

もしもモルさんが暗殺
者だったら

コーナー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

10年前。奴隷競売に掛けられてたところを、白いローブとフードで全身を覆った男に助けられる幼き少女。

成長した現在の彼女を、人々は様々な呼び方で呼ぶ——ハシシ（麻薬）野郎、ファイダーイー（イカれた殉教者）、化物、「フアナリス」、若き鷲（ヘイザム）。

そして、暗殺者（アサシン）。

彼女の目的は唯一つ——“人を縛るあらゆる鎖を断ち切る事”。

そしてそのためならば、両の手だけでなく、両の足すら血に染めることも厭わない。

何故なら、この世に“真実は無く、許されぬ事など無い”のだから。

オアシス都市“チーシャン”。迷宮（ダンジョン）の出現によって栄えたその街を舞台に。

今、“アサシン”モルジアナの、暗躍と冒険の物語が始まろうとしていた。

目次

第零夜

第一夜

第二夜

第三夜

第四夜

第五夜

第六夜

第七夜

第八夜

第九夜

第十夜

第十一夜

1

12

29

58

94

134

164

206

245

284

317

355

第零夜

それは彼女が3つの時だったか、それとも4つの時だったか。

「さあさあ、よつてらっしやい見てらっしやい！」

威勢の良い、商人の声だ。その後、続く商品を飾り付ける言葉を合わさり、商人の周りに集まる客はその購買欲を掻き立て、市場を激しく沸かせていた。

だが、そんな中彼女だけは唯怯え、涙を流すだけだった。

「さあ、お集まりの皆々様！ 此度、この『フアナリス』をお買い上げになられるのは一体どなたなのか!？」

理由は至極明快。

商人は奴隷商人であり、彼女はその商人に売られる奴隷だからだ。

(お父さん……お母さん……)

周囲の人々が彼女を見る目は様々だった。だが、その本質はどれも差して変わらないものだった。

大概の者は単純な労働力として、一部の者は幼いながら『女』である彼女を欲望の捌け口として。

もしかしたら、彼女を同じ「人」として憐れむような目も僅かながら有ったのかもしれない。だが大半が彼女を「物」としか見ておらず、結局のところそれらの視線と伴う熱気に気押された彼女が恐怖の真つただ中にいるという事実にも何も変わりはない。

(「わいよ……どい……」)

あるいは、彼女がもう少し成長してある程度の身体能力があつたなら、その足に絡む鎖を引き千切つて、強引にでもこの場から逃げ出す事が出来たかもしれない。何故なら、彼女は「稲妻のような蹴りで百獣の王たる獅子の腹すら貫く」という、そういう触れ込みすら有るほど、その筋では有名な民族の子なのだから。

だが、それをするには彼女はあまりにも幼く、あまりにも弱い。獅子とて、産まれたばかりの子獅子は本来捕食すべき草食動物にすら容易く殺されてしまう程脆弱な存在なのだ。

故に、いくら強靱な民族の出であろうが、5年生きた程度の少女に出来る事などあるわけも無く、唯、身を震わせて、その場にはいない親兄弟へ必死に助けを懇願するしか無かった。

「さあ、我こそと思う方はどうぞ！ 手を上げ、声を上げ、この奴隷めに払う額を御宣言下さい！ 最も高い額をご提示頂いた方にお売り致しますようぞ!!」

その商人の言葉と共に、周囲の人々が一際盛大に、オオーツ、と大声を上げる。

その声に思わず、ひつ、と洩らした少女の目に、上から見下ろす商人の鬼のような相が映る。

「黙つてろ。余計な事しでかして客に逃げられたら鞭打ちだ、クソ奴隷が」——侮蔑に満ちたその目がそう脅し付けている事は、幼い彼女にもハッキリと分かった。

再び、少女は黙りこくった。なお一層、体の震えと喉を吐く嘔吐感を強くして。

(「いよいよ……」)

この競売の果てに、自分がどんな人生を送る事になるのか。

それをその幼い頭が想像する事は出来なかったが、それでもそれがとても恐ろしく、苦しく、辛く、陰惨なものになる。そして両親と会うことはおろか、故郷の地を踏む事すら二度と適わないだろう事は何となく分かつていた。

分かるからこそ、臨界寸前にまで達したその恐怖を少しでも和らげようと彼女は努力した。

(お母さん……お父さん……誰か……)

ガチガチと上手く歯を噛み合わせられない口で、消え入りそうな声で、後ろで縛られた手を合わせて、願った。

(誰か……誰か……)

周囲の恐ろしい声に、下卑た視線に、自らの内の恐怖に必死に抗いながら、ただ只管

に、願った。

(誰か……助けて……!)

果たして、その声無き声を通じたのだろうか。

それとも、単なる偶然だったのか。

はたまた、哀れな乙女の真摯な願いが、訪れる運命すらねじ曲げたのか。

何であれ、彼女が願った「誰か」がそこに現れたという、その事実だけは確かだった。

「ならばこの娘は俺がもらおう」

その声が聞こえたのは、彼女の後ろからだった。

反射的にその方向を彼女が振り向くと、涙でおぼろげになっていた視界が途端に一面

の白で覆われた。

少し驚き、慌てて少女は首を振って、顔に張り付いた涙を振り払った。

「おお! これは精悍な殿方の登場だ! その格好を見るにもしや神学者の方かあ!?

アンタも好き者だね、この生臭坊主う! 残念ながらフードのせいでその御尊顔を確認

出来ないが、これはなかなかの美男子と見えるぞお!」

確かに商人の言う通りであった。

その男がいたのは、商人と彼女が立つ壇上のすぐ傍。彼女達の背後に立つその姿は一

面真っ白のローブに覆われており、一見すれば教会を出入りする神学者のようだった。

その顔は目深に被られたフードのせいで下半分程しか確認できない。だが、そこから見えるスツと通った鼻梁と形の良い顎だけで、その男の顔立ちがなかなか整っているだろう事を想像するには十分だった。

だが、男に対して彼女がより強い印象を抱いたのは、その「目」。フードに隠れていて見えない筈のその双眸に、他の客達のような恐ろしさとは真逆の光が宿っているような気がしてならなかった。

周囲の視線よりなお恐ろしく鋭く、それでいて小川のように澄み切っていて穏やかな光が。

「して旦那！　この奴隷めを買って頂けるとのことでしたが、その御代金は如何程で!」
一方、早速客を見つけて喜んでいるのだろう。

痛がるのも構わず、サイドテールに結わえた彼女の髪を引っ掴んで無理やり男の方に寄せながら、自らも鼻の息が掛かりそうな程に顔を近づけて商人が興奮しながら問い質そうとする。

「代金か？　そうだな、代金は——」

そこで、フードに覆い隠されていない男の口元が、不意に、不敵に笑った。

まるで、何かの企みを叶える絶好のチャンスが訪れたかのような、怪しい笑み。

だが男の近くに無理やり引っ張り寄せられていた事でそれを目にした彼女にとって、

これ以上無いほどに頼りがいのある、素晴らしい笑みだった。

そう、後にも、先にも。

「貴様が神の御許へ旅立つための片道切符、というのはどうだ？」

は、という声を洩らしつつ、商人が間の抜けた表情を作る。

それが死に顔になろうとは、彼はもとより、傍らでその一連を見取っていた彼女も當時は思いにもよらなかった。

男が取った動作そのものは極めて単純。彼の言葉に呆けている商人の首に、唯左手を掛けただけ。

傍から見れば何の問題も無いように見えるその動作だが、実際は巧妙に隠されたイレギュラーがあった。

それは男の左手。そしてより詳細に言えば、そこに有る筈なのに存在しない薬指ではなく、その隣の小指。

それを左手が商人の首に触れると共に、一瞬、何かを引っ張るように、くん、と動いた。

その刹那、革製の腕当てが着けられた男の左手首から銀色に光る“爪”が飛び出し、吸い込まれるように商人の喉へ飛び込んだのだ。

そして事はそれで終わり。商人がビクン、と震えて白眼を向くや、“爪”を何事も無

かつたかのように左手首に戻して、そつと男は商人の首から左手を離した。

途端、商人の体が壇上から転げ落ちた。

それにより商人と男の近くにいた観衆が一斉に後ずさる中、彼女は見た。男の“爪”が入つていつた喉に穴を開け、そこから泉のようにコンコンと血を湧き出させる商人“だつたもの”を。

そして、それが意味するものを幼いながらに感じ取り、恐る恐る彼女は男の方をもう一度見た。

男は、平然としていた。

今し方が死んだばかりだというのに。

自らが殺したばかりだというのに。

ただ平然と、フードの奥のその目を彼女と合わせていた。

不思議と、向け返されるその目に、先程まで飲み込まれそうな恐怖が掻き消えていくのを彼女は感じていた。

その答えは後に思い返して初めて分かった。——あの時の彼の目にあつたのが、彼女への慈愛と救いの意思であつた事。そして、実際に救われたためだつたという事を。

「……………あ……………」

だが、その時の彼女は状況も気持ちも整理がついていなかった。

故に何か言おうとしても言葉が出ず、また男の方も無言だったため、沈黙が彼女らの間に下りる事となった。

最も、その沈黙もすぐに破られたのだが。

「……あ、アサシンだ！ アサシンだーッ!!」

周囲の人々の誰かが、思い出したようにそう叫んだ。

それにつられて、それまで茫然としていた衆目達が一、一人と叫び声を上げていく。

「アサシン」が現れたぞオ！」

「奴隷商人が殺された！」

「イヤアアアア、神様あ!!」

「町警史！ 町警史イツ！ 急げッ、ここだ!!」

見る見る内に騒然となつていく観客達。

そんな刻々と変化していく状況に耐えられず、あたふたと狼狽する彼女の体を、男が無造作に抱え上げた。

そのまま、脇に抱えられる形となった彼女が驚きに悲鳴を上げる間も無く、ざわめく衆目達の中を男が一目散に駆け出した。

その日の一連の出来事が、彼女の後の運命を決定付ける分岐点であった。

そして時は流れ、10年後。

オアシス都市、ダンジョン「チーシャン」。奇しくも、突如出現した迷宮によって同じく10年程前より大きく栄え出したこの都市の一角、街中でも一際高い教会の鐘の隣に彼女はいた。

「……いた」

釣り上がり気味の独特の目尻を持つ目が、目的のものを捉えてスツと細まる。

その視線の先、下の路地にいるのはみすぼらしい姿の人々を引き攀れた、神経質そうな奴隷商人の男。

その男こそが、彼女の次の標的だった。

現在地からその標的への大体の距離と、事を為した後に自らが進むべき道を再確認した後、続いて足下、教会周辺の路地に彼女は視線を向け直す。

下には、行き交う人々に混じって、荷台に藁束を敷き詰めた馬車が一台。せつかくだ、アレを使わせてもらおう。

そして最期に、首元に下ろしていたフードを深く被り直してサイドテールに結わえた赤い髪と顔の上半分を覆い隠し、左手の小指に嵌めたリングをくんと引つ張った。

シャキン！

小気味の良い金属音と共に、革製の腕当てが着けられた彼女の左手首から銀に光る

爪”が飛び出し、固定される。——動作具合は上々。問題無し。

再び小指を引いて“爪”をしまい、全ての確認を終えた彼女は一端後方へ下がる。

そして足場としてゐるクリーム色の鐘の土台の端まで来たところで、再び前方へ、全速力で駆け出した。

逆端まで行くのに5秒と時間は掛からない。その短い時間の中で十分に助走を終えた彼女は、そのまま鳥の翼のように両腕を大きく広げた姿勢で、台から飛び降りた。

宙へ投げ出されたその体が滞空する事、ほんの僅か。

すぐさま重力に従って下へ加速していく体を仰向けにしつつ、猛禽類の鳴き声にも似た心地よい風切り音を聞きながら、下の藁束目掛けて彼女は真つ逆様に落ちていった。

彼女の名はモルジアナ。

伝説の狩猟民族“フアナリス”の末裔にして、人々の自由と平和のため、闇の中に紛れ標的を狩る事を生業とする暗殺者——“アサシン”。

その心に掲げる信条は唯一つ——“真実は無く、許されぬ事など無い”。

そして己が定める使命も唯一つ——“人を縛る、あらゆる鎖を断ち切る事”。

故に彼女は暗躍する。

かつて自らも堕ちかけた、奴隷という名の“紛い物の真実法の被害者達”を縛る鎖を断ち切る

ために。

己が爪に、その正義を宿して。

第一夜

「ねえ、おじちゃん。どうしてモルを助けてくれたの？」

奴隸市場から共に逃げ果せた後、手足に着けられていた鎖を外されてどうにか落ち着く事が出来た幼き日のモルジアナが、男に最初に尋ねたのは、それだった。

それに対し、少しだけ何かを考えるような——より詳しく言うならば、どうやって誤魔化すかを思案するような——素振りを見せてから、男はこう答えた。

「お前が救いを求めているように見えた。あの奴隸商を消す必要もあつた。だからついでに助けた。それではダメか？」

今ならばこそ、その言葉が男の本心の半分程度しか言い表してなかつたものだったと気付けたかもしれない。だが、生憎当時はまだ幼く、そうなんだ、ありがとう、と鵜呑みにした言葉への謝礼を送る以上の事はモルジアナには出来なかつた。

「礼には及ばない。それはそうと娘よ、お前の名を覚えてくれないか？」

その男の質問に、オウム返しをするように、ややたどたどしくモルジアナは返答した。
「モルジアナ。みんなはね、モルって呼ぶの」

「そうか、モルジアナ——『小さな真珠』か。良い名だ。俺の空虚な名とは違う。お前

は良い親の下に生まれたようだな」

頷き返しながらそう返す男の顔は、相変わらず目深に被られたフードでその表情を伺う事は出来ない。

だが、モルジアナはそれでも嬉しかった。自分の名前、そして愛する両親の事を、この男は間違いなく褒めてくれたのだから。自然、えへへ、と顔がにやけてくる。

だが、それが同時にある事を思い出させ、一時は明るくなり掛けた彼女の顔に影を差した。

「どうした？」

不意に俯きだしたモルジアナに、男が訝しむように尋ねて来た。それで、ふと思った——この人なら、知っているかも、と。

だから、思い切ってモルジアナは男に気になっている事を、訊いてみる事にした。

「ねえ、おじちゃん？」

「何だ？」

「あのね、モルのお母さんとお父さんがどこにいるか、しらない？」

そう尋ねられた男は、右側に古傷の付いた唇を真一文字に閉じ、顔に掛かるフードの影を深くして、首を左右に振る。

「いや、知らないな」

その返答に、そっか、と残念さの滲んだ声がつい漏れるも、すぐに気を取り直してモルジアナは更に質問を加えていく。

「あのね、ここってどこなの？ カタルゴじやないの？ ドレイつてなあに？」

「……」

それに対し、男は顎に手をやるなど、時折何かを考え込んでいるような素振りを含んだ沈黙という応答を返す。

そんな男の素振りを眺めているうちに、変な事でも訊いてしまったのだろうか、と疑念が浮かび、恐る恐るモルジアナは尋ねてみる。

「ねえ、おじちゃん？ どうしてだまつてるの？ モルへんなこと言った？」

「——ああ。濟まない。ちよつと気になった事があつたものでな」

彼女の不安げな視線を感じ取つたか、ようやく思考の海から戻つてきた男が、特に悪びれる様子も無くそう返した。

心なしか、フードの奥からのその視線は彼女の赤い髪に向いているような気がした。

その態度に不満を感じ、むつと頬を膨らませてねめつけるモルジアナに特別動じる事も無く、男は訂正の言葉を口にする。

「大丈夫だ、話はちゃんと聞いている。——安心してくれ、モルジアナ。お前は、お前のいた所に必ず戻る事ができる」

「ホント!？」

この場で最も聞きたかったその吉報に、先程とは違い胸を弾ませた声で、モルジアナはもう一度問い質す。

「お母さんとお父さんに会えるの!? みんなと会えるの!? もうドレイつていうのにされないの!？」

「ああ、そうだ」

フードから覗く口元に頼りがいのある笑みを浮かべ、男が深く頷く。

「ただ——先程のカタルゴというのは、お前の故郷と考えて良いのだな？」

「うん!」

「そうか。だとすれば、俺はお前の故郷がどこにあるのかを知らない。仮に、そのカタルゴとやらが海を隔てた先にある地だとしたなら、船の手に配に、旅の準備で時間が要る。それに俺がいない間の対応も考える必要があるな……」

喜びから元氣の良い返事を返したモルジアナに、口元に手を当てつつ男はそう述べて見せる。

が、その意味を幼い頭で整理仕切る事が出来ず、えつと、と目を瞬かせる事となったモルジアナに、簡略化した内容を改めて男が伝えた。

「簡単にいえば、お前の故郷について知る事と、そこに行くために必要な準備に時間が必

要で、すぐにお前を両親の下へ連れて帰る事は出来ない、ということだ」

そう言い改められて言葉の意味をようやく理解出来たモルジアナだったが、今すぐに両親に会うことは出来ないと思つたその心に少なからず陰りを齎した。

だが、そのせいで俯き掛けた顔を彼女はすぐに持ち上げた。

きつと彼に助けられないままだったら、自分はもう故郷に帰る事は出来ず、両親や一族の仲間とも会えなかつた。そう考えたら、例え時間が掛かるとしても、あの怖い場所から救つてくれただけでなく、故郷に連れ帰つてくれる事を約束までしてくれたこの恩人に、そんな些細な事で不満を見せるわけにはいかない——少女の気丈な面が、そう思わせたのだ。

「うん！ 分かつたよおじちゃん。おじちゃんのジユニビができるまで、モルまつてるよー！」

満面に見えて、その実どうにか作り上げた笑顔を見せて、モルジアナは返事を返した。あるいは、彼ほどの人ならば、その時の笑顔が空元気であると気付いていたのかもしれない。その上で、彼もまた微笑みを作つて、そう言つてくれたのかもしれない。

「ありがとう。出来る限りは急いでみせる。だから、もう少しの辛抱だ」

自らの肩の上に手を置く男に、再度元氣よく、うん、とモルジアナは返事を返す。

それに頷き返してから、男はその場に立ち上がった。

「では、まずは一度俺達の『家』に来てくれ。準備に必要なものがある」
「おじちゃんのおうち？」

「そうだ。俺が準備を進める間、お前を放っておくわけにいくまいからな。故郷へ戻る日が決まるまで、お前もそこで過ごすと良い」

差し出された男の手を掴み、モルジアナも立ち上がった。

「我ら『アサシン教団』の岩、『マシヤフ』で」

その後、カタルゴの位置を知り、出発の準備が整うと共に、長い間待った事により高まった故郷と両親への想いを胸にモルジアナは男と、彼の弟子だという数人の若者達と共に『マシヤフ』を発つこととなる。

その先に待つのが、再開の喜びや再び踏み締めた懐かしい大地の感覚等という喜ばしいものとは無縁の、惨たらしく理不尽な『絶望』であるなどは、まだ知る由も無い話であった。

その日から数日間の事を、後に忘れてたくても忘れられない、本当に碌でもない日々になろうなどと、その時点のアリババ・サルージャには予想もつかなかった。

事の発端は荷馬車の運転手のバイト中に起きたアクシデントだった。砂漠を横断中、偶然砂漠の肉食植物『砂漠ヒヤシンス』に襲われ、色々あって間一髪で食われそうに

なつたところをどうにか助かった。だがその代償は全く小さくなく、酒に弱い砂漠ヒヤシンスを追い払うために彼の馬車に乗っていた大豪農の葡萄酒樽を全て注ぎ込んでしまい、結果一生働いても返せないどころか、彼のバイト先にすら大きな被害を与えかねない恐ろしい額の借金を背負うハメになってしまう。

だが不幸中の幸いというべきか、アリババにはこれを返済する充てが一つあった。

それは、先の大豪農と同じように彼の馬車に乗り込んでいた、一人の少年であった。無論、唯の少年ではない。

何故なら彼こそが絶体絶命のアリババを救った命の恩人であり、彼を救う際に使った『魔法のターバン』や伝説の『ジンの金属器』といった魔法のアイテムを所持する魔術師であった。

名はアラジン。

実際のところ彼が何者なのかは今でもアリババは知らないし、その時点ではそもそも知る気も無かった。

だが、その力は本物だ。上手く利用しさえ出きれば、十分な力になってくれる筈。
迷宮ダンジョンを攻略し、借金を返してもなお手に余る程の大金を手にするための力に。

そう目論み、どうにか彼を取り込む事は出来ないかと考えを巡らしていたアリババだったが、生憎とその算段は早々にして潰えていたといえた。

「おい、アラジン！ アラジンってば！」

チーシヤンの街の大通りに面する市場。

多種多様の人々が行き交い、景気の良い売り文句がそこら中から飛び交う中、先程から前方を早歩きで進むアラジンを呼び止めようとアリババは声を張り上げていた。しかしその成果は見られず、まるでアリババの声が聞こえていないかのように、一瞥することも無くアラジンは歩みを止めない。

「何怒ってんだよ一体！ 俺何かしたかよ?！」

先ほど、アリババの自宅で彼のバイト先の社長に借金返済の目途を話すついでに紹介した時から、ずっとこの状態だった。

腹痛か、それとも得た金の割振りか？ 色々原因として思いつくことを振っては見るものの反応は無く、荷馬車での談話で彼がほぼ唯一反応を見せた『料理』や『やわらかいお姉さん』に関する話題で気を引こうとするも、やはり反応は無い。

そうやって手を拱いている内に苛立ちが募ってきて、いい加減に怒鳴りつけてやろうかとアリババが思い始めるのと同じくして、

「……わっ?！」

不意にアラジンが誰かにぶつかつた。

拗ねるあまり前を見ていなかったのだろうか。見れば、彼とぶつかつた誰かも衝撃で

その場に尻餅を突いていた。

——ああもう、何やってんだバカ!

すぐにアリババは彼らの下に駆け寄り、まずアラジンに手を差し出した。

が、差し出したその手は当のアラジンによって、即座にペシンと叩き返された。

その対応について堪忍袋の緒が切れそうになるのをどうにか我慢し、改めてアラジンとぶつかった方の者に手を差し出そうとした。

「ゴメン、ウチのがよそ見してて。大じよ……」

一瞬、その手が躊躇した。

その理由は、アラジンがぶつかった相手にあった。

一見すれば、ただの6、7歳くらいの少年だった。赤い毛が混じったボサボサの茶髪にクリクリとしたあどけない子犬のような目が特徴的だったが、今のアリババの目にはそれとは別に目立つものに焦点を合わせていた。

ボロのシャツと短パンの更に下、少年の足首に付けられた鎖付の枷であり、また「それが意味するもの」。つまり、「その少年が奴隷である」という事だった。

別に、奴隷だからどうというわけでは無い。こつちに落ち度があるのは事実であるのだし、このまま少年が取り落した荷物——こんな年端がいかない子供が持つていたというには少し多過ぎる気がする、大小の果物——を拾ってやることに特に抵抗は無い。

ただ、自らも借金のせいで奴隷に堕ちる可能性がある事をつい思い出したのと、こんな小さな子供すら奴隷にする世の中の不条理に一抹の怒りを焚き付けられたのだ。

「——あ、ごめん。ちよつと待つてろ、今拾——」

この次の瞬間、彼はちよつとした災難に巻き込まれることになる。

そしてその原因は、必ずしも一瞬彼が呆けていた内に少年に近づいたアラジンのみによるものでは無い。

ある種、この先に起こるアクシデントの最大の要因は、そこに「彼ら」が居合わせたという「間の悪さ」だったのだ。

「さつきはゴメンね。それにしても、動き難そうな鎖だね」

そう少年に言い、自らも彼の傍にしゃがみ込むや、首から下した金の笛をアラジンが吹いた。

やったのはそれだけだった。

それだけで、バキン、と甲高い音を立てて少年の両足を繋いでいた鎖が、一人でに断ち切れた。

同時に、アリババの目も点になった。

「ハイ、とれたよ。これで楽に歩けるね」

どうやったのか分からない。どうしてそんな事をしたのかも、アラジンという人間に

ついてこれっぽっちも理解していないこの時点では分からなかった。

だが二つ、ハッキリしている事があった。

一つ、少年の鎖を切ったのはアラジンだという事。

二つ、奴隷の鎖を勝手に解く行為は貴族の所有財産の窃盗に該当し、また重罪だという事。

(や、ヤバイ!!)

心中で、アリババは絶叫する。

そこへ泣きつ面に蜂とばかりに、ドヨめき出す大衆を割って厄介な人物が彼らの下にやってくる。

「コラそこら、何を騒いでおるか〜!」

不意に大通りの奥から聞こえてきた聞き覚えのある声に、反射的にアリババは振り向いた。

途端、つい声の主と目が合い、互いに、あ、と声を上げた。

「あんたは……っ! 何でここにっ!」

知っているような気がしたのは当たり前だった。

何せ、その声の主こそ砂漠ヒヤシンスの件でアリババが多大な借金を負う事になった大豪農ブーデルその人だったのだから。

——面倒な事になったわ。

ざわめく衆群の中に紛れ込みながら、彼女は尾行していた「標的」の様子を眺めていた。

「あ！ 君は昨日のおっぱいおじさん！」

「ザケんなクソガキヤツ!!」

青い髪にターバンを巻いた少年の侮蔑——少年的には唯のあだ名だろうが——に、体中にくつついた贅肉を、特に胸の辺りをタプタプと揺らして「標的」が怒鳴り返す。

——成程。だから「おっぱいおじさん」か。

上手いことを言う、と目深に被ったフードの下の無表情にほんの少しだけ浮かんだ笑みを、すぐに彼女は消し去る。

紛いなりにも仕事 중이다。自分の存在にまだ誰も気づいていないとはいえ、気を緩めるわけにはいかない。

「貴様らのせいでワシは大顧客の信用を失ったんだぞ！ 絶対許さんからな!!」

恨みがましく放たれた「標的」の言葉に、最初に彼に言葉を掛けた金髪の少年が震え上がるような素振りを見せる。

その一方で、先程の台詞に含まれた「ある言葉」を彼女はしっかりと聞き取って

た。

「大顧客」、と。

それが果たして葡萄酒の買い手として「のみ」の意味なのか？　そして、その「大顧客」とやらは誰なのか。

是非とも明確にしたいものだ。後に控えている筈の「あの男」。そして「標的」自身を「消せるだけの」罪状を確定させるためにも。

しかし、この場ではダメだ。人目が付き過ぎる。もう少し「標的」に移動してもらい、人目の無くなったところで後ろの護衛二人を消し、裏路地に引き入れるのが最良だが……。

そんなふうにも目の前の問答が早く終わらないかと彼女が観察を続けていたところ、なんと「標的」が唸る。

その後紡がれた台詞に、最初は聞き間違いだと彼女は思った。

だが、そうじゃない事は、「標的」から視線をずらしてすぐに判明した。

「キサマら、この上奴隷を窃盗か？　重罪だぞ？」

驚くべきことに、「標的」の台詞どおりだった。

青い髪の少年の傍らに、足枷に付いた鎖が断ち切られた幼い少年の姿が、確かにそこにあつた。

思わず、驚嘆に彼女は目を見開いていた。

白昼堂々重犯罪が行われたことではなく、またその少年達が碌な武器も持っていない中で見るからに頑丈そうな鎖を切った事でもなく、
「自分達以外にもそんな真似をしようという者が一般人にいた」、という事に。

「や、やだなあ旦那様。冷静に考えてくださいよ。僕ら、武器も無い非力な一般人ですよ？」

ど、どうにか誤魔化さないと！

焦燥と不安に駆られる内心を必死で抑えつけることでどうにか出来た愛想笑いのま
まに、掌を見せてアリババは釈明する。

それに対し、腕を組んだ不遜な態度で、白々しい、とブーデルは吐き捨てる。明らか
に、千切れた少年の鎖がアリババ達の所業であると確信している。

チツ、と心の中で舌打つアリババに、ブーデルが更に言葉を浴びせ掛けてくる。

「フン、気に食わんガキめ……。キサマが100金貨デナールの借金を返せなかつた時にどうし
てやろうか、もう決めてあるんだぞ？ 聞きたいか？ ん？」

「…………ど、どうなさるんで…………？」

ねちっこいその問い掛けに不安を逆撫でられ、胸が急激に高鳴っていくのを感じなが

らアリババは唾を呑んだ。

一拍待って、それまでただ嫌らしい笑みだけだったブーデルの顔が不意に変貌した。

「奴隷にしてやる」

それは予想通りの答えだった。

そしてその行く末を考える事すら恐ろしい、最悪の仕打ちだった。

無意識に体を震わせたアリババを尻目に、後に控えていた屈強そうな護衛二人に何かの指示を与えてから、ブーデルが言葉が続ける。

「奴隷にして、生涯、一生。ワシ自らの手で、痛め続けてやるっ」

憎らしげに響くその声は、アリババにとってはさながら地獄の大悪魔の放つ、怨念の詰まった呪詛のようだった。

生きた心地のしないそれが、耳から耳へと、嫌な残照を残して通り過ぎていき、次第に彼の顔を蒼白にしていく。

だが、何気なく視界の端に映ったブーデルの護衛達によって、半ば茫然としていた彼ははつと意識を取り戻した。

「奴隷はツライぞ〜?」

見れば、護衛達が例の奴隷の少年の腕を乱暴に引っ張り、ブーデルの傍へ強引に近づけていた。

何か、嫌な予感がした。

咄嗟に、止めようと彼は身を乗り出す。しかし彼の持病ともいふべき「癖」のせいで、それが明確な意思表示にならず、ブーデル達は止まらない。

否、例えハツキリと制止を呼び掛けられたとしても、彼らは止まらなかっただろう。

「こゝんな事されても、文句は言えんからなア〜!!」

そう言い切るや、自らの目の前に連れられて来た少年を、まるでそこらに転がっていたボールにそうするように、ブーデルが無造作に蹴り上げた。

肥えた男の太い靴が小さな体に容赦なくめり込む鈍い音の後、暫しの沈黙を挟んで、それによつて宙に舞い上がった少年の体が土の上に落ちる音が鳴った。

それから、何が起きたのかをアリババが理解するまで更に数刻。

そしてその数刻が過ぎた時、最初に動いたのは砂漠ヒヤシンスの一件のように、怒りと正義感に突き動かされたアリババでもなく。

されとて、首に掛けていた笛をさながら棍棒のように振りかぶったアラジンでもなく。

「……………えっ?」

ブーデルの後に戻っていた護衛二人の更に後。

ざわめく群衆を含めたその場の誰にも認識されていなかった第三者——銀に光る鉤

爪を掲げ、獲物目掛けて高々と飛翔する若き鷲^{ヘイザム}であつた。

第二夜

“男”に助けられ、故郷に帰る術を探すために彼らの家であるという“マシヤフ”という地に移つてから、早2ヶ月。

当時、モルジアナは“男”と、“男”が“マシヤフ”から引き連れられた数人の若者達と共に、東南の海洋国家“バルバット王国”本土の港へと訪れていた。

「済まないな、お前達。俺の我儘に付き合わせてしまつて」

栈橋に着いた一隻の船を背に、モルジアナと“男”の前にズラリと並ぶ若者達へ、“男”が労いの言葉を掛ける。

それを受けて、“男”と同じような白や、灰色のローブに身を包んだ若者達が、皆嬉しそうに微笑み合つた。

「いいえ。我々は皆“大導師”様の弟子です。弟子が師の持つてきた面倒事に付き合うのは当然の事ですとも」

そんな若者達の中から一人進み出た青年が大仰な仕草を踏まえてそう皮肉を言うや、釣られて他の若者達も、違くないや、と次々に同意の意思を示して見せた。

そんな彼らの様に、どこか微笑ましげに苦笑する“男”——“大導師”を見上げてい

たモルジアナは、逸る気持ちのままに頬を膨らまし、彼を急かすのであった。

「もう、だいどうしさま！ 笑つてないで、はやくカルタゴにこうよ！」

「そう急かすなモルジアナ。どの道、船が着くまで2カ月は掛かるんだ。今すぐ乗ったところですぐ家族に会えるワケでもあるまいし——」

そこで一端言葉を区切り、モルジアナと頭の高さを合わせた「大導師」の薬指の無い左手の人差し指が、彼女達の前に並ぶ若者達に向けられた。

「お前が『マシャフ』に来て、この『バルバット』に辿り着くまでに、俺とお前は、幾度と無く俺の『兄弟』達の世話になった筈だ。その彼らに礼の一つも言わず背を向けるというのは、それはあまりに恩知らずではないか？」

言われて、はっとモルジアナは気付いた。

——そうだ。この人達は『マシャフ』で色々な事を教えてくれたし、『バルバット』に来るまで、色々な怖い人や、色々な怖い生き物からも助けてくれた。

それにお世話になった人には、ちゃんと御礼をいわないとダメだと、故郷の両親も確かにそう言っていた。それなのに、何も言わずにこのまま帰ったら、きつと両親はカンカンになって自分の事を叱る筈。何故なら、それはとても悪い事だから。

そう考えが至り、慌てて姿勢を正して、目の前の若者達にモルジアナは頭を下げた。

「あさしんのおにーちゃん、おねーちゃん！ 今までずつとお世話になりました！ こ

のごおんはいっしょうわすれませんか!!」

たどたどしく、それでいて幼い子供なりに難しい表現を使ったその大きな声の礼の言葉は、見ている者を面白おかしく、それでいて無条件に笑みを浮かべる微笑まじさがあった。

再び微笑み合う若者の一団の中から、先程の青年とは別の、10代後半くらいの短髪の女性がモルジアナの前まで進み出て来た。

「ハイ、どういたしました。でも、ボクらが『アサシン』だってばらしちゃうのは頂けなかったな〜モルちゃ〜ん」

サイドテールの赤髪の上に手を乗せるや、女性がワシヤワシヤとそれを引掻き回した。

それによって思いっきり頭を振り回されて目を回したモルジアナに、そうだよ、バラしちやダメだよ、と他の若者達も笑いながら、冗談混じりに指摘した。

「でも、また何かあったら遠慮無く頼ってね。なんたって、ボク達は『アサシン』。人々の自由と平和の守り手だからね!」

去り際に、モルジアナの両肩に手を置いてそう告げた女性に賛同するように、他の若者達も威勢の良い声を上げ、囃し立てた。

そうして遂に出航時間を迎え、『大導師』と共に船に乗り込んだ後。

動き出す船に合わせて次第に小さくなっていく彼らが完全に見えなくなるまで、モルジアナはずっと、ありがとう、と感謝の言葉を叫び続け、ずっと、その小さな両手を必死に振り続けていた。

そして、そんな朗らかで優しくかった「大導師」の弟子達の姿は、彼女の心の奥底に深く刻まれた。

それが、後の彼女のある「決定」の、一つの要因となつたのは間違いない。

「大導師」が調べ上げたモルジアナの故郷「カタルゴ」の所在。それは「マシヤフ」から南西の、「暗黒大陸」と呼ばれる大陸にある国だった。

その大陸は、西方に位置する「レーム帝国」の南方属州以南の大陸であり、一般的には未開の地として知られているため、そう呼ばれていた。

その地が未だ未開発なのは、そこに生息する多くの猛獣達が理由であった。それも唯の猛獣では無い。

何とその地に住まう生物は、蛇や蛙のような食物連鎖上の地位が低い者だけでなく、コンドルやサーベルタイガーのような比較的上位に位置する者さえ、人を一瞬で死に至らしめる猛毒を持っているものが存在する。おまけに、いずれの固体もが極めて獰猛という話であり、それが「レーム帝国」が彼の地の開発に踏み込めない理由であった。

実をいえば、この大陸へ向かうには「バルバット王国」から向かうよりも、その南西に「マシャフ」が位置する「アクティア王国」から、更に海を挟んだ西に位置する「レーム帝国」を中継して、海路を渡って行った方が距離的には近かった。というか、そもそも「バルバット王国」は「マシャフ」を中心とした「暗黒大陸」のほぼ逆に位置する国であり、実際のところ遠回りもいいところだった。

では、何故敢えて「バルバット王国」を中継して向かうのか。

それは「アクティア王国」及び「レーム帝国」と、「バルバット王国」での「アサシン教団」に対する認識の違いが関係していた。それが、本来ならばより近い「レーム帝国」から出る船に乗るといふ選択肢を無きものにしていたので。

というのも、「アクティア王国」にしる、「レーム帝国」にしる彼ら「アサシン教団」は、言うなれば目の上のタンコブ。

「アクティア」南西の山間部に彼らの最大拠点「マシャフ」が存在し、度々「アクティア王国」や他の属領を始めた周辺の国家や地域に何かしらの被害を及ぼしてきた。特に、一年程前の「聖地」を巡った第三次十字軍派遣の際は「アクティア」だけでなく、十字軍を派遣していた「レーム」の多くの要人も彼らによつて暗殺されるといふ憂き目にも遭わされた。

されとて彼らを滅ぼそうにも、険しい渓谷の中に存在する「マシャフ」へ攻め入る事

は並大抵の事では無く、結果、今日までその存在を許すに至っているのが現状なのだ。

と、そんな経歴もあって、現在も“アクティア王国”と“レーム帝国”内での“アサシン”に対する警戒は厳しく、“大導師”達だけならまだしも、何の訓練も受けていない幼いモルジアナを連れて乗船というのは至極難しかった。

逆に、“バルバット王国”は“マシャフ”から距離もあり、それまで拠点も存在していなかったため、そもそも“アサシン”という言葉自体がそう広まっていけない状態だった。また、同時に“暗黒大陸”行きの船が出る数少ない港を持つ国でもあったため、一度この国を経由して“暗黒大陸”に向かうという、今回の帰路が出来上がったのだ。

要は、“急がば回れ”ということであるが、それが齎した効果はとても大きかった。

「だいどうしさまー！ 見て見てー！ おさかながいっぱいとんでるよー！」

爪先立ちで甲板の縁から身を乗り出したモルジアナが、そこから見える一面の青い海と、隣に立つ“大導師”を交互に見ながら、きやつきやとはしゃいでいた。

その頭の中は、航海という滅多に無い体験や、初めて目にする海や魚によつて刺激された好奇心によつて、一時的に両親や故郷の事を忘れていたようだった。

今はそれで良かった。

“バルバット王国”から出た船が“暗黒大陸”に着くまで、最低でも2カ月は掛かるし、そこから陸路を、休みを挟んで大体二週間ほど進む必要がある。その長い旅の間に、

家族や故郷への想いを巡らせ過ぎて体を壊してしまうよりは、こうして戯れに浸って、一時でも頭の中を空っぽにしてしまいうぐらいの方が良いのだ。

——といつても、

「きやはは、きやは——あつ……!?」

周りのものに夢中になり過ぎて、少なくとも俺には助ける手段の無い海へ落ちられても、それはそれで困るが。

咄嗟に掴む事の出来たワンピースの背を見て安堵の溜息を吐きつつも、そう思った大導師は一端船内に入る事を提案。それに詰まらなそうに頬を膨らませつつも従ったモルジアナの手を引いて、踵を返した。

それから、甲盤の中央に位置する船内への階段に着くまでの間、モルジアナが述べた感想を始めに、ちよつとした雑談を交わす事となった。

「あく楽しかった。モルね、うみ見るの初めてだったんだよ!」

「それは良かったな。次はお前の両親と共に見に来るといい」

“大導師”がそう返すと、フード越しに見下ろした少女の顔が満面の笑みを返して、元氣良く頷いた。

「うん! 絶対おかあさんとおとうさんといっしょに見に行く! あと、だいどうしきまと、おでしのおにーちゃんおねーちゃんたちもいっしょに!」

モルジアナからして見れば、何の気兼ねも無く、ただ思った事をそのままに口にしただけだったのだろう。

だが、ほんの一瞬とはいえ、その返事が「大導師」を口ごもらせたのは確かだった。「……いや。俺達がお前ともう一度海を見る事は無いだろう」

ゆつくりと首を振ってそう返した「大導師」に、どうして、と先程までの笑顔を不安げに曇らせたモルジアナが尋ねて来る。

迫り着いた船内への階段の一段目に足を下ろして、「大導師」がその返答を返す。

「それはモルジアナ。お前と、お前の両親が自由に、平和に生きるべき普通の人々民だからだ。対して、もうお前も知っての通り、俺達は「アサシン」。闇に紛れ、光に奉仕する者。平和と自由の守り手にして、人々に仕えし者。今はこうして言葉を交わし、歩を合わせているが、本来ならば民にお前達さえ存在を知られる事無く、影ながら救う事こそ、我らの使命であり、在り方」

いや。本来ならば、こうして少女の帰郷に付き合っていたかどうかすら分からない。今の「教団」にとつて重要な存在である彼が何カ月も「マシャフ」を離れること自体、本来ならば周囲が許しはしない。それをどうにか言い聞かせ、どうしようもなく危険な「あの果実」の力を使ってまでモルジアナの故郷を調べるといふ多大な苦勞などせずとも、弟子達に彼女を任せて、砦の頂上で旅の幸運を祈るだけでも本当ならば問題

は無かったのだ。

それを、敢えて無理をしてまで「大導師」自身が同行したのは、やはりあの奴隷競売の時に泣きじやくっていたモルジアナに重なった、「かつての親友」の面影がそうさせたからなのだろうか。

何にせよ、帰郷したモルジアナと彼らが二度目の出会いを果たすような事はあつてはならない。

それは十中八九、取り戻した筈の家族との平穩を、彼女が再び失ってしまった時に他ならないからだ。

「——住む世界が違う。お前が両親の下に戻った暁には、もう二度と会う事もあるまい。諦めてくれ」

——そして俺達の事など忘れ、お前の愛する両親共々幸せに暮らしてくれ。

最期に心中でそう付け加え、古めの木板が張り巡らされた船内の床を軋ませて階段を降りる「大導師」だったが、そこでモルジアナの手を掴んだままの左手が後に引かれた事に気付いた。

振り返ってみれば、階段の下から3段目で歩みを止め、無言で俯くモルジアナの姿があつた。

いや、正確には無言では無い。

かすかにではあつたが、下を向いていて見えないその口から、小さな嗚咽が聞こえて来たのだ。

それに気付いてしゃがみ込んでみれば、案の定、独特な目尻の大きな目から大きな水滴を溢して咽び泣く、くしゃくしゃの少女の顔があつた。

「モルジアナ……」

その泣き顔に「大導師」ははつとさせられずにはいられなかつた。

「なんで？　なんでそんな事いうの？　なんでだいどうしさまともう会えないの？　だ
いどうしさまはモルの事きらいなの？」

「そういうことではない。お前の今後の事を考えればこそ、俺達はもう会うべきではないと——」

「分かんない……だいどうしさまのいつていること、分かんないよ……」

それでもなお続けられた「大導師」の言葉を、これ以上聞きたくないとばかりに、両耳を塞ぎつつ首を左右に振って、モルジアナが拒絶の意志を顕にする。

そんな彼女に、彼は再び「かつての親友」の姿を幻視した。

——ああ、そうだ。あの時も真実を伝えようとして、そうして「奴」との間に亀裂が生じたんだ。

あの時、身に染みだ筈だ——「真実」を伝える事が必ずしも正しいことでは無い。〃

真理など無い”のだと。

だというのに、また同じ過ちを繰り返そうとしている。それも、こんな幼子相手に。そこまで考えが至った時、俺は何て愚か者なのだ、と”大導師”は白いフードの下に自嘲の笑みを浮かべずにはいられなかった。

だが、その行為がこの場を治めるに至った。

フードの下の彼の笑みに気づいたモルジアナが、それを不思議に思つて一端泣き止んだからだ。

それを足掛かりに、すぐに”大導師”は先程の言葉を訂正した。

「そうだな。もしかすれば、いつかまた会う日が来るかもしれん。この世に”許されぬ行為など無い”のだ」

無論、その言葉の裏の本音は先程と何ら変わっていない。故に今彼が口に行っているのは、可能性すら無い偽りだ。

だが、これで良い。

言葉が続けるにつれて、にわか雨が去つて虹が掛かり出した晴天の空の如く、表情を晴れ上がらせていく少女の顔が、その証拠だ。

「大人気ない事を言つて済まなかつた。いつの日か、また海を見に行こうモルジアナ。今度は俺達だけでなく、俺の”兄弟”達や、お前の両親と共に」

「うん！　いく！　ぜったい見に行く！　ヤクソクだよ、だいどうしさま!!」

遂にはその場で飛び跳ねる程に元氣を取り戻したモルジアナに頷き返し、再び彼女を連れて船内の奥へ向かおうと、**“大導師”**は立ち上がった。

それで、その場はどうか収まったように見えた。

しかし、それは誤りだ。

この後、すぐに思わぬ情報を彼らに手にする事になるのだ。

「お、どうやらお話は終わりのようですね」

そんな声が聞こえて、猛禽類の嘴のように尖ったフードの鏢を上に向けた**“大導師”**の目に、階段の上段側に立つ一人の男が目に入った。

見知らぬ男だった。その男を、彼に続いてモルジアナが見上げたところで、おどけるような態度で男が言葉を続ける。

「おおっと、失礼。ここを通ろうとしたところ、何やらお取込み中のあなた方に出くわしたものでして。降りるに降りれそうでもなかったので、暇つぶしついでに、つい盗み聞きをしてしまいました」

いや、申し訳ない、と、飄々としてこそいるが申し訳無さそうな口調で謝罪する男の言葉に、確かに自分達が階段を塞ぐ形になっていた事に**“大導師”**は気づいた。

すぐに階段からモルジアナを降りさせ、彼女共々階段の横に下がる。

「こちらこそ済まない。つい話が立て込んでしまいました」

「いえいえ。途中からでしたが、こちらも勝手に貴方方の会話に耳を挟んでしまったのです。お互い様ですよ」

ようやく開いた階段を男が降り切るのを待ち、互いに頭を下げ、謝り合う。

そしてその場から一足先に奥へ去るかと思われた男が、ふと、思い出したように「大導師」達の方へ振り返った。

「そういえば気になっていたので、お連れのお嬢さん、もしかして「フアナリス」ですか？」

「知っているのです？」

若干の驚き混じりに、「大導師」は訊き返した。

「暗黒大陸」に住むとされる伝説の狩猟民族「フアナリス」。

その名前こそ、モルジアナを助けた例の奴隷競売で聞き及んでこそいたが、それがどんな人々なのかを「大導師」が知ったのは旅の準備を整えていた2か月半前の事。それも、「あの果実」の力でようやく知った事だった。

別に男が知っているのがおかしい、というわけでは無い。ただ、そうまでして苦勞しなければ「大導師」すら知ることも無かった情報を、彼が知っていたのが意外だったのだ。

「ええ、知っていますよ。というのも私、こう見えて学者でして。『暗黒大陸』には珍しい生物が多く生息していますので、時たまこうやって調査で向こうに行くんですよ」

「成程。それで『フアナリス』の事も知っているとどうわけか」

確かに、それらしい肩掛け鞆を下げ、飄々としていながらも理知的な面持ちをした顔をしたその姿は、学者然としていた。

納得して頷く『大導師』に、男もまた、そういうことです、と頷き返した。

この時、『暗黒大陸』と聞いて頬を膨らませたモルジアナが文句を言おうとしたが、それを男に見られないようにしつつ、『大導師』は手で制していた。

あくまで『暗黒大陸』という名は蔑称であり、響きの暗さもあって、彼女がその名前が嫌いなものを知っていたからこその行動だった。

「いやゝ。それにしても、まさか『また』『フアナリス』に会えるとは思いませんでしたよ」

「――『また』？」

この後、『大導師』はどうしようもなく後悔することとなる。

足元のモルジアナを見て、感嘆したようにそう言う男の言葉に、覚えた違和感のままに問い質すべきではなかったと。

自らの『目』が捉えた、男から滲み出る不穏な空気の意味を、もつと考えるべきだった。

たと。

それが適わなくとも、男が“それ”を伝える前のこの時点で、聞こえないようにモルジアナを下がらせるなり、自分達がどこかへ移動するなりすれば良かったと。

海を見せて、モルジアナに一時でも家族や故郷の事を忘れさせた意味が無くなった。

どうしようもなく高慢で、それ故に多くの過ちを犯したかつての己を省みた時と同じくらい、後悔することになる。

だが、いくら“大導師”という責任ある立場を任されたといえど、彼とて当時はまだ20代半ばの若者であり、どちらかといえば、まだ思慮も足りなかった方だ。

故に、滅多に無い船旅——それも、無垢で純粋な幼子を伴った——という状況に、己も知らぬ間に気が緩み、結果考えが至らなかつたとしても、それは仕方なかつたのかもしれない。

「……確か、そのお嬢さんを御両親の下にお送りになさるんでしたね」

“大導師”の疑問に対し、口を滑らせたとはかりに慌てて口を両手で塞ぐ男だったが、“それ”を言おうが言うまいが彼らの行先に待ち受ける事は同じと腹を括つたのか、一つ咳払いをしてから“大導師”への返答を口にした。

先ほどまでよりも、幾分か重い口調で。

「ええ、そうです」

「でしたら——やはりお伝えすべきですね」

だが、結局のところ、これで良かったのかもわからない。

何故なら、「それ」は先程の「『大導師』達ともう一度海を見れるか」という問答と違い、「いずれ近い内に必ず直面する未来」の話であり、今聞こうが聞くまいが、

「今の『暗黒大陸』に『フアナリス』はいません。——もう、誰一人として」

その結末が、いずれ訪れる事になりなかつたのだから。

若い少年が、宙高々と空を舞った。

それがつり上がり気味の双眸に映つたのが、時が来るまで静観を決め込んでいた筈の彼女が、「カツとなつた」瞬間であつた

その事を、「まだまだ未熟だわ」と反省する事になる彼女であつたが、それはまた後々の話。

今重要なのは、カツとなつた彼女——モルジアナが起こした、一連の行動だ。

まず彼女が獲物に選んだのは、「標的」——「表面的には葡萄酒製造で名の通つている」大豪農ブーデルの、その背後に控える護衛二人の内の、左側。

距離にして10数メートル。普通ならば歩くなり走りなりして近づいてから「行動

“に移したい距離だが、そのいずれもモルジアナには必要無い。

彼女がやったのは唯一つ——その場からの跳躍。

助走などしない。前方を遮る人々のせいでそれはほぼ不可能であり、元より“この程度の距離”を跳ぶのにその必要は無い。

一端折り畳んだ足を、押し込められたバネを開放するが如く伸ばすだけで、既に彼女の体は宙高く飛ぶに至っていた。

そこから重力と慣性に引かれて護衛の筋骨隆々な背中へ踊り掛かるまで数秒。

その間に右手を前方に突き出して照準とし、後方に掲げた左手の小指のリングを引つ張つて、自らの“爪”を引き出す。

シャキン、というスライド音を立て、左腕に着けた腕当てから飛び出した“爪”が鈍い銀色の輝きを放った。

“アサシンブレード”——それが彼女の“爪”の名前だ。

腕当ての内側に取り付けられたスライド式の隠し短剣であり、小指に嵌めたリングを引く事により、薄い箱状の鞘に収められた刃の展開、及び納刀を行う事が出来る。一見して唯の腕当てとしか見てとれないその見た目を利用した暗器であり、同時に“彼女達の象徴とされる武器である”。

そしてその鋭い刀身が今、飛び掛かられた事に気付く事も無く、押し倒されて土に無

骨な唇を合わせる事となった護衛の男の筋張った首に、吸い込まれるように刺し込まれた。

——まず一人。

後首、頸椎から喉までを貫かれて一瞬の内に事切れた護衛の首から、添えていた両手を離してブレードを引き抜く。

途端に、栓代わりになっていた刃が抜けて噴き出した少量の鮮血が、指切り手袋を嵌めた左手を染める。

それを意にも介さず、突然現れた第三者に葬られた同僚に茫然とするもう一人の護衛目掛けて、すぐさま同じ様にモルジアナは飛び掛かった。

最初、何が起こったのか理解できなかった。

故に、突然現れた何者かによって押し倒されたブーデルの護衛と同時に尻餅を着いたアリババは、あんぐりと口を開けたまま、目の前で繰り広げられる光景をただ見ているしか出来なかった。

そしてそれは、同じようにその場で尻餅を着いたブーデルも同じ様だった。

「あ、ああ……ああわ、あ……」

否、ブーデルは違った。

何故なら、彼の場合は目の前の状況を否応無く飲み込んでしまい、結果、恐怖で腰が抜けたためだったからだ。

そして、彼に状況の理解を強いたものは、今、磨き上げられた高そうなその靴を汚さんと迫っていた。

彼の目の前で仰向けに倒れた護衛の、穿たれたその首から流れ出るぬらぬらとした血だ。

そして今まさに、咄嗟に応戦しようとしたも、あつさり銀の“爪”の餌食となったもう一人の護衛の首からも血が噴き出したところだった。

どうにか、噴水のように噴き出る生命の水を堰き止めようとしたもう一人の護衛だったが、それが適う事は無く、程なくしてその巨体を同僚の上に重ねて、×の字を描く事となった。

そうして全てが終わった時、いつの間にもやら完全に沈黙した群衆が作る円の中に残っていたのは、アリババと、ブーデルと、アラジンと、蹲る例の奴隷の少年と。

「……」

物言わぬ死体となって血だまりに埋もれるブーデルの護衛達の上に平然と立つ、白いローブの人物のみだった。

容易いものだった。

一人目は言うまでも無く、二人目は咄嗟に伸ばしてきた腕に合わせて懐へと入り込み、そのままブレードでガラ空きの喉笛を薙いでやった。

掛かった時間は一分とあるまい。

あまりに他愛無い、戦いとすらいえない不意打ちからの勝利に酔うような事も無く、されとて二人目の喉を切った際に嘔き出て、フードだけでなくその下の頬や、肩のやや下で切り揃えた赤い髪にもひっ掛かった返り血を気にする事も無く。

はたまた、腰を抜かし、結果的に“行動”を映す絶好の機会にある“標的”に目をくれる事も無く。

未だに沈黙を保つ人々の視線の中、最初にモルジアナが向かったのは奥の方で蹲る奴隷の少年の所だった。

「大丈夫ですか？」

少年に歩み寄るや、一端左腕のアサシンブレードを閉まってしやがみ込み、その背を擦りながらモルジアナは問い掛けた。

その問い掛けに、俯いていた頭をゆっくりと上げて少年が頷くが、その顔色は土気色に染まっている。加えて、彼のすぐ下には衝撃で吐き出したらしい吐しゃ物すらまき散らされているし、土に汚れたその顔にも擦り傷がいくつか付いている始末だ。

——酷い事をする。

改めて湧き出す怒りについ険しくなりそうになる顔を、幼い子供の前だという事を思ひ出してどうにか抑える。

そして、その口元に残った吐しゃ物の残り涎をローブの右袖で拭ってやってから、スツと立ち上がって踵を返す。

「少し待っていて」

肩越しに少年に告げてから、改めてモルジアナは「標的」の方を見据えた。

「標的」——ブーデルは未だ恐怖から抜け出せないのか、変わり果てた自らの僕達を前に腰を地面に着け、抜け出してしまいそうな程に目を見開いている。

周囲には相変わらずの衆目の目。その奥には大通りに沿うように並ぶ露天。その更に奥には、街の中央側へ向けてズラリと並ぶ石造りの家屋の列。

こうなつては仕方がない。「標的」をここから連れ去つて、適当な路地裏にでも逃げ込んでから必要な事を聞き出して、始末しよう。

そう決め、迫り行く彼女に気付いているのかどうかも分からないブーデルの下へ、ゆつくりとモルジアナは歩み寄る。

そうして、後はその後ろ襟に手を掛けるだけというところまで来たのと同じくして、

「アサシン」だッ！　「アサシン」が出たぞー!!」

群衆の沈黙が解かれた。

「アサシン” つ!?! 今噂になつてる、あの!?!」

”アサシン”。

誰かが叫んだその言葉に耳朶を打たれて、ようやくアリババは我を取り戻した。

同時に、自らがバイトをしている運送業の社長が、アラジンの紹介を終えて冷めきらない驚き混じりに言つていた、ある ”注意” を思い出した。

『ま、まあ、何だ。その、借金返す充てがあるなら、良いんだ、うん。あ、だが、それは別にだな、街を歩く時は気を付けろよ、アリババ。今、チーシャンには物騒な奴が居座っているからな』

その ”物騒な奴” とやらは、何でもここ一週間ほど前に現れ、瞬く間に3件、被害者数17名もの被害を出した凶悪犯だそうで、ここ数日仕事で出はからつていたアリババの耳には届いていない話だった。

行つた罪は殺人。それも奴隷商ばかりを狙つた犯行で、犯人の特徴も精々分かつているのは服装くらいらしい。

だが、その服装だけで犯人の正体は——正確には、その組織名や通称といった方が正しいが——は十分に判明していた。

『そいつは、常に神学者みたいな白いローブを着て、どこから出したかも分からない刃物で人を刺しては颯爽と逃げちまうらしい。——もう分かるだろ、そいつが何なのか』
 彼らの事を、ある者は事に及ぶ時に大麻を服用するという噂から「ハシシ野郎と呼び、またある者は事のためなら自らの死すら許容する手段の選ばなさから「イカれた殉教者ファイターイー」などと呼ぶ。

だが、結局のところ彼らはこう呼ばれるのが常であり、また彼ら自身もその名を名乗っていた。

人の目を掻い潜り、人の不意を突いて闇打つ暗殺者——「アサシン」、と。

そして、街を騒がせているその「アサシン」が今、目の前にいる。

「あ、ああ、「アサシン」？ マジで？ 「アサシン」？」

段々、段々と湧き上がってくる驚愕と恐怖に震えて照準の定まらない人指し指を向けながら、ブーデルのすぐ傍に立つその白いローブをアリババは凝視した。

成程。上から下まで真っ白なそのローブは、フード周辺と左手に付いた返り血さえ無視すれば、確かに神学者のように見えない事も無い。

目深に被ったフードの下の顔は、後を向いているためアリババの位置からは確認できないが、その身長はざっと見て150cm程と差ほど高く無い。肩幅も狭い。また、腰には赤い布製、茶色い革製の順で二種類の帯が巻かれている。

そして更にその下は、左右に太股の半分ほどまでのスリットが入ったローブの裾が膝の下まで伸びている。驚く事に、裾と布帯の端、そしてその下の黒いスカートから覗く両脚は靴を履いておらず、足首に巻いた黒紐の下で健康的な色合いの肌が堂々と自己主張していた。

だが、最も目に着くのはその左腕だろう。

何せ、そこに着けられた革製の腕当ての内側、同じく革製の指切り手袋が嵌められた手首の付け根の辺りから、先程まで鈍い光を放つ「爪」——もとい、血塗れの短剣が確かに伸びていたのだから。

アレが恐らく噂の「どこから出したかも知からない刃物」なのだろう。

だが、それが分かったところでどうということは無く、その事実に変更がぞつとしたアリババの震えが酷くなるだけであった。

だが、すぐに怯えてばかりもいられなくなる。

件の「アサシン」の、すぐ右隣。つい先程までブーデルの左足の前だったそこで、首から下ろしていた金色の笛を握ったまま、地面に座り込んで茫然と「アサシン」を見る「彼」の姿を見つけたからだ。

(げえっ！ アラジン!?)

アリババに課せられた重い借金を返済する唯一の目処にして、彼の野望 ダンジョン 迷宮攻略

“。財力も無ければ、碌な装備も無い彼がそれを成し遂げるための、ほぼ唯一の手段と言つても良いその少年が、今し方二人の人間を容赦無く殺めて見せた冷酷な殺人鬼の、すぐ間近にいる。

おまけに、呑気に見上げている。

その状況を見た人間は、彼で無くとも同じ事を考えるだろう——「殺してくれ」と言っているようなものだ、と。

(あ、あああ、アラジン！ ななな、何やってんだあつ！ 早くこつち来おいつ！)

“アサシン”に気付かれないよう、努めて静かに。

しかし、溢れんばかりの焦りと恐怖からガクつく口を必死で動かさし、どうにか紡いだ言葉でアリババはアラジンに呼び掛けた。

が、それに対しアラジンが取った行動は、

ふいっ

と、相も変わらず、悪意を込めてアリババから顔を背けただけだった。

(拗ねてる場合じゃねーだろバカヤロオオオ！ 死ぬぞっ！ マジでぶっ殺されるぞオツ!!)

さつきよりほんの少し、それでもなお気付かれないように気を付けながら、音量の上がつたアリババの悲痛な声が放たれる。

が、やっぱり返ってくるのは、ぷいつ、というアラジンの無視だった。

(ダァーッ！ お前分かってんのか!? そいつ、アサシンだぞ！ 噂のおつそろしい殺人犯だぞっ！ いくらお前でも敵わないっつの！ そいつがお前に手え出す前に、早く戻って来おい!!)

じゃないと、俺の人生が終わるんだよ！

最期に心の中でそう必死に本音を絶叫する頃には、アサシンが怖いやら、でも俺の野望と人生が掛かっているやらと、色々な思いと感情がない交ぜになってワケが分からなくなった彼の目には、遂には涙さえ浮かんでいた。

一方、件の「アサシン」ことモルジアナは、先程から後ろから聞こえてくる妙な囁き声を煩わしく感じ、フードの中で頬をむすつと膨らませていた。

——ウルサイな。

どうやら、その声は足下の青色の髪にターバンを巻いた少年に向けて放たれているようだ。

チラリと、肩越しに声の方を覗いて見れば、途端に、ひいひいいつ、とあの金髪の少年が情けない悲鳴を上げながら、もの凄い勢いで後ずさる姿が見えた。

その勢いに、同じように悲鳴を上げて、後退する少年の道を開けるように周囲の人々

も後ずさる。

その様を見て、モルジアナは思った——馬鹿馬鹿しい、と。

彼らは自分達が彼女の次の獲物にされる事を恐れて、そういう行動に出ている。

だが、それは「まず」有り得ない可能性だ。

「アサシン」には「掟」がある。その「掟」の一つとして『罪なき者を殺めるなかれ』というものがある。

「掟」は絶対だ。それを守り、人々の平和と自由のために戦うからこそ、「アサシン」は冷酷な殺人鬼ではなく、「正義の味方」として在れる。信頼し尊敬する「兄弟」達が皆そう豪語するように、モルジアナ自身もまたそう思っている。

だが、彼らはその事を知らない——知ろうともしない。だから、次の犠牲者になるまゝいと無駄に怯え、無駄に逃げ回ろうとする。

だから「馬鹿馬鹿しい」のだ。どうしようもなく。

だが、そんな事は今はどうでも良い。そんな事に気を回している暇は無い。

どうせ、もうそろそろ来るだろうから。

「来たッ！ 町警史イ！ こことだ！ こつちに「アサシン」がいるぞオツ!!」

不意に、大通りの奥が騒がしくなり、すぐさま群衆の中の誰かがそう叫んだ。

予想通りのタイミングだ。

すかさず、未だその場で呆けるブーデルの襟首を掴んで強引に自分の方に向かせる。

「っ！ な、何だ貴様！ 何をする離——」

それによつて、半ば失つていた意識を取り戻すや、取り乱すブーデルにモルジアナは淡々とこれから行う事を告げ、

「ブーデルですね。一緒に来てもらいます」

肥え太つたその腹へ、それなりに手加減した右ストレートをめり込ませた。

その一発によつて、問答無用で昏倒する肥満体の後ろ襟を右手で掴んで地面に引き摺りつつ、もう一度例の奴隷の少年の下へ駆け寄る。

そしてキョトンとした表情を浮かべる彼に、お待たせしました、とだけ告げて、空いている左腕でその小さな体を抱き上げた。

そうする頃には、群衆を無理やり掻き割つて来た二人の町警史が、手にした警棒を構えて彼女への威嚇を行つていた。

「アサシン」め！ チーシャン この街を血に濡らす悪党め！

「今日こそひつ捕えてやる！ 覚悟しろ!!」

各々がそう怒鳴るや、一齐に警棒を振り上げて駆け寄ってくる町警史達。

鬼のような形相で迫ってくる彼らだったが、しかしモルジアナはそれを一瞥しただけで気に留める事も無く。

町警史達が今まさに組み押さえようとしたその一瞬前には、既に彼らや群衆、青い髪と金髪の二人の少年達の頭上十数メートルの高さまで、右手の気絶したブーデルと、左脇に抱えた少年諸共、彼女は飛翔していた。

続いて、大通りに並ぶ適当な露店の屋根に着地。布で出来たそれをトランポリンの如く窪ませて、もう一度高々と彼女は飛び上がる。

そうして露店の奥の、漆喰の塗られた民家の屋根に着地するや、勢い余つて打ち付けられた町警史達の頭が鳴らした中身のあまり無さそうな音と、群衆のざわめきを後に。

平坦な屋根の上を、猛禽類の尾羽のようにロープの後裾とスカートをはためかせて、モルジアナは駆け出した。

第三夜

偶然出会った学者から得た、目的地にして故郷たる「暗黒大陸」に「フアナリス」がないという情報。

その詳細を確かめるという名目で場所を変えてその続きを聞き出したが、詳しいことまでは分からなかった。彼の学者も人伝に聞いた話で、大規模な奴隷狩りに遭ったか、それとも、それを嫌がって他の地に移り住んだかも定かでは無いらしく、その詳細を確かめることも彼の今回の船旅の目的だそうだからだ。

学者との話を終えた後、根も葉も無い噂だったようだ、心配する必要はない、と不安げな表情を浮かべたモルジアナに一応答えはしたが、生憎と、その解答が少女に内に燻り出した不安を拭い去るには至らなかった。

最初の内、例の学者と会ってから一カ月程までは、まだ良かった。最初の日のように、雄大な海に心奪われてはしゃぐ少女の姿を、まだ見ることが出来たからだ。

だが、航海期間の半分以上を過ぎた辺りから、次第にモルジアナが思いつめたような表情をするのを目にする機会が多くなり、食事も少しずつ残すようになっていった。寝付く時間も次第に遅くなっていった。

唯でさえ、航海というのは厳しいものだ。途中途中での補給こそあれど、船という閉鎖空間の中で、限られた物資や食料を遣り繰りしなければならぬし、美しいだけでなく、ちよつとした要因の変化で晴天が荒れ狂う大嵐に変化する大海原の気まぐれさにも上手く付き合っていかなければならない。

そんな苛烈な海上の旅で、次第に不摂生になつていくそんな生活を送っていればどうなるか。

“暗黒大陸”まで後半月というところで、遂に幼い身体を壊して客室のベッドで寝込むこととなつたモルジアナと、その傍らで彼女の額から取り上げた濡れ布を冷たい水に浸して絞り上げる“大導師”が、その答えだ。

「気をしっかり保て、モルジアナ。まだお前の故郷に辿り着いてはいない」

固く絞つた布を熱の籠つた額に乗せ、荒い息を立てて覽される少女の片手を優しく握つて、“大導師”は語り掛ける。

その言葉を受けて、火照つて痛々しい顔に必死に作つた微笑みを浮かべ、モルジアナもまた希望を口にした。

「だ、だいじょうぶ、だよ、だい、どうしさま……だ、だって、しんじつなんて、ないん、だよね？」

「そうだ。あの学者の言葉は、彼自身が見聞きしたものではない。そんなものに惑わさ

れてはいけない。何が正しいかを決めるのは、己自身だ」

ベッドの脇に設置された柵の上に置いてある粥を取り、スプーンで掬い取った一口を彼女の口へ運ぶ。

それをモルジアナが口に含み、弱弱しくも咀嚼するのを確認してから、彼は語気を強めて言葉を続けた。

「信じろ、モルジアナ。お前の両親は故郷にいます。今も、お前が無事な姿で帰ってくることを、心待ちにしていると。必ず辿り着くのだ、故郷に」

そして、その言葉に力を振り絞って頷き返す少女の口に、もう一度粥を運んでやる。

そんな遣り取りを何度か繰り返し、“暗黒大陸”に着くまでにどうにかやり過ごしてこられたのも、一重にモルジアナが“フアナリス”だったからこそ。例えば奴隷商人から付けられた柵は外せなかったとしても、その血は同じ年代の子供を上回る生命力を確かに与えていた。

いや、それだけではない。加えて、少女は何よりも懇願していた。故郷へ帰ること。そして愛する両親の下へ帰ることを。

その想いと、彼女の気丈な性格。そして“大導師”という心強い味方の存在があればこそ、出だしとは打って変わったこの辛い旅をモルジアナは乗り越える事が出来ただ。

だが、それにも限度がある。

いくら想いがあつても、優秀な血を受け継いでても、頼れる味方がいても、幼い少女が身体を、そして心を、日に日に衰弱させていくことを止めるまでには至らなかつた。

そして、そんな彼女を介抱し続ける日々は「大導師」にも少なからず影響を及ぼして来た。

付きっ切りで少女の看病を続ける肉体的疲弊と。病床の中で親を求める彼女の姿と、やはりそれに重なる、同じように親を求めていた「かつての親友」の痛々しかつた姿との、二重の精神的疲弊という形で。

それに彼が耐える事が出来たのは、日々の修練の賜物であり、また「アサシン」として培つた忍耐力。そして自分以外にこの娘を親元へ導く者はいないという、使命感があつたからこそだ。

そして、そんな船旅の果てに、遂にモルジアナと「大導師」は「暗黒大陸」に辿り着いた。

肉体的に、精神的にも多大な疲れを強いられた彼らには、もはや一刻の猶予も無い。すぐさま馬を調達するや、敢えて休息をほとんど挟まず、それを走り潰す勢いで先を急いだ。その結果、予定していた二週間を大幅に短縮した一週間で目的地に辿り着き、尚且つ猛獣に出会う事も無かつたのは行幸だつた。

それも、所詮は不幸中の幸いに過ぎなかったが。

そうして、その地に辿りつく事が出来たモルジアナと“大導師”を出迎えたのは、ここにたどり着くまでに延々と見続けてきた、悠然と、果て無く広がる大地と。

心地良い風を受けて靡く一面の草原と。

青々と生い茂った葉をさざめかせる大樹の群れと。

地平線の奥から昇りながら、少しずつ彼らとその周辺を暖かく照らし上げていく穏やかな朝日と。

そして彼らと同じように朝日の光を受け、無残にへし折れた木材や砕けた石壁、焼け焦げた地面を晒す、変わり果てたカタルゴの街並であった。

記憶の中のそこは、とても豊かな場所だった。

幾つも青々と生い茂った大樹が立ち並び、柔らかな草原が風を受けて靡く広大な土地。

その雄大な大地の上を歩く、穏やかな草食動物の群れ。

何本もの丸太を合わせて作られた家が並び、角ばった石のブロックを並べて作られた壁が周囲を覆う街。

その中を行き交い、世間話に興じたり、狩ってきた動物の毛皮や肉を運んで来たり、何

処からか持つてきた珍しい物を露店に並べて売ったりしていた、自分と同じ赤い髪の人々。

そして、近くの草原で他の子ども達と遊んできてクタクタになった自分を、いつでも優しい笑顔と共に迎えてくれる両親。

とても、豊かな場所だった。

……その筈だった。

「あつ、あそこ！ あそこね、いつも石屋のおじちゃんかめずらしい石を並べてたんだよ！ すつごくキレイだったんだよ！」

「大導師」に抱き上げられた状態で大通りを進んでいたモルジアナが、その途中の一角を指差して叫んだ。

整えられた平坦な地面の上に構えられた露店で、髪と同色の無精髭を生やした店主がいつも快活な声と笑顔で迎えてくれたそこは、今は地面が抉れ、小規模のクレーターと化していた。

「大導師」は、無言だった。

「あつちはね、だいいくじょうなんだよ！ みんなでいっしょにおふろに入って、みんなせなかをながしあいっこしたりしたんだよ！」

次に彼女が指したのは、右側の奥手。

へし折れた木材の鋭利な先が剣山のようにそこから飛び出る民家だったものの群れの奥に、元は優美な彫刻が成されていたのだらう、砕けて折れた四方の柱に囲まれた、ボロボロの石造りの大浴場だったものが見えた。

“大導師”は、無言のままだった。

「あとね！ あそここのとうは、ひのとりさまにおいのりするためたてたんだよ！ ひのとりさまはね、お日さまのおともだちだつてみんながおしえてくれたんだよ！」

大通りを進むうちに辿り着いた、街の中心に立つ石の塔。

その上方には、確かに火の鳥のレリーフが刻まれていたのだが、今は中ほどに入った大きな罅によって翼の端くらいしか見えない。

そうして塔を超え、その向かいにも続く大通りを更に進んだ先。あと少し進んだところで逆側の出入り口に着くかというところまで進んだところで、“大導師”の腕の中から飛び出したモルジアナは、こっち、とだけ彼に伝えて、一足先にそこから左の脇道の方へ向かった。

その先にある筈なのだ、彼女が最も行きたかった場所が。

温かい笑顔と手料理で出迎えてくれる母が。

太い腕で小さい自分の身体から、とても大きな動物まで担いで見せた、力持ちの父が。正直、こうやって走るのは辛かった。船の中で崩した体調は未だに優れない。だから

“大導師”がここまで抱き抱えていてくれた。

頭痛がする。体が熱っぽくて怠い。でも構わない。

ずっと辛い思いしてきたその甲斐が、その先にあるのだから。

愛する両親が、優しい母と父が待つ家が、自分の背より少し高い塀が並ぶこの小道を右に曲がったところにある

「お母さん！ お父さん！ ただ……」

—— 筈だったから。

だから言おうとした、「ただいま」という台詞も、その口を出切る前に引っ込んでしまった。

モルジアナの背よりも遥かに高い壁の上に立派な屋根が付いていた一戸建てだったのに、いつの間にか彼女の背より低くなってしまった壁の、その上にも、その中にも何も無くなってしまった、変わり果てた家。

その周囲に万遍なく散らばる木片は、かつて屋根や壁だったものだけでなく、家族全員で囲んだ机や、丸田を短く切った簡素な椅子、三人で一緒に使っていたベッドの破片も間違いなく混ざっているだろう。

そして何より、ここまで見てきた街がそうであったように、ここにも、誰も、いなかっ

「モルジアナ」

不意に聞こえた静かな声に、はっとモルジアナは振り返った。

見れば、「大導師」がゆっくりと歩いて来ていた。

心なしか、その顔を覆うフードの影が、一段と濃い気がした。

——いけない。

すぐに気を取り直し、彼の方に向き直った。

「あつ、だいどうしさまあ！ 遅いよお、もう！ モルが先に着いちやつたよ！」

ふくれっ面を作り、気分を害したような素振りを見せてみせる。

そうすると、いつも「ああ、済まない」と愛想の無い返事を返してくれるのだ。少な

くとも、この4か月はずっとそうだった。

ところが、その言葉を受けた「大導師」は黙ったまま。

ただ、モルジアナに歩み寄るままだった。

そんな「大導師」の態度を不思議に思いながらも、もう一度モルジアナは家の方を向

いて、元気な声を上げた。

「ここがモルのおうちだよ！ “マシャフ” みたいに大きく無いけど、木のおいがし

て、すつごく涼しいんだよ！」

そうかつての自分の家について紹介するモルジアナに対し、やはり「大導師」は無言

のまま。

——なんで、なにも言ってくれないの？

次第に、モルジアナの心に不安が蓄積していった。

その不安は、必ずしも沈黙を保ち続ける。『大導師』によるものばかりでは無いことに、彼女はまだ気づいていない。——気付いていない振り続ける。

それには熱のせいだろうか。何故か、視界も次第にぼやけて来ていた。

これではいけない、と思った。ここまで連れて来てくれた『大導師』に、せめてもの礼として、自分の故郷がどんなところなのかをもっと知ってもらわないと。

そのために、モルジアナは空元気を振り絞って、より一層大きな声を上げようとした。

「い、今はきつと、かりに行っていていないんだと思うけど、いつも、お母さんとね、お父さんがね、おかえりって言って、抱きしめてくれるんだよ！ お、おいしいシカのお肉のスープを——」

「もういい」

やつと、『大導師』が返事を返してくれた。

だが、そんな言葉を彼女は聞きたくなかった。

「——き、きつとだいでどうしさまにも、ごちそうしてくれるよ！ ほ、ほんとうにおいしんだよ！ だから、だから——」

「もういいんだ」

次第に纏れ出す口でそこまで、絞り出すように言い掛けたところで、指が一本無いが、しかし優しく、温かい手が、モルジアナの頭に置かれた。

今までなら照れ臭くも嬉しく感じた筈のその行動が、何故か今は、そんな風に思えなかつた。

「……やめてよう……」

さつきより、頭痛が酷くなっていた。視界のぼやけも、酷くなるばかりだった。目頭すら、熱くなり出していた。

それでも、モルジアナは耐えようと頑張った。

やっと、待ち望んだ故郷に帰ってきたのだ。

今はないが、両親も、街の皆も、きつとすぐに戻ってくる。『真実なんて無い』のだから、もう誰もいないなんて、そんな事は絶対に無い。

だから、止めて。

もう少し、待って。

ほんの、ほんの少しでいいから。

もう少し、待って。

そう、言葉に出来ない言葉で、必死にモルジアナは頼み込んだ。

奴隷にされそうだったところを助けてくれた恩人に。海というものを始めて見せてくれた恩人に。長い時間を掛けて、ここまで連れて来てくれた恩人に。

優しい「大導師」に、今にも崩れてしまいそうなその顔を見られないように、背を向けながら。

でも、駄目だった。

ゆつくりと首を振られて、そう言われては、もう耐えようがなかった。

「『ここにいても、誰も帰ってこない』。——もう、いいんだ」

……分かっていた。

でも、考えたくなかった。——聞きたく無かった。

だが、言われてしまった。聞いてしまった。

その言葉が決定的な罅となつて、必死に塞き止めていたものが一気に流れ出すのを、もはやこの少女に止める術は無かった。

次の瞬間、長いロープの裾に覆われた「大導師」の足にしがみ付き、溢れ出る激情のままに、モルジアナは絶叫していた。

変わり果てた故郷に、もう会えない両親への想いに、特徴的な目元から際限なく湧き出る涙で、男の白い裾を只管に濡らし、汚していく。

それを跳ね除けるようなことも無く、幼い身体を悲しみに震わせる少女の為すがまま

に、唯、その赤い頭を撫でてやりながら、
“大導師”はその支えとなつてやった。
“……” “済まなかつた”

何故か告げられたその謝罪の言葉の意味も、フードの下で悲哀と罪悪感の色を帯びたその目も、今の彼女が気づくことは無かつた。

数年後、“レーム帝国”の南方属領に加わり、多くの人々が移り住むと共に開発が進み、そこに広がる廃墟と化した街すら消えることになるそのサバナの一角で。

たつた一人取り残された幼い少女の悲痛な慟哭が、泣き疲れて一時の安らかな眠りを迎えるその時まで、延々と、延々と響き渡つた。

傍から見ても90kgは下らないだろう肥満体のブーデルを引き摺り、奴隷の少年も抱えて高々跳躍するという離れ業を見せた“アサシン”を、未だ恐怖に引き攣つた目でアリババは追つていた。

本来なら、スゲー、とでも感嘆の言葉を送つたりしたのだろうが、相手が相手であり、状況が状況だっただけに、そういう発想すら浮かばなかつた。

そんな彼を尻目に、奥の露店の、そのまた奥の民家の屋根に降り立つや、あつという間に街中の方へ駆けていって見えなくなつた“アサシン”に、打ち付け合つた頭を押さえて悶絶していた町警史達が怒号を上げながら続いて行つた。

それで終わりかと思いきや、一連を見守る過程で再び沈黙していた群衆を掻き分け、
「アサシン」はどこだーッ!

更に十数人の町警史が警棒を振り回し、砂埃を巻き上げて「アサシン」と最初の二人
が向かった方へ駆けていった。

彼らが眼前を通り過ぎ、しばらく耳の中で反響し続けていたその靴音が止んでから暫
くして、その時になってようやく脅威が去った事を悟って、アリババは吊り上げていた
両肩を下げたのであった。

「……た、助かった……」

「アサシン」の獲物が最初からブーデル一人だった事など知る由もなくば、これまで
奴隷商ばかり狙ってきたという話の信憑性もどれ程のものか知れたものではない。

故に、自分も狙われる可能性があったと思ひ込んでいた彼は、こうして命が助かった
事に心の底から安堵した。

そしてすぐさま、この場に残ったもう一人の生存者の下へアリババは這いずり寄っ
た。

「アラジン! 無事かアラジン!?!」

アリババが安否を気遣った青い髪の少年は、折り重なったブーデルの護衛達の死体の
傍で、「アサシン」達の消えた屋根の辺りをポーツと見上げていた。

その背に掛けた彼の声に一瞬振り返りこそしたものの、本来大きな青い瞳が踊っている筈のその顔をすぐに忌々しそうに、親の仇でも見るように歪め、ぷいっと相も変わらず明後日の方向へ背けるのであった。

——無事みたいだな。

それを確認できただけ、良しとしよう。ここは寛大な心を持って、良しとしよう。後で「迷宮」^{ダンジョン}でタツプリ働いてもらうから、それで良しとしよう。

いい加減プツツンしてしまいそうな自分をどうかそう言い聞かせ、ざわつく心を落ち着かせるために一端深呼吸する。

——よし、冷静になった。もうキレてない。イラツともしてないぞ。

「そ、そうだよな。目の前でいきなりあんなモン見せられたんだもん、どうしたらいいか分かんないよな。うん、分かる。俺も怖かった、チョー怖かった。ちびりそうだった。でもな、もうあんな血生臭い殺人鬼と遭うことなんて二度と無いからさ。さっさと忘れて、俺達は「迷宮」^{ダンジョン}に行こうぜ。夢と希望が詰まった楽しい冒険に行こうぜ。な？」

仏のような優しさを持って、聖人のような慈悲を持って、思い付く限りの思いやりの言葉を、清々しい笑顔とサムズアップと共に掛けてやる。

それに対し、アラジンの返答はこうだった。

「……一人で行けば？」

地獄のコキユートスもかくやというような冷たさと、もう話しかけるなという拒絶の意が言外に詰まった一言。

やはり合わせず、そっぽを向く顔。

次の瞬間、自分の中でプツンと何か切れる音を、アリババは耳にした。

「いい加減にしろこのガキツ！ 下手に出てたら調子に乗りやがって、俺が一体何をし

——」

が、アラジンの胸倉を掴み上げてのその激怒もすぐに納めざるを得なかった。

「あ！ 町警史！ アイツら奴隷泥棒（未遂）だ！」

「え？」

アリババの怒鳴り声に気付いたのでろうか。

群衆の中から身を乗り出した誰かが、アリババとアラジンを指差していた。

「何いつ!? アサシン」だけじゃなく盗人だとお!?」

「え？ え？」

しかも間の悪い事に、その応答を発したのは先の「アサシン」の襲撃の犠牲となったブーデルの護衛達の死体の検証のために、下手人を追わずそこに残った町警史2名。

彼らがいたのは、アリババのすぐ後ろであった。

「あの憎たらしい殺人狂フィクサーに託けて人様の奴隷モソを盗もうとはいいい度胸だな！ 小僧共お

!!

「え？ え？ え？」

もはや、聞き分けの無い子供を叱る余裕など無かった。

“アサシン”の脅威が去ったのも束の間、すぐさま訪れた奴隷泥棒の冤罪の脅威の前にしどろもどろした後、問答無用で取り押さえようと飛び掛かってくる町警史達に対しアリババが取ったのは、アラジンを小脇に抱えての反射的な逃走であった。

「結局こうなるのかよチクシヨー!!」

そうヤケクソ気味に叫びつつ走り出したアリババが、集まる外野に塞がれた大通りを強引に突き抜ける中、その右脇に抱え込まれたアラジンは相も変わらず拗ねていた。

むしろ、この状況をほんの僅かではあったが、良い気味だとも思っていた。

何せ、“友達”だと思っていたのに、彼にとつて自分は体の良い“家来”でしかなかった。アリババがバイト先の社長に自分の事を紹介する際、ハッキリとそう言っていた。それも、事前に“友達”だとアリババ自身が言っていたのに、だ。

詰まる話、アラジンは裏切られたと思っっているから、怒っっているのだ。

最も、当初アリババは彼の事を『迷宮を攻略し、がっほがっほ稼いで借金も帳消しにするための手段』としか考えていなかったため、最初から利用されていただけというの

が真実なのだが。

まあ、つい最近になってようやく外に出る事が出来た、文字通りの「箱入り」だったアラジンにその意図を悟れというのも、それはそれで酷というものだ。

「待てえ！ この盗人共があ！」

「神妙にしるお!!」

「だから違うつつーのお！ 鎖切つたの俺じゃねーし、あのカキ 奴隷盗んでつたのも「アサシン」だつつーのオ!!」

後ろからは、もの凄い勢いで町警史と呼ばれていた男二人がアラジン達を追い掛けて来る。

それに涙目になりながら喚き返すアリババの言葉は、残念ながら彼らの耳には全く届いていないようだった。

——知らないけど。

ふいっと、一瞬だけアリババを見上げていた顔をすぐに別の方向に向け直した。

すでにアリババの事や、今自分達が追われている真つ最中だということは頭の片隅に追いやられていた。

代わりに彼が思い浮かべたのは、先の「アサシン」と呼ばれていた少女の事。

少女と、そう分かったのは、直前までその脛を打ち抜こうとしていたブーデルの傍で、

彼がフードの下に隠れたその顔を見上げる事が出来たからだ。

自分より年上らしい、可愛らしい顔立ちの少女だった。独特の目元と、瞼の上辺りで切り揃えられた赤い髪が、確かにフードの薄暗い影の中に覗けた。

そして何より、とても優しそうに見えた。

実際、あの少年を気遣うような素振りを見せていた辺り、そう感じた事に間違いは無さそうだったが、それが逆にアラジンをも不思議に思わせていた。

何で、あんな優しそうなお姉さんが人を殺したんだろう、と。

いくら世間知らずといっても、彼とて根は心優しい少年だ。今アリババにしているような年相応の、あくまで年相応の意地悪をする程度の悪意を持つ事はあっても、本質的に善人であることに変わりはない。

故に、例えば常識というものを持たなくとも、殺人が「悪い事」であることは知っている。

だから、あの優しそうと感じた少女と、瞬く間に彼女が行った殺人という悪行とのギャップが彼の中に疑問を渦巻かせ、同時にちよつとした興味を抱かせていたので。

最も、それはあくまで「アサシン」の少女個人に向ける興味という意味であり、
お姉さん
女”として向ける興味ではない。

それどころか、全身を覆うローブの下に隠れた、モリモリとした筋肉の存在を本能的

に感じ取った時点で、そういう意味での興味はアラジンの中から綺麗さっぱり失せていた。

さて、そんな事をアラジンが悶々と思考していた内に、

「追いつめたぞ、奴隷泥棒め！」

「盗んだ奴隷はどこにやった!? 正直に吐いて投降しなければ、強制連行だ！」

進行方向にあった横道から別の町警史達に先回りされ、すっかり彼らに囲まれて逃げ場の無くなったアリババとアラジンという構図が出来上がっていた。

「じよ、冗談じゃねえぞ! まだ『迷宮』の入口にすら触れてもいないつてのに、ワケ分かんねー内に泥棒にされて捕まるなんてっ……!」

チラリと横目で上を見上げて見れば、冷や汗を流して動揺を顕にするアリババの顔があった。

そしてその刹那、必死に探した末に見つけた一つの光明に縋るように、彼の顔が一気にアラジンの間近まで迫って来た。

「頼むアラジン! このまま捕まったらもう冒険どころじゃ無くなる! 俺だけじゃなくて、社長やバイト先の皆にとんでもねえ迷惑掛けることになっちゃう! 何でお前が未だに拗ねてるのか分かんないけど、頼む! 助けてくれ! この通りだっ!!」

周囲からにじり寄ってくる町警史達の突き刺さるような視線の中で、何度も頭を下

げ、必死にアリババが懇願して来る。

正直、この時点でいい加減怒るのを止めて、助けてやろうかとアラジンは逡巡した。

こうまでして頼み込む彼を無碍にするのも気が咎めたのもそうだし、こうしていて被害を被るのが彼ばかりでは無いのもそうだが、「もしかしたら」程度の認識ではあつたが、アリババがこうして窮地に陥っている理由は自分にあるからじゃないのかと、薄々気が付いていたからだ。

だが、肝心な事について撤回が為されていない事に気付き、すぐに彼はそっぽを向き直した。

「……ヤダ」

「何でだよおっ!? そんな事に言わずに、頼むよおっ!! 一緒に迷宮ダンジョン攻略するって言つたじゃないかあ! 俺達仲間じゃないかあ! 相棒じゃないかあ! 友達じゃないかあ!!」

ここでの幸運は、遂には恥も外聞も無く喚き立てるまでに至つたアリババが、無意識に、偶然にもアラジンが最も聞きたかつた言葉を発言した事。

耳を震わせて聞いたその言葉を引き金に、それまで抱いていた鬱屈とした思いが一瞬の内に霧散し、夜明けと共に昇る朝日の如く晴れ晴れとした気持ちへと早変わりした、良くも悪くも単純で純粋な彼の在り方であり。

そしてその気持ちのままに、彼らを取り押さえんと、一斉に警棒を振り上げて飛び掛かる町警史達に怖気づく事無く、迷わず首下の笛を啜え、自らの一番の「親友」を呼んだアラジンの行動の速さであった。

「来て！　「ウーゴ」くん!!」

一方、大通りより東の民家の屋根の上。

一つ前の屋根からそこに降り立つたモルジアナは一端立ち止り、背後と下の道路を見回した。

先程まで態々攀じ登って来た数人の町警史達がいた屋根には、今は自分と連れて来た少年とブーデル以外は誰もいない。

下の石畳の道路も同様で、そこから見上げるのはそんなところに立つ彼女を珍しがるか、あるいはその正体に気付いて怯える一般人のみ。

先程まで聞こえていた制止の声も無ければ、「フアナリス」の特徴の一つたる犬以上の嗅覚もまた、警棒の木と塗料の臭いも、町警史の制服の汗臭い臭いも近辺に存在しない事を伝えていた。

「どうやら、撒いたようだ。」

現状をそう判断し、さて人目に付かない所にいこうと腰を屈めた。

突然、来た方から届いた轟音が鼓膜を打ったのはその時だった。

——何？

そう思つて来た方、つまり大通りのあつた辺りに振り向いて、思わずモルジアナは目を剥いていた。

場所は、大通りから少し彼女側に逸れた、脇道の辺りだ。 “チーシャン” に来て最

初の任務で使つた道だ、まず間違いない。

だが、“アレ” は一体何だ？

土を巻き上げ、恐らくは進路上にあつた露店や民家の成れの果てだろう粉々の木片も伴つて疾走する、あの“青い巨人” は、一体何なのだ？

遠くからでも分かるその威容のままに、ダンダンと文字通り地を震わせる足音を立てて街の中を駆け抜けたその巨人——青い、筋骨隆々の体に白い禪一丁の姿で、首から上が無い。その無い頭部の代わりに、ついさつき見たような気がする青色と金色が連なつてくつ付いていたような気がする——は、街を囲うレンガの壁を抜けて郊外に出るや、その首元から吸い込まれるように消えてしまった。

後に残つたのは、暫しの巨人の足音の残響。

それから抜け出すや、足下の人々が皆例の巨人のいた辺りに釘付けになっているのを好機とばかりに、モルジアナは移動を再開する。

向かうは更に東。『あそこ』なら人目に付く事もないだろうし、先に『拠点』に少年を預けてから、この男に話を聞く事も出来る。

飛ぶように屋根から屋根へ駆ける中、左腕の少年と、右手に掴んだブーデルを一瞥し、続いて先程の巨人を思い浮かべたモルジアナが思った事はこうだった。

——『大導師』様なら、何か知っていらっしやるかしら？

才氣溢れ、あらゆる知識や知恵を自分だけでなく、多くの『兄弟』達に授けてくれる恩師の姿を頭に描いた彼女の足は、更に目的地目掛けて加速するのだった。

不意に襲い掛かった鋭い冷たさに、ブーデルの意識は強引に覚醒させられた。

驚いて瞼を開けば、そこから何かが流れ込み、目を沁みさせる。

どうやら、冷え切った水を掛けられたらしい。

口の中にまで浸透して来る無味無臭の液体からそう悟ったブーデルがやったのは、自らを濡らす水を振り払うことでもなく、また口内に侵入してきた水を吐くわけでもなく。

その水が入っていたのだろう、濡れた木製の桶を石畳の地面に落した、白いローブを憤怒の形相で睨み付ける事だった。

「きつ、貴様あの時のお〜！」

間違いない。あの時、大切な商品をめちやくちやにしてくれた運転手のガキと不愉快極まりない笛のガキを見かけてちよつと脅し付けてやっていたところを、突然現れて僕二人を殺し、彼自身にも蛮行を振るつた、不屈き千万な輩。

彼も、彼の「大顧客」からその話を既に聞き及んでいた。今、この「チーシャン」を騒がせる暗殺者の話を。

「薄汚い、アサシン」めがああ〜！ よくも、よくもこのわしにこのような無礼な真似をおおおお!!」

火山が噴火するが如く怒りを噴き上がらせ、憎悪と殺意に満ち満ちた声を、歯ぎしりと共に目の前の「アサシン」へブーデルは叩き付けた。

そこにいるのが、あるいは例の運転手のガキだったなら、恐れ慄いて土下座の一つ二つはしたかもしれない。

だが、今彼の目の前にいるのは例のガキではなく、「アサシン」だ。

例え、薄汚くて狭い裏路地のど真ん中に立つそれが、白いフードから艶やかな赤い髪が漏れた、背も体格もブーデルより小さい、十代半ば程度の少女のように見えたとしても、その事実には変わりはない。

ましてや、自らの後を守らせていた屈強な護衛達を少女は一瞬のもと葬っているのだ。

なればこそ、尚の事その姿に根柢の無い勝てる見込みを見出し、怒りのままに殴り掛かるなどという愚の骨頂をブーデルは犯すべきではなかった。

ましてや、その果てにコイツを“大顧客”辺りに突き出し、あのガキ共にくれてやろうとした、そして“これまでくれてやって来たドブネズミ共と同様の報い”を与えてやろう等と、思うべきでは無かった。

「死に腐れこの小娘が——ふぶおっ!？」

最も、その大ぶりな一撃をかわされた上での右ジャブ一発と、それに伴ってゴミの散乱する石畳の上に背を強かに打ち付けるといっておまけが追加されるだけであり。

抵抗しようがすまいが、この後に彼に加えられる一連の仕打ちに大きな変化があるわけでは無かったが。

「う、お、お……ふっ!」

呻き声すら満足に洩らす間もなく、地に仰向けになった彼の襟首を掴んだ“アサシン”によって、罅割れた右側の壁に、今度は意図的にその背を叩き付けられる。

途轍もない衝撃だ。とても、目の前にいるような小娘によって加えられたものとは思えないそれによって、肺の中の空気を強制的に排出させられたブーデルは一瞬呼吸困難に陥る。

そこに間髪入れず、更に“アサシン”が力任せに彼を壁に叩き付ける。

たまらず、再び意識がとびそうになったところで、すかさず空いている左手による平手打ちが朦朧とした彼の意識を強引に呼び覚まさせる。

「つー！ はっ、ぶほお、ぶほっ、うおほっ……！ き、貴様あ、わ、わしにこんな事をして、唯で済むと——」

「思っています」

肺が求めるがままに息を吸い、そのせいで軽い過呼吸に陥るも怒りを失わないままに怒鳴りつけようとしたブーデルに更に加えられたのは、鼻骨を叩き割るヘッドバッドであつた。

メキヤリと、小さいながら生々しい音の後に、中程で折れ曲がつてしまった鼻からだぐだぐと血が流れ出し、怒髪天を強引に沈めさせる強烈な痛みが放たれた。

「は、はがっ、はが鼻の骨に骨がっ……！」

折れた鼻を押さえて悶えようとしたブーデルだったが、襟元からぐいつと引き上げられた彼はもう黙らざるを得なかつた。

「いくつか質問をします。答えて下さい」

それ以外の行動は何一つ許さない——そんな身も凍るような言外の威圧感の前には、震える事は出来ても、怒りを込み上げさせることはもう適わない。

もはや、彼はその権力と悪知恵のままに“ドブネズミ共”すら好きに出来る“大豪農

“ではない。

鷹の爪の中で捕食の時を待つ、哀れな獲物でしかなかった。

「あなたは葡萄酒造“のみ”で巨万の富を築いた大豪農——それは本当ですか？」

手始めにそんな分かり切った質問を振ったのは、怯えて切ったブーデルを多少なりとも落ち着かせるためだ。

間違つても手心を加えたわけではない。この男にそんな必要は無い筈だ。

ぶんぶんと、未だ血の止まらない鼻を押さえて慌ただしく首を上下させるブーデルだったが、しかしそれが嘘であることをモルジアナは既に知っていた。

だから、静かに首を振って、その返答を彼女は否定した。

その対応に文句を言おうとして、されど鼻の痛みにそんな事をすればどうなるかを思い出したか、遺憾そうな唸り声を上げるだけに留めたブーデルを無視して、モルジアナは尋問を続けた。

「次の質問です。先程、大通りで口論になっていたようですが——100金貨デイナーの借金とはどういうことですか？」

先程、この男を尾行していた過程で耳にした、例の少年達との口論。その果てに、一時の感情に身を任せて護衛二人を葬ってからの、強引な運びになってしまった。その事

についての言い訳は後で考えておくとして、今は異様な額のこの借金について聞き出そう。

「喋って下さい。ただし、余計なマネはしないように」

最も、少し騒がれたくらいならどうという事も無い。

この辺りに、既に人はいない。『2ヶ月程前に全員連れて行かれたのだから』。

それだけ告げると、ぽつぽつと震える声でブーデルが語り出した。

「そ、その借金は、あの小僧共が、砂漠ヒヤシンスを追い払うために駄目にした、わしの酒の弁償代だ。——べ、別におかしい事等あるまい！」

——確定だわ。

フードの下は無表情のまま。されどその口元を横に伸ばして、確かにモルジアナは笑っていた。

最期に、唾すら飛ばすほど力を込めてそう断言するブーデルであったが、対照的に泳いだ目が、その言葉の中にある『嘘』の存在を如実に語っていたからだ。

もう一度、彼女は首を左右に振った。

「そのお酒は、本当に100金貨テイナーもの価値があるんですか？」

「！ど、どういう意味だ！ 貴様、わしの酒にそんな価値が無いと抜かすのか！」

紛いなりにも、自分が手塩に掛けて作り上げた逸品を馬鹿にされたからだろうか。

豚のように肥え太ったその顔に急激に赤みが増し、青筋が立ち始めていた。

このままなら、確実に逆上して騒ぎ出す。

もう一度、今度は足の方でもお見舞いしてやろうかと一度思ったが、敢えてそんなブーデルを無視してモルジアナは、さあ、とだけ首を傾げて見せた。

「未成年にはお酒の価値など分かりません。——けれど、本来廃棄すべき失敗作」にまでそんな価値があるかどうかくらいは、分かるつもりです」

そう問い掛けるように話を振った途端、再び贅肉だらけの顔がさーつと蒼白になった。

当然だ。

それが、すなわちこの男の暗部に繋がるのだから。

「あなた個人については、調べはほとんど付いています。——葡萄酒製造の過程で出来た失敗作を、他の誰かの手でダメにさせ、それを高い価値を持つ『本物』と偽って、法外な借金を背負わせる。そして借金の返済が出来なければ、その者に何らかの形で受ける必要の無い罰を与える」

それがこの男の、もう一つの資産の稼ぎ方。

葡萄酒製造で生み出される廃棄物の効率的な再利用リサイクルという名目の下で生み出された、

「大豪農」ブーデルのもう一つの顔であり、「稼ぎ方」であった。

ある時は自らが雇った従業員。ある時は邪魔な同業者。またある時は、道行く中で目に付いた知らぬ顔。

自らの気分を害したか、あるいは「使えない」からか。

ともかく、何かしらの形で目に付いた人間に高級酒と偽った失敗作を、自らや部下の手も使つて「そいつ個人の手で」駄目にさせ、それを理由に一族諸共借金地獄に追い込む。

その偽りの借金を返済し切れればそれで良し。仮に出来なくとも、そこから大金を作る方法はいくらでもある。

「何人の人間を売つたんですか？ 何人の人間の人生を金に変えたんですか？」

あるいは娼婦か。あるいは砂漠の労働者か。あるいは野生の、それとも人に飼われた獣の餌か。

だが、金と法の下に自由と平穩を奪われたその哀れな人々を、端的に言い表わすのに相応しい言葉がある。

「一体、何人の人々を『奴隸』に墮としたんですか？」

その言葉を口にした時、ブーデルの襟を掴む手をモルジアナはより一層、震え出す程に強く握り締めていた。

自らの口で敢えて発したその言葉が、彼女が最も嫌いな言葉だからだったからだ。

そして、

「……な、何が悪いというのだそれが！ わしは唯、失敗した酒を無駄にしたくなかっただけだ！ 捨てるしかないものを、金に変えただけだ！ 無意義で無価値なものを、この頭を使つて有意義で価値ある商売にしただけだ！ その過程で、地べたで這い蹲るだけのドブネズミ共に『商品』という価値を与えたではないか！ それの何が悪い!!」

他者の自由を奪つておきながら、自らの罪の重さも介さず、法と権力に託けて身勝手な理由の下に行動を正当化するこの豚男のような悪党は、彼女の最も嫌いな人種だ。

だからこそ、豚のように耳障りな声で喚き上げるこの男を今すぐ消してしまいたい衝動を抑えるために、もう一度モルジアナはブーデルを引き寄せ、手加減する事無く壁に叩き付けた。

途端、壁を揺らす鈍い音と共に、ブーデルの襟を掴んでいた彼女の右手に、何かを凹ませたような感触が伝わった。同時に、ひぎい、という汚い悲鳴がブーデルの口から漏れた。

どうやら、右側の鎖骨をへし折ってしまったようだ。

構わない。後一つだけ聞けば、その後は始末するだけなのだから。

「——最期に訊きます。あなたが『大顧客』と呼んでいた者。『彼』は、つい2ヶ月ほど前から、あらゆる手段を講じて自らの下に奴隷とされた人々を集めている。現に、こ

「こ最近この街では奴隷商人の姿が散見されたし、この辺りに住んでいた人々も忽然と姿を消した。そしてあなたも、酒と共に、陥れた人々を度々彼に売り付けていた筈」
 一端、襟首を掴んでいた手を無造作に離し、ブーデルを下に落とす。

それによつて、彼をフード越しに見上げていた先程までから一変、今度はモルジアナが、氷のように冷たい無表情のままに、折れた鎖骨を押さえて呻くブーデルを見下ろす形となった。

「答えて下さい。あの男の——チーシャン、現領主、ジャミル」の目的は何なのかを」

それが、彼女の今回の任務における、最大の「標的」^{ターゲット}であり、最大の罪人。

そしてその目的を聞き出すための駄目押しとばかりに、敢えて見えるように左腕のアサシンブレードを引き出す。

答えなければ、死あるのみ。そう思い込ませることで、より確実に情報を聞き出すためだ。

だが、残念ながらその目論見は意味を為さなかった。

「し、知らん、知らん！ 確かに領主様は最近手持ちの奴隷^{モス}を増やしておられるようだが、何でかなど、わ、わしは知らんぞおっ!!」

ぎらつくブレードの刀身に完全に竦み上がったブーデルが小刻みに頭を振りながら

答えたのは、「知らない」の一点張りだった。

これほど絶体絶命という言葉が相応しい状況において、嘘を吐く事が出来る人間は相
当に限られて来る。そして、間違い無くこの男はそういう人種では無い。

つまり、領主の目的については本当に知らないのだろう。

結果として時間を無駄にしただけに過ぎなかった自分の行動に嘆息し、後退し切れず
壁にへばり付いていた豚男の襟元を、もう一度モルジアナは掴み寄せた。

「もう結構です。——貴方にもう用は無い」

その言葉の意味は、もはや考えるまでもない。

だからこそ、彼は今までで最も引き攣った表情を浮かべているのだ。

無情な死刑宣告による、その絶望を覆さんがために。

「や、止める！ 止めるっ！ わしはまだ死にたくない！ ——そ、そうだ！ か、金を

払おう！ 貴様が好きなだけの額を払おうっ！ な、何ら家だつていい！ 葡萄酒商だつ
て好きなだけくれてやる！ “奴隷”だつて買ってやる！ わ、わしはブーデルだ！

葡萄酒造の大豪農だ！ “地を這うねずみ如き”には及び付かない金を持っている！

“命の売買だつて出来る”！ 何だつて買える！ だから、だからっ！ 命だけは
あつ！！

それは金の亡者の傲慢であり、また死刑囚の最期の告解でもあつた。

だが、それが聞き入れられる事は無い。——決して聞き入れはしない。故に、彼女が行ったのは開放ではなく、ただ「彼の誤解を解いた」だけだった。

「命は金では買えない。貴方の強欲の犠牲となり、鎖に縛られる事となった人々の命も、金に腐つてしまった、消えるべき悪党^{悪方}の命も」

その言葉が必死の形相をしていたブーデルを完全に絶望へと追いやったその刹那。

贅肉がたつぷりと詰まったその腹の中心——人体急所の一つ、肝臓へ、迷う事無くモルジアナはアサシンブレードを突き入れた。

見開いていた臉をなお一層大きく開き、白眼を剥いたブーデルだったが、突き立った銀の「爪」を引き抜かれるやボトボトと腹から血を垂れ流し、掴まれていた襟元を離されると共に力無く石畳の上に尻餅を着く。

それから程無くして、彼の命の灯火は完全に消え去った。

その方法の如何はともかく、「葡萄酒」という武器を駆使し、誰もが羨む巨万の富を築いた筈の大豪農の最期は、あまりにも惨めで、汚らしくて、呆気なかった。

「眠りなさい、安らかに」

罅割れた漆喰の壁に寄り添うように座り込んだブーデルの死体の目を閉じさせる。

そうして恐怖に引き攣っていた筈の顔を安らかな寝顔へと変えた後、革帯に挟んでいた白い羽根を彼の傷口に押し当てた。

流れ出したばかりの血を吸い取り、赤黒く変色した羽を再び帯の中に戻して、誰もいない貧^{スラム}困街の路地の奥へモルジアナは踵を返す。

眠るようにそこに座り込む「標的」だった者の亡骸を背に、白いローブがゆつくりと、溶け込むように「チーシャン」の闇の中へ消えていった。

第四夜

再び目を覚ました時、来た時と同じように栗色の毛の馬の背に跨る「大導師」の腕の中で、落馬しないように支えられながら眠っていたという事が、最初にモルジアナが気付いた事だった。

「——起きたか」

上からの声に反応して見上げれば、「大導師」もまた彼女を見下ろしていた。

これまでも、そしてこれからもずっとそうなのだが、目深く被られたフードの下、鼻から上までは正面からはなかなか見えない。だが、こうやって見上げるような形であれば、薄暗い影に覆われたその目元も見える事も出来た。そしてその目元はいつも鷹のように鋭く全てを見据えるかのように深い輝きを放っているのだ。

だが、その時に見えた「大導師」の目は少し違った。

その時の「大導師」の目は、確かに謝罪の念と悔恨に曇っていたのだ。

そして、それがどういう意味かは当時はまだ分からなかったし、その詳細を知るのもう何年か後の事だった。

「……………だいたいどうしま………」

「これから『マシャフ』へ帰る。帰った後は、今後のお前の身の振り方を考えよう。――いいな?」

「……うん」

一方で、そう気の無い返事を返すモルジアナの目は未だ赤く腫れ上がっているだけでなく、著しく生気も欠けていた。

今、彼女の頭の中は酷く茫洋としていた。

奴隸商から救い出され、『大導師』によつて与えられた帰郷という希望も、船旅によつて壊した体を引つ張り続けて来た、愛する両親との抱擁という期待も、もうその心の中には一片たりとも残っていない。

瓦礫とうち捨てられた家屋のみが並ぶ故郷だった地と、もう誰一人としてあの場所に帰つてくる事はないだろう人々という現実が、彼女の中に確かにあつた筈のそれらの気持ち完膚なきまでに、無慈悲なまでに粉碎してしまつた。

そしてその無情な事実を少女の頭が理解するには、今しばらく時間が必要だった。

そうして、それ以後無言のままだった『大導師』と、かぼかぼと草原を踏み敷く馬の足音のみが続いた沈黙の中でその時間を済ませたモルジアナが呟いたのは、

「……どうして……?」

という一言だった。

今の彼女の心境を如実に表わすその言葉に、
“大導師”のフードの先端が下に傾けられる。

「お母さんね、モルにうれしい事あるとね、いつも「ひのとりさまにお礼をいいにこうね」って、ひのとりさまのところにつれてくの」

記憶の片隅に残る、無邪気に笑う自分に笑顔を向けて、その手を引きながら街の中央の火の鳥の塔へ歩いて行く母の姿。

だが、幸福を感じていた思い出として頭に深く刻み込まれていた筈のその記憶が、今や酷く不鮮明で廃れていて、思い出してもちっとも嬉しく感じなかった。

「なんでお礼をするの？」ってきいたらね、「ひのとりさまがモルをいい“うんめい”にみちびいてくれたからだよ」って、いつもそう言うの。ひのとりさまは、いい事をした人や、すぐくつらい目にあってもがんばった人に、たのしい“うんめい”や、うれしい“うんめい”をはこんできてくれるって」

そこで一端言葉を区切って、モルジアナはもう一度“大導師”の顔を見上げた。

その顔は、精一杯の笑顔を作ろうとして、しかし湧き上がる別の感情が邪魔してそれを浮かべることが出来ない。およそ幼い少女がするべきとは思えない、そんな歪な表情だった。

「ねえだいたいどうしさま……モル、がんばったよね？ ドレイにされそうになったり、“マ

「シャフ」で帰るじゅんぴができるまで我慢したり、おフネで病気になったり、色んなつらいことがあったけど、でも、がんばったよね？　がんばって、かえってきたよね？」
そうだ。ここまですつと頑張ってきた。

家族に会いたがために、爽やかな風が頬を撫でた、あの故郷に帰るために。
だというのに――。

「ねえ……どうしてなの？　モル、いっぱいがんばったのに、なんでひのととりさま、こんなつらい「うんめい」をもつてきたの？　まだ、がんばりたりなかつたの？　もつとつらい目にあつても、がんばらなきゃいけないの？」

次第に、声が弱弱しくなっていく。

もう何も無い。家族や故郷への希望や期待はもとより、良い「運命」のために今を頑張ろうとする気持ちも。

最も訪れる事を待ち望んでいた最高の「運命」を、最も見たくなかつた最悪の「運命」によってズタズタに引き裂かれた。そんな経験をしてしまった少女が如何に気丈であらうと、なお良い「運命」のために頑張ろうとする意思など持てる筈が無い。

それでもなおお持てるものがあるとしたら、それは前へ進もうとする努力を否定する無気力であり、進化を続けようとする生命を嘲笑う退化であり。

そして、自らへの理不尽な仕打ちに対する、「運命」そのものへの。

「もう……やだ。もう……いやだよ。なんで、モルだけ、こんなにつらい。うんめい。ばつかりなの？　もうやだ……。つらい。うんめい。しかもちびいてくれないひのとりさまなんて、きらい。いっぱいがんばったのに、いっぱいつらかったのに——」

——恨み、憎しみ。

それが、次第に少女を黒く変えていく。

心を。身体を。そして、その魂を。

少しずつ。しかし、着実に。染め上げていく。

そうして腹の奥に募って来る黒い鬱憤のまま、遂に決定的なその言葉をモルジアナは口にしようとして、

「うんめい。なんて……。うんめい。なんて……。うんめい。なんて、だいきら——」
「止めろッ！」

しかし、すぐさま発せられたその一喝に、ビクリと背筋を立てて中断した。
強い、とても強い声だった。

それまで彼と過ごしてきた中で、あんな風に声を張らせる彼を見たのは、それ以後もそう多くは無かった。

そして、反射的に顔を上に向けたモルジアナの目に映ったその時の彼の顔は、彼女の生涯で二度と忘れることが出来ない顔となるのだ。

「——『運命』を、恨むな」

しばしの沈黙の後、そう語り掛けるように告げた『大導師』の、必死さと懺悔の念に塗れたその顔は。

『大導師』の『目』は、その時のモルジアナの身に起きていた変化を詳細に捉えていた。

つい先程まで、確かに彼女の体は青い燐光に包まれているだけのように見えていた。その光が今は、端々から徐々に、黒ずみ出していった。

その現象自体は、今まで行ってきた数々の任務の中でも何度か見て来たものだ。その黒ずむ現象が起きるのは大抵が暗殺対象か、あるいは任務を遂行する過程で消さなければならなかった人間が大半であったが、時として一般人——それも、奴隷や貧困層の間等、過酷な境遇に置かれた民にも度々見られた。

いつしか、その現象が起きた人間に共通点がある事に彼は気付いた。——いずれの者もが、己に与えられた『運命』を恨んだという共通点に。

そして、その中で彼によって命を絶たれる事の無かった、あるいは免れた人々は往々にして、その性質を破滅的で、邪悪なものへと変貌させていた。

その現象が一体何なのか。何故、自分の『目』でそれを見る事が出来るのかを、自ら

の「目」の出所同様に彼は知らない。

だが、今確かな事が目の前にある。

この4ヶ月超を共に過ごした幼い少女が、今まさに、変貌し掛けているというその現状が。

この数ヶ月間で、何度もあの日の「親友」の姿をその身に重ねた救うべき幼子が黒く染まり掛けている——「あの日の過ちを繰り返そうとしている」という、その事態が。

そして気付いた時には、それこそどうしようもない悪人を前に怒りを押し殺し切れなかった時くらいにしか出さないような声で、彼は叫んでいたのだ。

「——『運命』を恨んだとて、悔やんだとてどうとなるものでもない。どれ程辛かろうが、どれ程憎かろうが、過ぎてしまったものは、失ってしまったものはもう戻らない。——先へ進む事すら、ままならなくなる」

驚きのあまりか、瞼の晴れた目をキョトンとさせて彼を見上げるモルジアナへ、諭すように「大導師」は告げた。

かつて師に問われた、「教団」に生まれたことを悔やんだことは無いか、という質問に対する答えそのままのそれが、26年余りというまだまだ先のある人生の中で見出した、「運命」というものに対する彼の答えだ。

彼もまた、これまでの人生で多くのものを失った。

両親。例の「親友」。愛した女性^{ひと}。そして、師。

何度絶望したか。何度悔やんだか。何度悲しみに暮れたか。

だが、その度に彼は思い知らされたのだ。どれ程悔やんだとて、どれ程憎んだとて、失ったものは戻って来ないことを。そして、そんな事をしたところで、唯空しいだけだということ。

そして、そんな辛い「運命」を乗り越えた先には、必ず「自由」と平和に裏打ちされた幸福があるということも。

だから、彼は得る事が出来た。「アサシン教団」始まって以来の天才とまで謳われたその実力を。何者にも代えがたい新たな「親友」を。そして、かつての奢り高ぶった自分を省みた結果に得た、今の自分を。

だからこそ、例えにどんなに辛かろうと、例えどれ程の理不尽に遭おうと、前へ進む事をモルジアナに止めて欲しくは無かった。

「運命」を恨んではいけない。それにモルジアナ。お前には、そんな大き過ぎるものよりも前に、もっと身近に、恨むべき者がいる」

例え、そのために彼女に恨まれる事になろうとも。

それが事実であり、尚且つ「運命」であるならばこそ、受け入れる事が出来る。——
受け入れなければいけない。この娘も、自分自身も。

「——今この地カタルゴがどうなっているかを、俺は本当は知る事が出来た。より知識を引き出す事が出来た。だが、そうしなかった」

否、出来なかつた。

“あの果実”を使い過ぎて誘惑に飲み込まれ、最期に見た師と同じになる事を恐れたのだ。

だから、“カタルゴに辿り着いた自分とモルジアナ”の姿が頭の中で像を結んだその時点で、彼は“アレ”を使う事を止めてしまった。

もっと深く、もっと前の事を、もっと先の事を見ていれば、誤魔化すなり、事実を伝えて諦めさせるなりすることが出来た筈だ。

それをしなかつたために、今のモルジアナがいる。

全ての希望を失い、明るい笑顔を浮かべていた顔を疲れさせ、今まさに黒く染まろうとしている目の前の幼い少女が。

彼の間違つた行いが故に、あの時の“親友”同様に、心身共に傷つき果てた哀れな娘が。

「全ては、俺の責任だ。俺の弱さが故の、過ちの結果だ。それが、お前をこれ程までに傷付けた。“奴”にしたのと同等の、いやそれ以上の仕打ちをお前に与えた。お前が真に恨むべきは“運命”じゃない。この、俺だ」

そう奥歯を噛み締めて告げる。『大導師』の頭にあつたのは、今まで犯してきた数々の過ちの記憶。

素直じゃないところがある今の『親友』が左腕と弟を失つたのも、高慢だった自分のせい。

あの任務の失敗の末に『マシヤフ』が敵に攻め込まれ、多くの『兄弟』達が命を失つたのも自分のせい。

目の前の少女が『運命』に憎悪を向けてしまう程に傷ついたのも、自分のせい。

そして、『彼』の父の事を教え、結果的に『彼』に憎しみを与えてしまったのも、また――。

「――俺のせいだ。何かも、全て。だからモルジアナ。俺を、恨め。俺に、贖罪をさせてくれ」

沸々と蘇って来るその記憶が、彼の冷静さを次第に失わせていく。ある種の熱が、彼を狂わせていく。

次第に、周囲の変化に対して鈍感になっていく。

「お前が、俺を『奴』のように嘔吐きと罵るならば、甘んじてその言葉を受け入れよう。お前が右の薬指も切れというならば、今この場で切り落そう」

だから気付かなかつた。

色を失っていた少女の瞳が、段々と潤いを取り戻していく様を。

「お前が俺の死を望むならば、喜んで俺は、この喉を掻っ切つて——」

「だいどうしさま」

小さな声だった。

だが、消え入るような細かい声では無く、むしろ込められた悲哀が故にはつきりとした声だった。

その声によつて、自らの罪の念に吞まれ掛けていた意識を現実に取り戻させられた大導師は視線を下方に向けた。

彼に抱かれた少女が、変わらず彼のフードの中の双眸を見つめ返していた。

その特徴的な目元には、当に枯れたように思っていた涙が少し、溜まっていた。

「だいどうしさまは、モルにうらんでほしいの？」

そう問い掛けるモルジアナを浸食していた黒は、今その一時において、その侵攻を止めていた。

“チーシャン”の貧民街スラムの一角。

平線の向こうに落ち掛けてオレンジ色になった日の光が照らす、人っ子一人居ない閑散としたボロ家の群れの外れの方に、“そこ”はあった。

周囲を砕け掛けた漆喰の屋根に囲われた“そこ”は、一般の人間が見れば、さぞ不思議がることだろう。何せ、“そこ”は本来あるべき出入口が無く、2 m程の高さの直方体を織り成す四方の壁は一面が穴はおろか罅一つ無い。

否、出入口そのものは存在する。平らな屋根の半分程に広がる四角形の大穴が、それなのだ。

何故、そのような場所に出入口が設けられているのか。

少なくとも、通常はそのようなところに設けられた出入口を態々利用する者はいない。

いるとすれば、それは余程酔狂な者か、さもなければ、敢えてそれを利用する者かの、大体その二択に分けられるだろう。

そして今、どこからともなくその奇妙極まりない出入口へ飛び込んでみせた白ローブ——モルジアナは後者であった。

出入り口を潜り抜け、その先にある四方に観葉植物が置かれた休憩室のカーペットの上に降り立った彼女は、背後の“A”の文字を振ったような紋章が大きく描かれた壁を背に、前方に存在する長方形の至極真つ当な出入り口へ進む。

そして、出入り口を抜けるやフードを脱ぎ、独特の目元と緩やかに垂れる赤いサイドテールを顕にした。

「安全と平和を」

休憩室を抜けた先にあるのは、任務や情報を受け、報告を伝えるための作戦会議室。フリーイングルーム

先程潜ってきた出入り口以外に光が入る場所の無いその薄暗い部屋に入つてすぐの右側の木製のカウンターで、青銅製のゴブレットを磨いていた女性がモルジアナの告げた「合い言葉」に気付き、一端作業を中止して彼女に返答を返した。

「あら、お帰りなさい、兄弟」

女性、と先程そう表しはしたが、実際のところその容姿は一目見てそうとは分からぬい者の方が多いだろう。何せ、彼女の体はそんなじよそこらの大男よりもお高く、幅が広く、筋骨隆々の体を持ち、ほぼ長方形といつて差し支えない輪郭の中に収められた独特の目鼻立ち——妙に高い鼻と、妙に小さい目と口の組み合わせが、際立つた異彩を周囲に放っている。

その身体を覆う、モルジアナのそれと同様の色をしたローブと、濃い紫の上着に関しては、もはやはち切れんばかりに四方へ引つ張られている有り様だ。

その、誰もが一瞬は戸惑いを覚えてしまうだろうその女性に臆する事も無くその前に進み出るや、自らが殺めたブーデルの血によって赤黒く変色した羽を革帯から抜いて、薄らと埃を被つたカウンターのの上にモルジアナは突き出した。

「ブーデルは死にました」

淡々としたその報告と共に羽を受け取るや、それで、と女性が報告の続きを促して来る。それに従い、両腕を後ろに組んで、淡々とした口調のままモルジアナは言葉を続ける。「葡萄酒製造の過程で発生した粗悪品を利用し、人々を自らの利益に変えていたという彼の罪は確かでした。今回もそのために商品と共に粗悪品を自ら輸送していたようです」

最も、その粗悪品については本物の商品諸共、今や「砂漠ヒヤシンス」の腹の中に収まつてしまつたわけだが。

「それと、残念ながら領主の目的については何も知りませんでした。得られたのは、彼が自らの下に奴隷取められた人々を集めているということだけです」

「とつくの昔に手に入つてゐる情報ね」

少しばかり、女性の声のトーンが残念そうに下がった。

実際、彼女だけでなくモルジアナも、新たな情報が得られなかつた事を内心無念に感じていた。

「これであなたが消した罪人は「9人」。その大半の口を割らせてきたつていうのに、未だに根幹が見えて来ないとはね」

思ひの外用心深い事だわ、と最大の標的への苦々しげな賞賛を口にした女性に頷き返すその傍らで、

「——もう、『9人』も消したんですね」

自らのこれまで行いに、少しばかりの驚嘆をモルジアナは口にした。

その言葉に、怖気づいた？、と心にも思っていない事を返す女性に首を左右に振ることで返事を返した彼女の口元は、自信に満ちた緩やか弧を描いていた。

「まだ消すべき者も、救うべき人々もいます。彼らの全てに手を下す時。そして彼らの鎖を断ち切る時がもうそんなに近づいているんだと、そう思っただけです」

そしてまた、この任務を終わらせる時も近づいている。

「一人前」^{アサシ}昇格後の初仕事として請け負った、『チーシャン』領主『ジャミル』、及び彼に関係する人物達の動向調査と暗殺の任務を。

彼らに奴隷の身に墮とされた人々の可能な限りの解放という副題の達成も含めた、有終の美を飾った上で、この世で最も敬愛する『大導師』にその旨を報告するという、その時が近づいているのだ。

そう思つて、その無表情について笑みが浮かんでしまう程に、モルジアナの心は高揚したのだった。

「そうね。そして、あなたとこの『チーシャン支部』で衣食住を共にするのも後少しなのねえ、『ヘイザム』」

一方で、女性の方はカウンターに二の腕を下し、どこか寂しげな溜息を吐いた。

致し方ない。任務が終わればどう転ぶにせよモルジアナは「チーシャン」を去ることになり、当面「そこ」は彼女一人だけの家と化するのだ。——「誰もいない家」程、寂しいものは無い。

であればこそ至極全うなそのぼやきの意味を悟り、緩やかな弧を描いていた口元をモルジアナは真一文字に戻すのであった。

「アサシン教団 チーシャン支部」——それが「そこ」の正式名称だ。

真つ当な人間の寄り付かない貧困街スラムの、そのまた離れの方に設けられた「チーシャン」での「アサシン教団」の拠点であるそこには、現在モルジアナ以外の「実働隊」——実際に暗殺等の任務実行を担う「アサシン」はいない。

左程治安が悪いわけでも無かった故に大きく行動する必要も無かったため、元より配置数が少なかったこの街の「実働隊」が、現在内紛の多発等で情勢の芳しくない「バルバット王国」を始めとした周辺地域の拠点へ全員回されてしまっているからだ。

そこへ舞い込んできたのが、2か月程前より見られ出した現「チーシャン」領主「ジャミル」の不穏な行動、及び同時期から「チーシャン」で散見される数が増えた奴隷商人達についての報告だった。

領主は、元より悪名高い人間として知られていた。癩癩持ちで、奴隷や犯罪者をいた

ぶる事を趣味とするサディストとして、市民から恐れられていた。

だが反面、街のインフラ整備や興業、治安維持等の領主としての仕事に目立った卒は無く、無実の民を繰り返して処刑する、市民を誘拐して奴隷にする、といった「教団」が動くに十分な罪を犯すような素振りは今まで無かった。そのため、極めて際どいところではあつたが、今まで彼女、ひいては「教団」のマークから外されてきたのだ。

そんな領主が最初に起こした不穏な行動とは、貧民街からの住民退去だった。

それ自体はどうという事は無い。治安維持の一環として、犯罪者の寢床になりやすい貧民街から人払いをするというのはよくある話であり、太っ腹な統治者であれば、再開発を加えたうえで住民を帰させるということも無いわけでは無い。

だが、住民の退去が為された後も貧民街に開発の手が加えられるような事は無かつた。というか、住民退去とこそ書いたが、そもそも退去勧告の類は一つも出ていない。であるにも関わらず、貧民街の住人は日を追うごとに少しずつ、まるで煙のように消えていったのだ。

それに、このころから「チーシャン」では奴隷商を引き攣れて歩く奴隷商人の姿が多く見られるようになっていた。もし前述の貧民街の件が治安維持を考えての事ならば、まずこちらをどうにかするのが道理というもの。

ましてや、彼らの行先が往々にして当の領主の屋敷とあれば、唯でさえ良いといえな

い市民からの評判を更に貶めるその存在に対処こそすれ、放っておく理由はない筈だ。

そして、そんなチグハグな領主の行動に疑念を抱いた彼女は、その調査のために「実働隊」の派遣を本部たる「マシヤフ」に要請。

そうして、今はこの支部を離れている「実働隊」の「アサシン」達の代わりに「チーシャン」に訪れたのが、若干13歳にして一人前昇格という、「大導師」をも超える異例の出世を治めた天才少女。

その才能と「大導師」自らが「教団」に引き入れたという経歴から「ヘイザム」という渾名で呼ばれるようになった、「アサシン教団」唯一の「フアナリス」にして期待の新人。^{ホープ}

既に現役を退き、裏方としての仕事に従事している筋骨隆々の「チーシャン支部」管区長——バートリーの目の前で無表情を崩さない赤髪の少女、モルジアナであった。

「——それはそうとモルジアナ」

「何ででしょうか？」

ただ、いくら天才といったところで、そこはほんの1カ月程度前に一人前になったばかりの新米で、高々14年弱生きた程度の小娘に違い無いといふべきなのか。

「あなた、随分ハデに立ち回ったようね？ 大勢の前で護衛を斃してからブーデルを拉

致したんですって？」
「お店」の娘達が、早速町中に噂が広まっているって教えてくれ

たわ

「それは——」

「今回はそうしろなんて指示を出した覚えはないわ。というか、それ以前に——」

一端言葉を区切り、薄暗い部屋の奥へバートリーは視線を動かす。

そこでは、一人の少年が薄いブランケットを小さな体に掛けて寝ていた。

その少年が何者なのかはまだバートリーは聞いていないが、その正体は彼の足首の鎖が切れた枷で十分理解できた。

「あの子は一体何なのかしら？」

未だ優れない顔のまま眠り続ける奴隷の少年から、視線をモルジアナに戻して問いかける。

その際に一瞬視線を逸らした彼女の顔が、バツが悪そうに頬を少し膨らませた、年相応の不貞腐れ顔を浮かべていたのをバートリーは見逃さなかった。

それらの話は、絶対振られるだろうと思っていた。

これまでで請け負ってきた任務で消してきた数は8人。その内、敢えて人目に付くようなハデな遣り方で消した者が、ブーデルを除いて3人いた。

そうしたのは、今回の任務のもう一つの目的——今後“チーシャン”に奴隷商が足を

踏み入れる事が無いように、奴隷商人達への見せしめにするという目的のためだ。そのため、業界で名の知れていた件の3人については、その護衛諸共衆目の前で敢えて立ち回りをした上で殺して見せた。

つまり、今街中で騒がれている「アサシン^{彼女}」の噂は大衆に敢えて見聞きさせたそれらの件についてのみの話であり、本当は誰も知らない内に後5人、モルジアナの手で尋問をされたうえで「行方不明」になっているのだ。

だが、今回のブーデルについては違う。

あくまで、彼の奴隷売買は本業で葡萄酒製造のついでに行われた副業だった。故にそっちの業界での彼の名は無いに等しい。よって、本来ならば「行方不明」の5人同様、衆目に気づかれない内に拉致、尋問の末暗殺する算段だった。

そうせずに、何故衆目の前で護衛を斃してからブーデルを拉致するという強引な手際になってしまったかといえば、その理由は部屋の奥で未だ土気色の顔のまま寝息を立てる茶髪の少年にあった。

「……あの子を、救うためです」

正直に言えば、あんな年端もいかないうち子供を言い訳に使う事は憚られた。

だが、かといって目の前の相手に嘘を吐き通せる自信は無かった。

いくら現役を退いているといえど、バードリーもかつては師範たる「導師長」――

マスターアサシン”の一人であり、現在は情報を精査し、他の”アサシン”達の任務遂行の補助を担うこの支部の管区長だ。彼女のような若輩者の考えついた嘘など容易く見破つてしまふだろう。

だから、”嘘にはならない”程度の脚色を加えた上で、事の次第をモルジアナは正直に話すことにした。

「あの子は、ブーデルに暴行を受けていました。それを見捨てて、予定通りの形で彼を連れ去ることを優先していれば、彼はもつと酷く痛めつけられていました。いえ、もしかしたら——」

「殺されていたかもしれない。だから助けた？」

どこかな胡散臭げな視線を返すバートリーに、モルジアナは頷き返す。

他人の奴隷を盗むことが重罪であるように、他人の奴隷を勝手に”壊す”こともまた重罪として扱われる。

だが、奴隷どころか一般人すら”ドブネズミ”呼ばわりしていたブーデルの事だ。絶対にやらないという保証も無くば、その気になれば奴隷一人”弁償”し、罪を帳消しに出来るだけの財力を彼は保持していた。

本当に、少年はあの場合で彼に蹴り殺されていたかもしれないのだ。

「虐げられる民を救う事も、また”アサシン”の使命です」

「それに従つたまで、と。——成程、立派な事ね」

ふむ、とバートリーが感心したように頷く。

どうやら納得してくれたようだ、と内心安堵し掛けたモルジアナだったが、すかさず掛けられた言葉にそう判断したのが間違ひであると否応なく知らしめられた。

「本当にそこまで考えて行動したなら」、の話だけど」

思わず、特徴的な目元を動かしていた。

どうやら、感情に先走つて動いていた事は既に見抜かれていたようだ。

なら、これ以上何かを言い繕つたとて意味は無い。

「あなたねえ、私がああ坊やの事を聞いた時、思いつきり都合悪そうな態度取つたでしょ。あんな態度見せといて悟られないと思つたの？　『アサシン』であることを理由にするなら、もう少し自分の一挙一動に気を配れるようにしてからになさい」

「……すみません」

——まだまだ未熟だわ。

内心でそう自省しつつも、素直に謝罪の言葉を口にし、モルジアナは頭を下げた。

それに対ししようなくない子供の相手に少し疲れたような溜息を吐いてから、諦めたようなバートリーからの指示が下つた。

「まあいいわ。これからすべきことは分かつてるわね？　あの子を連れて行きなさい、

いつも通り」

それは分かっている。いつまでも「教団」に無関係の人間を支部内に置いておくわけにはいかない。

彼もまた、これまでこの街で解放した奴隷ひとと同じように「連れて行かなければならぬ」。

「承知しています。ただ——」

「ただ？」

「もうしばらく、あの子をここで寝かせてあげてくれませんか？　まだ、体調が優れていないようなので」

未だ土気色の顔をする少年の額には、まだ脂汗が滲み出していて、彼の赤毛が混じった髪をそこに張り付けていた。

まだまだ痛々しいその様を、心に重いモノが押し掛かったような感じを受けながら見つめるモルジアナの前で、

「あなたに言われるまでも無いわ、そんなこと」

一際大きい、呆れたようなパトリーの溜息がカウンターの上の埃を舞い上げた。

どうしてだろうと、その時の「大導師」の様子を見上げてもう一度、モルジアナは

思った。

“運命”を恨むかどうかなんて、彼女の勝手であり、彼には何の関係も無い筈だ。

なのに、どうして“大導師”はこんなにも自分が“運命”を呪うのを止めさせたがるのだろうか。

どうして、“運命”じゃなくて、彼自身を恨めと言うのだろうか。

大体、そんな事出来るわけが無い。

「何で、だいたいどうしさまをうらまなきやいけないの？　だいたいどうしさまは、モルを助けてくれたよ？　“マシヤフ”にも連れてつてくれたよ？　海もみせてくれたよ？　モルがびようきになった時も、おせわしてくれたよ？　カタルゴにだつてかえつてこれたよ？　いっぱいいっぱい、だいたいどうしさまはいいことしてくれたよ？」

彼には、いくつもの恩がある。

それこそ、良く分からないが彼が犯したという過ちなんて頭の片隅にすら残らない程の、いくつもの大恩がだ。

そんな“大導師”に感謝の念こそあれど、いくら期待していた“運命”が訪れなかったからといって彼を恨む気には到底なれない。

ただ、思い詰めたような顔をフードの中に浮かべてそう言い連ねる彼は見ていてどうしようもなく哀しげで、辛そうだった。

そんな「大導師」を目にするモルジアナ自身も、また辛かった。きつと、彼がこんな顔をするのは自分のせいだ。

どうしたら、こんな顔を止めてくれるだろうと、幼い頭で考えてみた。

「ねえ、どうしてだいどうしさまはそんな顔するの？ モルが「うんめい」うらむのが、そんなにイヤなの？ そんなにモルにうらんでほしいの？ むりだよ。モル、だいどうしさまのこと、うらめないよお……」

だが、どうすべきなのか全く分からない。

「大導師」の言う通り、彼を恨めばいいのか？ 嘔吐きと言ってやればいいのか？

右手の指も切り落とせと言えればいいのか？ 「死ね」といえば良いのか？

——いや。ぜったい、いや。

激しく首を振って、モルジアナは否定する。——そんな事、言えるわけが無い。

されとて、一度抱いてしまった「運命」への恨みを消し去る事もまた出来そうになり。

なら、どうすればいい。

どうすれば、「大導師」はこの顔を止めてくれる？ どうすれば、彼にこんな辛そうな顔をさせたままにしないでくれる？

必死に、なおも幼い頭を回して考えるも、その答えは皆目見当もつかない。四方八方

塞がりだ。

それでもなお思考を続けるも、しかし答えを得られない。

そんな堂々巡りを続けている内に、遂には額の熱がぶり返し出してワケが分からなくなった。モルジアナは目尻に溜まっていた涙をポロポロと流し始めるが、それでもなお「大導師」の顔を元に戻す方法を考える事を止めない。

どうすればいい？ どうしたらいい？ ——次第に、そんな問い掛けの言葉だけで埋め尽くされていく彼女の思考と口を止めたのは、他ならぬ「大導師」だった。

気付けば、優しくモルジアナの頭を撫でる彼の顔はあの辛そうな顔から、笑顔に変わっていた。

——何を熱くなっていたのだ、俺は。

先程まで、自分のせいで再び泣き出してしまいう程に悩ませていた少女の頭をあやし付けるように撫でながら、「大導師」は自嘲の笑みを浮かべていた。

あの時と同じだ。 “もう会う事が無い” という真実を唯付き付けて、相手が年端もいかなない子供だということも忘れて傷付け掛けた、船旅を始めたばかりのあの時と。

本当は唯謝罪したいだけなのに、いつの間にか自分の世界にのめり込んで、どうしようもなく傷ついたこの娘を更に追い詰めてしまっていた。

結局それも、「アレ」に誘惑される事を拒んだのと同じ自らの弱さと、これまでの多くの過ちの原因となった、未だ捨て切れていない高慢さが故の結果だ。

かつて、友は言ってくれた——お前はもう、かつてのお前ではない、と。だが、結局そのかつての自分と同じ事を繰り返している、今の自分は何なんだ？

あの日の、自分を救ってくれた友の言葉を無碍にするつもりは毛頭無い。だが、それでも思わずにはいられなかった。

「——情けないな」

「だいどうしさま？」

「俺は唯、お前に『運命』を恨んで欲しくなかっただけだ。お前を、結果的に『運命』を恨ませるように仕向けてしまった事を、謝りたかっただけなんだ。それなのに、いつの間にか俺は、お前に俺が犯してきた数々の罪の断罪を強要していた。そのせいで、またお前を傷つけてしまった」

本当に俺は高慢ちきで、成長しない、度し難い男だ、と。

そして一度溜め息を吐いて調子を整え、少女の大きな赤い目を見つめて、本当に伝えたかった事を『大導師』は告げた。

「よく聞いてくれ、モルジアナ。今回の帰郷は、確かにお前にとつてどうしようもなく酷い結果に終わった。何かに憎悪を向けなければ、やりきれないだろう。だが、それでも

「運命」を恨んではいけない。それをするには、俺達人間はあまりにも弱くて、脆い。いくら「運命」を恨もうが、悔やもうが、訪れてしまったそれは、人間の手に余り過ぎるんだ」

そこまで告げた時、無言でこそあれ、モルジアナの俯いた顔は確かにこう言っていた。——あんなに酷い目に遭つたのに、そんなの理不尽過ぎる。

そう彼女が感じてしまうのも仕方ない。ここまでの言葉は、「何も恨むな」と言っているのも同然だ。どんな聖者であろうと難しかろうそれを、たかが4, 3歳の幼子が出る訳が無い。

だが、彼の話はこれからが本番なのだ。

「だがな、代わりに人間には皆権利が与えられている」

「けんり?」

「『運命』を受け入れ、その先にある『自由』と平和を享受する権利——この世界の混沌とした美しさを理解し、それに伴う困難を乗り越える事が出来る、人間だけの特権だ」それがあるからこそ、人間には『運命』を恨む権利も、気にいらぬ『運命』を変えれる力も与えられてはいない。故に与えられた『運命』を乗り越え、その先にある『自由』を謳歌する事こそが、人の在るべき姿なのだ。

そして、それこそが彼ら『アサシン』が存在する意味でもある。

「よくわかんないけど……みんな『じゆう』だから、どんな『うんめい』がきてもへつちやらつてこと?」

「そんなところだ」

少女なりに嘸み砕いた解釈に、『大導師』は頷き返す。

だが、それに対して遺憾があるらしく、モルジアナは首を左右に振った。

「でも、モル、ドレイにされそうになったよ? とつても重たいくさり付けられて、全然『じゆう』なんかじゃなかったよ? いまだって……」

『大導師』の考え方と、これまで自分が受けて来た仕打ちが矛盾している、という事なのだろう。

「確かに、この世界にはお前のように、一部の身勝手な人間のせいだ『自由』や平穩、それ以外にも多くのものを奪われた人々が大勢いる。彼らに今俺が言った事を唯告げても、何も奪われていない人間の戯言だと撥ね付けられるのが関の山だろう。だが、だからこそ『アサシン』^{俺達}がいる」

法に笠を着て、あるいは権力や財力に任せて他の者に隷属や不平等を強いる罪人を討ち、人々に自由と平穩を取り戻す者達が。

闇に紛れ、光に奉仕する者達が。

人々の『自由』と平和の守り手が。

「だからこそ、俺はあの奴隷競売の場でお前を救った。奴隷の身に墮とされる寸前にあつた幼子に、野を駆け回る『自由』と、愛すべき親と分かち合う平和を取り返してやりたいがために」

本当の事をいえば、それは理由の全てでは無い。あの日の『親友』の姿をモルジアナに重ねたという、もう一つの極々個人的で身勝手な理由も確かにあつたからだ。

だが、自らの口で述べたその理由そのものに、嘘偽りは一切無い。

「——とは言つたが、『両親との平和までは、取り戻してやることは適わなかつた』

それどころか、実際に少女に与えたのは、変わり果てた故郷と、煙のように消えてしまった両親という残酷な現実であり、その身を黒く染め出す程の絶望と『運命』への憎悪だつた。

本末転倒もいところだ。

そして、その落とし前の付け方を、『自分を代わりに恨ませる』という方法一つに縛つてしまつた事は、なお悪かつた。

「埋め合わせをさせて欲しいんだ、モルジアナ」

「うめあわせ？」

「俺に出来ることであれば、何でも良い。お前が望むことを言つてくれ」

そうする事で、せめてもの証明にしてやりたいのだ。

どれ程までに過酷な“運命”に挫けそうになったとしても、必ずその先に“自由”と平和に裏打ちされた幸福が待っているという事を。

「……ホントに、何でも良いの？」

「ああ、何でも良い。——必ず叶えて見せる」

もう一度、彼女の両親を探す事でも。あるいは、他の“フアナリス”がいる地へ導く事でも。——そういう願いが返ってくるだろうと、“大導師”は高を括っていた。そして、再び“アレ”の力を借りなければいけないかもしれないそれらの願いのために粉骨碎身する覚悟を、彼は固めていた。

だから、暫し俯いて考えるような素振りを見せてから告げられたモルジアナの“願い”は、普段から落ち着きを取り戻していた筈の彼を心底呆気に取らせた。

それが彼が予想していた“願い”に比べあまりに容易で、そしてあまり予想外だったからだ。

「……モルね——」

だが、その“願い”を“大導師”が無碍に断る事は無かった。

否、出来なかった。

彼女がそう答えた時、幼子には似つかかわしく無い“決意”の火が確かにその目の奥で揺らめいていた。

そして少女が伝えたその「願い」を己が「目」をも使つて確かめ、その過程で彼女に起きていた変化に、少なくとも、その時点の拒否という選択は憚られたからだ。

だが、彼を責める事は出来ないだろう。

戸惑いも無く、まるで子が親におぼろげなイメージのまま将来の夢を告白するが如くその「願い」を答えたモルジアナが、まさにその時、その身を侵攻していた黒が少しずつ退去し掛けていたところだったからであり。

なおも「運命」を恨み、変貌してしまうか否か。——その最終決定は、間違いなく当時の「大導師」の一举一動に掛かっていたのだから。

「——「アサシン」に、なりたいつ」

——あの日の事は、今でも鮮明に覚えている。

今の自分の始まりとなった、あの日の自分の「願い」は。

「おう、「ヘイザム」。今日もこ活躍だったみたいだな」

「チャーシヤン支部」から500m程移動したところにある、貧民街スラムの北西部。

変わらず罅割れたり穴の開いた壁で構成された民家が林立するそこに、腕の中に抱き抱えた奴隷の少年を伴い、フードを下したままの頭から赤いサイドテールを靡かせて降り立ったモルジアナを、一人の男が出迎えた。

顔を覆面とターバンで覆った、モルジアナのものとは少し違うローブを纏ったその男は、この街の「収集隊」——大衆に紛れての情報収取等、彼女を含む「実働隊」のサポートを任務とする裏方の「アサシン」の一人だ。

「大勢の前で護衛を始末してから、豚野郎を拉致つたんだって？　またハデにやったもんだ。管区長も呆れてたろ？——で、要件は？」

大方予想は付くが、と付け加えた「収集隊」のターバンと覆面に挟まれた双眸は、モルジアナの腕の中で目脂の付いた脛を擦っている少年に向けられていた。

「この子をお願いします」

一瞥し、抱き抱えたまま少年を差し出す。

それを受け取った「収集隊」は片眉を潜ませ、ほらね、と確かに覆面の下からぼやきを洩らしていた。

それを耳にしたモルジアナは、形の良い眉の端と作りの良い小顔を少し下げた。

「すみません。予定に無い事をしてしまつて」

「ん？　ああ、聞こえてたか。勘違いするな。別にお前を責めてるわけじゃないし、どの道仕事に違いはない。ただ——」

そこまで「収集隊」が口にした時だ。

「もう帰らせてくれえっ!!」

物々しい音と共に、彼女らの左隣の民家からみすぼらしい格好の男が絶叫のままに飛び出して来た。

それに続いて、同じ民家と近くの脇道から現れた、モルジアナと話していた男とは別の「収集隊」の「アサシン」達が、覚束ない足取りでどこかへ逃げていこうとする男を後ろから取り押さえる。

「離してくれえっ!」

「バカ言うな! 一体どこ行く気だよ!」

「ご主人様のところだよおっ! 脱走したと思われたら終わりなんだよお! 鞭で打たれるんだよおおお! 砂漠に放り出されて、のたれ死んじまうんだよおおおおっ!」

「もうアンタにそんな事する輩はいない! 当にあの世に逝っちまってるよ! もうそんな心配する必要は無いから、ホラッ!」

「後生だあああっ! 帰してくれええええ!!」

一頻り叫び続けた後、業を煮やしたのか、彼を取り押さえていた「収集隊」の一人に延髓を手刀で打たれた男が気絶し、そのまま出て来た民家の中へ引き摺られて戻されていった。

暫し、気まぎれな沈黙がその場を包んだ。

その沈黙を破ったのは、直前までモルジアナに何かを告げようとしていた「収集隊」

の男だった。

「——ほら。ああいうのもいるから」

先ほどよりも深刻な口調で告げられたその言葉の意味は、考えるまでも無かった。前述したように「チーシャン」の「実働隊」の配置数は少なく、「収集隊」の数もそれと同程度の人員しか配置されていない。その「収集隊」の「アサシン」達がどうなっているかといえば、現在彼らはほぼ総出で、任務の過程でモルジアナが解放してきた奴隷人々の保護に当たっていた。

大量の奴隷を保持する領主、及び標的となつた彼の身辺の人間がほとんど奴隷商人だつたことから、彼らの暗殺に際して解放された奴隷への対応は必須事項といえた。

そこで、領主によつて蛻スラムの空と化した貧民街にて彼らを一時的に匿い、モルジアナが任務を完遂させ次第、彼らの所在を明らかにし、元の場所へ帰る算段を付けるという任務が、「チーシャン」の「収集隊」にもまた与えられていたのだ。

だが、保護した人々の扱いは一筋縄ではいかない。

元より物資も無ければ、環境も良くない貧民街スラムの民家内に実質的に軟禁される生活は、いくら解放されるまでそれ以下の環境に置かれていた奴隷達とて辛いものがある。

それに、解放した人々の一部でこそあれ、ただ奴隷商から解放し、足枷を外してやつただけでは十分ではない者もいた。

奴隸商人の中には、売った後の奴隸が粗相を起こしたり逃げたりしないよう、売る前からある程度の「躰」を行う者もいる。最初から従順であれば、なお価値が上がるからだ。

そして、そういう類の商人から解放された奴隸は、逃げ出したり逆らったりしたらどうなるかを徹底的に教え込まれる事になる。

その「躰」がその奴隸商を消して、それでどうにかなる程度ならまだ良い。

だがそれで済まない程に「躰」が進行していた場合、解放された後も先程の男のように、なお一時的な主人であった奴隸商の下へ帰ろうとしてしまうことになる。

ある種の心的外傷トラウマであるそれが、実質的に奴隸という立場から解放された筈の彼らをおも縛り上げているのだ。

「『見えない鎖』、ですな」

先程までの男の哀れな姿をそう表したモルジアナの眉間は、彼女の内で燻った怒りと正義感に細かな皺を刻んでいた。

あんな風に、自由を取り戻したことを自覚することも許さず、前に進む事も許さない。それだけじゃなく、そうやってどこかに向かう術も無いままに、知らぬ間に多くのものを失っていく。

そういう宿命を与えて、なお「鎖」は雑巾に残った水を徹底的に絞り出すように、彼

らを縛り続けていくのだ。

そして、あくまで“アサシン”である彼女には、そんな宿命を歩ませる程に人々の中で成長した“鎖”を断ち切る術は無い。主人を消して、それで終わらせることが関の山の彼女達には、後はもう彼らが自分達の力でその“鎖”を断ち切ってくれることを祈るしかできないのだ。

だから、先程の男のように、どうしようもないほどに縛られてしまった奴隷を目にした時、どうしようもなくモルジアナは齒痒く感じてしまう。法の被害者

あの日“大導師”に助けられなかった場合に歩んでいた、有り得たかもしれない自分の未来を想像させ、どうしようもなく背筋がゾツとしてしまうのだ。

「言い得て妙だよ、まったたく……。だが、もしああいうのに逃げられでもして、ここが割れちまったら今までの苦労がパーになっちまうし、それに元居た場所に帰りたい人達の方が圧倒的に多いのも事実なんだ」

苦々しそうな気持ちを吐き捨てた“収集隊”が、モルジアナから受け取った後抱き抱えていた少年の頭を優しく叩きながら言葉が続ける。

「早く任務を終わらせてくれよ、モルジアナ。お前が領主が何やろうとしてるか早く明かして、早く殺れば殺る程、俺達の肩の荷も早く降りるし、このボウズや匿っている人々も早く元の場所に帰れるんだ。そのためなら、俺達も助力は惜しまないからさ、兄弟

「
 “ そう力強く語る。『収集隊』の覆面に覆われた口元が期待の笑みを作っているだろうことは、想像に難くなかった。

その期待は彼個人のものではない。

彼ら『チーシャン支部』に残る『アサシン』全員の期待であり、このボロボロの民家の群れの中で帰りの時を待つ、奴隷とされていた人々の期待。そして、これからもその足に絡む鎖を断ち切り、救って行くであろう人々の、自分への期待だ。

その期待には、絶対に応えなければいけない。——それこそ、正に自分が『アサシン』になつた理由なのだから。

だからこそ、滅多にしない意気と感情の籠つた返答を、モルジアナは返した。

「——はい。」

あの日、モルジアナは多くのものを失い、絶望した。

だが、『大導師』の言葉を聞いている内にふと思つたのだ——こんなツライ目に遭つたのは、自分だけじゃないんじゃないかと、と。

いやそれどころか、自分以上にツライ目に遭っている人達が、もつと一杯いるのではないかと。

事実、〝大導師〟もそういう人が大勢いると言っていた。

可哀想だと思った。助けられるものなら、助けてやりたいと、心の底から思った。どうしたら助けられるのかと、考えてみた。

だが、考える必要など無かった。

その答えは、すぐ目の前にあつたのだから。

だから、何でも〝願ひ〟を適えてくれるという〝大導師〟の言葉に、彼女はそう願つたのだ。

自由と平和の守り手になる事を。

闇に紛れて光に奉仕する者になる事を。

救いを求めていた自分にただ一人手を差し伸べてくれた目の前の男や、彼の弟子達と同じ道を歩むことを。

〝鎖〟に縛られ、自由だけでなく何もかも失つたあの日の自分と同じ境遇にある人々に手を差し伸べられる唯一の存在——〝アサシン〟になる事を。

そうして、〝マシャフ〟に戻つてからあの日の決意のままに修練を積み、成長し、力を付けていった結果、今のモルジアナがいる。

幼き日の決意をより強固に、愚直なまでに為そうと羽ばたく、一羽の若き鷲ヘイザムが。

「今はまだ、ここで待つていて下さい。でも約束します。——必ず、貴方達の自由と平和

を取り戻すと」

この世界の混沌とした美しさを理解し、それに伴う困難を乗り越えられる人としての特権を、必ず取り返して見せると。

赤茶色の頭を撫でてやりながら「収集隊」の「アサシン」に任せたあの少年にそう誓った。

だから、この任務は絶対にやり遂げて見せる。

奴隷という存在を認める法などに貶められ、誰にも手を差し伸べられなかった彼らを、あの日の「大導師」のように救つてみせる。

「真実は無く、許されぬ事など無い」事を知っている自分達が、どんな手を使ってでも救つて見せる。

「『アサシン』^私のモルジアナが、救つて見せる」

——そのために、私は「アサシン」^道となる事を選んだのだから。

「チーシャン支部」の屋根の上から、それなりに距離の離れた街の中心部をモルジアナは見据えていた。

本来の大きさより遥かに小さく見えるのに、なお失わない威容を夕日に染め上げる領主の屋敷を見つめ、彼女は決意を新たにするのであった。

第五夜

彼が待たされることとなつた応接室は、とても豪華な作りだつた。

四方に立つ柱は大理石の円柱を削り出して作つたのだらう4体の女神像がそれぞれ部屋を中心に向けて手を差し伸べており、それらを上下から挟む細かな凸凹が刻まれた円柱も名のある彫刻家に削り込ませたのだらう見事な出来栄えだ。その間に渡された四枚の壁もやはり大理石製であり、一つ一つ正確に切り出された正四面体のブロックが隙間無く詰められたそれらが厳正な雰囲気醸し出している。

視線を下方に移せば、そこにあるのは曇り一つ無い硝子製の机と、その下敷きになっている、上質な絹で織られたらしい手の込み入つた幾何学的な模様のカーパーペット。更そこから前を見れば、対面の自分が今座っているものと同じ、包み込むように柔らかな綿が詰め込まれた金装飾付の大きなソファアが横に広がっている。

そんな今回の「旦那様」の屋敷の応接室と、ここから南東に馬で1、2週間程のところにある自分の採掘砦アジトの、文字通り掘り込んだ末に適当な調度品を拵えただけの歪な部屋とをつい比較してしまい、組んでいた足の上で頬杖を突いてフアティマーは溜息を吐くのであつた。

「流石は一つの都市を任せられた男、とても言うべきなのかしらねえ？」

誰にというわけではなく、咳いたその間い掛けに、はあ、とだけ後ろで控えている手下二人の片方が気の無い返事をする。

——全く、日陰者には羨ましい限りだわ。

そう心中で嫌味を呟いていたところで、ようやく「旦那様」がお見えになった。

「やあゴメン。待たせたね」

朗らかな笑みを浮かべながら応接室の入り口を潜ってきたのは、一人の青年であつた。

容姿自体は至つて端麗で理知的。やや太めの眉と垂れ気味の細い目が育ちの良さを感じさせるが、かたなく「お坊ちゃん」っぽさも滲み出ている。

背が高く、細い身体に纏う白のローブと黒紫の上着は絹のツヤが照り返す上物ではあつたが、悪く言えばその「お坊ちゃん」っぽさにより拍車を掛けていた。

といつても、実際のところは二十代始めの若造ながら、なかなかの敏腕らしいのだが。そんな風に、事前の客先調査の結果を思い浮かべながらその姿を目で追っていたフアティマーの体面のソファアの真ん中に座るや、大きな欠伸を一つ搔いてから青年が自己紹介をした。

「さて、遠いところから態々ご苦勞だつたね。この「チーシャン」の領主を務めさせて

もらっているジャミルだ。宜しく、フアティマー君

「(ちん)そ、旦那様」

さも恭しく聞こえるように口調を整えた言葉と共に一礼をした後、社交辞令として握手をするために、机の上にフアティマーは右手を差し出した。

だが、その手をジャミルが握り返す気配は無く、まるで気づいてないかのように再び大口を開けて欠伸をしていた。

本当に気づいていないのか。それとも、自分のような下賤な輩と握り合う手は持つていないという事か。

何にせよ、握り返す相手のいない手をいつまでも突き出していても所在無いだけなので、その行動に感じた不満を押し殺してフアティマーは手を引つ込めた。

その間に、三度目の欠伸を終えたジャミルが目尻に滲んできた涙を手で拭っていた。

「随分と眠気が溜まっておられるようですね。徹夜でお仕事でも為されたのかしら？」

嫌味を多分に込めて投げたその問い掛けに、特に不愉快そうな素振りも無く、眉間を揉み解しながらジャミルが返答する。

「ん、〜？ ああ、まあね。仕事じゃあないけど」

「あら？ でしたら、想い人との夜のお付き合いかしら？」

「生憎、そういう類の女はいなくてね。それに、仕事じゃないとはさつき言ったが、同じくらい重要な事なんだ。ここ最近暇が出来たらそればかりで、どの道そんな暇は無いのさ」

ふっ、とジャミルが小馬鹿にしたような鼻笑いをする。

ファティマーもまた、

「あらあ、そうでしたの。お仕事並にお忙しいとは、余程ご重要な事を為さつてられるのね。それこそ、私共のような下賤な身の上には理解できないような事を」

オホホ、と手を口に当て、さも関心したような笑い声を上げつつ、皮肉を返して見せた。

やはり、言葉の裏の棘に気分を害すような素振りにはジャミルには見られない。

それどころか、彼の言葉と笑い声に気を良くしたように満面の笑みを浮かべながら、得意気に「何をしている」のかを語ってくれる始末だ。

「アツハツハ、その通りだよ君イ。今僕がやっているのは、君達平民には到底及び付かない崇高な目的のための、その下拵えなのだよ」

「まあ。それは凄いわあ。して、その偉業とは一体どのような事なのかしら？ 是非とも卑しい私めにもお教え頂きたいですわ」

そんな軽い「旦那様」への口ばかりの称賛を送る傍ら、ファティマーの本心は冷めて

いく一方だった。

崇高な目的とやらはともかく、その下拵えとやらが何なのかは大体想像が着く。

手下どもに事前にやらせていた調査で分かったこの男の最近の周辺状況が無くとも、
 “態々彼を名指しで呼び出す” ような輩のやつていそうな事なんて簡単に察しが着く。

——頭に浮かぶ過去の記憶が、腹の底にムカツキを感じさせる。

最も、そんな内心は億尾に出す事も無い。

彼とて、長い事 “この道” を続けて来たプロなのだ。そんな事で “旦那様” の機嫌を損ねるようなヘマをしていた時代は、当の昔に終わらせている。

「そうかそうか、気になるか。——何の事はない、唯の “躰” さ」

「 “躰” ？」

ああ、やつぱりね、と分かり切っていた下拵えの意味に心中で嘆息しつつも、さも分からなかったというように目を見開いて見せる。

「そう、 “躰” 。ここ最近、奴隷スレーブを買ひ込んでね。 “あの方” がお見えになるまでに使
 い物になるように調教しているんだけど、これがなかなか難航してるのさ」

金飾りの枠が付けられたソファアの背に回していた掌を翻して、ジャミルが肩を竦めて見せる。

「特に、えーと、ぶー、ぶー……ああ、ブータロウ！」

よっぽどどうでもいい名前だったのだろうか。頭の片隅からどうにか引き摺り出して来たらしい様子だったが、あまりに間抜けすぎるその響きに、多分それは間違っているだろうとフアティマーは悟った。

されとて、それを指摘する気はない。ヘタに刺激して機嫌を損ねる可能性を考慮したのもあるが、それ以上にそうする義理が無かった。

「そのブータロウっていうね、顔が汚くて品が無いんだけど、それなりに美味しい葡萄酒を売ってくれる奴がいたんだよ。彼、そのついでで何度か奴隷も持つて来てくれた事があるんだが、全然『騾』が行き渡って無くてね。2, 3日前に連れて来た女メス犬なんかもまるで自分の身分を理解してなくてさ」

そこまで聞き流していてフアティマーだったが、それ以降は一端話が終了するまで浮かべていた作り笑いを止めることにした。

まるで世間話でも聞かせるような口調で話しているジャミルが、その実、自分の世界に完全に入り浸っている状態である事に気付いたからだ。

「酷かったんだよコレが。この僕を引掻こうとしたり、人でなし呼ばわりしたりさ。正直処分してやろうかと思っただけど、高い金出して買ったモノ早々に捨てるのも癪だろ？」

だからさ、裸にして壁に大の字で括りつけてやってからさ、鞭で引つ叩いたり、窒息寸前まで他の奴に、糞尿に顔突っ込ませさせたりしてやったんだよ、一晩中。そしたら、

ようやく自分が人間様以下の存在だと学んだんだ。たかが奴隷なんぞに貴重な時間を割いてやった甲斐があつたつていう——つて、聞いている？」

「ええ、もちろんですとも。御苦労お察し致しますわ」

途中から聞いていなくなつたのは言うまでも無い。

だが、そんなことは関係無い。

要は、咄嗟に愛想笑いを浮かべてそう返したことで、自分の「武勇伝」に感心させる事が出来たと誤解した。『お坊ちゃん』が更に気を良くしたという、その結果が大事なのだ。

そうしておけば、この手の人間にありがちな「気まぐれ」による被害は、とりあえずは避けられるからだ。

「だろお？——だけど、そんな僕の努力を邪魔しようとする不埒者がいてね」

不意に、ケラケラと無邪気な笑いを浮かべていたジャミルが不愉快そうにすつと通つた鼻の上に皺を寄せる。

「まあ、旦那様の崇高な行いにケチを付けようだなんて！ 一体その不屈きな輩は何者なんですの？」

さも憤慨したように声を張り上げて問い質すファティマーだったが、その不埒者とやらについては心当たりがあつた。

故に、その不埒者について吐き捨てたジャミルにしてみせた領きだけは、演技では無かった。

「——アサシン」だよ」

今この街で噂される、暗殺者。

「アクティア王国」南西の山間部に構えられた「マシャフ」砦の主、山の翁からの刺客。

一週間ほど前に現れ、瞬く間に多くの被害者を出したという暗殺者の話は、特に調査を行わなくともフアティマーの耳にも届いていた。

同業者達の、ましてや業界の有名所達の悲報等、放つておいても彼の部下なり、得意先の競売屋なり、採掘砦アジトを共有する盗賊なりを通して伝わってくるからだ。

「これまでの被害を受けたのは、君と同じ奴隷商人。それもこの僕が直々に呼び出した、『評判の良い』連中達さ。それが、この街に到着して瞬く間に連れていた傭兵共々抹殺され、僕が買う筈だった奴隷は全員横取りしていきやがった。——いや、そいつらだけじゃない」

そう、彼らだけじゃない。

他にも、「チーシャン」を最期に行方が分からなくなった同業者達がいる。

最も伝わっていたのはその内1、2人程度で、続いて伝えられた実際の数については

素直に驚くことになってしまったが。

「呼んだきり来る気配も無くて気になっていたんだが、昨日ブータロウが拉致されたと聞かされてやっと分かったよ。——あと5人、いや6人分、僕が鼻肩にしていた連中の死体が、僕の領地の何処かに『不法投棄』されている。おまけに僕の奴隷まで奪われていた、と」

お蔭で、早々に業界内では『チーシャン』は奴隷商人を食らう街。迷宮ダンジョンと活気を囿にした、『アサシン』の狩り場。死にたくなけりや近づくなかれ』等という噂がごく僅かながら囁かれ出す有り様だ。

これで、更に有名所が一人でもこの街で死ぬ事になれば、いよいよ持つて『チーシャン』に奴隷商人が訪れる事は無くなるかもしれない。少なくとも、これから先1, 2年は。いや、これ以上被害が続くようなら迷宮ダンジョン目当てに訪れる観光客や冒険者の足も遠退いていくかもしれない。そういう人間によって発展してきたこの街、ひいてはそこを治める領主にとっては、間違いなくそれは痛手だろう。

最も、奴隷を虐める事が好きらしいこの『お坊ちゃん』にとっては、領土の衰退よりも奴隷商についての方が由々しき問題かもしれないが。

「度し難いものですわね」

「ああ、全くだ。奴隷以下の狂犬のくせして、本当に憎たらしいよ。おまけに、そいつに

託けて人の奴隷を盗もうなんて不届きな輩まで出てくる始末だし……。もし捕まえられたなら、最低でも体中の皮を剥いで、剥き出しにした肉に塩と唐辛子の粉末を塗して、四肢を切り取ってやって、断面に汚物を塗りたくって、滅多刺しにして、女なら野良犬共の慰み者にして……！」

次第に口調に險呑さを纏わせていくジャミルの目には、先程までの「お坊ちゃん」ぶりとは打って変わった、鋭く冷酷で、それでいてねちっこい光が見えた。

毒牙と長い身体で何処までも獲物を追い、猛毒と締め付けで徹底的に苦しめてから飲み下す毒蛇のそれと似たその眼光に。

ほんの一瞬、本当に極々僅かではあったが、確かに背筋を走る寒気を感じ、ファティマーは眉を顰めた。

「ともかく、自分から死ぬ事を懇願するくらい痛めつけて、それから錆びだらけの鋸でゆっくり首を落としてやるくらいの罰は与えないと。それぐらいはしなきゃ、この僕をこうまでコケにした罪は到底罰し切れない！」

サディストなのは事前調査は元より、先程の自分の世界に入り浸った世間話に出て来た奴隷の話でも分かっていた事だが、こんな目が出来る男とまで思っていなかった。

そんな意外なジャミルの目が、それまで感じていたものとは違う不快感を自らの心の中に根付かせた事に、この時までファティマーは気付いていなかった。

氣づいてはいなかったが、次第に皺を刻んでいく眉間という形で、その不快感は徐々に表に現れ出していた。

そんなファティマーに気付かず、再び自分の世界にのめり込んだように憎悪の籠った口調で語っていたジャミルだったが、そこまで言い切った途端に、

「——と、本当ならそう考えていたさ」

掌を返したかのように楽観とした、元の「お坊ちゃん」の口調に戻っていた。

その事が、はっと自らが浮かべていた険しい表情をファティマーに気づかせた。

良くは分からないが、何か心変わりするような事があつたらしい。

それが何なのかを、取り合えず営業スマイルを作り直し、場の流れに従って問い質さうとしたファティマーの口はすぐに閉じられた。

他ならぬジャミルが、それも御丁寧に述べてくれたからだ。

「例の「アサシン」について、分かつている事が三つある。神学者じみた白いローブを着ている事。何処からともなく現れては、どこから出したかも分からない刃物で事を済ませ、途轍もない速さでどこかへ去っていく事。そして、顔を隠すフードから漏れている髪が、「赤い」事」

「赤い髪」。

特に揚々とした調子でその特徴を彼が挙げた時、奴隷集めが御趣味な「お坊ちゃん」

が何を言わんとしてゐるかを瞬時に理解したフアティマーは心中の苦笑とは裏腹に、さもはつとしたような素振りを見せつつ音頭を取つてやった。

「——フアナリス」

「そう。『アサシン』の正体は『フアナリス』。あの暗黒大陸を馳せた、伝説の狩猟民族。そう、僕は睨んでゐるのだよ」

予定通りの返答が返つて来て満足げなジャミルを見るフアティマーの目は、詰まらぬ道化を眺めるように冷たい。

「そこでフアティマー君。本来僕は君から適当な奴隷を何人か買つてやるだけのつもりだったが、それは後回しにして、一つ仕事を頼まれて貰いたいんだ。勿論、無事成功させれば報酬も与えるつもりだ」

徐にソファアから立ち上がり、これが本題だ、と言わんばかりに後ろ手に腕を組んだ背を向けるジャミル。

一方で、完全に時間を無駄にさせられた事を悟り、鼻白んだ視線を隠す事無くその背に浴びせつつ、彼の告げる『仕事』をフアティマーは半ば聞き流していた。

「『アサシン』を捕獲して来てくれたまえ。僕が『王様』となるために」

場所は移り代わり、『チーシャン』東の貧民街スラムの、その西端。

一般市民が居住する住宅街と隣接しているその地域へ、一目に付かぬよう物影に隠れながら彼は移動していた。

一束前髪が跳ねた金髪。あまり高いといえない背が高くなる事を期待して買い、そうなるまで引き摺らないように裾を結んだ白い上着を纏い、その下の腹を覆う帯から購入時の値段相応の装飾が施された金色のナイフの柄を覗かせる10代後半の少年。

アリババ・サルージャであつた。

「……誰もいないな、と」

背後とその周辺を見渡し、その場に自分以外の人間がいない事を確認したアリババは安堵の息を吐き、両手の中に抱えた物を見下ろした。

瑞々しい赤色の皮に太陽の光を反射させる3個のリングがそこにあつた。——それが、どうにか手に入れた今日の朝食であつた。

少し、いやかなり侘しい気分が驅られた。

昨日の不幸な出来事のせいではなし崩し的に夕食を抜いた末のすきつ腹ともあれば、なおの事であつた。

それこれも、全て「奴」のせいだ。

「くっそ〜お、アサシン」めえ……!」

昨日のブーデルからの因縁付けの際、何処からともなく現れた暗殺者。

あれから行方の分からない大豪農を連れ去った張本人にして、アリババ達が因縁を付けられる原因となつた奴隷の少年をも誘拐し、ついでに奴隷泥棒の冤罪を彼らに押し付けた憎きハシシ麻菜野郎。

どうにかこの場にはいない連れ——アラジンが解き放つた「ジン」——神話に出てくる、金属器に封じられていとされる精霊——によつて町警史達の包圍網から逃げさせたのも束の間、瞬く間に街中で指名手配される事となつていた。

お陰で「チーシャン」の住民街の一角にある彼の自宅は、現在町警史達の警戒下。帰る事が出来なくなつただけでなく、街中の壁という壁にアリババ達の手配書が貼られ、彼らの冤罪を広めるふれ役がそこら中で大衆に呼び掛けている。物一つ買う事すら困難な有様だ。

そんな中で、「アサシン」だけでなく自分達まで飢えた狼のよう歯を剥き出しにして搜索する町警史達の目を掻い潜り、尚且つ手配書が周囲に無く、ふれ役も近くにいない店を見つけて迷宮ダンジョン攻略の装備を整える等まず不可能。手元にあるような少ない朝食を調達して来るのが、アリババの精一杯だった。

されとて、彼が背負つた多額の借金も未だ健在だ。如何に請求者であつたブーデルが消息不明であろうが、元々それは「チーシャン」の領主に届けられるべき葡萄酒の弁償代だつたもの。故に、アリババの借金は帳消しになつたわけでは無く、返済先が彼から、

悪名高い領主に移っただけに過ぎない。

むしろ、より悪質な相手に首根っこを絞められるハメになった事も、それどころか装備を整えるどころの話ではない絶賛犯罪者扱いの現状も省みれば、悪化しているといえた。

そんな経緯があつて、一夜も経たぬ内に追われる身となつてしまつたアリババ達が寝床として昨日の夜を過ごす事となつたのが、人つ子一人居ないこの街の貧民街であつた。

普段から近寄る事も無かつたため、そこが所謂ゴーストタウンと化していた事は奇妙に思ったが、お陰で手配書もふれ役も町警史もないだけでなく、ボロとはいえ夜の砂漠の寒気を凌げる住居を勝手に使う事も出来た貧民街は身の隠し場所としては最適だった。

そういう訳で、一夜を過ごすこととなつた民家に待つ連れの下へと向かうため貧民街の奥へ歩みつつも、アリババはぼやき続けていた。

「マジでどうしたモンかなあ。——いつそ、今から迷宮行こうかなあ？」

と、冗談めいて言つてみたものの、それを実行する気は全く無い。

迷宮攻略は生易しいものではない。完全武装した幾十、幾百もの重装兵団が入つたきり一人も帰つて来ないなどいうことはザラという、過酷極まる世界なのだ。

ましてや、最初から資金不足で、ようやくアラジンという一抹の希望を手に出来ただけのアリババである。これで碌に装備も整えずに迷宮ダンジョンに突入しようものなら、十中八九彼らも晒す事すらない骸の群れに加わることとなる。

希望を手に入れたなら、それを無に帰さないためにも、なおの事打てる手は全て打つておくべきなのだ。

それが分かり切っていて、しかしこのままでもどつぼに嵌っていくだけであり、そんな状況を好転させる手もまるで考え付かない。

詰まる話八方塞であり、途方に暮れた心境そのままの乾いた笑いを無意識に漏らしつつも、寢床にしていたボロ家がようやくアリババの視界に入った。

それと同じくして、

「あー、おかえりアリババくーん!!」

待ち切れなくてボロ家の外に出ていたのか、昨日の不機嫌さとは打って変わった無邪気な笑顔を浮かべ、彼目掛けて一目散に駆け寄ってくるアラジンの姿であった。

「おー、アラジン」

ただいまー、と上げた右の掌と共にアリババが返事を返す。

見れば、彼の左脇にはリングが3個だけ抱えられている。

「わくあ！　もしかして、それが朝ゴハンかい？」

「おお、そうそう。どうにかこれだけ手に入つてな。少ないけど、これで我慢してくれよ」

若干申し訳なさそうにしながら、三つのある赤くて甘そうな果物の一個を手渡すアリババに、三つ編みにして縄のようになった後ろ髪をぶんぶんと振り回してアラジンは否定する。

「何で我慢なんてするんだい？　このリンゴはアリババくんが頑張つて買つてきたものじゃないか。それだけで僕は十分うれしいよ！」

誰かが自分のためにした行為に素直に礼を返すことはあつても、得てきた物が多少少ないからと非難するような思考はアラジンの頭には存在しない。

ましてや、

「それに僕達、　『友達』　じゃないか！」

それが『友達』とあつては。

そういう訳で、満面の笑みを浮かべながら、人から見れば大仰なほどにその喜びを表現する仕事を交えながら、アラジンはリンゴを受け取つた。

それに対し、かとなく引き気味に応対したアリババだったが、不意に大きな溜め息がその口から吐き出された。

「? どうしたんだいアリババくん?」

受け取ったリンゴの甘い果肉をま、り、ま、り、と齧りながら問い掛けるアラジンに、もう一度溜息を吐きつつ別の家の入り口の階段に腰掛けてから、心底参ったと言わんばかりにアリババが答える。

「なあアラジン、これからどうすつか?」

「どうするかって、何を?」

「昨日も話したけど、俺達、奴隷泥棒ってことで今やお尋ね者だ。ちよつと街歩いただけで、町警史^ツどもが血眼になって追っ駆けて来るような状態だ。そんな今の俺達じゃ、周りの目掻い潜ってこのリンゴ買ってくるのが関の山。迷宮^{ダンジョン}攻略の準備なんて悠長にやってられる状況じゃねえ」

深刻気に現状を語るアリババに、アラジンもリンゴを齧るのを一端止め、重々しげに頷き返す。

正直な事をいえば、アリババの言葉がどういふ事なのか、彼は良く分かっていたいなかった。それを理解するための知識が、
“大切に育てられてきた” 彼には圧倒的に足りない。

ただ、断片的に “自分達の立場がとても危うい事” と、 “そのせいで迷宮^{ダンジョン}攻略に大きな支障が出た事” は理解できた。そうなってしまった原因が過去の自分の行動にあつ

た事も、また然りだ。

といつても、その原因が「奴隸の少年の鎖を切った事」だとまでは未だに辿り着いていない。アラジン自身としては完全な善行であったため候補から除外されており、その事についてアリババからも言及されない——もとい、実際に連れ去った「アサシン」へ意識が向いているせいで頭の片隅に追い遣られて言及しようがなかったため、辿り着きようが無かった。

「かといつて、このまま手え拱いていてもどうしようもねえ。借金は健在だから、このままじゃ遠くない内に社長やバイト先の皆が奴隸にされかねないし、ここがバレて御用つてならねえ保証も無い」

「そっか……。あ、じゃあ今から迷宮ダンジョンに行くつていうのは？」

続けられるアリババの説明に、うくん、と唸りながら捻った頭に浮かんだ妙案を提案してみたが、すぐに左右に振られた彼の首にそれは撥ね退けられる。

「いや、ダメだ。迷宮攻略ダンジョンは準備が重要なんだ。碌な準備も出来ていない今の俺達が挑んだところで、きつと死ぬだけだ」

「でも僕達には「ウーゴ」くんがついているよ？」

そう言つて、首下の円と奇妙な文字群に囲われた八芒星が刻まれた金色の笛を突出し、そこから出て来るアラジンの最初の友達を指し示して見せる。

一度現れば、その大きくて強い身体で彼の力になつてくれる、心強い一番の「親友」を。

にも、変わらずアリババの返答は左右に振られる首だった。

「確かに、お前のジンはスゴいよ。俺らが町警史から逃げ切れたのも「ウーゴ」くんのおかげだしな。だけど、それだけで攻略出来る程迷宮は甘く無いんだ。出来るだけの準備はやっておかねえと、本当に死にかねない。そういうモンだ。かの有名な「シンドバットの冒険書」にもそう書いてあるんだから、間違い無い」

アリババもまた、ウーゴの事を何度も目にしている。その大きさも、その力も、何度も目の当たりしている筈だ。現に、彼の言葉はあくまでウーゴの事を認め、賞賛している。

それでおこう言われたとあつては、一昨日に初めて迷宮ダンジョンの存在について彼に教えられたばかりのアラジンにはもう返す言葉は無い。そういうものなのだと、渋々自分に言い聞かせて引き下からざるを得なかった。

そうして黙り込んだところで、不意にアリババがガリガリと金髪を掻き毟り出した。

「——あー、クソっ。それもこれも、全部あの「アサシン」のせいだ。攫つてくのがブーデルだけなら良かったのに、あのガキまで一緒に連れてつたせいで関係無い俺達まで「誤解されて」この有様だ！」

クソツタレ、と最後に吐き捨てた彼のその言葉が耳に伝わった時、魚の小骨が喉に引つ掛かったような感覚がアラジンの頭を過った。——「誤解されて」？

「ねえアリババくん？ 僕達 “誤解されて” いるのかい？」

「え？ ——いや、そりや、元はあのガキの鎖切ったのは俺ら、つーかお前だし、“アサシン” 来なかつたらブーデル殴つてもつとヤバイ事になつてて……い、いや！ それだけなら、まだ言い逃れのしよはあつたんだ！ “アサシン” が奴隷のガキもお持ち帰りしたから、“周りに誤解されるハメになつた” んだ！ うん、そうだ！ そういふことなんだアラジン！」

少し迷うような素振りが見えたような気もしたが、最終的にはキツパリと言い切つて忙しなく頭を上下させるアリババに、確かな確信をアラジンは得ていた。

更はその確信が、まだまだ常識というものが欠けている彼の頭の中で、瞬時に新たな妙案へと昇華していく。

至極簡単にして、至極最適な解決策へと変化していく。

「だつたら簡単だよ！ 僕達の “誤解を解いて貰えば良い” なんだよ！」

これ以上は無いその解決策を、すぐさま声を上げて堂々と彼は発表して見せた。

その意味が分からなかつたのか、は、という間の抜けた声を洩らすアリババを後目に、すぐさま頭に巻いたターバンに付いている赤い宝石に、アラジンは手を掛ける。

「——あ、あのアラジン？　ご、誤解を解いて貰う」って、誰に？」

留め具となつてゐるそれを引つ張り、そうすることによつて解けたターバンにすかさず自身の「お腹の力」を与え、自分とアリババの足下に展開。

そうして二人の少年が乗るのに十分に広がつた「魔法のターバン」に足を掬われて尻餅を突いたアリババからの絞り出したような問い掛けに、彼がない間に見た事をまだ伝えていなかつたのをアラジンは思い出した。

「実はね、アリババくんが居ない間に「あのお姉さん」があつちの家の屋根を走つて、街の方に行くのを見たんだ。だから、今から行けばきつとまた会えると思うんだ」

そう、確かに見た。

今自分が指差している方向——彼らがいる場所から北の、奥の方の家屋の屋根を物凄いい速さで伝つていく「彼女」の姿を。

あの優しそうな「彼女」なら、きつと自分とアリババに掛けられた誤解を解いてくれる。——そういう確信めいた考えが、アラジンの中にあつた。

「あ、あのお姉さん？」　い、一体誰だそりや？　そんな奴、俺知らな——」

「ううん、アリババくんも知つてる人だよ」

それに、あの「がんじょうなへや」から出た後の旅の中で出会つた誰かが言つていた。——「善は急げ」、と。

今から自分達がやる事は、唯「誤解を解いて貰う」だけで、これは悪い事では無い筈なら、その言葉に従つて急ごうではないか。

「探しに行こうよ、アリババくん。——あの「アサシン」のお姉さんを！」

そう告げるや、先程と同じ、しかしそこに込められた意味が先程とは大きく異なつた、は、という間の抜けた声が再びアリババの口から洩れた。

彼らの乗つた「魔法のターバン」が、どこかにいるであろう「アサシン」を目指して「チーシャン」の街の上空へ急速上昇を始めたのは、それから間もなくの事であつた。

「あーあ、バカバカしい」

ジャミルとの会談を終えて、大通りへ続く裏路地へ入つてから約15分、彼の屋敷が見えなくなるや、口紅の塗られた口をファティマーは歪めた。

その後ろに追従する、彼が左肩から垂らしているのと同じ赤茶色の毛皮を首元や腰に巻いた部下二人が、思い出して吹き出しそうになるのを堪えながらファティマーに相槌を打つ。

「「アサシン」は「ファナリス」で、しかも髪が赤いから、ですしね」

赤い髪だから何だというのだ。確かに「ファナリス」の特徴の一つであると共に滅多に見ない色合いではあるが、それだけで「ファナリス」と言い切るのはバカバカしい

にも程がある。

「あと、〃アサシン〃は逃走の際に家屋の屋根や高台なんか、いとも容易く登ってみせるから、とか何とかとも言っていましたよ」

確かに、根拠はもう一つあったようだ。

だが、それでも答えは「否」だ。

「アサシン」というのは、そもそもそういう事が出来る連中だ。ちよつとした高所くらい、彼らにとつては隠れ場所、あるいは逃走経路でしか無い。

あらゆる場所を進み、あらゆる場所に隠れ、あらゆる場所から標的を仕留める。そういうことが出来るように訓練された連中なのだ、〃アサシン〃とは。

詰まる話、あの「お坊ちゃん」が「アサシン」の正体を「フアナリス」と言つてのけた、その論理はお話にならないものなのだ。

「領主サマともなれば自分の領チーシヤンにほとんど居座りつきりだろうし、仕方ないのかもね」
元々、この街では「アサシン」による被害はほとんど無かったそうだとすれば、この男は例の奴以外の「アサシン」について耳にした事も無いかもしれない。

それで、高所に容易に登って見せた「アサシン」の実績を、常人を超えた強靱な脚力を最大の武器とする「フアナリス」と結び付けるに至った、というのが、その誤認の大方の経緯なのだろう。

と、推測しては見たが、それを理由に態々部下達へジャミルの弁護をしてやるつもりはファティマーには無かった。

そう考えが至ったところで、

「どの道、あの『お坊ちゃん』は気に入らないけど」

内に生まれたあの高慢不遜極まりない若造への嫌悪感が拭い去れるワケでも無い。

「そうですねえ。握手一つ返さないどころか、ファティマーさんガン無視で話進めちやったりとか。あそこまで酷い客は滅多に——」

「そうじゃあないわ」

もちろん、部下が挙げたような無礼の数々や、こちらの嫌味一つにも勘付かない鈍さもファティマーの嫌悪の理由には違いなかった。

だが、他の客としてそういった対応を彼達にするものは少なからずいる。奴隷商人自身お天道様の下を堂々と歩けない日陰者が営むような職であり、それが個人の客相手に仕事となれば、大概の相手が人を見下し切った成金だ。ジャミル程酷い客とは会ったことが無いとはいえ、今に始まった事では無いし、そんな事で一々気分を害してはやってられない。

にも関わらず、ファティマーの内では当面は消えないであろう、ジャミルへの強い嫌悪感が燻っている。

その理由は何であろうか。自分より10近くは年下の若造だったからだろうか。

いや、違う。

彼には、「何か」があつたのだ。自分には無い、「何か」が。

それを具体的に言い表す言葉は思い付かない。だが、今にして思えば自分はその片鱗を見たのかもしれない。

自分の言葉に完全に入り切っていた彼にほんの少しだけ見えた、あの毒蛇のような眼光の中に。

そんなことを思い返している内に黙りこくっていたせいでだろう。

不意に別の話題を振ってきた部下の口調は、どこか気まぎれだった。

「それはそうとなんですが、例の『アサシン』の捕獲の件、どうします?」
「ん? どうするって?」

そういうえばそんな話もあつたな、と部下の方を振り返り、ファティマーは首を捻って見せる。

「いや、流石に『ファナリス』ってことはないと思いますけど、『アサシン』は『アサシン』で厄介な連中です。一端採掘砦^{アジト}の盗賊共に連絡を取って、準備を整えた方が良いかと」

そう心配げに告げる部下に呆れて溜息を吐き、次いで親指を立てた右手でファティ

マーは上空を指し示して見せる。

言葉にして聞かれる事を一応防ぐためのボディランゲージで、何かを思い出したように先程の部下が納得したような頷きを返した。

彼にそうさせたのは、二階建ての建物の屋根のシルエットに区切られて細長く窄められた青空で旋回し続けている、一对の翼と毒々しい輝きを放つ鉤爪を持った黒い影だ。

事前にファティマーが飛ばしておいた、彼のペット兼捕獲道具の「砂漠カラス」だ。

砂漠カラスの爪は大牛も即座に眠らせる強力な睡眠毒が染み出す。それに彼の砂漠カラスはファティマーが呼ぶか、また彼に危害を加えようとする者が現れば、瞬時に彼の下に飛んで来るように調教済みだ。

その自分のペットの俊敏さと毒の前には「アサシン」はおろか、「ファナリス」さえ無力化できるという自負が、いや、「実際にした」事による自信が、ファティマーにはあった。

といつても、「ファナリス」が出て来る事など十中八九有り得ないが。

あの人間兵器といつても過言ではない強靱な一族は、その原産地である「暗黒大陸」から既に絶滅したと風の噂で聞いたことがある。現存する「ファナリス」は、そのほとんどが既に奴隷に堕ちた者ばかりだろう。

ましてや、そんな身の上の者が「アサシン」になっているなど、眉唾もいいところだ。

それに「お坊ちゃん」のご依頼は『「アサシン」を捕まえて来い』だ。「フアナリス」で無かるうが、ともかく「アサシン」をひっ捕らえて目前に晒してやれば、それであの嫌な旦那様との仕事は終わり。

「お坊ちゃん」からすれば不本意極まりないだろうし、期待外れの「アサシン」が地獄を見せられる事になるだろうが、当のこっちは連れてきた奴隷の代金にちよつとしたボーナスまで付いてくるのだから、何も不都合は無い。

「どうせ向こうから来るんだから、ゆつくり待つとしましょう。「アサシン」を」
彼らが「チーシャン」に到着したのは今日の明朝だったが、既に「アサシン」にその存在を知られている可能性は十分にある。いずれ襲ってくるだろう事を予測するのは容易い。

されとて、生半可な奴に解除されてしまう程、こちらが仕掛けた罠もトロクはない。獲物が罠に飛び込むその時を、気長に待てば良い。

それまでは、精々談笑なり観光なりしながら、「アサシン」を誘き寄せる罠になつてやろう。

それで、何も問題は無い。

「——にしても、とんだ「崇高な目的」だったわねえ」

部下への無言の説明を終えて大通りの方へ向き直るや、急に頭に浮かんで来たジャミ

ルとの商談の後半部分に、フアティマーは鼻を鳴らした。

例の仕事の依頼が言い渡された後、彼らが引き連れて来た奴隷達の取引も終了して悦に浸っていた。『お坊ちゃん』に、度々口に出していた『崇高な目的』とやらについて尋ねてみたのだ。

理由は特に無い。ただの気まぐれであり、敢えてそれ以外の理由を挙げるなら、ほんの少しばかりの興味本位といったところか。

だが、話すべきか否か躊躇するような素振りの後、

『いいだろう、『アサシン』捕獲の依頼を受けてくれた、その前金代わりだ』

と踏ん返り返られてから教えられたそれには、唯でさえ良くなかった彼の印象を更に下降修正せざるを得なかった。

想像もつかない程の大枚を叩いて奴隷を集めたその理由が、紛いなりにも一つの街を任され、周囲の眼差しを羨望のみに染めるには十分な富と権力を持った男が抱くにはあまりにもチープで、あまりにも幼稚で、それでいてあまりにも困難な『野望』だったからだ。

「なーが『迷宮攻略』よ、そこらの命知らずな冒険者と変わんないくせに飾り立ちやつて。王様がどーとかなんて知らないけどさあ、欲の皮張り過ぎだわ」

ぺつ、と唾ごと石畳の地面にその台詞を吐き捨てる頃には、路地の出口から差し込む

明るい陽光に照らし上げられるところまでフアティマー達は辿り着いていた。

思わず手を眼前に掲げる程に眩しい光が、目に差し込んでくる。

同時に、鬱屈としていた気分を浄化させていく心地よさも持ち合わせたその光に、無意識に赤く塗られた唇をフアティマーは微笑ませていた。

その光から感じる暖かさが、ほんの僅かな時ではあったがジャミルへの嫌悪感も、請け負った“アサシン”の捕獲任務の事も、何もかも彼の頭から忘れさせた。

当に通り過ぎて彼らの後ろ5 m程の位置に後退していた石製のベンチの存在などに至っては、当然の如く最初から意識外だ。

だから、彼が気づくことは無かった。

今も上空を旋回していた筈のペットが、眩い白一色の太陽の中から、彼と部下の間の地面目掛けて変わり果てた姿で墜落してくるその時まで。

角が削れて丸くなっている件のベンチから腰を上げ、日光の入り切らない裏路地の薄暗い影に白い輪郭と赤い髪を滲ませて彼達の背後に立った、“捕獲対象”の存在に。

フアティマーは、全く気付けなかった。

第六夜

「採掘砦のフェアティマー」って聞いたことある？」

対面で水の入ったゴブレットを呷っていたバートリーが突然そう切り出したのは、
「チャーシャン支部」の休憩室にてモルジアナが簡単な朝食を終えた、そのすぐの事であつた。

「『兄弟』がその名前を口にしていたのを、小耳に挟んだ事はありますけど」
それ以上の事は分からない。

だが、その問い掛けに含まれた意味はすぐに分かった。——次の標的だ。

「ここから東南、『バルバット王国』の国境付近に盗賊に占拠された元採掘所があるんだけど——」

そう説明される傍ら、二人は隣の作戦会議室へ移動し、カウンターへ入るバートリーと、その対面に立つモルジアナという、互いの所定位置に着く。

「その採掘砦の盗賊共と手を組んで、悪どい商売をしていると評判の奴隷商人よ」

次いでバートリーが語った『悪どい商売』の内容だが、要は結託している盗賊を使つた奴隷商品の仕入れだ。

仕入れ先は主に付近を通り掛かった旅人や商隊キヤバン。盗賊達が彼らを襲い、金品や食料、身包みだけでなく、人間も奪つて来る。それを自分達が受取、奴隸として競売に掛けるなり、金持ちに直接売りつけるなりして利益に変え、盗賊達と山分けする。そうして盗賊達にまた奴隸を仕入れさせ、一儲けする。——それがファティマーの基本的な遣り口だ。

無論、あくまでそれは基本であり、他の奴隸商人がやっているような、奴隸狩りに遭つた人々等の売買もまた彼の商売の範疇である。

「最近じゃ内紛続きの『バルバット』から逃げ延びてきた人々も捕まえては売っているらしいわ。それで流石に目に余るつてところに、今朝方『チーシャン』に辿り着いたつて報告が上がつたワケ」

おまけに、彼が手下と数名の奴隸を連れて向かつたのは最大の標的、領主ジャミルの屋敷だという。

それで、これを好機としてファティマーの暗殺任務がモルジアナに回つてきた、という事だった。

そこまでは理解したが、同時にモルジアナには一つ疑問が浮かんでいた。

「『バルバット』周辺にアジトがあるとのことでしたが、『バルバット』にいる『兄弟』達は何も手を下さなかつたんですか？」

現在、*「実働隊」*の者を中心とした、この街を含む周辺地域の*「アサシン」*達が*「バルバット王国」*へ集結している筈。

来るかも分からなかった*「チーシャン」*で、半ば待ち伏せるような形でモルジアナに消させずとも、その内の適当な人員を見繕って協力関係にある盗賊諸共一網打尽にしてしまえばそれで良い筈だ。

少なくとも、これまでの情報から判断する限りではそうすべきだったと、モルジアナは思ったのだ。

対し、少し言葉を選ぶような素振りの後に返されたバートルリーの答えはこうだった。

「——今の*「バルバット」*は、私達が思ってるよりずっと深刻らしいのよ。頻繁に起きる内紛の火消しに、碌に動こうとしない政府に代わって民の安全を守る必要がある。おまけに、連中の採掘^{アジト}は国軍すら手を拱く程堅牢らしくて、攻め込むにはそれなりの人員を揃えなきゃいけない。終いには未確認だけど、ファティマーが商品として取り寄せた猛獣までタツプリいるそうよ」

掻い摘めば、内乱の火消しと悪化の一途を辿る治安への対処に人員を割かれている状態であり、ファティマーと盗賊達を消すのに必要な戦力を整える事が出来なかった、ということだった。

故に、今まで手を出すことも出来なかった*「バルバット」*の*「アサシン」*達に代わっ

て彼を葬る事が出来る今回のチャンスは、正に行幸といえた。三重の意味で。

「ま、この街に寄つて来る奴隷商ゴキッリを消すのも今回で終わりね。ファティマーの奴は取つて置きの有名所。消せれば、その時点で向こう2、3年は固いわ」

「2、3年もですか？」

「チーシャン」についてすぐの頃、任務全体の概要について確認した際にバートリーに、今回の任務終了後にどれだけの期間奴隷商人の足を阻めるか、と尋ねた事があるが、その時の彼女の答えは『精々が1、2年』というものだった。

そのバートリーが、ファティマー一人を斃すだけで2、3年はほぼ確定とハッキリ言い切つた。

それ自体は喜ばしいことだ。あまり任務を長引かせれば、消えるのは奴隷商人だけではない。元より命知らずばかりの冒険者達は別としても、前者同様に街の重要な収入源である観光客は数が減り、「チーシャン」とそこに住まう人々に要らない衰退を強いる事になり兼ねない。

だが、そこまでの効果が今回の任務に見込める理由は何なのだろうか。

そう不思議に感じて訊き返したモルジアナに、

「……それだけ、とびきりの有名所なのよ、ファティマーは。例の採掘アジャトや盗賊との協力関係が、そこまでアイツを押し上げたの」

とバートリーが告げた。——「嘘」を。

フアティマーには、業界で「伝説」として実しやかに囁かれる偉業を納めた事がある。それが、彼を有名所の奴隷商人へ押し上げたのだ。

だが、その「伝説」をこの少女が知れば、少なからずその心を掻き乱すことになる。年若い「兄弟」がそれを知る必要は無い。——そんな配慮が故の嘘であつたどころか、その言葉が偽りであつた事すら、モルジアナが気づく事は無かつた。

故に、どこかに府に落ちないような感じを抱きつつも、納得して見せたように頷くしかなかつた。

「——ま、今までみたいにな隷商から領主の目的を聞き出せなくなるのも確かね。そつちについては追々考えておくとして——」

一端言葉を区切り、バートリーが上着の懐を弄る。

数刻の後、上着から出て来た彼女の太い指に抓まれていた「それ」が、モルジアナの眼前に差し出される。

暗殺任務の許可証、及び暗殺完了の証明証を担う一枚の羽根が。

「今回は尋問も遠慮も要らないわ。大衆の目を、耳を、口を介して、小汚い人売り共にこの街に来たらどうなるかを知らしめてやるつもりで徹底的に、ハデにやっておしまいなさい。『ヘイザム』」

穢れ一つ無い純白のツヤを持ったその羽根を、力強い領きと共にモルジアナは受け取った。

その遣り取りの後、更に幾つかの助言を受けてからフードを目深に被った彼女が支部を後にしたのは、“事”を始めた現在より一時間弱前の事であった。

標的——“採掘砦のファティマー”とその手下二人がこちらに振り返るのと同じくして、革帯に添えていた右手をモルジアナは横薙ぎに振っていた。

もとい、革帯の左右に据え付けられている革製の鞆にしまわれていた投げナイフを、引抜き様に投げていた。

広げられた鳥の片翼を横した、鈍い銀色の輝きを放つ小振りの刀身。

それが右側、後ろ髪を結わえたオールバックの方の手下の開かれた眉間に根本まで突き刺さり、その奥の前頭葉を破壊する——のを待たずして、即座にその場から疾走。

狙いは前髪を下した左側の手下。

刹那の内に詰まっていく間合いの中で、袖口が小さくはためく右腕と共に後ろへ下げた左腕からアサシンプレードを展開。その刀身を、懐に飛び込まれた事すら気づけていない手下の首元に巻かれた黒い毛皮の、その奥にある喉目掛けて下方から滑り込ませ、力任せに押し倒す。

次の瞬間、瞬時に物言わぬ肉の塊と化した二人の男が、ほぼ同時にもんどりを打って石畳の上に倒れた。

一瞬の内の出来事だった。

あつという間すら無い内に起こった一連が、モルジアナ以外のその場の人間の思考を奪い、平等に一時の沈黙を強要する。

その重苦しい時の中から最初に抜け出したのは、

「だ、誰か助けてくれえ！　　アサシン」　　だあ！　　アサシン」　　が出たああああ!!」

気付かぬ内にその間に腰着けていたモルジアナが姿を隠す手伝いをさせられていた事など知る由も無く、それまで座っていたベンチの両隣から立ち上がや、絶叫を上げて一目散に逃げ出す中年男と若い女で。

愕然とした目で足下に転がる手下の死体と、彼らが行っていた妙な仕草を頼りに見つけて投げナイフで射落した、異様な臭いがする、鉤爪を持ったカラスの死骸を見下ろしていた銀髪の標的を大通りの方へ走らせるには。

更に暫しの時と、彼の足下に向けて放った三本目の投げナイフが必要であった。

ガスツと、何かが固い物に突き刺さるような音が足下から響いた。

その音に反応するままに視線を動かしてみれば、ブーツを履いた自分の爪先から5c

m前のところで、石畳に根元まで刀身が刺さった小さなナイフが、小刻みに振動していた。

仰向けに倒れる二人の手下の片方の眉間に刺さっているのと同じナイフが。

それよりも前に空から落ちてきたペットの胸元に食い込んでいるのと同じナイフが。

そして眼前には、それらを放った白いローブがいた。

“お坊ちゃん”から捕まえて来いと言われた、数々の同業者を葬ってきた暗殺者の姿が、そこにあつた。

「……ッー」

ようやく意識を取り戻したファティマーが取った行動は、背後に広がる大通りと、“アサシン”の出現により集まってきたヤジウマ共の方に向き直つての逃走。

及び、傍のベンチに“アサシン”が紛れ込んでいた事に気づかなかつた迂闊さに対する自省と後悔、ではなく、

(どういう事?? 何故こんな事に……!?)

完全に予定外の事態に陥つた事による、焦燥と疑問であつた。

歩く自分達のすぐ横で堂々とベンチに座っていたのは流星に予想外ではあつたが、それは問題では無い。

相手は神出鬼没という言葉を絵に描いたような暗殺者。既に近くに潜んでいること自体は当に予測済みだった。だから、声で作戦が悟られないよう、部下と無言の会話を交わした。

仮にその意味を読み取られ、その存在を知られた上空の罠砂漠カラスが真つ先に攻撃されたとしても、それはそれで占めたものだった。

そこから、どのような手段で攻撃が行われるかまでは流石に想定は出来なかったが、問題は無かった。弓だろうが、クロスボウだろうが、自分の砂漠カラスにはそれを容易く避けられるだけの俊敏さがある。次の攻撃が行われる前に、その毒爪で「アサシン」を無力化出来る。——その筈だったからだ。

その自慢のペットが、まさか弓やクロスボウよりも遅い筈の投げナイフによつて仕留められるなどは、夢にも思わなかった。

一拍置いて、両腕を後に下げて追い駆けて来る「アサシン」の姿を肩越しに見て速度を上げた今も尚、信じられない思いだった。

だが、どれだけ認めたく無かろうと作戦は失敗し、使えた手下達と優秀な道具を失つたという結果が変わる事は無い。今の自身が完全な手詰まりである事にも変わりはない。

今はともかく、逃げるしかない。逃げ切れなければ、「死」が訪れる。

そう分かつているからこそ、

「ええいつ、お退きッ！」

進行方向に並ぶ群衆を押し退け、踏み倒して行く自身の体の奥から湧き上がる底無し
の力をフアティマーは感じ取っていた。

それは彼にとって、二度目の体験だった。

目前に迫る“死”から逃れんがために生命としての本能が生み出した火事場の馬鹿
力によつて、只管に、突き動かされるままに、限界をも振り切つて自らの体を動かすと
いう、その体験は。

自由を求めて、その手を主人の血に染めた時以来の事だった。

少し時間は巻き戻り、“チーシャン”上空。

貧民街スラムから“魔法のターバン”で飛び立って、そろそろ一時間が経つ頃になつても尚
彼らの、もといアラジンの“アサシン”搜索は続いていた。

「なく、もう良いだろ？ 帰ろうぜ？ “アサシン”なんて絶対見つからねえって。帰
ろうぜ？」

ふよふよと波打ちながら浮遊する白いターバンの端から顔を出して目的の白ローブ
を探しているアラジンとは対象的に、特に何もする事無く寝そべったターバンの中心部

からそう促すアリババは、退屈のままに片耳を穿っていた。

“アサシン”の搜索など、元々彼は反対であった。

当たり前だ。

どこに好き好んで殺人鬼の搜索を行う一般人等いるというのだろうか。そんな文字通り藪の中の蛇を突くような行為をすれば、せつかく一度は助かった命を今度こそ奪われかねない。

だがしかし、“アサシン”の搜索を言い出したアラジンの眼は本気だった。

加えて、彼には常識というものが著しく欠けている事を、二日にも満たないこれまでの短い付き合いの中でアリババは嫌という程思い知らされていた。

だから分かってしまった——間違い無く、彼はやる、と

“アサシン”を見つけ次第、本当に奴隷泥棒の“誤解を解いて”もらおうとする。

そして殺される——半ば強制的に連れて来られた自分も、諸共に。

そこまでの論理が頭の中で構築された時、

『イヤアアアアアアアアア!! 止めてええええええええええ! 殺されるううううううう

!!』

相手が子供だという事も完全に忘れて掴み上げたアラジンの首を、噴き出す恐怖のまま泣きながら、自身も首を振り回しながら、がむしやらに揺さぶっていた。

そのせいで危うく昇天させ掛けるという珍事に発展してしまった前半から何事も無く時間が過ぎた今、そんな一幕が合った事などまるで伺わせない程に彼は落ち着き、のんびりと寛いでいたのであった。

最も、当のアラジンは相変わらずだったが。

「大丈夫さアリババくん。きつとすぐ見つかるよ」

返答を返す合間も、なおその顔は真下の小さくなつた街の方を向いている。

「だからー、見つけてどうすんだって。『アサシン』が俺達助けてくれるワケないだろ。むしろ殺されるって」

「そんなことしないよ。あのお姉さん、とつても優しそうだったし」

「いやだから、そう考える根拠は……やっぱいい」

眉間に皺を寄せ、少しだけ青い目を揺らめくターバン越しに見せたアラジンとの会話をアリババは切り上げた。

その問答は、彼が落ち着いてから既に5回は繰り返したものだ。そして、その根拠は何だ、というアリババの質問に対して、少し思案するような素振りの後に返ってくるアラジンの答えは決まっただけだった。

『だって、とつても優しそうだなって思ったんだもん』

答えになっていない。

そんなふう感じた、その根拠を訊いているのである。なのに、彼がどう感じたかを繰り返されても、当のアリババとしては困惑を強めるしかない。

それでも理由らしい理由を彼なりに推測した結果、恐らくは第一印象だろう、というのがアリババが至ったその理由であった。

「根拠が無い」という一点においては通る話だ。所詮印象など個人の感性でどうとも変わるものだし、アラジンのように理性の発達はまだまだ未熟な子供ならば、よりその傾向は顕著だろう。

それならば尚の事会いたくない、というのがアラジンより理性の発達した十代後半の少年がそこから見出す結論であった。

「……つーか、アサシン」って、「女」だったんだな」

ただ、アラジンから聞かされたアサシンの性別や年頃については少し意外ではあった。

彼曰く、「アサシン」はアラジンより年上でアリババより年下——つまり十代前半から半ばぐらいの、独特の目元が特徴的な可愛らしい顔の少女であった、とのことだった。

後ろ姿しか碌に見て無かったが、確かにあの背格好は十代の少女と言われればしつくりと来るような気がしたし、前述したアラジンの第一印象の話も、そこに起因しているのかもしれない。

だが、それはすなわちアリババより年若い少女が「アサシン」として3件、いや恐らくは4件もの殺人という大罪を犯した、という事だ。

それも噂程度の根拠しか無いが、恐らく「少女個人の意思とは無関係に」。

「……腐った世の中だよなあ」

例の少年のように、幼い子供が奴隷として家畜同然の生涯を強要され、その一方で自分とそう変わらない年頃の少女がその手を血に染めさせられている。

そんな世界を、腐っているといわずして、何というのか。

その場に寝転がってそう呟くアリババの顔に、既に先程までの呑気さは無い。

代わりにあつたのは、そんな世の理不尽に燻らせた怒りとは対象的に、天上をどこまでも穏やかに流れる白雲の群れへの睨視であつた。

最も、すかさず飛んで来た凶報に飛び起きた次の瞬間には、元の黙阿弥とばかりにゲドゲドの怯え面がその表情を彩る事となつたが。

「——あつ！ 見つけた！」

目当ての者をようやく見つけられたその嬉しさがありありと表れたその声に、えつ、と踏まれたカエルのような悲鳴が腹の奥から飛び出たのも束の間。

それまでその場に悠然と漂っていたターバンが、主人たるアラジンの意向に従うがままに急降下を始めた。

「ちよ、ちよ待つ、ちよつと待つ、アラジ——」
「行っけーっ!!」

慌てるあまり呂律の回らないアリババの制止の声などどこ吹く風とばかりに、主の言葉に従ってターバンは速度を増していく。どんどん増していく。

そうして恐怖の涙と絶叫を尾に引きながら、二人の少年を乗せた白布は、チーシャン“の大通りへ向かった。

民から奪い取った馬の背に跨る銀の長髪を追跡する、白フードの方向けて、全速力で降りていったのであった。

視界の端に一頭の馬を引き攀れた商人らしき男を見つけた時、ツイているとフアティマーはほくそ笑んだ。

“アサシン”に追われることとなって、まだ5分と経っていない。

しかし、完全な不意打ちにより冷静さを欠いてしまった事と、文字通り命が掛かっている緊張感により、最初から全速力で走っていた彼は限界寸前。既に肺と心臓に締め付けられるような痛みが走る領域まで達していた。

一方で、未だに彼を追跡する“アサシン”には息を荒くする素振りすら見られない。まだ余裕があるのは明らかだ。

いや、本来ならば既にフアティマーに追い付き、左手の仕込み剣でその首を貫いている筈だ。既に満身創痍ながらもペースを落としていない彼から、一定距離の保ち続けている。上でその様子なのだから。

それを、敢えて尚も速度を合わせて、追い付く事の無い追い駆けつ子を続けるその理由は極々簡単に推測出来た。——「見せしめ」だ。

街中を走らせるだけ走らせて、引けるだけ大衆の目を引いたところで一気に追いつき、標的たる自分の命を刈り取る。そうして大勢の人間に知れ渡った自分の死という情報を同業者達への脅しとして、どうなるかを徹底的に知らしめてやる。大方、そういう算段なのだろう。

つまり、今の彼は客寄せパンダであり、後には形無き晒し首の役目も待っているという事だ。

ふざけんじやないわよ、と立ち止つて込み上げる憎悪のままに吐き捨てたいのは山々だったが、生憎と今のフアティマーにそんな余裕は無い。

立ち止つた瞬間が自分の地獄逝きの瞬間であり、同時に後の憎たらしい白ローブの計画達成の瞬間だからだ。

だが、それもこれで終わりだ。

「ちよつと借りるわよッ！」

馬の傍まで急接近するや、その主人たる商人から許可ではなく手綱を奪い取り、良く手入れされた黒い毛の上に乗せられた鞍に跨つて、その腹を蹴った。

瞬間、ヒヒーン、と一鳴きした馬が、唐突に自分を奪われた事に啞然とする主人を尻目に、フアティマーが握つた手綱のままに、大通りの奥目掛けて一気に走り出した。

「よーしよしよし、良い子よおー」

思い通りに動き出してくれた黒馬に労いの言葉を掛けてやりつつ、手綱を振つて更にフアティマーはその足を急かせた。

速い。周囲に並ぶ露店は勿論の事、彼が操る馬に踏み潰さまいと慌てふためく群衆の顔が、おぼろげなままに前から後へ、前から後へと連続して流れていく。

どうやら、かなり良い馬をかつぱらう事が出来たらしい。これならば、如何な「アサシン」と追つては来れまい。

如何に厳しい訓練を積み、人並み以上の体力を持つに至つた連中だとしても、所詮基礎ベースは唯の人間。全速力で走る馬の速度に敵う訳が無い。

人を晒し者にしてしようとして泳がし続け、結局その機を逃したわけだ。

何ともマヌケな事だと、片手を口に当ててフアティマーは嘲る。

ジャミルとの契約も残っている以上、このままこの場を逃げ切り、採掘砦アジトに戻つて再度捕獲の準備を整え直すのが先決だろう。

今度は必ず捕獲して見せる。それこそ、商品として仕入れた『暗黒大陸』の猛獣達を『チーシャン』中に放つてでも。このフアティマーの顔に泥を塗ってくれた、その報復を必ずしてやる。

そう固く誓い、もう大分小さくなってしまっただろう『捕獲対象』をその目に焼き付けるために、最期にもう一度だけ後ろを見た時だった。

有り得ない光景が、見開かれたフアティマーの三白眼に映り込んだ。

「……嘘」

『アサシン』が、いた。

当に撒いている筈の真つ白なローブが、慌てふためく人々の間を縫って、尚も追跡を続けていた。

フアティマー自身が直接逃げていた時と、『同じ距離間隔を維持したまま』で。

人間には到底追いつけない馬の全速力に、ローブの裾から覗く裸足の両足だけで、ぴつたりとくっ付いていた。

自分の目が、おかしくなったのかと思った。

念のために擦ってみたが、やはり自分と馬の後に着いて来る『アサシン』の姿は消えなかった。

次いで自分の頬を抓ってみたが、普通に鋭い痛みが走った。

となると、目の前に広がるコレは現実らしい。信じ難いにも程がある情景だが、現実らしい。

それどころか、次第に“アサシン”が距離を縮めて来ている事すらも、現実らしい。

——まさか、そういう事なの？

あまりの事に現実を逃避し掛けたフアテイマーの耳に、屋敷でのジャミルの言葉が不意に蘇る。

確かに、“それ”ならば全てに説明が付く。

自分の砂漠カラスが投げナイフなんぞに射ち落とされたのも。

白ローブが、遂に馬と並走し出したのも。

“あの一族”なら簡単だ。

普通の鎖なぞ何重巻きにしたところで引き千切って見せる“あの一族”の者が放つたナイフならば、その速度は弓やクロスボウの比ではないだろう。

どんな攻撃もかわすといわれる俊敏さと、獅子の腹すら穿つといわれる強靱な脚力を持つ“あの一族”の者ならば、“たかが全速力で走っているだけ”の馬を“追い越す”のも必然の結果だろう。

ましてや、それが“アサシン”としての訓練を受けたとあれば。

遂には先に回り込み、その足下に投げたナイフによつて馬の前脚を強引に持ち上げさ

せ、半ば呆けていた自分を落馬させる事くらい、赤子の手を捻るよりも容易い事だろう。後頭部からの突き抜けるような衝撃に揺さ振られた意識が飛び掛けたところに覗きこんで来た、白いフードの中を逆に覗き返しながらそう納得したフアティマーの顔には、笑みが浮かんでいた。

諦観の笑みであつた。

彼は悟つたのだ。『昔のように』逃げ果せる事は、もはや適わないという事を。

油断していたところをこの少女に狙われた時点で、逃げ果せるなど最初から不可能だつたのだという事を。

『お坊ちゃん』の言葉を碌に聞かず、そんな者はいないと自分の理屈で決めつけてしまった時点で、この結末は避けられないものだつたという事を。

「……お手上げだわ」

フードの影の中から、捕えた獲物を見下ろす猛禽類の眼光を彼に向けるその目元は、かつて捕まえた『あの戦闘民族』の青年ととても良く似ていた。

吹きかかった風にローブの端と柔らかな赤髪をたゆたわせる『フアナリス』の『アサシン』を大の字で下から見上げるフアティマーに出来る事は、潔く全てを諦める事だけであつた。

標的が民衆から馬を強奪した時、ヒヤリとした。同時に、自分が「フアナリス」で本
 当に良かった。——それがモルジアナの正直な感想であった。

もし彼女が常人であつたなら、馬が走り出した時点で標的に逃げ切られる結末は確定
 していた。

遥かに多くの修練を積んだ「大導師」や導師マスタアサシ長クラスの「兄弟」ならばまだしも、
 一人前アサシと認められたばかりの自分では、本来はその結末を覆すことは出来なかつた筈
 だ。

故に足りない分の実力を補えるこの身体をくれた両親に——もう会う事は適わない
 だろう実の父と母に、心の底から感謝したい気分だつた。

だが、それは後だ。

まだ標的を消していない。

馬という予想外の要素も含め、十分に集める事が出来た周囲の大衆の監視の中で、
 採掘砦の「フアティマー」の暗殺を完了させなければいけない

だがその前に、裏路地で手下達と語っていた「あの台詞」の真偽について問い質さな
 ければ。

「質問があります」

傍にしゃがみ込んで投げ掛けた問い掛けに、薄笑いを浮かべていた銀髪の男のまつ毛

の長い三白眼が訝しげに歪められる。

「何よ、藪から棒に。こっちはとつくに覚悟決めてるのよ。殺るなら早く殺つて頂戴」

それとも見逃してくれるのかしら、とからかうように赤紫の口紅が塗られた口から告げられた言葉に、モルジアナは首を振って返答する。

「貴方は消えるべき罪人。言われずとも、神の御許へ送ります。ですが、これだけはハッキリさせなければいけない」

任務の説明の際、ファティマーを葬つた暁には完全に街から消えるだろう奴隷商人への尋問に代わる、領主の目的の調査方法の必要性をバートリーは口にしていた。

だが、「あの台詞」の真偽さえ明確になればその必要は無くなるかもしれない。

「領主ジャミルが最近奴隷を集めるようになったその理由が、『迷宮攻略』^{ダンジョン}であると、貴方は語っていた。それは本当ですか？」

領主の暗殺を行うための最期の鍵である、「目的そのもの」が分かるかも知れないからだ。

だが、彼女が彼女の質問の意図を噛み砕くまでの少しの間の後に返ってきたのは返答ではなく、小馬鹿にしたような空笑いであつた。

「——何が可笑しいんですか？」

耳障りなその笑いに、ファティマーを睨みつける双眸をモルジアナは一層鋭くする。

笑い声自体はそれで収まったが、神経を逆撫でるようなその嫌らしい笑みは、尚も変わららずその顔に張り付いたままだった。

「クク、あの『お坊ちゃん』の目的ですって？ それを態々訊くって事は、つまりアンタらの最終目標はあの『お坊ちゃん』って事で、アタシは偶々この街に来たせいでついでに殺される事になった、唯の『通過点』って事じゃない」

フアティマーの言う事も一理ある。

彼が『チーシャン』に訪れたという報告がなければ、確かにモルジアナの次の標的として選ばれる事も無かつただらうからだ。

だが、それは決して単なる偶然ではない。

「ふふ、それもまさか、いる筈が無いと高を括っていた『フアナリス』の『アサシン』に狙われるだなんて。ああ、ホントにもう、なんてツイてないのかしら」

「違う」

「途方に暮れたように長髪を掻き上げたフアティマーの言葉を、キツパリとモルジアナは否定する。

その凍え切った目の奥で、彼女の内の怒りが静かに揺らめいていた。

「貴方は盗賊と手を組み、大勢の罪無き人々を奴隷組に変禁えた。下らない金稼ぎのための、惨めな生贄として捧げてきた。その『報い』を受ける時が、今ようやく訪れただけのこと

と

決してツキがどうのの話ではない。

全て、必然だったのだ。

採掘砦に籠ってばかりで「兄弟」達が手を出せなかったこの男が外に姿を出した事も。

その結果、こうしてモルジアナに追い詰められる事となった事も。

今はまだ左腕の鞆の中に収まった「爪」によって、程無き内にその喉を貫かれる事も。

全てはこの悪党が犯して来た罪の、その「報い」なのだ。

故に今のモルジアナに情は一切無い。あるのは、心の隅々までを満たす意地汚い人売りへの無慈悲さのみだった。

「——「報い」、か。そうねえ。色々やらかして来たアタシにとって、今が正にその時なんでしょうね。認めるわ」

それに相対するファティマーは心の底から観念しているが故の、逆に清々しい微笑みを浮かべていたが、言葉と表情とは裏腹に、その目と口調は「最期まで思い通りになつてやるものか」という反骨心が明確に表れていた。

その意味は、続いて投げ掛けられた彼の問い掛けと、それに連なる2、3の会話によつ

て、嫌という程理解した。

「さて、お坊ちゃんの目的が迷宮攻略で間違いないかダンジョン、だったわねえ？ ええ、その通り」よ。領主様はそのために奴隷を掻き集めているの」

そう素直に話す理由を、避けられない死を目前に控えたが故の諦めだと、目的の情報を手に入れて内心ほくそ笑みつつモルジアナは解釈した。

だが、それは理由の一部であつた。

続けられたフアティマーの言葉に、必要な情報を聞き出して後は消すだけとアサシンブレードを引き出そうとした彼女の心境は一変する事となつた。

「けれど、邪魔者がいる。この街を騒がせる『フアナリス』の『アサシン』——そう、アスタガ。そしてその捕獲に、アタシが駆り出される事になつた。——捕獲難易度最高クラスの『フアナリス』の大人を、たつた三人で捕まえて一躍伝説となつた、この『探掘砦のフアティマー』が、ね」

——今、何て言つたの？

耳に入つたその言葉を、彼女の頭はすぐには受け入れてくれなかつた。

そのせいで目を見開き、身体を強張らせていた事にモルジアナがようやく気付いたのは、そんな彼女の様子をした顔で見上げる銀髪の男が目に入ると、ほぼ同時だつた。

一方で、もう二度と会う事は無いだろう『フアナリス』同郷の者を故郷から消した、その一人

だという彼の言葉がその頭に行き渡るには、もう暫しの時間が必要であった。

“報い”、と自らの顔のすぐ横にしやがみ込んだ“アサシン”の少女は言った。

成程、と彼はその言葉にスンナリと納得していた。

そう言われると、確かにこの有様は不幸な偶然などでは無く、“元奴隷の癖に、奴隷商人としてかつての自分と同じ存在を大量生産した”その“報い”なのだろうと容易く腑に落ちたのだ。

同時に、それは仕方の無い事だった、という言い訳も喉の奥から込み上げて来た。

かつての旅の最中で日々の扱いに耐えかねて主人を殺めた後のファティマーには、身分を隠す事と、生きるための糧が必要であった。その両方を満たせるのは必然的に社会の闇で生きるような連中がやるヤクザな商売で、加えて腕っ節が斗出している訳でも無かった彼が営める商売は更に限られた。

故に、自らが受けて来た仕打ちと経験をそのまま仕事の知識として転用出来る奴隷商に身を窺ってしまったのは、仕方の無い事だった。

後に自らが打ち立てた“伝説”によって、同業者に自らの過去が暴かれる事を危惧し出す程に業界内で一目置かれる存在になったとしても、仕方の無い事だったのだ。

奴隷狩りに遭った異民族や、あぶれた貧困層の子供。果ては最強とすら謳われた狩猟

民族の青年から、内乱から逃げて来た親子までを惨めな奴隷に変え、時には獣の餌にする変えるこの商売が儲かるとあれば、尚更。

といつても、それをこの少女に言つても詮無いことだろう。

元から自分とは違う「高級品」の癖に、奴隷ではなく「アサシン」などに「興じている」小娘に、自分の辿つて来た道なぞ理解できる筈が無い。——して貰いたくない。

そう思い、口から出掛かったその吐露を敢えて飲み込んだ代わりに、「氣に入らない」視線をフードから覗かせて偉そうに糾弾して来る「アサシン」に、せめて死ぬ前に吠え面の一つでもかかせてやろうと企んだ。

それで、自分を前にしても冷静な態度を崩さない少女にもしやと思い、どうせ死ぬのだからと元々黙る義理も無い領主の目的を白状するついでに、カマを掛けてみたのだ。

その企みが成功した事は、冷えたナイフのように冷たく鋭いだけの視線を送っていた赤い目が急激に点に変わっていく様によつて、手に取るように分かった。

「同郷の人を……貴方が？」

「あらあ、やつぱり知らなかつたんだ」

あるいは、バックに控えている連中から知らされなかつたか。

恐らくは後者だろう。

冷徹にあるべき暗殺者にとつて、適切な判断を阻害するような余計な情報は毒には

あと一歩だと、昂る嗜虐心を抑えながら、トドメの言葉をファティマーは口にする。「ああ、それにしても無念ねえ。『ファナリス』の『アサシン』だなんて『レア物』を前にして死ぬだなんて。唯でさえ極上の『兵器』なのに、更に諜報や潜入の技術まで身に付けている。大国の国家予算の2、3割は下らない。そんな『超高級品』を捕まえれば、一生遊んで暮らせるだけの金が——」

その言葉を遮ったのは、強引に引き上げられるや彼の頬を打ち抜いた右の拳だった。急激に視界を揺らす衝撃が、左の犬歯を中程から折り、切れた内頬から鉄の味が滲み出させる。

その痛みにファティマーが顔を顰めたのはほんの一瞬の事。

眼前を覆う『それ』に、解き放った嗜虐心のままに彼は勝ち誇った笑みを浮かべていた。

「……言いたい事は、それだけですか？」

襟を掴まれて引き寄せられた事によって、目と鼻の先にあつた『アサシン』の白いフードの中。

その中に収まっている少女の、地獄の釜の如く煮え滾る憎悪に歪んだ小顔。

先程までの冷たい『アサシン』の顔とは打って変わった、同郷の者を害した者への憤怒に満ちた『ファナリス』の顔が、そこにあつた。

ファティマーを睨み据えるその目は、親兄弟の仇を見るかのように、否、一族の仇を見ているがために、赤い瞳の奥で憤怒の大火が舞っていた。

そこまで変貌して、なお元の冷徹な暗殺者の表情に戻そうとして上手くいかず、眉間や口元やらを引く付かせるその様が酷く滑稽だった。

それを作ったのは、自分だ。

目の前の少女とは程遠い普通の奴隷モだった自分が、「高級品」を心底怒らせた。

その事が、状況が許したなら小踊りの一つでもしていたかもしれない程に、ファティマーを狂喜させていた。

そんな気持ちになったのは何年振りかという程の、爽快な気分が彼の内に満ちていた。

今すぐにも黙らせんとばかりに、首元を掴む手が右手に入れ替わるや、代わりに後方へ下げられた「ファナリス」の左腕から飛び出す死の刃を見ても、なお彼は笑みを絶やさなかった。

「言いたい事ですつて？ ええ、まだあるわよ。アタシの「報い」について偉そうに講釈垂れてくれたけど、自分はどうかなのかしら？ 例え悪党だろうが、大勢人間殺して来たアンタは？」

その質問に言葉での答えは返って来なかった。

代わりに返つて来たのは、耳障りな鳴き声を立てて喚く獲物の喉を潰そうと大きく開かれた、若鷲の6本の趾あしゆびであつた。

「所詮は同じ穴の貉。いずれアンタも『報い』を受ける事になる。精々覚えておきなさい、『高級品』」

そう告げた直後、首から地面へと掴み倒されたファティマーに、おぞましい程の熱と窒息感が襲い掛かつてくる。

それが穿たれた喉から発せられたものだど認識して、程無く薄れ出していく意識の中で彼の頭に描かれたのは、あのジャミルの顔だつた。

——今際の時に、よりよつて思い出すのがあの『お坊ちゃん』とは。

最期までツイていないと嘆息する。

だが、その代わりに自分が彼の事をああまで嫌つた理由が、何となく分かつた気がした。

やはり、あの毒蛇を連想させる目だ。

あの目はどうしようもなくねちっこくて残忍な光を放っていたが、その一方でバカげた程に大きな夢を抱く子供のように深い瞳をしていた。

物心付いた時から、今この時までずっと暗く淀んだままだと自覚できる自分の目と、似ているようで決定的に違うその目が、生まれながらに支配者としての道を約束されて

いたジャミルとの差を知らぬ間にフアティマーに意識させていた。

そして、今この時においてその事実には気付かせたのは、やはり自分とは違う、高級品の少女の、どこまでも冷え切った猛禽類のような目の奥に垣間見えた、どこまでも純粹な正義感と使命感だった。

そんな彼らのどうしようもなく眩しい目が、きつとどうしようもなく怖かったのだ。薄汚れた大人の自分を焼け爛れさせようとする、あまりに恐ろしい光から逃げようとしていたのだ。

だから、「氣に入らない」という台詞を鎧にして、碌な土台の上に出来ていない自尊心を守ろうとしていた。態々「伝説」の事なんて切り出して、怒りに目を曇らせさせてみた。

それで片方の光は遮る事が出来たが、もう片方は生憎と遮る手立てが思い付かない。だから、命を引き換えにはいえ、あの目をもう見ないで済む事にフアティマーは安堵していた。

残忍さと純粹さが入り混じった、あの「暴君」という名の「王」の目を見ないで済む事に。

意識が永久の闇の中へ完全に沈み込むその時まで、心の底から。

「貴方と一緒にしないで」

耐えるような重い口調でモルジアナがそう告げた時には、既にファティマーは事切れていた。

再び大の字で倒れた彼の色白の首には、彼女のアサシンブレードによつて穿たれた傷穴が開いている。そこから流れては地面を染める、当面途切れる事は無いだろう赤黒い血が、その傷にファティマーが受けたであろう痛苦を嫌という程伝えていた。

にも関わらず、光を失った目が開いたままの当のファティマーが浮かべていたのは苦悶ではなく、薄笑いだった。

その死に顔が、その口を永遠に黙らせてなお同郷の者を奴隷に貶めたこの男に「商品扱いされ、同類呼ばわりされているように思えて、どうしようもなくモルジアナは腹立たしかった。

「私が暗殺^{じれ}を為すのは正義のためだけ。貴方のように、他人を商品としか見れない哀れな人間とは違う」

それでも、いつかはファティマーも言った通り、報いを受ける日が来るかもしれない。如何な目的や思想の下であろうと、自分がやっている事が許されざる事だという自覚は彼女にもある。

それが分かっている、なおそうする事で救える人間がいる。

そう信じるからこそ、いくらでも自分の手を汚すことが出来るし、どれ程辛いものだとしても、受けるべき「報い」を甘んじて受ける覚悟を持つてゐる。

何かを為した結果、例えそれがどうしようもない不幸だったとしても受け入れなければいけない。——それこそが「許されぬ事など無い」という事なのだから。

故に、自らの行いの「報い」を受けたこの男に、これ以上の唾棄も暴力も必要無い。

「眠りなさい、安らかに」

例えどれ程の悪人だとしても。

例え、同郷の人間を奴隷に変えた、八つ裂きにすべき仇だとしても。

己が行いの報いを受け、神の御許へ旅立つた死者には、等しく敬意を払わなければいけない。

自分に家畜同然の人生を与えようとし、挙句全てを奪い去つて「教団」に入る切欠を作つた者達と同じこの男と、自身が違うと考えるのであればこそ、尚の事冒瀆は許されない。

するべきは、薄い半月を描くその臉を閉じてやり、安らかな眠りに着く事を、唯祈つてやるだけだ。

それを分かちつていて、実際に行つてからバートリーに受け取つた羽根にファイティマーの首の血を擦り付けて暗殺完了の証明を作つても、なおモルジアナの心はクツクツと煮

え滾っていた。

目を閉じさせても、なお安らかな寝顔ではなく嘲笑を浮かべる彼の死に顔を目にして
いる故のその憤りを、人は正当だといつかもしれない。

だが彼女は「アサシン」。湧き上がる義憤や憎しみを抑え、唯標的を消すことだけに
徹すべき暗殺者。如何に憎い相手だったからとて、いつまでもその感情に身を浸らせ
ている事は許されない。

「教団」の教義も、モルジアナ自身も、時間さえもそれを許さない。

「そこを動かすな！　「アサシン」！」

気付けば、恐ろしいものを見るような視線を投げ掛けていた周囲の民衆を掻き分け
て、集まって来た町警史達に囲まれていた。

どうやら、フアティマーとの問答に夢中になり過ぎたらしい。

「もう貴様に逃げ場は無いぞ！　観念するがいい！！」

余裕の表情で警棒を片手ににじり寄って来る町警史達の陣形は、モルジアナを中心
に隙間の無い円を作っていた。確かに、隙間を縫ってその囲いを突破するようなマネは出
来そうに無い。

加えて、上方を見渡せば左右に並ぶ民家の上に攀じ登って待機している他の町警史達
の姿も窺える。

周囲の連中がカバーし切れない上から民家の屋根に飛び込んだ彼女を、待ち伏せして捕まえるという算段なのだろう。

この一週間超の活動の内、前のブーデルの時を含めたハデな手段の4件を終えた後の逃走は、いずれも民家を足場にしていた。その事を彼らなりに対策した結果が、この二段構えの包囲なのだろう。自分が来るまで「兄弟」達が大きく活動しなかつた事を考慮すれば、この町警史達の対応は十分優秀であるといえた。

だが、やはり経験不足か。あらゆる場所を走り、あらゆる場所に潜む「アサシン」相手にそれだけでは王手とまではいかない。特に、導師^{マスターアサシン}長クラスの猛者や、モルジアナのように斗出した能力を持つ者には。

すばしっこく逃げ回る兎を追い詰めた狼のような町警史達の視線と、その後ろで檻の中に放り込まれる寸前の狂獣を見るような群衆の視線の中、荒れた心を少しでも落ち着けようと吐いた深呼吸の後にモルジアナが取つたのは、その場からの跳躍だった。

だが、その行き先は周辺の民家の屋根では無い。

町警史や市民をギリギリ飛び越えられる低さで、長く距離が取れるように飛んだ先にあるのは、より近かつた背後の民家の屋根の、「縁」だ。

屋根の「上」に着地すると踏んでいた町警史達の盲点を突いた到達地点だ。

それにより面食らつた屋根の上の町警史の隙を利用して、砂が薄らと乗つた縁を掴む

や取り付いた壁を足場に、先程よりも力を込めた足をモルジアナは突き出した。

瞬間、ボコリという音を立てて小さく陥没した漆喰の壁を背に、包囲していた町警史から、厚さ8mは下らないだろうバリケートとなっていた民衆を飛び越え、その奥の地面の上に着地。

直後、そろそろ正午間近だということをもふと思ひ出し、丁度良いと彼女は「そこ」目掛けて駆け出した。

大通りの奥、まだ小さいながらもその壮麗な作りを目の当たりに出来る位置まで来ていた、教会の方へ。

「に、逃がすなッ！ 奴を追えーッ!!」

周囲を完全に囲い、今までの逃走パターンから周辺の民家にも仲間を潜ませた万全の布陣は、しかしあっさりと崩されてしまった。

そのショックから立ち直るまでの一瞬の間を置いた後、誰かが叫んだその号令の下に、一斉に走り出す町警史達に一瞥もくれる事無く、怯えて道を開いていく民衆の中を真つ白な後ろ姿が駆けていく。

彼らは知らない。「アサシン」が速度を抑えて逃がっている事に。

故に、敢えて速度を落としているその理由が、その先にある街一高い教会へ辿り着く

時間を調整するためであり、手加減している訳でも、ましてや後の彼らには辿りつけまいと油断している訳でも無い事も、当然知る由は無い。

そうして、その白いフードの中の企みに勘付く事も無く、遂に辿り着いた教会の前で振り返った「アサシン」を、いずれも己が全速力のままに追っていた町警史達が顔に汗を浮かべながら再度囲み上げる。

両腕をダラリと垂らして立つ「アサシン」の後ろには、大の大人二人分程の高さを持つ堅牢な扉が聳え立ち、教会の入り口を固く閉ざしていた。

時刻はもうじき十二時だ。中で礼拝を終えた神学者達が休憩を摂るために、両開きのその扉が開き、隔てられていた教会の外と中が一時的に繋がる時がやって来る。恐らくは、その瞬間に教会の中へ逃げ込もうという魂胆だったのだろう。

そう推測するに至り、しかし自分達に再び包囲されて水の泡と化したも同然の「アサシン」の計画に数名が、ざまあみろ、と失笑するその間にも、警棒を構えた町警史達はじりじりと「アサシン」との距離を詰めていく。

そして、後数歩で全員が助走無しで飛び掛かれる程に白ローブとの差が縮まった、その時だ。

三角に下りた教会の屋根。その正面の中心から天へ伸びるクリーム色の塔の先にある鐘が鈍い音と共に一日の折り返しを告げると同時に、飛び立つ直前の鳥のように、

真つ白な袖を左右に優雅に広げた「アサシン」の背後で、軋む音混じりに重い音を立てて教会の扉が開く。

それから一拍置いて薄暗い空間から出て来たのは、「レーム帝国」や「パルテビア王国」、「アクティア王国」等の西方の国家や都市で見られる赤い前掛け付きの白いロブに目深くフードを被った格好をした神学者の群れ。

その中へ倒れ込むように下がった「アサシン」の姿が、フツと「消えてしまった」。ギョツと目を見開いた時にはもう遅かった。

すぐさま神学者達に制止を呼び掛けた町警史達は手分けして「アサシン」を探そうとしたが、しかし似たような格好の、しかも似たような背格好の者までいる神学者達の中からたった一人の暗殺者を探すのは困難の極みだった。

「クソツッ！ まだ近くにいます筈だ！」

「「アサシン」を探せ！ 何としても捕まえる!!」

そんな怒声が空しく響く中行われた、神学者達や周辺の民衆を掻き分けての町警史達の必死の捜索は、しかし何の実も結ぶ事無く、これより2時間程後に逃げ切られたと判断され、強制終了と相成るのであった。

教会の表で町警史達が、主に神学者達への詰問を中心に見当違いの個所を探してい

る。

後ろから聞こえるその喧騒を尻目に、俯いて胸の前に両手を握り合わせた祈りの格好を解いたモルジアナが歩いていたのは、教会のすぐ横の裏路地であった。

やった事そのものは単純。フアテイマー達をベンチで待ち伏せしていた時と同様、気配を消し、群衆に紛れこんだだけの事だ。そうする事で、見えているのに見えていない存在となり、周囲に完全に溶け込み、敵の目を欺く。『アサシン』の『掟』の二つ目——『我らの力は鞘の中の刃』を体現するため、民衆に紛れ、一体となつてその姿の眩ますための『アサシン』の基本技術だ。

とはいえ、今回もいつものように家屋の上を伝つて逃げ切つていても、別段問題は無かつた。待ち伏せしていた町警史達も、フアテイマーの暗殺を済ませたあの辺りの民家に集中していたようだし、少し移動した先の待ち伏せの無い家屋に跳べばそれで済む話だつた。

それを態々遅めに走り、基本に立ち返るような手段で逃げて見せたのには、それなりの理由があつた。

——この辺りでいいかしら。

十分に教会の後ろ側まで歩くや、せつかく撒いた町警史達の目に入らぬよう気を配りつつ、その場からモルジアナは垂直に跳び上がった。

“フアナリス”特有の強靱な脚力が、高々と彼女の体を宙高く浮かび上がらせるが、それでも縁の高さが10 m以上はある教会の屋根に降り立つには、まだ少し込める力が足りなかつたようだ。

代わり、目前に現れた石のブロックを右手で掴み、僅かに揺れる姿勢を整えて壁から飛び出しているそれを足掛けに、慣れたように屋根の上に攀じ登る。

最中、一端上空を見上げて、“目的のモノ”を探す。

——いた。

一面の青空の中に見える“それ”の位置を確認後、頂点付近で人間大の大きさの鐘が未だ揺れている教会の塔を駆け上がり、鐘の上を覆う四角錐の屋根の頂点から伸びるポールを掴んで身体をその場に固定。

続けて、赤褐色の屋根を跳び台に、“それ”が浮く方向に向けてバックジャンプで飛び付いた。

狙いはドンピシャ。イメージ通りに“それ”——はためきながら宙空を浮く、4 m四方程の白布の上にボスリと片膝立ちで着地したモルジアナを、先着していた二人の内の一人が悲鳴で出迎える。

だが、そんな事はどうでもいい。

ついでにいえば、今足場となっているこの布がどういう理屈で宙に浮いているのか

も、気になるならないは別として、今はどうでもいい。

今すべきは、〃何の理由があつて〃アサ^自シン^分〃を付けて来たのか〃を問い質す事、だ。
「やあ。僕はアラジン。旅人さ」

立ち上がり、そう名乗る青い髪の少年と、その後で後ずさりし過ぎて布の上から落ち掛ける金髪の少年をフードの中から見下すモルジアナの赤い目は、多分に含まれた疑心と苛立ちによつて細められていた。

意図せぬ2度目の邂逅となつた二人の少年へのその視線は、必ずしも尾行者への警戒や、先のファティマーのせいで未だにささくれ立ったままの機嫌だけが理由では無かつた。

第七夜

“秘宝”と、そう聞いた大概の者が思い浮かべるのは大量の金銀や宝石か。

あるいは、この世界においては人知を超えた力が秘められた“魔法アイテム”や、伝承に伝わる“ジンの金属器”といったところか。

いずれにせよ、その言葉が持つ意味を大抵の人間は何物にも代えがたい代物として、好意的に解釈するだろう。

だが、モルジアナは違った。

彼女の辞書において、“秘宝”という言葉が持つ意味はむしろ逆。“人を誘惑し、幻影を見せて変貌させてしまう。決して触れざるべき恐ろしい物”という、そういう負の意味合いが強い言葉として、彼女の中に刻まれている。

いや、それ以前に“大導師”が今の席に着いた10年前、モルジアナが末席に加わる以前から“教団”に属する“アサシン”達にとつて、“秘宝”とはそういう物であった。

何故なら、彼らの大半はとある“二人の男”の手によつて、己が身を持つてその脅威を体験した。“大導師”によつて救われなければ、そのまま“秘宝”の力によつて唯の

意思無き傀儡と化したままか、あるいは何も分からぬまま死に果せていたという経験があった。

そして、身体の端から凍りつくようなその恐怖の過去を聞かされた新たな入門者達は——特に、俗世から離された「マシャフ」の中の世界しか碌に知らないモルジアナのよ
うな若者達は、実際に見た事が無い故の想像から来るものも含めた「秘宝」への恐れを
植え付けられる事となったのだ。

先代の大導師を誘惑し狂わせ、多くの「アサシン」達に滅びの幻惑を見せた「秘宝」
——「エデンの林檎」の、その恐ろしさを。

その時、彼らは、というより彼の相方は、眼下の大通りで走る一群を追っていた。

正確にはその先頭で両腕を翼のように後ろに下げて走る、白いローブをだ。

そしてその最中も、

「^や止めて^と止めて^や止めて^と止めて^や止めて^と止めて^や止めて^とエエエエエツ!!」

相方アラジンの両肩を掴んで、引き返すよう必死にアリババは懇願していたのであつ
た。

が、宙高く飛行するターバンの上からのその響きは下の人々は元より、その対象であ
るアラジンすら意に介す様子も無い。彼の青い目と意識は、只管「アサシン」の方へと

注がれていたのだ。

おまけに、如何な「アサシン」も「魔法のターバン」の飛行速度には適わないのか、除々にその差は詰まって来ていた。

このままではマズい。「アサシン」に追い付いてしまう。そして「誤解を解いてもらう」という名目の下にその逆鱗に触れたアラジン共々、殺されてしまう。

冗談では無い。何としても止めなければ！

頭の中に勝手に浮かぶ、血溜まりの中で倒れ伏す自分とアラジンの惨殺死体という最悪の未来凶を避けるため、なおも涙目で絶叫するアリババであったが、そんな哀れな彼に一抔の福音が訪れた。

福音だと、そう感じられたのは、驚いたようなそのアラジンの言葉が、彼らの眼前に迫っていた教会の鐘の荘嚴な音と共に告げられたからだ。

「あれっ？ お姉さんがいなくなっちゃった？」

困ったようなその声を聞くや、すぐに表情を一変させてアリババも下方を見渡した。

見れば、白いローブの神学者の一団を相手に、お前か、いやお前じゃない、などと怒声を上げて問い詰めている町警史達と、それを距離を置いて周囲から見守る群衆の様があった。

似たような格好の神学者達のせいでそう判断するのに手間取ったが、確かに件の白

ローブの姿は見当たらなかった。

その状況を、自分達を含むあらゆる者から「アサシン」が逃げ切ってくれたらしいとアリババが悟るのに時間は要らなかった。

「……………ほくくお……………」

……………生き延びた……………。

ガチガチの緊張感から解放されて一気に弛緩した全身のままに大の字で寝ころぶや、肺に残っていた空気を間延びした安堵の息として全て吐き出していた。

一方で、アラジンは首を傾げていた。

「おかしいなあ。真つ白な服の人達が出て来るまで、ちゃんとしたのに」

次いで、いたよね、と確認を求めて来る青髪の少年に、うんそーねー、とだけアリババは気の無い返事を返した。急激な脱力により一気に散漫になった思考と口ではそれだけ返すのが精一杯だった。

ふと、飛び上がった彼の前髪の一束が風も無いのに揺れた。

それが「魔法のターバン」が周囲を旋回し始めたことよって発生した慣性によるものだと悟ったのは、石ブロックを積み重ねて出来た教会の屋根から伸びた鐘楼が左から右へ出たり消えたりする様が視界の端に覗けたからだ。

懲りねえなあ、と嘆息してから、未だ鐘が鳴り続ける教会の方に何気なく顔を向けた、

呑気に自己紹介をする相方と、一気に下がった目線により目深に被ったフードの中から覗けた可愛らしい顔——平時且つ、相手が一般人であれば、『おっ、カワイイ子!』と鼻の下の一つでも伸ばしていたかもしれない——をどこか苛ついたような無表情にして彼を見下ろす暗殺者という構図が、たゆたう布の隙間から覗けたその瞬間。

とつくの昔に天へ召された両親の下へ旅立つ親不孝が確定してしまった事を悟ったアリババの目の前が、恐怖と絶望で真つ暗になった。

「……何の用ですか?」

昨日の大通りで出会った白装束に赤髪の少女は、とても不機嫌そうに顔をムスンと膨らませていた。口調も、昨日の少年に掛けていた優しげな感じとは打って変わって、どこか警戒しているような棘のある口調だった。言外に、そんな事は訊いていない、とさえも言っていた。

何か嫌な事でもあったのだろうか? そういえば、さつきもまた誰か殺していたような気がするが、そのせいだろうか。——そう思つて尋ねようかと少し迷つたアラジンだったが、態々蒸し返すのも悪いと考え直して、彼女の質問に答えた。

「うん。実は僕とアリババ君は、今街中の皆から誤解されているんだ。それでお姉さんにその誤解を解いて欲しいんだ」

「誤解？」

「うん。ドロボウの誤解なんだ。僕達が連れて行つたつて思われてるのさ。ね、アリババく——」

そうアリババに同意を求めようと振り返るや、途中まで出掛かつていた言葉をアラジンは止めざるを得なかった。

致し方ない。全く気付いて無かったのだ。

てつきり今もそこにいると思つていた筈のアリババが、ターバンの端を掴む指と、チラと出たり現れたりする金の髪の一束だけしか見えなくなつていたとあつては。

ましてや、発見したその直後にターバンの端に掛かつていたアリババの指が滑るよう
に離れたとあつては。

「つて、アリババ君っ!？」

突然落ちたアリババに慌てふためき、急いで首下の笛を啜えようとするアラジン。

だがそれよりも先に、既に白い人影が彼の横を通り過ぎ、アリババの指が掛かつていた辺りにしやがみ込んでいた。

右袖が振られたと思つた、その瞬間には既にアラジンの隣で白ローブに放り上げられたアリババがボスリとターバンを窪ませて着地していた。

同時に、何故か気絶していた彼が意識を取り戻すや、ガバリと上半身を起こして少女

を震える手で指差した。

「あ、ああ、あさ、あささ、あさ、あさしつ、アサシン、つ……い！」

目を剥き、カチカチと齒を打ち合わせて「アサシン」に怯えるアリババを、大袈裟だなあ、と思いつつ宥めようとしたが、そうするよりも前に「アサシン」の少女が呆れたような溜め息混じりにこう言った。

「貴方に危害を加えるつもりはありません。落ち着いて下さい」

「ちよ、ちよつかい掛けるつもりは無かつたんだ！俺は無かつたんだ！こ、殺すのだけは勘弁——へっ？」

今のところは、と最期に少女が呟いた事は、半狂乱のアリババはおろか、傍から様子を見ていたアラジンの耳にも届かなかつた。

それはともかくとして、手を合わせて頭を上下させたのも束の間、さも予想外とばかりと間の抜けた半泣き顔で見上げたアリババを無視して、先程よりも幾分か険しくなつた表情の少女が再びアラジンの方を見下ろしたのであつた。

「先程の話ですが、もしかしてブーデルから暴行を受けていた少年の事ですか？」

「うん。そのおっぱいおじさんに蹴られてた男の子。連れて行ったのはお姉さんなのに、皆僕達が連れて行つたって感違いしているみたいなんだよ」

そう返した後、少し考えるような素振りの後に確認するように少女が問うて来た。

「——それが『アサシン』^私を付けて来た理由ですか？」
「そうだけど？」

そう返答を返すアラジンに躊躇は一切無かった。

その迷い無い答えが、少女に訝しさを覚えさせて形の良い眉を顰めさせたなどという事には、当然気付く事など無い。

「何故、私が貴方方の助けになると？ 殺されてしまうとは考えなかつたんですか？」

その問い掛けに、アラジンは首を左右に振った。

彼女の問い掛けにそう答えるだけの根拠を彼は持っていた。

それは、一時間ほど前にアリババが推測した『第一印象』だけの話では無い。もっと、ハッキリとした根拠が彼にはあつたのだ。

ただ、それはそのまま伝えた所でアリババはもちろん、この『アサシン』の少女にも理解してもらえないものでも無かつた。

それが分かっているからこそ、彼はアリババに答えた時同様に感じた印象を答えたのだ。

「だって、お姉さんとっても優しそうだったから」

正確には、そう『伝えられた』。

彼女の周囲を飛び交っている、白く光り、ピイピイと鳴く小さな鳥の群れ。

今もなお少女がどんな人間なのかを曖昧ながら彼に伝え、その一方で彼女の「左腕」に——正確にいえば、そこにある腕当てに据え付けられた、隠し短剣に——だけ、「怖がっている」のか一匹も近づこうとしない。

「アラジンにしか見えない」その鳥の群れが、「アサシン」の少女を優しそうだと感じる、アラジンの最大の根拠であつた。

アラジンと名乗つた青い髪の少年に対し、モルジアナが抱いた感想は「ワケが分からない」というその一言で片づけられた。

今街を騒がせている殺人鬼——彼女自身はそこまで自分の事を卑下していないが——にちよつかいを掛けるようなマネをし、その理由が「誤解を解いてもらうため」。おまけに、自分が協力してくれるだろうというその根拠が「優しいから」ときた。

おまけに、何故自分が優しいと感じたのか、と問い返せば、「だって、優しそうな顔してるもん」

と、少しだけどう返すかを考えるような素振りを見せた後に、答えになつていない答えが返ってくる始末だ。

ふう、と小さな溜め息を洩らす。

「採掘岩のファティマー」の追跡中に、たまたま後ろから飛んで来る彼らを見つけ、

態々教会の神学者達に紛れてまで追つて来た理由を問い質そうとした。が、こんな暖簾を腕で押すような遣り取りばかりでは、唯でさえファティマーのせいで荒れている心に要らぬ苛立ちが溜まるだけだった。

仕方が無いので、代わりに先程の彼の言葉で少し気になった事について訊く事にした。

「何故、あの子の鎖を切ったのですか？」

昨日のブーデルの攫う前の一連を、モルジアナは群衆の中から見ていた。その際、確かにブーデルが「彼らが奴隷の少年の鎖を切った」と言っていたのも、耳にしている。

この際、どうやって見るからに頑丈そうだった鎖を断ち切ったか、などはどうでもいい。気になるのは、「何の目的があつて、少年の鎖を断ち切ったか」だ。

奴隷泥棒の罪は、奴隷の鎖を切ったその時点で確定する。そういう意味では少年の言う「誤解」とやらこそ正に誤解なのだが、それよりも、重い罪となるその行為を「教団の外の人間である」彼らが行ったその理由の方に興味があつたのだ。

といつても、同じ人間の事を、「法」が認めたからと物のように扱われる事に疑問すら抱かないような連中の考える事だ。

大方「無料で奴隷が欲しかった」とか、「所有者だつた貴族が悔しがる顔が見たかつた」とか、そんな木端のような理由が関の山。自分達のように、唯自由を奪われた人々

を救おうとする当たり前の意思すら欠如している彼らから訊ける事など、高が知れている。

そんなふうにならざるに高を括り、視線に込める疑心を高めていたが故に、自らの問いに続けられたアラジンの返答は、表に出す事こそ無かつたまでも、少なからずモルジアナを狼狽させるだけの威力を持つに至っていた。

「何でって、*“重たそう”* だったから」

そう答えた少年の青く大きな瞳は、天上に広がる大空のように透き通った真つ直ぐな光を放っていた。

予想とはまるで正反対のその返答が、一欠片の嘘も無い純粋な真実だという事は一目瞭然だった。

それはとどのつまり、このアラジンという少年がああ奴隷の少年の鎖を解いたその理由が、*“見ず知らずの奴隷を同じ人間として扱い、純粋な善意のままに救おうとした”* という事だ。

“教団の外の人間” が下したその解答は、あの現場に立ち会ったその瞬間と同様に、*“意外”* という他無かつた。

それをどう捉えるべきかを再び考えあぐね出すモルジアナだったが、その思考は程無くして中断させられた。

「どうしたのお姉さん？ 僕、そんなにおかしな事言ったかい？」

不思議そうに眉を下ろしてフードの中を覗き込んで来るその顔に、いえ、と小さく首を振ってモルジアナは返答した。

多少幼い思考の上に成り立っているようではあるが、おかしな事など無い。少なくとも、彼女の判断基準と比較した上では。

だが、「法を盲目的に信じる」筈の彼らからすれば、それは常識に著しく欠けた非理性的な屁理屈もいいところの筈。だから「アサシン」^{自分達}の行動も理念も彼らには理解し得ないものなのだ。こんな事は、有り得ないのだ。

故に、自らも知らぬ間に、モルジアナの内には彼らへの——というより、アラジンへの——興味が生まれていた。

その正体の掴めないまま、気付けばその気持ちのままに彼女の口は、勝手に動いていた。

「分かりました。貴方方に掛けられた「誤解」とやらを解きましょう」

先程より少しだけ薄まった疑惑の視線の先で、青い髪の少年が願いを受け入れられた事を飛び跳ねて喜び、その傍らでアリババと呼ばれた金髪の少年が鳩に豆鉄砲を撃たれたような表情を浮かべていた。

誤解を解いてやる、とそう答えた。『アサシン』にアリババの頭にまず過つたのは聞き間違いの可能性であり、次いで予定通りに事が進んで喜ぶアラジンの意思のままに飛行を始める。『魔法のターバン』の上に平然と正座するその姿を見て浮かんたのは『意味不明』の四文字であつた。

てつきり殺されるとばかり思つていた。相手はイカれた殉教者ファイターにして、大麻中毒のハシシ野郎だ。そもそも、まともなコミュニケーションを取れる相手かどうかすら疑わしかつたのだ。

なのに、そんな素振りもまるで無く、気付けば本当にアラジンが言つていた通り協力してくれている。

この状況を意味不明といわずして、一体何というのか。

——いや、まだ油断出来ねえ。

とりあえず協力してやる、とそう言つて見せたに過ぎないのだ。油断したところを狙つて口封じに喉笛をバツサリ、という可能性もある。

普通に考えれば最初にターバンに乗りこんで来た時点でそうなつているところだが、だからといつて無いとは言ひ切れななし、用心を怠つて良い理由にもならない。まだ17年しか経つていない短い人生で何かと数奇な出来事に遭つて来たアリババからしてみれば、特に。

右肩から左脇まで細いベルトが走った背を見せてターバンの上に座る白ローブへの視線を外さず、いつでも臨戦態勢に入れるように赤と黄色のサツシュに差したナイフの柄に右手を近づけ、拳を握った左腕を背に回しておく。

最も、その警戒の構えをすぐに彼は解く事になるのだが。

「ねーアリババ君？」

不意に振り返ったアラジンの事は、その時点の彼には完全に意識の埒外であった。

故に、張り詰めていた気の対象外からのその声に驚いたアリババは、思わず引き抜き、宙に放り投げてしまったナイフを落とさないがための危うげなジャグリングをしつつ、すつ頓擧な声を上げていた。

「お、驚かせんなバカ！ 何だよイキナリ!？」

「怒らないでおくれよお。——えつとね、どこに行けばいいか教えて欲しいんだよ」

若干怯えたようにそう言ったアラジンに、は、とアリババもまた間の抜けた声を洩らしていた。

考えてみれば、意気揚々と飛び出して、一体自分達はどこへ向かおうとしていたのだろうか。

あるのは「奴隷泥棒の誤解を解く」という目的と、「本気かどうかは別として協力してくれることになった」「アサシン」「」という現状の二つだけだ。具体的な手段と方針

については、アラジンもアリババも最初から考えていなかった。というか、アリババに至っては最初からやる気すら無かった。

当然、これから向かうべき方向など分かるワケが無い。

それに気付いて、暫し茫然としていたところに解答を催促して来たアラジンを、
「俺が知るかそんな事お!!」

アリババは怒鳴りつけていた。

「つーか、お前こそどこ行くつもりだったんだよ一体!? 思いっきりターバン飛ばしてたじゃねーか!」

「ご、ごめんよお。お、お姉さんが誤解解いてくれるって言ったから、つい嬉しくなっちゃって……」

「お前なあ……」

つい、で本当に一体どこまで飛ぶ気だったのか。

細い両の眉で八の字を作ってあたふたとするアラジンに呆れ返ったアリババの腹の底から、大きな溜め息が込み上げて来た。

徐に「アサシン」が立ち上がったのはその時であった。

喉を通り過ぎ掛かっていた溜め息は、視界の端のその動きを察知した時点で反射的に飲み下していた。

——く、来るのか!?

すぐさまナイフを抜き、昔仕込まれて以来身体に沁み付いた左腕を背に回す構えのままにアラジンの前に立ち、その切っ先を白ローブの背へと向ける。

アラジンとの遣り取りで半ば緩み掛けていた緊張を一気に引き締め、一切の油断を捨てた目で、その一挙一動を見定めようとした。

そんなアリババを、相も変わらずフードのせいで表情の伺えない顔を向けて一瞥したかと思いや、まるで意に介していないように彼らとは逆の方向へと歩を進めていく。

その行動に、あれ、と毒気を抜かれたアリババが、それでも尚ナイフを下ろさずにいられたのはそれから十数秒後までの事。

地表30mは下らないだろう高さで波打つターバンの端まで歩み寄ったその刹那、飛翔を始めようとする猛禽類のように両腕を広げた「アサシン」が、二者二様の目でその様子を見ていた彼らの前で「飛んで」「見せるまでの事であった。

身を投げた、といっても良い。

何にせよ、先程の協力の承諾等比較にならない、あまりに唐突極まりない事態であった事に変わりは無かったのだ。

それに目を点にしたのも束の間、すぐさま構えを解いて傍らのアラジン共々、数瞬前まで白いローブが立っていたそこから下を覗きこんだアリババの目に映ったのは。

彼らの遙か下を通り掛かった荷馬車の荷台に敷き詰められた藁の数本を巻き上げ、彼らの方を向いた仰向けの体勢の「アサシン」がその中へ飲み込まれたところであった。

背中越しにアラジンと金髪の少年——アリババの騒ぎ声を聞いていたモルジアナは、呆れるばかりのその内容に心中で嘆息しかけて、止めた。

彼らに計画性がない事は分かり切っていた。最初のアラジンとの対話の時点で、唯「奴隷泥棒の誤解」を解いて欲しいという欲求が先立つており、そこに深い思慮などおよそ介在しえない事は明白であった。

詰まる話、協力とは名ばかりで実質はモルジアナ任せだといえた。

当の彼女としてはそれでも構わなかった。

元より、引き受けた理由は彼らへの——特にアラジンという少年への、個人的な興味であり、こちらにもそういう自分勝手な理由がある事を省みれば、これくらいの要求は一応ギブアンドテイクの範疇だと思えたのだ。

ともあれ、そんな無計画の下、相変わずどういう原理で飛んでいるのか不明な白布が行き着いたそこが、「偶然にも目的地付近だった」という幸運に代わりは無かった。布越しに下方を覗き込む。

良いタイミングで藁を詰めた荷馬車が布の真下に近づいて来ていた。お誂え向きだ。

行動を始めようと立ち上がる。

途端、一端は消えていた背後からの警戒心と敵意を再び感じた。

そちらの方を向いて見れば、案の定サツシユに差していたナイフを向け、庇うようにアラジンの前に出たアリババの警戒体勢があった。

実に正しい反応だった。少なくとも、何の戸惑いも無く暗殺者に協力を求める背後の青髪の少年の摩訶不思議な思考よりは理解出来た。

だから、彼には興味など無い。『信用に値しない』。

据えた目でそれを一瞥したのも束の間、すぐに顔を正面に戻して布——先程、後の少年達がターバンと言っていたような気がする——の端まで歩み寄り、再度下を確認。

予定通り自分の真下に辿り着いた荷馬車の姿を認めるや、その荷台の藁山目掛けて、猛禽類の翼に見立てて両腕を左右に広げ。

躊躇無く、モルジアナは飛翔した。

一時の滞空。そして、落下。

如何な『フアナリス』とて鳥では無い。翼を持たぬ身である以上、重力に引かれた身がそうなるのは必然の事。大切なのは、そこから『先』だ。

そうして猛禽類の鳴き声に似た風切り音とローブのはためきを纏いつつ、宙で整えた姿勢のままに背中から少女の身体が藁山の中へ飛び込む。

そのまま、荷台と激突した衝撃のままに後頭部が陥没し、思わず目を背けるような骸
に変わり果ててしまったと、普通の人間なら考えるだろう。

実際、もう少し時間が経っても何事も無かったなら、「魔法のターバン」から唾然と
した面持ちで荷馬車を見下ろしていた二人の少年の頭にもその様子が連想されていた。

そうならなかったのは、潜り込んだ藁の中からすぐに、何事も無かったかのように平
然とモルジアナが飛び出したからであった。

「^{イグルタイフ}飛鷹の舞」。

藁山や植込みのような緩衝効果のある場所へ飛び降り、その内部で特殊な受け身を取
る事で緩衝能力を最大限に引き出して落下の衝撃と着地音をほぼ0に変え、同時にその
中へ身を隠す。高所から地表への高速移動、潜入、逃走等、様々な用途で使える高い汎
用性を持った、「アサシン」の基本技術の一つである。

それによって、行き交う群衆の誰にも気付かれる事無く地表への移動を済ませると共
に、気配を消してその中へ紛れ込みつつモルジアナは辺りの様子を探った。

あの大通りの先の教会から西北西、大通りから少し逸れた所にあるその住宅街の中心
で、大衆や、奥の方でギラついた目で巡回している町警史達とは別の人間が声を張り上
げていた。

その人物が最初の目標だ。

「市民諸君！ 昨日、大通りにて奴隷泥棒が現れた！ 賊は二人組の小僧だ！ 人のモノを盗み果せたこの愚か者達を見つけ次第、直ちに町警史にその旨を伝えるのだ！ 有力な情報を伝えた者には賞金も出るぞ！ 先の『アサシン』共々、皆で一致団結してこの街から全ての邪悪を一掃するのだッ!!」

二枚の紙を片手に道路のど真ん中でそう叫んでいる、黒いローブを身に着けた触れ役であつた。

まずは、アラジンとアリババの件を声高に叫ぶ彼の口を黙らせなければいけない。

だが、殺すのは駄目だ。そもそも『掟』が許さないし、仮にそれでその口を永久に黙らせる事は出来ても、それでは行き渡つた二人の少年の『悪い噂』を解く事には繋がらない。『別の方法』で黙らせなければいけないのだ。

そのために必要な物が揃っているかを、革帯の後ろ側に据え付けられた小さなバツクパツクの上から確認——問題無い、十分足りる——し、町警史達は勿論、周囲の人々にも自分の存在を悟られないように気を配りながら、その中をゆつくりと、ひっそりとモルジアナは掻き分けていく。

そうして、遂にその背後、薄暗がりの道路の角に回り込むように辿り着き、触れ役の肩を叩いた。

「すみません。少しお話を」

その彼女の呼び掛けに、仕事を途切れさせられる形となった触れ役が顔を顰めて振り返る。

と同時に、そこに立つのが噂の「アサシン」である事に気付いて叫ぼうとする前にその口を右手で押さえ、強引に黙らせた。

その一連の動作に気付く者は、誰もいない。丁度道路の角を背に立つ格好になっているため、掛かった影とモルジアナより大きな触れ役の体躯が、良い具合に周囲から彼女の姿を隠す障壁と化していたからだ。

「むぐつ、むつ……」

「貴方に危害を加えるつもりは無い。ただ、今広めていた内容を少し改めて貰いたいだけだ」

そう告げ、革帯の後に付いていたバックパックから「それ」を取り出し、緊張した触れ役の面持ちの前に突き出す。

2枚の銀貨であった。

『奴隷泥棒の罪を犯したのは「アサシン」で、当初犯人だと思われていた二人の少年は無実だった』。そう内容を変えて下さい。従わなかった場合は——」

もう一度触れ役の目の前に左腕を移動させ、その手首から飛び出させたアサシンプレードの刃で念を押しておく。

無論、唯の脅しだ。唯職務を全うしているだけの罪無き者を殺めるつもりは無い。

そうやって、要件を伝えた後にブレードを収めた左手で震える触れ役の手に銀貨を握らせ、薬指を曲げた左手を胸に当てて一札をしてから、モルジアナは踵を返した。

程無くして、

「し、諸君！ 昨日の奴隷泥棒の件について新たな情報が入った！ 当初犯人だと思われていた二人の少年は、どうやら罪を被せられただけらしい！ 善良なる市民を嵌めた悪魔の正体は、何とあの『アサシン』だ！ 例の殺人鬼は人を殺めるだけに飽き足らず、あろうことか人様の——」

背後から伝えた通りの内容が聞こえて来たのを機に、先程同様群衆に紛れながら次の目的地へ彼女は足を運ぶ。

触れ役が手にしていたのと同じ、アラジンとアリババの手配書が貼られた壁の方へ。

早く帰らなきゃ、と『彼』は思っていた。

『彼』が帰らなければならぬと、そう考えるのは『彼』の帰りを待つ人間が最低でも二人いるからだ。

二人共、『彼』よりも大きな体を持ったお兄さんだった。

一人は、とても怖い見た目をしているけど、とても優しいお兄さんだ。無口だが、そ

れでも度々頭を優しく撫でてくれたりする。とても大きくて逞しい身体の、大好きなお兄さんだ。

逆に、もう一人のお兄さんはとても怖い人だ。見た目は優しそうだが、少しでも「彼」が言われた事が出来なかつたり、逆らつたりと、すぐに「彼」を踏み付けたり、鞭で引つ叩いたりしてくる。酷い時には、いつも腰に差している剣の先を口の中に突っ込んだり、手に刺して来たりする。

多分、こつちのお兄さんの事は嫌いなんだと、「彼」は思う。多分、とそう頭に付くのは、それよりもそのお兄さんに対して「怖い」という感情が先立つようになってしまったからだ。

ともかくとして、「彼」はすぐにも帰りたいと思つている。そうしなければ優しい方のお兄さんに会えないし、怖い方のお兄さんにどんな恐ろしい目に遭わされるか分かつたものでは無かつた。

だがその事を、今「彼」がいる場所にいる人達に伝える手段を「彼」は「持つていない」。

いや、仮に持つていたとしても、そこにいる人達は「彼」をここから出してくれないかもしれない。

ここにいる白い格好の人達は、「彼」をここへ連れて来た赤い髪のお姉さんも含め

て、皆優しかった。

怖いお兄さんがくれるのよりも暖かくて美味しいご飯を食べさせてくれるし、優しいお兄さんのように頭を撫でてくれたりする。重くて仕方なかった足枷も外してくれたし、踏み付けたり、酷い事を言われたりもしない。お蔭でそこは、見た目の悪さとは対象的に、とても居心地が良かった。

しかし、白い格好の人達とは違う、*「彼」*と同じようにそこに連れて来られた人達がそこから出ようとするのを、白い格好の人達は何としてでも止めさせようとする。時には、気絶させたりもする。

だからきつと、白い格好の人達は自分もここから出してくれないだろうと、*「彼」*は幼心に悟っていた。

でも、帰らないワケにはいかない。ここにいたいのは山々だったが、二人のお兄さんが待っている。

だから白い格好の人達が、いつものようにどこかへ行こうとする人に気を取られていたその隙に、彼は逃げた。

その小さい身体が故に、自分達の目をすり抜けた事に気付かない白い格好の人達の叫び声を背に、彼は屋敷への帰路に着いたのであった。

“アサシン”が宙に身体を放り出した時、何事かと、今までした事が無い程に驚愕し、狼狽した。

投身自殺かと、次の瞬間には見るもおぞましい死体に変わっているだろう “アサシン”の結末に、もう少しで顔を下から背けるところだった。

それが信じられない事に唯の杞憂だったとアリババが思い知らされたのは、少し前まで下を通っていた荷馬車の荷台の藁山から何事も無かったかのように白いロープがひよっこり出て来たという、その事実を頭が受け入れるまでの数刻が経った後であった。

「——えっ、何アレ？ え？ 何で生きてんの？ 何で平気な顔で歩いてんの？」
軽く見積もっても、浮遊する “魔法のターバン” から藁山まで30mの距離はあった。

仰向けの姿勢でそんな高さを落ちたのだ。後頭部を強打して墜落死、よくて全身骨折の大怪我、というのが常識的な結末である。

その常識から余りにもかけ離れた現実の前に、絶対頭打ち付けたとか、あの荷馬車に積まれていたのは藁じゃなくて、藁っぽい何かだったんじゃないかとか、そんなチャチな疑問など容易く飲み込まれてしまう程の疑問の波が、彼の頭の中で無数の波頭を作り上げていた。

そんな状態がために己が目が続けて映していた映像を拒否し続けているアリババと、「うわー！ 見たかいウーゴくん！ お姉さんが凄い高さから飛び降りたのに、全然怪我してないよ！ 凄いや！」

きやつきやとその傍らで、首元の笛を突き出しつつはしやぎ立てるアラジンを見目。

二人の奴隷泥棒の件を周囲に伝えていた触れ役が突然それも「アサシン」の仕業だと言い出したり、そこはかたなく悪人面へと脚色された二人の似顔絵付きの手配書が次々に壁から剥がされたりという奇妙な現象が立て続けに起こった。

そして、それから暫くして何処からともなく彼らの背後に戻って来た「アサシン」の少女の、

「次へ向かいますよう」

という指示の下、空から街中を回る事となった二人の少年が、それから5回は繰り返された一連の出来事に、彼女が一体何をしたのかを否応無く理解させられた頃には、相も変わらず天頂から下界を照らしていた日がもう一刻もすれば夕陽に変わるだろう程度に下がっていた。

最初の飛び降りには、まあ、これは続けて見せられる内に慣れて来た、という他あるまい。きっと、その度に彼女が飛び込んでいるアレは藁では無く、WARAというべき別

の何かなのだ。

普通の藁に30、40mの高さから飛び込んで無事でいられる人間などいる訳が無いのだから、きつとそうなのだ。——半ば思考を放棄するような形で、アリババはそう納得した。

次に、突然触れ役が内容を改めた件だったが、何の事は無い。「アサシン」がそうするよう仕向けていたのだ。驚く事に周囲の誰にも気づかれずに、左腕の隠し短剣による脅迫と銀貨2枚の賄賂という、実に分かりやすい餌と鞭を使い合わせて。

何とも狡い手口だ。それが「アサシン」の情報操作の手段の一つであるとは見抜けなかつたまでも、既に4件の被害を出した殺人鬼なだけの事はある、とその手口に気付いた時、アリババは嘆息せずにはいられなかつた。

最期に、次々壁から剥がれていった彼とアラジンの手配書だが、これは更に簡単な理由だ。唯、「アサシン」が手当たり次第に剥がしていたという、たったそれだけの事だった。それ以上は何も言うまい。

何はともあれ、最期の手配書が眼下の路地の壁から剥がされてから暫くして、やはりどこからともなく、少なくとも常人が飛び下りれば問題無く死ぬるくらいの高度を浮かんでいたターバンの上に誤解とやら戻って来るや、

「暫くすれば貴方方の悪い噂も消えると思えます。これで宜しかったですか？」

そう問い掛ける「アサシン」に、お、おう、と覚束ない動作でアリババは頷き返す。正直なところ、目の前の白ローブが本当に、しかも自分が奴隷泥棒の汚名を着る形で、自分達の助けになってくれた事を未だに信じられなかった。何か裏があると踏んで緊張していた筈なのに、今となってはそれが完全に解れてしまっていた。

それどころか、最初は自らの命の危険が故に怯えてすらいた殺人鬼に、殆ど恐怖を感じなくすらなっていた。

そんな、自らも困惑してしまうようなアリババの心境を見透かしたように、にんまりとした笑みを浮かべたアラジンが言った。

「ね？ 僕の言った通りだったでしょ？」

そう勝ち誇ったように言われたところで、アリババに返す言葉は無く、唯啞然とする他無い。

そんな彼の横を通り過ぎ、「アサシン」の前に出た青髪の少年が後ろ手を合わせた格好でそのフードの中を見上げて、礼を告げる。

「ありがとう、アサシン」のお姉さん！ これで僕達、迷宮攻略ダンジョンの準備が出来るよ。お姉さんのお蔭さ」

「……いえ」

眩しいばかりの笑顔を向けるアラジンから目を逸らすようにそっぽを向く「アサシ

ン”。その小口が、フードの影の下で何かを小さく呟く様が、ほんの少しだがアリババには見えた。

だが、ほんの少し気になったその内容など、次にアラジンと、そして“アサシン”が取った驚愕の行動の前には塵芥そのものであった。

「そんな事無いよ、大助かりさ。——ほら、ウーゴくんもこんなに感謝してる」

そう言うや、アラジンがぐつと首元の笛を突き出す。

その行動に対し、それが意味する事が分からない“アサシン”が訝しげに小首を傾げ、一方でその意味を理解しているアリババは反射的に腕を伸ばして止めさせようとしたが、少し遅かった。

アラジンの口に咥えられた金の笛が、彼に息を注ぎこまれるがままに音を出した。

だが、その後端から出て来たのは甲高い音色だけではない。もう一つ、いや二つあった。

巨大な、二本の腕であった。

青く、隆々とした筋骨が付いたそれらが、金の笛の先端の細い穴から伸び出していたのだ。

そんな奇妙奇天烈な物体が突然目の前に出現した“アサシン”は、フードの下の口をあんぐりと開けてその場に尻餅を付く程の驚きから。

その様子を傍から見ていたアリババは、あーあ、言わんこつちやない、という呆れかけら。

共に、発するべき言葉が失っていた。

「あー、コラッ、ウーゴくん！」

ほんのりと青い肌を赤く染めて瞬時に笛の中へ引つ込んだ腕の主(?)と、それを呼び出した当人を除いて。

「ああもう、ウーゴくんだったら……。ゴメン、お姉さん。ウーゴくんは凄くシャイなんだ。きつと、女の人の前だから照れちゃったんだよ」

自らが放った言葉通りにシャイな性格の親友の、しかしあんまりな無作法を笛越しに窘め、次いでその事を謝りつつ少女に弁解する。

だが、パクパクと金魚のように口を戦慄させる当の「アサシン」からすれば、そんな事は至極どうでも良かった。

「……何ですか、今の？」

あ、そっか、と彼女にウーゴの紹介を済ませていない事に気付いたのは、絞り出たようなその問い掛けの対象が彼である事に気づくまでに要した一拍の後だった。

「今のはウーゴくんだよ。僕の大事な友達なんだ」

「……友？」

そう返したところ、見開かれていた少女の赤い双眸が少しずつ、尚一層訝しそうに細められた。

まるで信じられないと、そう言いたげな眼差しがその臉の見え隠れしていた。

「——あの、質問を変えます。その笛は何ですか？」

「これかい？」

そう指差された笛を、躊躇無く首から外して「アサシン」の眼前に差し出して見せる。

夕陽を受けた金属製の筒が、ほんのりとアラジンとフードの中の少女の顔を照らし上げた。

「僕も良く分からないんだけど、「ジンの金属器」っていうものらしいんだ」

「ジンの、金属器？」

「うん。迷宮^{ダンジョン}で手に入的过程中で一番凄い宝物で、ウーゴくんのお友達が中にいるんだ。僕は「地下のがんじょうな部屋」からこれを拾ったんだけど。——そうだよね、アリババ君？」

後ろにいるアリババの方を向き、確認を取る。アラジンに迷宮^{ダンジョン}の事だけでなく、

ウーゴ^{ウーゴ}やその友達 ジンの事や、「ジンの金属器」の事について教えてくれたのも彼だ。

その不意に振られた問い掛けに覚束ないながらも肯定の頷きを返すアリババに、若干の考え込むような素振りを挟んで「アサシン」の少女から問い掛けが投げ掛けられた。

「まさかとは思いますが、この笛——「ジンの金属器」やらは、もしかして「秘宝」なのですか？」

その時の「アサシン」の様子が、どこか妙だとアラジンには感じられた。

アリババへ質問する最中も忙しくなく彼の笛に向けられる赤い瞳がその違和感の正体だという事はすぐに分かったのだが、その理由までは推測するに至らなかった。

故に、それから後に彼女が起こす行動等、予測しようが無かった。

「え？ そりや迷宮ダンジョンで手に入るお宝の最高峰だし、秘宝かっていわれりや秘宝に違い無いけど……」

その質問の意図が分からず、腕を組んで頭を捻るアリババと、彼の口が紡がれた答えを聞くや再び目を剥いた少女の反応はあまりに対照的だった。

特に、その直後からチラチラと真下の様子を伺う「アサシン」の少女の緊張したような様子は、大袈裟だとさえいえた。

「……そうですか。でしたら——」

相も変わらずターバンの下へ視線を向けたままの「アサシン」の左手が、いつの間にか自分の笛の中程を握っていた事に、ふとアラジンは気付いた。

何故笛を握っているのか。疑問を感じて尋ねようとしたが、それは適わなかった。

「これは貴方方が持つには危険過ぎる」

そう告げるや、彼よりほんの少し年上の少女のものとは思えないような強い力でアラジンから笛を奪い取った。『アサシン』が、間髪入れずに後ろへ飛び退いた。

広がった『魔法のターバン』でもカバーし切れない、足場一つ無い宙空へ。

アラジン、続けてアリババの順で反射的に追い継ろうとしたが、その時には既にターバンの下を通った荷馬車の藁山に、巢へ飛び込む鷹のように白いローブが飲み込まれたところであった。

もう一度だけ藁山から姿を現すや、水の中へ一滴垂らした墨のように行き交う群衆の中へ溶け消えてしまった。『アサシン』の姿が、まるですぐに眼下を覗き込んだ彼らを嘲笑うようだった。

一瞬の内に起こり、一瞬の内に過ぎ去ったにわか雨のようなその事態に理解が出来ず、当に見失ってしまった少女の痕跡一つ残らない真下の道路を、唯只管二人の少年は啞然と見下ろす他無かった。

それでも、一つだけ分かり切っている事があった。

笛を——『ジンの金属器』を奪われた。

それすなわち、初めてにして、最も大切な親友が目の前で攫われたのも同義であった。

「う、ウーゴくん!? ウーゴくん!? ウーゴくうううううん!!」

気付けば、*「魔法のターバン」*を降下させる事も忘れ、咄嗟にアリババが押さえに入らなければそのまま下へ落ちていただろう勢いのままに、アラジンは叫んでいた。

何も分からぬ内に囚われの身となってしまうた友へのその必死の叫びは、しかし応える者も無く、いよいよ夕焼けに変わり出してオレンジ掛かって来た空に空しく響き渡るだけであった。

悪い事をしたとは思わなくても無い。

だが、これで良いのだ。

これが*「秘宝」*だというのであれば、あの少年達にこれはあまりにも過ぎた代物だ。

この*「ジンの金属器」*とやらが、多くの*「兄弟」*達が幼い頃から語ってくれたあの*「エデンの林檎」*と同じ*「秘宝」*であるならば、これをまともに使える人間など、自分も含めてほとんどいない筈。

それこそ、唯一*「エデンの林檎」*を完全に制御し、多くの*「兄弟」*を救ったと実しやかな噂が囁かれる*「大導師」*くらいでも無ければ、触れる事さえ忌避すべき代物なのだから。

そういう善意が、今自らが小脇に抱えるその金属製の笛を取り上げた際に、モルジア

ナの内にあつた。

そう、あくまで「善意」から来る行動なのだ。

フアテイマーのせいでささくれ立った心は、あれから随分と落ち着きを取り戻していた。

あの二人の少年の「誤解を解く」ために費やした時間が、結果的に彼女の中で燻っていた苛立ちを鎮火させるのに必要な時間になつてくれたのだ。

もし、彼らの願いに耳を傾ける事無く支部へ報告に帰つていれば、きつと荒れた心のままにバートリーに、フアテイマーが同郷の人間を奴隷に貶めた事があつた事を隠していたのを問い詰めていた。今朝の彼女に感じた違和感が、その事を知つたモルジアナへの余計な影響を考慮して敢えて黙つたためだつたという事に気付かないままに。

そうして互いが互いに、もしくはモルジアナ一人だけが険悪感や疑念の類を抱き、確執という程では無いにせよ、今後の任務に少なからず影響を与えるところだつた。

そんな可能性があつた事を加味すれば、彼らに協力した事に得られた利益が確かにモルジアナにもあつた。

少なくとも、あのアラジンという少年にはその事に対する感謝の念があつた。

だからこそ、この笛を彼の手元から遠ざけてやるべきだとも、強く思つたのだ。

無論、その気持ちの裏側に会つたばかりの、それも個人的には好ましい思考を持つた

無邪気な少年の持ち物を奪ってしまったという罪悪感が無い訳でも無かったが。

何はともあれ、今は帰路を急ぐべきだろう。

彼らに付き合つたせいで、報告に “チーシャン支部” へ戻るのが随分と遅くなつてしまつた。

明確に帰還の時刻を決めていた訳でもないが、しかし無駄に時間を過ごしても良い訳でも無い。既に日が暮れ掛けて辺りがオレンジ色に染まり出した今の時刻に、何の途中報告も無く戻つてきたとなれば、少なからずお叱りの言葉を受けることになるだろう。

しかし、それだけの時間を掛けた甲斐があつた、と頭に付きこそしないものの、“領主の目的” という思わぬ成果があつたのも確かだ。

今まで領主の暗殺に乗り出せなかつたのは、彼の最近の行動の裏に潜むその目的が分からなかつたためだ。それが判明したとなれば、いよいよ次は今回の任務最大の標的を消しに向かう事になる。

彼の者を討ち、その下に集められた多くの奴隷ひとを開放するその時が、いよいよ訪れるのだ。

“採掘岩のファティマー” を始末しただけでなく、それだけの収穫も持ち帰つてくるのだ。それで多少はバートリーが機嫌を直してくれる事を、いよいよ屋根に設けられた支部の入口が眼前に近づいて来たモルジアナは祈るばかりであつた。

が、その身に掛かった慣性のままに飛び込むように入り込んだ支部内の様子は妙だった。

着地と共に視界に入ってきた休憩室の入口の奥、作戦会議室でカウンターを挟んで、バートリーと「収集隊」の「アサシン」が、何やら困窮した様子で向かい合っていた。

「何か」が起こったのだ。それも、唯事では無い「何か」が。

彼女達の周囲に漂う緊迫した空気にそれを数瞬の内に悟ったモルジアナは、すぐさま入口を潜りつつ二人に問い掛けた。

「何かあったんですか？」

「おお、ハイザム！ スマン、ヘマしちまった」

「「ヘマ」？」

彼女の姿を認めるや慌てて頭を下げる「収集隊」の言葉を聞き返す。

その言葉の意味に特徴的な顔立ちを深刻気に歪めて答えたバートリーの言葉は、支部内に漂う緊迫感の意味をモルジアナに否応なく理解させるものだった。

「昨日アナタが連れて来た坊や、覚えているわね？」

「あの子が何か？」

「逃げてしまったわ。昼過ぎに」

逃げた、と、そう届いた言葉に、モルジアナは思わず耳を疑わざるを得なかった。

今、*「チーシャン」*の貧民街の一角には彼女の任務の過程で開放された多くの奴隷だった人々が集められている。

同様にそこに匿っていたあの少年が逃げ出したという事は。

すなわち、彼女の任務終了を待って、*「収集隊」*により各々のいた場所へ戻されるその時まで匿われている彼らの所在。ひいては*「チーシャン」*の*「アサシン」*達の拠点である支部の位置が彼の口から割れてしまうという事。

一刻を争う事態に陥ったという事に、他ならなかつたからであつた。

第八夜

保護していた奴隷が逃げ出した。

それは、すなわち同様に匿っていた人々の居場所だけでなく、自分達「アサシン」の拠点である「チーシャン支部」の位置まで知られてしまうという事。

そうなれば、すぐにでもその情報を頼りに大挙して押し寄せて来るだろう町警史達から逃れる準備を整えなければならない。

つまりは、街を出なければいけない。まだ消していない最大の標的も、これまで救いだして来た多くの人々も、全て捨て置いて。

もはや任務どころの騒ぎでは無い。そうなってしまう前に、何としてでも逃げ出した少年を連れ戻さなければならない。

それが分かっているからこそ、慌てて制止を呼び掛けるバートリーヘフアティマーの件を報告する事も忘れて、すぐさまモルジアナは踵を返し、「チーシャン支部」を飛び出したのだ。

そして、既に搜索を始めていた「収集隊」の「アサシン」達に加わって「チーシャン」中を必死に駆け回ったものの、終ぞ少年を見つけたことは適わぬまま、その日は終わ

りを告げる事となった。

無念と、そう評する他無い結果であった。

だが、日を改めることとなつてしまつたその結果は、同時に違和感を覚えるものでもあつた。

少年が貧民街^{スラム}から逃げ出したのは昼過ぎだ。その搜索を始めてから一日の終わりを迎えるまでに掛かつた時間は、ざつと見繕つても6〜8時間はあつた。

それだけの時間があれば、少年から「アサシン」達と奴隷達の隠れ家が割り出され、即時編成された町警史の一団が向かつて来るには十分な筈だ。

にも関わらず、既に深夜一時過ぎ、丑の刻が近づいて来た頃になつても、支部や奴隷達の保護区域はおろか、貧民街^{スラム}にすら町警史の一人も近づくと心配は無かつた。

それが何を意味しているのか全く持つて不明であれば、依然予断を許さない状況である事には変わりはない。

だが少なくとも、遅れたファティマーの件と、それに伴つて得た領主の目的についてのモルジアナの報告を受けたバートリーの鶴の一声で、少年の搜索による疲れを癒す間もなく領主ジャミルの暗殺計画の打ち合わせが彼女らと数名の「収集隊」によつて行われる分と。

それから、暗殺の下準備と少年の再搜索。そして時が来るまで待機する分の猶予がモ

ルジアナ達に与えられた事だけは、確かであった。

建付けの悪い二枚扉の入口を潜るや、途端に視界一面に広がる質素かつ古びた内装に喉の奥から込み上げて来る安堵の息を吐き出していたのは22時間と30分前の事。

奴隷泥棒の疑いが掛かってからずっと続いていた町警史達の監視から、ようやく解放されて床を踏めるようになった自宅を後にしたアリババが現在行っていたのは、堂々と歩けるようになった大通りでの買い出しと迷宮^{ダンジョン}攻略の準備。そして、

「おっ！ 見ろよアラジン！ この剣スゲーぞー！」

笛を失って落ち込んだままのアラジンへの慰めであった。

そういうわけで、今もナイフの新調を目的に立ち寄った武器屋で偶然見つけた、細い刃が手入れの為っていない植木のように幾重にも枝分かれした、禍々しくも珍しい形状の剣を手元に気を惹こうとするアリババであったが、

「……ウーゴくん……ウーゴくん……」

うわ言の様に俯きながら俯く当のアラジンの耳に、彼の呼び掛けは全くといっていい程伝わって無かった。

はあく、と自宅に帰り着いてから優に500は繰り返しただろう溜め息が、またアリババの口から漏れた。

彼の気持ちは分からないでも無い。

形や状況こそ違うが、アリババもまた「親友と呼ぶべき友」を失った経験があれば、それがヘタをすればいつまでも立ち直れない程に心を抉る悲しみを呼ぶ事も知っている。昨日今日出会ったばかりの彼の言葉が、障壁として聳え立つその悲しみを超えてアラジンの耳に届く筈が無い事は、アリババも最初から分かっていた。

それでも、俯いて見えない顔に沈鬱極まる表情を浮かべているだろう年下の少年を前に、少なくとも何かせねばと思考を巡らさずにはいられないのが、アリババ・サルージャという少年が持つ優しさであり、当人も自覚していない彼の本質の一端であった。

——といっても、今回ばかりはその言葉の裏にあるのがそんな優しさばかりという訳でも無かったが。

「大丈夫だつて！ きつと、その内笛もウーゴくんも取り返せるつて！」

「……そうかな……？」

「あつたり前だろ！ 絶対「アサシン」の奴見つけて、お前の大切なモン纏めて取り戻してやろうぜ！」

——じゃねーと、迷宮^{ダンジョン}なんて攻略できねーしな。

そう最期にポツリと洩らした本音は、今のアラジンに届く事は無い。

実際、ウーゴがいけないというこの状況はアリババにとっても由々しき事態だ。何せ、

あのジンの存在がアラジンを迷宮攻略ダンジョンに誘った最大の理由であり、迷宮攻略ダンジョンにおけるアリババ達の唯一にして最強の手札だ。

それが失われた現状においては、既に家から持ち出して来た背負い鞆が一杯になる程に買い溜めた物資も、ハッキリいえば全てが無駄同然だった。

だがしかし、バイト先の運送会社の行く末や、自らの人生という重いものを幾つも背負っている以上、迷宮攻略ダンジョンによって借金を返すという目的を諦める訳にはいかない。

何としても取り戻さなければいけない。アラジンの笛を、あの憎き「アサシン」から。

思えば、本当に上手い具合にハマられたものだ。

一見無償で協力するように見せかけて、こちらの緊張が完全に解けたそこを狙って、最も重要なお宝を強奪してくれたのだ。

これは本当に彼のミスという他無い。何せ、彼は既に己が身を持って知っているからだ。——「家族のように慕っていた人間でさえ、裏切る時は裏切り、騙す時は騙すという事」を。

であるにも拘らず、奪われた当のアラジンの言葉について同意して、あれだけ危険だと自分で言っていた「アサシン」に、自分までもが隙を見せてしまった。

如何にその教訓に纏わる記憶が思い出したくない辛いものだったとしても、そのあんな

まりな失敗にアリババは自分の額を小突かずにはいらなかった。

さて、そんな彼らの目下の目的は再三記述するが、『アサシン』の搜索。及びアラジンの金属器の奪取、ひいてはウーゴの救出』である。この目的を為す上で問題なのがその手段であるが、少なくとも刃を交えるという選択は御免被りたい、というのがアリババの正直な想いであつた。

何故か？

平然と何人、何十人と人を殺められるような殺人鬼だから、というのもその理由の一つには違い無いだろう。だが、実際に対面した今となつては、それよりも大きな理由が彼の心中の割を占めていた。

まず、地表30mの高空から落ちても平気な顔をしているような、精神的にも肉体的にもイカれた奴と再会する事への危険性が七割強程。

続いて、『法』の下で生活を営む事を当たり前の常識として捉える一般人として、刃傷沙汰は流石にマズイだろという考えがほぼ三割。

そして最後に、紛いなりにも年下の少女に自分から刃を向けに行くのはどうかという健全な一少年としての矜持が少々、というところであつた。

そういう訳で、実際に『アサシン』と再開した際に取り得る手段は自然と限られてくる。——交渉だ。

幸い、十にも満たない頃から靴磨きや地元の観光案内程度ではあったが、客商売を経験して来たお蔭でアリババ自身も口の上手さには自信がある。

しかし、これも残念ながら手段として安定しているとは言い難い。

大方お宝に目が眩んだためだろうと睨んでいるとはいえ、笛を奪われた正確な意図が抜けているのも然り。取引を要求された場合、〃ジンの金属器〃に見合うだけの物が良くてアラジンの〃魔法のターバン〃くらいしか思い付かず、それが撥ね退けられた場合も然り。そもそも、相手が超高度からの紐無しバンジーを平気でやらかすような者である事に変わり無く、交渉に応じる事無く、今度こそ殺されるという可能性を否定できない事もまた然り。

というか、それ以前に――。

「どうやって見つけりゃいいんだよ……」

そうばやきつつ周囲を見渡せば、とどころに警戒の目を光らせつつ徘徊する町警史達の群れが、露店や民家、周囲の人々越しにチラチラと見て取れた。

既に奴隷泥棒の罪が〃アサシン〃によって消え去ったも同然の今、獲物を探してうるつく狼のような犯罪捜査のプロの眼にアリババ達が映る事はもはや無い。

そんな彼らが大勢で血眼になって探すのは、当然その〃アサシン〃唯一人である。

語るまでも無く素人では無い町警史達が一様に探しているそのたった一人の白い

ローブの少女は、しかしアリババ達の悪い噂を消した時も含めて、大つぴらに動かない分には今まで発見されて来なかった。加えて、昨日彼らが彼女を発見出来たのも、やはりあの少女が“一仕事”を終えて道路のど真ん中を逃走中だったからだ。

つまり、“アサシン”が何かしらの行動を起こすまでは見つからない可能性が高いという事であり、よしんば見つけても町警史に追われているか新たな被害者となる者を追っているかのどちらかといつても良い。

果たして、そんな状況の“アサシン”を交渉の席に座らせる事が出来るかどうか。

されとて、前述した背負っているモノもある以上、何としても金属器の笛を取り返して迷宮を攻略せねばならない。でなければ、やはり借金という見えない縄によって、踏み出す事も出来ないまま、じわじわと首を絞められていく他無いのだ。

以上より、面倒事に関わっていない余裕のある状態の“アサシン”を見つけ、すぐさま交渉の席に引き摺りこんでこちらのペースに乗せ、戦う事や機嫌を損ねる事はおろか、取引の類を申し出される前に笛を取り返す、というのが理想的なシチュエーションであるのだが、そこまで持つていくのは至極困難なのであった。

「どうすつかなあ……っ？」

どうにかしてその理想のとまでいかないまでも、それに近い状況に持ち込む事は出来ないだろうか？

首を捻つて思考を巡らすアリババであつたが、しかし、まだ土台も出来上がつていなかった彼の計画は程無くして崩れ去る事となるのであつた。

「おいつ！ 大変だ！ 南方を警備していた連中が、アサシン」を見たそうぞぞ！」

どこからか駆け込んで来た町警史が、アリババ達の近くを回つていた一団に合流するやそう叫ぶのが聞こえて来た。

それを受けて上がった、何いッ、という町警史達とアリババの驚きの声が重なつた。

「それは本当か!? あのライダーイカレ野郎はどこに行つたんだ!？」

「いや、それがすぐに見失つたらしくて。北側へ向かつたのは確からしいんだが」

「北側——もしや、貴族街の方か？ 今頃は領主様お抱えの衛兵共が警備中だろうが

……分かつた！ 行つてみよう！」

その一団のリーダー格なのだろう町警史がそう決断して二、三他の者達に何かを告げるや、すぐに彼を含めた一団の半分が何処かへ駆け出して行つた。

その様子を見送つてすぐ、タイミンクの良く無い「アサシン」の目撃に舌を打つたアリババの足下に、不意に違和感が走つた。

嫌な予感がした。

慨視感もあつた。

昨日も感じたその浮遊感のままに恐る恐る足下へ視線を下ろしてみれば、案の定そこ

に広がる白い布があった。

咄嗟に、

「ちよ、ちよつと待てアラジン！ 今行くのはマズつ——」

と、制止を呼び掛けるアリババだったが、すぐさまターバンを飛び立たせるや振り返り、

「行こう！ アリババ君！」

と、先程までと打って変わった張りのある声を上げるアラジンの眼中に、既に彼の姿は無く。

次の瞬間には、

「待っててね、ウーゴくん……！」

その場にはいない親友を必ず救って見せるという青髪の少年の決意の言葉と、

「だから待っててええええええええええッ!!」

もはや馬に唱える念仏程にも相方の耳に届かない金髪の少年の絶叫を尾に。

白い月といくつも散らばる星々の煌めきが美しい夜空の奥、その先にいるであろう

アサシン”の下へ、真つ白な”魔法のターバン”が飛んで行くのであった。

”チャーシャン”の北側、大通りを中心に広がる一般街を抜けたその一帯に広がって

るのは、貴族や豪商等の支配層・富裕層が生活を営む貴族街である。

そこに住むいずれもが富と権力を欲しいままにした者達ばかりなだけあつてか、そこに建ち並ぶ屋敷や建造物は下を歩く他人を見下ろすためといわんばかりに大きく高く、そして飾り立てられている。その前には、教会を除く一般街や貧民街のみすばらしいばかりの民家群など、象を前にした蟻程の価値も無くなつてしまふだろう。

そんな見るからに高級で威圧的な建物群の内の一つ、周囲のものより頭一つ高い屋敷の屋根の上に、一つの人影があつた。

モルジアナであつた。

本来相反する色合いの白いローブ姿を、星々と月の光、そして屋敷群の窓から漏れる薄灯の明滅だけが照らす夜の黒の中に己が気配諸共完全に溶け込ませて周囲を見下ろす彼女に気付く者は誰もいない。

夜中の路地を僕を連れて歩く貴族も、屋敷の中で酒の入った杯を片手に下卑た笑い声を上げる豪商も。

そして路地、あるいは彼女と同じように建物の上に立つて警備を行っている、軽装の鎧に身を包んだ領主直属の衛兵達も。

装備の質も練度も一般街を見回る町警史達よりもずっと上な彼らの、その内一人が丁度今、モルジアナのすぐ下、隣接する一回り程小さい建物の屋根の端で欠伸を欠いた。

モルジアナが音も無く屋根を蹴つたのは、それと同時にであった。与えられた力のままに、彼女の身体が屋根を超え、前へ飛び出す。

狙い通り、未だ明後日の方向を向きながら頭を掻き出す衛兵の背中目掛けて。

一瞬の間を置いて、前に翳していた右手が一足先に衛兵の右肩に触れると同時に、振り上げていた左手の小指を引いてアサシンブレードを展開。

さほど重い訳でも無い自らの体重によつて抵抗の間もなく漆喰の屋根へと押し伏せた衛兵の後首——人体急所の一つ、頸椎へ、月明かりを受けて煌めく刃を流れるようにモルジアナは突き入れた。

神経中枢を断られた事で、ビクリと一度だけ大きく身体を震わせて生命活動を停止した衛兵の首から、ゆっくりと血に濡れたブレードを引き抜く。

人間は両の目が二つとも前に向いて付いている。そのため、意識して首や目を向ける等しなければ視界の端にしか映らない上下は注意を向け難い方向といえる。

その死角と、そして全く気付かなかったが故に見せた背後という二重の隙を突いた、お手本のような飛翔暗殺^{エアァサシン}であつた。他の「アサシン」がその動きを見ていたならば、拍手の一つでも送つただろう。

だがまだだ。

馬乗りになる形で乗っていたうつ伏せの死体から立ち上がるや、一端ブレードを閉

まっつて眼前に聳え立つ壁——と見間違ふほどに高く切り立つた屋根の段差を駆け上がり、その縁に両手を掛けたところで足を止める。

縁に掛けた手と、壁に着けた両足で身体を支えているその体勢から、少しだけ頭を持ち上げて段上を覗き込んだ。

ついさつき排除したばかりの者と同様の格好の衛兵が一人。仕切に周囲を見回しては警戒を怠らないその様には、先程の衛兵のような分かりやすい隙は期待できそうに無い。

といつても、丁度良い具合にモルジアナの方へ歩いて来るその時点で、隙の有無に大した意味は無かったが。

後一步で段差の縁というところまで衛兵が歩み寄つて来たその瞬間、すかさず上半身を縁の上へ持ち上げると共に衛兵の股座を左手で掴み、同時に小指を引く。

刹那、内部機構が作動して飛び出るアサシンブレードの刃に股間——語るまでも無い、代表的な急所——を貫かれて目を剥く衛兵の身体を、腕力と、再び縁の下に上半身を引き戻す動作に任せて、段上からモルジアナは引き摺り落した。

上方同様、下方もまた意識しなければ警戒の範囲外になりやすい。ましてや、段差、あるいは屋根の下で身を隠す敵の存在など、直に近づいて下を覗き込みでもしなければまず発見できまい。それを利用した縁からの暗殺である。

そうして下方から聞こえて来た鈍い落下音を後に、監視の目の無くなった段上へ悠々と登るや振り返り、段の下をモルジアナは見下ろした。

最初に飛翔暗殺で仕留めた衛兵と、今さつき仕留めたばかりの、仰向けの体勢で開かれた股の辺りを赤く滲ませる衛兵の、二人分の死体が一列に並んで転がる様が見えた。

人死になど縁が無い一般人が目によれば十中八九絶え間ない悲鳴と共に逃げ惑うだろうおぞましい光景に、しかしモルジアナの心には何の感情も湧く事は無い。

“アサシン”——暗殺者の端くれとしては、極々正しい心境だ。一々殺す事に眉を顰めていては、こんな仕事は続けられない。

されとて、全ての“アサシン”も最初から殺人に対する忌避感が無い訳ではない。それに慣れるために、彼らは修練を重ね、“教団”の教えを受け、先達の手腕を見て学ぶのだ。

だが、そうやって殺す事を仮想したり、他の誰かが殺す様を見たりすると、実際に自分の手で殺す事は違うのだ。

その事を己が身を持ってモルジアナが知ったのは10歳になる少し前、始めて人を殺めた時であった。

当時、先達の一人前アサシノに追従する“見習い”の一人として、“アクティア王国”の都市

の一つ「アツカ」にモルジアナは赴いていた。

見習いの「アサシン」が熟達した一人前アサシリーノや導師マスターアサシン長の任務に補佐兼見学目的で同行する事は別段珍しい事では無い。

ただし、過去それが許されたのは十分な修練を積んだと認められた十代後半の少年少女が大半であり、まだ9歳、「教団」の末席に加わって6年しか経過していなかった当時の彼女の様な子供までもがそれを許されるという事は前例が無かった。

それを可能としたのは、「教団」に加わってからのモルジアナの努力と、目を重ねる度に彼女の身体を常人には達し得ない高みへと近づけていく「フアナリス」の血脈であつたが、今はそれについて深く語る時ではない。

問題は、そういう過程の下に先達の「兄弟」達と共に赴いた初の補佐任務にて訪れた、予期せぬ機会であつた。

「そつち行つたぞー！」

明かり一つ無い闇の中で「兄弟」の誰かが叫んだその数刻後、モルジアナを含む見習いが待機していた民家群の道路に、恐らくは標的であろう人影が現れた。

その「標的」が何の罪で狙われる事となつたのかは、今となつてはモルジアナの記憶の片隅にも残っていない。

見習いとしての補佐とはいえ、初の実戦に心が沸き立つて仕方が無かつたが故に事前

説明をあまり聞いていなかったがためであり。

“標的”の姿を確認するや、前に出ずに先達達の手際を見て学ぶ事を優先をするよう言われていたのも忘れるほどの興奮に思考が追いつかないまま、緊張でガチガチに固まった身体で考え無しに“標的”の足を止めようとしたためであり。

しかし待機していた家屋の影から出るやつんのめり、当の“標的”の前で転んでしまったが故に起こった、その後の経過のためであった。

強かに地面に打ち付けた顔面を痛がって押さえたのも束の間、

「くっ、来るなあ!!」

首に何かが巻き付くような感じを覚えたその時には、既に顎下に回された“標的”の腕によって身体を強引に持ち上げられた後であった。

「ち、近づくな! 近づいたら、このガキが死ぬぞ!!」

“標的”の空いている方の手に握られた何か闇の中で僅かに光るのを、既に闇に覆われていたモルジアナの双眸が捉えた。

ナイフだった。

何か——“標的”自身の汗臭さに混じって、錆びた鉄のような臭いがしたのを覚えてい——に濡れているらしいその切っ先が、“標的”に拘束されている状態の自分に向けられていると悟った時、無意識に彼女は息を詰まらせていた。

訓練の過程で摸造劍の切っ先程度なら幾度か突き付けられた事がある。

だが、突き刺さればそのまま命の危機に繋がる本物の刃を、それも明確な殺意を込められて目前に晒されるというのは、これが初めての経験であった。

それが、彼女の内の緊張だけをそのままに、しかし思考を麻痺させる程の興奮は全身を震え上がらせる恐怖という形に変わらせるに至っていたのだ。

蛇に睨まれた蛙だ。既に大の男3、4人程度なら担いで悠々と走れる程度になった伝説の狩猟民族の肉體も、こうなってしまうてはもはや意味を為さない。

加えて、彼女を肉の盾とされた「兄弟」達も手が出せない。

絶望的な状況、という他無かった。

当時のモルジアナは、「大導師」に救われた時からそう変わらない程度に感情の振幅が大きく、日々の厳しい修練の中でも喜怒哀楽をハッキリと表わす事を忘れていない少女であった。それが、「この後の出来事も含めて」、全ての仇となったのだ。

そして、その「後の出来事」を引き起こす展開が訪れるには、もうほんの少しだけ時間が必要だった。

あまりの状況の変化に齒を打ち鳴らすことすら出来ない程に固まっていたモルジアナの身体が、

(…………殺されちゃう…………何とか…………何とかしないと…………！)

必死に抗おうとしていた彼女の意思にどうか反応して、護身用に支給された「標的」の物より小振りのナイフをサッシュから抜いた左腕を振り上げさせるには。

包丁を固い肉に入れた時のような感触と共に、「標的」に捕まえられた時にそうなったのか、いつの間にかフードが脱げて露出していた赤い髪に、何か降り掛かった。

恐らくは、それが開始の合図だったのだろう。

気付けば、ナイフを握ったままの左腕をがむしやらに上下させていた。

無我夢中だった。手が「何か」に当たる度に顔や髪に飛び掛かる「何か」になど、その時点では構う暇も無かった。

そうしている内に、不意に宙に持ち上げられていた身体が地面へと落ちた。

それが「標的」の拘束から解放されたということ「まで」は理解できたモルジアナは、肩で息をしながらも四つん這いから座り込んだ姿勢になりつつ、安心から来る笑顔を浮かべた顔を振り上げた。

その笑顔が、移動した視界に入って来たものによって瞬時に凍り付いた。

「標的」が寝そべっていた。

正確には、「標的」だったものがそこにあつた。

だった、とそういわざるを得ない。

いつの間にやら真っ赤に染まったその首から上は鋭利な刃物で滅多刺しにしたかの

ように——と、その時のモルジアナには思えた——いくつもの刺し傷で埋まっており、咲き誇る薔薇の花弁とも、地面に落したトマトともつかない状態に成り果ててしまったそれは、元が人間の頭部であった事さえ疑わしく感じずにはいられない。

そして、“それ”には“足りない物”があつた。

「あ……あ……っ」

この世のものとは思えないおぞましい“それ”に、先程までとはまた別の理由からモルジアナの身体が震え出す。

その振動によって、下りていたフードに引つ掛かっていたところを振り落された何か、コロコロと見習い用の灰色のロープの上を転がって、折り曲げられていた彼女の膝の間で止まった。

“足りない物”——面影が無い程にズタズタになつた“標的”の眼窩の中に収まっていた筈の、眼球であつた。

少量の血液と涙液の混合液体の中に切断されて間もない視神経の尾を浸らせたその眼球の、瞳孔が開き切つた瞳が、見る見る内に見開かれていくモルジアナの赤い双眸を見返していた。

頭から上半身までが髪や目と別の赤に染まつたモルジアナ自身が、そこに映つていた。

全身に感じていた生温かさやヌルヌルとした感觸の正体を、否応なく理解した。

次の瞬間、襲い掛かって来た猛烈な吐き気のままに、モルジアナは嘔吐していた。

胃の中に残っていた夕食が、ドロドロとした吐瀉物となつてローブの裾とスカートの間、そして眼球に降り注がれる。

そこから発せられる強烈なまでに酸っぱい臭いを嗅ぎ取つた“フアナリス”の強力な嗅覚と、全身を覆う生温かい返り血の感觸が、更に強力な吐き気を誘発する。そうして更に強まつた悪臭を、無意識に嗅ぎ取つてしまふ。

そんな地獄の責め苦のような凄惨な連鎖に囚われるがままに、遂には胃液すら吐き出せなくなつてもまだえずく。

その傍らで彼女に駆け寄り、心配して背を擦つたりする“兄弟”達の声や姿が段々とおぼろげになつていく最中も、吐瀉物に半分ほど埋もれた眼球が映している物は変わらなかつた。

そこに映る、“返り血で真っ赤に塗れた恐ろしい自らの姿”がようやく視界から消えたのは、更に何度かえずくの繰り返した後に訪れた、失神という名の静寂の帳のお蔭であつた。

彼女のように、殺人を犯したというストレスから、嘔吐を始めとして身体に何らかの

変調を来す者はたまにいた。

それどころか、時には発狂してそれつきりという者もいれば、「アサシン」を続ける中で使命感や信念に綻びが生じ、結果として肉体や精神の異常という形でスランプに陥る者すらまれに存在する始末だ。

それを考慮すれば、高々齡9歳で、嘔吐程度で始めての人殺しの反動を抑える事が出来たモルジアナはむしろ才能がある方だといえた。

だがそんな事は関係無く、当のモルジアナからすればあの時の事は現在でも忘れられない、屈辱の思い出であった。

そして、心の底からそう感じる理由はもう一つあった。

それから目覚めてすぐ、「マシヤフ」の砦内の医務室で掛けられた言葉であった。

『「アサシン」など、止めてしまふべきだ』

今にして思えば、ただ彼女を氣遣ったがための言葉だったのかもしれない。だが、例えそうだったとしても、現在でも素直に受け入れられないその言葉が放たれた事は変わらない。

自分を救い、「アサシン」の道に進む事を許してくれただけでなく、様々な知識や技を教えてくれた、他ならぬ「大導師」の口から放たれたという事は。

悔しかった。

“大導師”の言葉が。

それ以上に、多くの恩を受けた師の口から、そんな言葉を紡がせた自分の不甲斐無さが。

彼と共に帰った故郷カタルの惨状を目にしてから流す事の無かった大粒の涙を溢れさせ、強く握り過ぎて掌から滲み出した血と共に白いシーツを汚してしまふ程に。

そうして、その日からモルジアナは少しずつ変わっていった。

まず一人称を改めた。物心ついた時からずつと使い続けて来た“モル”の響きに含まれる甘ったるさに嫌気が差し、現在も使う“私”という無味無臭な一人称へと変えていった。

日々の修練にも今まで以上に精を出して来た。周りが寝静まった深夜まで訓練に打ち込む事は勿論、見習いを指導する教官役の導師長や“大導師”、近い間柄の“兄弟”に無理を言つて個人的に指導を付けてもらふ事も、日を追うに連れて多くなつていった。

そして最も変わったのが、自分から志願して先達の“アサシン”の任務について行く機会が多くなつた事であり、その中で率先して“標的”、あるいは邪魔となる者を殺す役に就いた事だった。

最初の内は大変だった。あの日のように気を失うような事こそ無かつたとはいえ、ト

ラウマと化したその時の事が足を竦ませたり、どうかそれを振り切つて敵を排除する事が出来ても、その後には必ずと言って良いほど耐えがたい吐き気や悪寒に襲われた。自分が殺されたように顔を青くして、他の「兄弟」に抱えられながらその場を離脱した事など、一度や二度では無い。

それでも彼女は前に出続けた。反吐を吐きまくつた。身体を震えさせた。行水をするが如く、返り血を浴び続けた。——殺し続けた。

そんな文字通りの血と汗と努力と反吐の日々が、やがて彼女を大きく変えたのだ。

唯流れ出すだけの血すら怯えていた一羽の野兔アルネブは。

闇の中に息を嚙め、音も無く背後から近付き、

「んむっ……!?!」

瞬時に口を押さえた手で断末魔を上げさせる事もなく、無慈悲に突き刺した鋭い鉤爪と手がヌルリとした鮮血に塗れる事に眉一つ蹙めずに獲物の命を刈り取れる、一羽の若き鷲ハイザムへと生まれ変わったのであった。

そうしてまた一人、始末した衛兵の力の抜けた遺体をその場にそつと横たわらせ、前方の誰もいない新たな屋敷の屋根へ駆け込んだモルジアナは、その端まで移動したところで一端足を止めた。

その眼前に入り込んだ、一際大きく壮言な作りの、貴族街のほぼ中心に位置するその

屋敷。

二本の太いポールに挟まれた門と、周囲を覆う緩やかな弧の連続で出来た高い塀に囲まれた目的地。一人前昇格後の初任務の最期にして最大の標的、領主ジャミルの邸宅の威容がそこにあつた。

そしてその邸宅を囲む塀の内側、入口の前に立つ4人の衛兵達の後に、堆く積もつた干し藁を乗せた荷車が一台置いてあつた。

その日の昼の内に百姓を装つた「収集隊」の「アサシン」によつて設置されたものであり、恐らくは飼つている馬や奴隷用に仕入れられたであろうそれが為す本当の役割は二つ。

一つは荷車との距離を見極め、その場から飛鷹イーグルダイフの舞を行ったモルジアナの身体を受け止めるための緩衝材であり。

もう一つは、それによつて門の前に立ち、あるいは塀と屋敷の間を徘徊し、あるいは屋敷の屋根から周囲に注意を向ける衛兵達の目を掻い潜つて屋敷に入るための、侵入経路であつた。

両腕翼を広げ、跳躍飛翔。

強靱な脚力によつて技名の如く飛鷹の速さで闇夜へ飛び込んだ白いローブが門と塀を越え、宙で反転した身体のままに藁山の中へ侵入した。

時間にして5秒と掛かっていない。その間、堂々と賊に忍び込まれた事はおろか、その姿を目撃した者さえ一人としていない。

故に、そこに潜む彼女の存在に気付く事無く、屋敷と塀の間の巡回から荷車の角に腰掛けて休憩しようとしたその衛兵は格好の獲物であつた

刹那、藁の中から上半身を伸ばしたモルジアナは背後から衛兵の口を押さえ込み、同時にアサシンブレードをその横首に突き込みつつ藁山の中へ引き摺り込んだ。

他の衛兵の目が向いていないのを瞬時に確認してからの藁山隠れ場所から暗殺によつて、騒ぎ立てる間も無く藁の中に収まったその死体の存在に気付く者は誰もいない。

そして、すぐ隣に自らが殺めた者の遺体が存在するという常人ならば震え上るような状況に、もはや吐き気一つ催す事無く。

その衛兵が消えて監視の目が無くなつた屋敷側から荷車の外へ出たモルジアナは、事前の打ち合わせ通りにジャミルの書齋が位置する屋敷の裏側へ、音一つ立てる事無く回るのであつた。

時間は少し前に遡る。

“外側”の壁に埋め込まれた蠟燭のおぼろげな光だけが唯一の光源であるその場所の一角に、その二人はいた。

片方は赤毛混じった茶髪に、特徴的な目元に子犬のような眼差しを持った6、7歳の少年——“チーシャン”の“アサシン”達が必死になって探していた、あの奴隷の少年だ。

見れば、再び足枷を付けられたその身体には出来てそうは経っていない切り傷や打撲痕が幾つも付いていた。

どれもこれも痛々しく——實際痛むのだろう、時折身体を震わせている——、また幼子が負うにしては聊か度が過ぎていいるそれらを、労るように撫でる手があった。

指一本一本が太く、そこから伸びてはくつきりと広い手の甲に浮かび上がる筋が、行っている行為と結び付け難い力強い印象を与える。そんな手の持ち主に相應しい隆々とした筋骨で覆われた大柄の身体を少年にしがみ付かれているもう片方の見た目は、“不気味”と、そう評する他無かった。

年齢そのものはまだ“青年”というカテゴリーに収まる範疇だ。

しかし、それを見た目から——特に、歳を推測する上で真つ先が目が行くであろう顔から判断する事は不可能に近い。

如何に観察眼に優れた人間であろうと、唯一割り貫かれて覗ける左目の部分だけからそれを見抜ける者はまずいないだろうからだ。

そう。彼の顔のパーツは左目しか外に晒されていない。

それ以外の一切の部分が、長方形の簡素且つ無機質な鉄仮面に覆われてしまっているのだ。

当然表情等読み取れる筈は無く、それどころか空気穴一つ開けられていない仮面と顔面との僅かな隙間越しに行っているせいで鳴ってしまふコシユウという呼吸音は、ともすれば見る者に“不気味”を通り越して嫌悪感や怖ろしさすら抱きかねさせない有り様だ。

されど、そんな自らの身体に身を寄せる少年に“彼”はそういう類の感情を垣間見た事すらない。むしろ、円らなその瞳の中に見えたのは“彼”を慕い、頼ろうとする好意の眼差しであった。

それを受ける“彼”自身にもいつしか庇護の感情を抱かせるに至ったその眼差しは、
“ずっと昔に失った大切な存在”がかつての“彼”に向けてくれたそれと、瓜二つだった。

だから、少年がどこの馬の骨とも知れぬ奴隷泥棒に攫われたと、憎々しげに“主人”から聞かされた時には、その安否から何年振りかという程に強く心を揺さ振られた。

それこそ、一歩間違えれば“主人”やその従者達を蹴散らしていたかもしれない程に。

幸いにして、“主人”がどれ程に恐ろしい人間であるか、逆らったりすればどのよう

な目に遭わされるかを「精神的にも物理的にも」刻まれているが故にそうはならなかったが、それで自らの目の前から消えた少年への内憂が消える訳でも無かった。

そんな心境にあつた「彼」が一日以上置いて屋敷にひよつこりと少年が戻つて来た時に心の底から安堵したのは当然の事であつたが、一方で、何故戻つて来た、と少年に問い質さずにもいられなかつたのもまた事実であつた。

その理由が、彼の全身に付けられた夥しい傷の数々だ。

小さな身体のほぼ一面に覆うように付けられたそれらの傷は全て彼らの「主人」によつて刻まれたものであり、何故に幼子にそのような酷い事の上無い真似をしたのかと訊けば、間違い無くこう返つてくるだろう。——^{アサシ}狂犬なんぞに盗まれて御主人様僕を心配させるような駄目な奴隷に、灸を据えてやつたんだ、と。

実際心配していたのだろう。「混じりモノの欠陥品」とはいえ、大枚叩いて手に入れたレアモノが、どここの馬の骨ともしれない奴隷泥棒、もとい暗殺者に奪われてしまう事を危惧する程度には。

そして、例えレアモノだろうが、高が奴隷なんぞの事を気に掛けてしまったという下らない自尊心から来る苛立ちを紛らわすために、当の少年レモが痛め付けられるという、分り切つていた筈の理不尽が発生したのだ。

そう、分り切つていた事なのだ。ほぼ毎日のように、躰だ何だといつて、出来る訳

が無い事を敢えてやらされてはそんな理不尽な暴力に晒されているのだから。

ここに戻ればそういう奴僕ぬぼくとしての扱いを受け続ける事になると、彼も当に悟っている筈なのだ。

だからこそ如何な幼い頭でもそうなるだろう事は容易く予想が付いた筈の少年に、しかしそれでも戻つて来た理由を問ひ質す術は「彼」には無かつた。

彼らは互いに喋る事が出来ないのだ。

「彼」はかつて受けた喉元の傷の後遺症から。そして少年は、「彼」のような目立つた怪我が無い事から、恐らくはこの世に生を受けた時から。

共に声を出し、言葉を紡ぐ能力を殆ど失っているのだ。

そういう偶然の共通点も、また「彼」が少年に寄せる情の沸き所だった。

と、そこで鉄仮面を固定する緒が掛かった「彼」の耳が、地表へ続く階段から響いて来る足音を捉えた。

ほぼ同じくして、少年の傷を撫でていた手を少年の手に回し、自らと共に「彼」は少年を立ち上がらせる。

その足音の主が、「主人」の下へ彼らを連れて行くために下りて来た「主人」の使いであること察知したからだ。

程無くして、錆び付いた鉄格子越しに自分達が身に着けるボロとはまるで設えの違う

服を身に着けた使いの者が姿を見せる。

その手に握られた鍵が固く閉ざされた地下牢の出入り口を開けるその時を、何も感じる事無く唯惰性のままに、少年と「彼」——ゴルタスはその場で待つていた。

机に広げた巻物——「チーシャン」の今週分の収入、近況報告等を纏めた報告書に最後の一文を書き終えて羽ペンを置くや、ドツと疲れがジャミルの双肩に押し掛かつて来た。

ともすれば、周りにいる従者達の存在も忘れて椅子の背もたれにだらしなく投げ出した身を任せていたかもしれない重たい疲労を、どうにか耐えてフウ、という溜息一つで済ませたのは高貴なる者としてそんな見つとも無い姿を下々の者に見せられないという彼のプライドがあつたからだ。

といつても、それで誰も目も気にせず一服したいという欲求まで消えるわけでも無く、すぐに彼は書齋から人払いをし、誰もいなくなつたのを見計らつて、今度こそ深い溜息と共に背もたれにドツカリと身を落とした。

勢いのあまり、一枚一枚を職人に天然石から削り出させた高級タイルが敷き詰められた床と、遠き東の「煌帝国」から各種コネを使って仕入れた高級木材（チヤンチン）で作らせたイスが擦れて悲鳴染みた軋みを上げるが、しかしジャミルの耳には届かない。

一仕事を終えた後の彼には、いつもそんな事に耳を傾ける余裕は無い。決まってその心境は下民が感じるような達成感ではなく、渦巻く鬱屈とした感情に満たされているからだ。

人がいうところの屈辱が、その感情の正体であった。

彼は不満なのだ。

今の一オアシス都市の領主という地位も。それに付随する各種業務も。

その地位を自分に任せ、その仕事を自分に与えた、国王という「自分より上の、自分を見下せる立場にある人間」にヘコヘコ従い、満足せねばならぬという、その一点において。

何故ならば、彼は「王」になるべき男なのだ。

人には上と下がある。「使う者」と「使われる者」が。

そして「王」とは「使う者」の最大級。その「王」となるべき自分を「使う」存在がいるという現状は、ジャミルにとっては忌々しい事この上無いのだ。

だが、そんな屈辱塗れの「領主」の日々ももう少しで終わりを告げる事となる。

この現状を打破し、いよいよ「王」となる日が間近に迫って来ている。

そう知った——教えてくれたのだ。

彼に「使う者」——「王」としての素質がある事を伝え、そのために必要な事を教え

てくれた「先生」の、その使いを名乗る者達が。
椅子からジャミルは立ち上がる。

視点の上がつた視界に映る、自らの書齋の内装——中央に敷かれた綿密な模様絨毯を中心に、左側に夜景を一望できる開けっ広げの窓、右と背後に書き溜めた巻物を含む書物類を収めた書棚、前方奥と後方左に出入り口が設けられている。

その内、右側の書棚の隣に立て掛けられている「それ」の方へ、ジャミルの足が進む。小包であつた。

一切を覆い尽くす汚れ一つ無い純白の布と、それを留める一本の細い黒帯によつて鎧われた細長い小包は、中身の正体を見極めるために一度封を解いた時と、たまに被つた埃を払う時以外は、ずっとその状態でそこに置かれている。

その横に鞆に仕舞われて立て掛けられた愛用のサーベルとそう変わらない大きさのそれを見下ろすジャミルの顔は、先程までのウンザリしたような表情から一転、期待に裏打ちされた喜色に満ちていた。

いよいよ「王」となる日が近づいている事を告げた「先生」の使いの者達から、そのために必要な「ある試練」に役立つようにその小包が手渡された二か月前の記憶が、その脳裏に再生されていた。

あの時は驚いたものだ。

丁度今のように与えられた政務を終えて淀んだ気分浸つていたところに、突然書齋のど真ん中に杖を片手に携えた二人の黒緑色のローブ姿が現れたのだ。彼らの片方の制止と、その後告げられた「先生」からの言伝が無ければ、賊かと慌てて掴んだサールでそのまま切り捨てていたところだ。

だが、お陰で「その時」に備えてタツプリと準備する事が出来た。

『お久しぶりでございます。そしておめでとうございます、坊ちゃん。10年前に申した通り、いよいよ貴方が「王」となる日が近づいて参りました。つきましては、そのために必要な最後の下準備を貴方は行わなければいけません』

使者の口越しに聞く十年來の「先生」の言葉。

もはやそれだけで湧き出してくる感激に珠のような笑みを浮かべたジャミルに続けて告げられた「下準備」の内容は、要約すれば今以上に、可能な限り、山のように奴隸を集める事だった。

それを別段不思議には感じなかった。

ジャミルにとつての、そして彼の中での「王」とつての「力」とは「使われる者」——その最たる奴隸なのだ。

だからこそ——使者越しの「先生」の助言もあつての事だが——この二ヶ月間、手段を選ばずあらゆる方法で奴隸を集めてきた。

薄汚さではどっこいどっこの貧民街スラムの連中を、部下やその時点での手持ちの奴隷達を使って、何日か掛けて一人残らず攫ったのも然り。

街中をうろつく姿が散見される程に奴隷商人を呼び寄せ、今までの買って来た数の倍以上の奴隷を買い漁ってきたのも然り。

その過程で足りなくなってきた奴隷の牢保置場所や奴隷そのものの購入資金を賄うために、街の収入の一部をチョロまかしてきたのも然り。

そして、どこからか湧き出て来た邪魔者アサシンを捕獲し、自分の奴隷カに加えようとしたのも、また然り。

最も、最後の「アサシン」の捕獲は依頼したフアティマーが手下共々殺された事で失敗。

加えて、名声が業界内に響き渡っていた彼が死んだせいで他の奴隷商も街のどこかに巢食う暗殺者の存在を恐れ、今日一日だけでも、元々屋敷に来るように呼び掛けていた者の3、4割から商談のキャンセルを言い渡された始末だ。明日には、恐らく5、6割、いや7割には増えるか。

そういう訳で、今後「チーシャン」に奴隷商を呼び寄せる事はほぼ不可能であり、そうなるどころから奴隷商の下なり奴隷競売なりに出向かなければ奴隷に手に入らないといつていい。

だが、そうすると使いの者を送るか、彼自身が出向かわなければならぬ。そして、戻つて来た時には当然何匹もの奴隸を引き攀れて来る。

それが何度も続けば、今まで騙くらかしてきた国王の目も流石に欺けなくなつてくる。疑われて査察でも入ろうものなら、不満でこそあれど何かと都合が良い領主の地位を、ここまで集めてきた奴隸を含めた財産諸共剥奪されかねない。せつかくここまでやつてきた下準備の意味が無くなる。

“先生”の使者から告げられた、“王”となるための試練——“迷宮攻略”の、その下準備の意味が。

そんな迷惑極まりない置き土産を残してくれたファティマーは、本当にクズという他無かつた。大人の“フアナリス”を捕獲して伝説だかなんだかを築いたその手腕を期待して、誰にも話してこなかつたこの偉大なる目的を教え、高い報酬も用意してやつていたというのに。

『所詮一介の奴隸商かよ！ おべつかと奴隸の躰方だけが一丁前の下民め！ いや、与えた責務を熟せないどころか、まんまと手下共と一緒に狂犬アサシに噛み殺されて、他の商人の足まで遠退かせてこの僕に不利益を生じさせたあのオカマは、いつその事自分が奴隸犬になつていれば良かったんだ！ 駄犬め！ ゴミクズめ!!』

唾を吐くどころか、滅多刺しにして汚物を塗りたくるかのようなその侮辱の数々は、

今朝方奴隸商達の商談キャンセルを部下から告げられるなり、憤慨のままにその部下を蹴り飛ばしたジャミルが放った言葉だ。

今にして思えば、アレは無かつた。

「王」となる運命にある高貴なる者に、赤い布を見た暴れ牛のようなあの怒り狂い様はあまりにも相応しくない。

目の前の小包を前に、今朝の自分の醜態をそうジャミルは自省する。死者への敬意などとは無縁な男だが、しかし「王」として選ばれるための努力は決して怠らない男でもあつたが故に。

そう、「王」とは選ばれる者なのだ。——「先生」がそう言っていた。

十年前の、彼の下を去る時も。

そして二か月前の、例の使者達の口を通した時も。

『この下準備をしつかりと積み、いよいよ貴方の前に訪れるであろう「彼」の導きのまに迷宮を攻略して貴方の「力」を示すことが出来れば、「彼」も貴方の素質が「王」に相応しいものであると認め、貴方を「王」にする事でしょう。「王」を導きし者——』

「偉大なる創世の魔法使い——「マギ」が」

記憶の中に残る使者越しの「先生」からの言葉を、自らの口に出して半濁するジャミ

ル。

その目で見下ろす小包——迷宮「王」になるための試練攻略のために「先生」が用意してくれた彼の新たな「力」と、それを渡す際に使者達が掛けてくれた鼓舞の言葉が、彼の笑みをより強くさせる。

『八芒星アル・サーメン アジエンタの計画書のままに』、か』

——差し詰め、僕が「王様」となる事は、その計画書アジエンタとやらに記された決定事項も同然、ということか。

実に縁起が良い、とジャミルはほくそ笑む。

確かにファティマーが死んだのを機に奴隷が手に入らないも同然の状態となつてしまった。しかし保管場所としていくつもの別荘が必要になる程には奴隷を仕入れる事が出来たのも確かではあるし、それでも足りないのであれば、最悪一般街の市民や、他所から訪れた旅人や冒険者を奴隷にしてしまえば良い。

どうせ貧民ばかりとはいえ市民の奴隷化は既に一度経験した事だし、一般街の連中も、それどころか貴族外の連中も、自分から見れば同じ下民に過ぎない。自分が「王」となるそのためには、いくらでも奴隷に出来る。

——そうさ。任されているだけとはいえ、僕は「チーシャン」の領主。実質この街の全てが僕の物。全てを奴隷に変えてしまえばいい。僕の「力」に。

「王様」となるこの僕の、「力」に」

故に、実質ジャミルがすべき事は唯待つだけだ。

彼の「力」を認め、「王」へと導いてくれる創世の魔法使いを。

恐らくは既に「チーシャン」のどこかにいるであろう「王」を導きし者が、自らの前に現れるのを。

日が近づく誕生日の祝いの品を貰う事を、只管に夢見て待ちわびる子供のように無邪気な期待を胸に。

黒帯に八芒星の紋章が描かれた「先生」からの贈り物を前に、満面の笑みを浮かべてじつくりと待つだけであった。

だが、その笑みは程無くして凍結する事と相成る。

「騒がないで下さい」

高いながらも静かな声色と共に、首下へ伸ばされた鋭い刃の切っ先によって。

「貴方に一つだけ訊きたいことがある」

そう遠くない内に訪れる筈の栄光への期待感に酔い痴れるあまり、すっかり忘却してしまっていた、「王」への道を阻む邪魔者によって。

「その小包は何ですか？」

知らぬ間に背後まで忍び寄っていた事に対する、驚きによつて。

「何故、貴方の下にこんな物があるんですか？　貴方は『奴ら』と関係があるというのですか？」

後ろ手に回されて関節が決められた右腕と首筋に突き付けられた隠し短剣によつて、目の前の愛剣を掴むことすらままならなくなつた事によつて。

「答えて下さい。貴方と『奴ら』の——『テンプル騎士団』との関係を」

完全に無力化され、大人しく従う事しか出来なくなつてしまつたところに背後の『アサシン』から投げ掛けられた、およそ意味の分からない質問によつて。

『王』となるべき自分が、奴隷以下の狂犬に自由を奪われているという事に屈辱を感じる間も無く、ジャミルの思考はその表情同様に凍り付いてしまつていた。

第九夜

“彼ら”が歴史の表舞台に現れたのは現在から72年前。

“聖地”と謳われた“アクティア王国”の都市“エルサレム”が、“レーム帝国”より派遣された第一次十字軍の征服下に置かれてから30年後の事だ。

“彼ら”を表わす紋章は、当時は一頭の馬に跨る二人の騎士であり、またその名を示す聖堂であり、そして“公式には”組織解体が為された現在でも“アクティア王国”や“レーム帝国”の人々には印象深く残る、白地の赤十字だった。

そう、公には“彼ら”は既に存在しない組織として認識されている。

故に、人々は知る由も無い。

現在も“彼ら”が存在する事も。

『“聖地”を訪れる巡礼者の警護』という表側の目的の裏に隠された本懐を達成せんがために、今も歴史や社会の裏側で暗躍を続けているということも。

そして、同時期に先代大導師によつて“教団”として組織が再編されるよりもずっと前から、常にその前に立ちはだかつて来た“アサシン”達と刃を交えて来たという事も。

“彼ら”の目的は唯一つ——“平和”。

それは、同じように全ての“平和”を目指す“アサシン教団”と同一の目的ではあつたが、しかしその手段が故に“彼ら”と“アサシン教団”が相入れる事はこれまで一度たりとて無かつた。

何故ならば、“彼ら”が“平和”を為す為の手段は“法”と“秩序”、そして民心の“支配”という、人の自由意思を尊ぶ“アサシン教団”の理念とは相反するものだからだ。

故に、“彼ら”と“アサシン”は常に争つて来た。

ほとんどの記録が失われ、その存在さえ真偽は定かでは無い遠き“理想郷”の時代から、“彼ら”の紋章が現在の黒地に白の八芒星に変わった数年前。そして現在に至るまで。

“自由と平和”を指標とする“アサシン教団”と、かつては“秩序と平和”を最大の目的とした“テンプル騎士団”との長きに渡る戦いの歴史は、連綿と続いて来たのだ。

屋敷の裏手、三階の壁際に面した窓の縁に一足跳びで貼り付くや、初任務の最期の標的を目前にして高鳴る胸を抑えつつ、中の様子を伺おうと目線をそこから覗かせた。

それによつて持ち上がった視界の中にモルジアナがその紋章を捉えたのは、本当に単なる偶然としか言いようが無かつた。

汚れ一つ無い清廉な白布に覆われた小包に巻かれた、細い黒帯。その上に刻まれた、白線の八芒星の紋章——かれこれ6、7年ほど前から「教団」でも確認されていた、「テンプル騎士団」の新しい紋章に間違い無かつた。

心中を埋めていた高揚感が、あつという間に驚愕と疑念に変わった。

彼の仇敵が今回の任務に関わっているなどという報告はとんと聞いた覚えが無い。

いや、それ以前に「騎士団」が裏で関わっているような任務が、彼女のような成り立アサシリーての一人前の初任務として宛がわれる事自体がまず有り得ない。彼らが関わっている

その時点で、マスターアサシン導師長やそれに近い階位にある熟練の「アサシン」に数人の補助を付けて挑んだとて不思議ではない、高難易度任務として扱われるべき案件と化するのだから。

恐らく、バートリー達も今回の件に「騎士団」が介在していた事までは掴めなかつたのだろう。9年前に「レーム帝国」が南方属州「キプロス島」にて暗躍していたところを「大導師」によつて阻止され、更に「レーム」にて解体が表明されて以来、「テンプル騎士団」の動向はすっかり掴み難くなつてしまつていた。

それこそ、遙か東の「煌帝国」を勢力下に置いているといふ眉唾な情報くらいしか無い現在の彼らが、こんな一介の、それも敵対組織の拠点が既に築かれているオアシス都

市の領主と繋がりがあるなど、目の前の小包のような明確過ぎる程の確証でも無い限りはまず思い付きすらししない。

現に、それを今日にしているモルジアナ当人ですら、小包の留め紐に付けられた八芒星の存在が幻では無いかとつい疑ってしまっている有り様だ。

だからこそ、ハッキリとさせなければいけない。

「テンプル騎士団」が、この「チーシャン」で一体何をしていたのかを。

完全に気配を遮断して近づく彼女に気付く事無く、例の小包の前で感極まったように何かを呟いている「標的」と、宿敵との関係を。

彼を消し、その目的のために寄せ集められた奴隷人々を開放するその前に、聞き出さなければ。

そうして背後を取り、首筋にアサシンブレードを突き付けて拘束した上から、本来する予定の無かった尋問に移ったのだ。

「あ、アサシン」？ な、何でここに？ 衛兵達は一体何を——」
「無駄口は止めて下さい」

質問よりも、嚴重に衛兵達に警備を行わせている筈の自らの屋敷に平然と忍び込んだ事の方に気を取られているらしいジャミルの首筋に、向けていたブレードの切っ先を更に近づける。

うつ、という呻き声と共に、ひくつく顎先が更に上方へ傾けられる。

「余計な言葉は要らない。貴方と『テンプル騎士団』に何らかの関係がある事は、その小包が証明している。貴方がすべき事は唯一つ——奴らと貴方にはどのような繋がりがあるのかを私に話すだけ」

アサシンブレードを展開したまま翻した左手の人差し指で小包を指し示したモルジアナに対し、ジャミルから返つて来たのは、

「な……何だよ『テンプル騎士団』って!? し、知らないぞそんなの! それに、コレが僕と、その『テンプル騎士団』との繋がりだど? ち、違う! コレは、『先生』が——」

「『先生』?」

怯えるあまりのたどたどしい口調で告げられた否定と、新たな第三者の存在。そして、その第三者たる『先生』こそが、この小包を彼の下に届けた者だということであった。

その事実から導き出される欠片は三つ。

その第三者は最低でも『先生』と呼ばれる程度にはこの男から敬意を寄せられる存在であるという事。

そして、その『先生』という者こそが、ジャミルと接触していた『テンプル騎士』で

あるという事。

更に、この悪徳領主が手段を問わず大勢の奴隸を集めていたその理由が迷宮攻略ダンジョンというある種の道楽のためだったという現状の見解に、誤りの可能性が出て来たという事。

それらの情報がモルジアナの脳内で組み合わさり、ある一つの推測を産み落とす。

「——もしかして、貴方が奴隸を集めていたのもその『先生』とやらからの命令だからですか？」

「迷宮攻略を目的とした奴隸集めはジャミルが自分自身で考え付いた事では無く、彼に『先生』と呼ばれる『テンプル騎士』の差し金ではないか」という推測を。

加えて、それに付随するもう一つの可能性も浮かび上がって来る。——この男は『先生』の目的のために利用されているだけではないのか、という可能性が。

そして、その可能性の裏付けは次の瞬間放たれたジャミルの返答で取れたも同然だった。

「そ、そうだよ。僕が『王様』となるために必要な下準備だから、『先生』が、やれつて」
ガチガチという歯が打ち合う音と共に耳に伝わって来たその言葉に、無意識に眉間に皺を寄せつつも、やっぱり、とモルジアナは納得していた。

二十歳は流石に過ぎたであろう大人が口にするには聊か幼稚過ぎる『王様』という響きに少々度肝を抜かれたが、ほぼ間違い無さそうだ。

迷宮ダンジョンを攻略すれば、あのアラジンから奪った笛のような「ジンの金属器」なる「秘宝」を始めとした金銀財宝が手に入る。その莫大な資金を使えば、自分の国を立ち上げる事も不可能ではない。現に、そうして国を作った王もいると、以前バートリから聞いた事もある。

恐らく、「先生」という「テンブル騎士」の目的はジャミルダンジョンに迷宮を攻略させて彼の国を作らせ、王となった彼を使って人々に「法」と「秩序」による「支配」を敷くための足掛かりとする算段なのだろう。

そして、下準備と称してジャミルに集めさせた奴隷人々は彼が王となるために迷宮ダンジョンに敷かれる鮮血の赤絨毯であり、「騎士団」がジャミルを介して動かす使い捨ての兵力兼労働力といったところか。

あくまで推測だが、しかし那样的から逸れた見解では無いという確信がモルジアナにはあった。

任務以外では碌に「マシヤフ」の外に出なかつたせいで彼女自身迷宮ダンジョンについてもそれほど無く、また「騎士団」が関与しているのも今し方判明したばかりの事である。だが、「テンブル騎士団」がどういふ連中かは幼い頃から多くの「兄弟」達から教わつて来た。

彼らは、彼らが望む「支配」を為す為なら何でもする。民から自由意思を奪い、隷属

を強いる事も。彼らの“支配”のために無辜の民を殺める事も、平然と。

尚の事、この男は消さねばならない。

任務や集められた奴隷の解放のためはもちろんの事、見えない所で蠢く“騎士団”の野望を潰すためにも。

後でバートリーに報告し、この男と接触した後の“騎士団”の動向を調査して貰うためにも。

自分の腕の中でガタガタと身体を震わせる標的を、今は、消そう。

尋問はここまでと、握り直した左手から伸びる刃をジャミルの喉元に突き込むためにモルジアナは力を込める。

木が小さく軋むような音と共に、不意に嗅ぎ覚えのある臭いが鼻腔を擦ったのはその時だった。

え、と思わず声を洩らす程の驚きと共に振り向いた左後方——すぐ傍の壁に開けられた書斎の入口の扉から、臭いの主が半身を覗かせていた。

例の奴隷の少年であった。

“チーシャン”の“アサシン”達が探し続けて、終ぞ発見出来なかったあの少年が、赤毛混じった茶色の短髪の下で、円らで特徴的な子犬のような目元に予期せぬ再開への喜びから来るのであろう笑みを形作って、白いフードの下のモルジアナの顔を覗き返し

ていたのだ。

「貴方、この男の——」

一方で、モルジアナは驚愕していた。

偶然ブーデルに暴行されているところを救っただけの、それも貧民街スラムから逃げ出したつきり全く行方の分からなかったあの少年が、まさか最大の標的に隷属を強いられる身であったなどは、夢にも思わなかった。

満面の笑みを浮かべる顔や、歓喜した犬の尻尾のように忙しなく振られる手にいつの間にもやら蚯蚓腫れや青痣が出来た少年の姿は、見開いた眼で彼を見返す今のモルジアナに、余計な手合いに即時対応出来るように張っていた警戒が緩んでいる事に気付かない程の驚きを与えていたのであった。

それ程までの驚きが故に、勝手に動いた口が紡ごうとした、この男の奴隷だったの、というモルジアナの台詞は、しかし最期まで紡がれる事は無かった。

「やれ！ ゴルタス！」

不意に放たれた、誰かに何かを指示するような“ジャミルの叫び声と、ほぼ同時にモルジアナの頭上の壁から現れた刃であった。

海面を破り、波を割りながら迫る鮫の背鰭のように、漆喰の壁を易々と切り裂きながら自身目掛けて猛スピードで迫るその鉄刃に。

少年に気を取られていたモルジアナの反応は明らかに遅れてしまっていた。

ゴルタスのボロのズボンを掴みながら歩いてきた少年が不意に走り出したのは、すぐ左隣りまで主人の書齋の入口が近づいて来た頃の事だった。

最初は妙だと思った。普段なら、その先で待ち受けている主人を恐れて、近づくに連れて震えが強くなる身体をゴルタスの背後に回り込ませているところだ。だというの、そつと彼の身長 of 2 倍半はある両開きの木製扉を開いて、その奥へ半身を競り上げらせる前に見えた少年の横顔は無邪気な笑みすら浮かべていた。

何故かと仮面から覗く左目を細めたゴルタスだったが、その理由を彼は程無くして目にする事となる。

壁越しに聞こえた主人からの命令と、それに思考よりも先に反応する彼の身体が取った行動によって。

「やれ！ ゴルタス！」

耳に伝わったその指示を頭が理解した時には、既に腰に差していた筈の愛剣を書齋と廊下を隔てる壁に根元まで突き刺していた。

黒鉄色の太い刀身が、間髪入れずに漆喰の壁をじっくり煮込んだ野菜のように裂きながら降りて行く。

赤い毛飾りが後端にあしらわれた曝し巻きの柄を握るゴルタスの筋骨隆々の腕によつて、彼の意思とは無関係に。

そうして床まであつという間に刃先が迫り着くと共に、縦一文字に切り裂かれた壁が耐え切れずに罅割れ、細かな瓦礫となつて碎け落ちる。

その瓦礫によつて立ち込めた砂埃の向こうに、ゴルタスの左目が捉えた。

書棚の傍で荒い息を吐く主人——ジャミルの猊視と、彼の剣によつて周囲の壁が文字通り消え失せた事により体裁が保てなくなつた入口の前に立つ少年の輝く視線を受けながら書齋の奥へ音も無く飛び退く、白いローブを。

一度は少年を連れ去つた事を激昂したジャミルから聞かされた、例の「アサシン」の姿を。

「ハア……ハアツ……よ、良し。良くやつたぞゴルタス！」

後でトウモロコシをやるう、と彼特有の労いを掛けつつ書棚の横に立て掛けていたサーベルをひん掴むジャミルに身体が覺えたままに領きを返す傍らで、すぐ傍の少年と、奥の壁を背に左腕を身体で隠すような構えを取る「アサシン」を交互に見て、ゴルタスは悟つた。

どうやら、少年のあの目の輝きの正体は好意的な相手との再会の喜びから来るものであり、その相手は驚くべき事に眼前の白ローブらしい。

相手が何人もの人間を葬った悪名高い暗殺者である事は、外の情景など見る事の適わない屋敷の地下牢に仕舞われている事の方が多し奴僕ぬぼくの自分達でさえ知るところ。そのような者に、一体如何な経緯の下にそのような眼差しを向ける程に懐いたのか？

いやそもそも、それほど悪党が何故殺めたり売ったりする事も無く、少年を生かし、手元に置いておいたのか？ 少年が喋れないから助かったようなもの、逃げられた挙句何処とも知れない隠れ家の位置を知られる危険性くらい考え付きそうなものだが……。

疑問は尽きなかったが、しかしゴルタスは思考を途切れさせざるを得なかった。

「よくも僕にこんな無礼を働いてくれたな、アサシン！」 狂犬の分際で！ だが、それもここまでだ！ さあ行け、ゴルタス！ そいつを生け捕りにして、僕が王様になるための一駒に加えるんだ！」

怒声混じりの指示を叫ぶジャミルの手で、引き抜かれたサーベルが指揮棒のように気取って振るわれる。

細く鋭い銀の刀身が書齋の灯りを受けて煌めき、仮面越しの左目を差した。

途端に背筋の毛という毛が逆立つかのような悪寒に襲われた次の瞬間には、大きく振り被った大剣のままに「アサシン」目掛けてゴルタスは飛び掛かっていた。

主人の指示は生け捕り。となれば、腕か、足といったところか。

そんな予測をしながら、自らの意識と無関係に振り下ろす黒鉄の刃の軌跡を眺めていたゴルタスだったが、生憎と予想は外れに終わる。

叩き付けた切っ先が高級絨毯の敷かれた床を砕き、巻き上げるその数瞬間に、*「アサシン」*の姿が剣の進行ルートから消え去っていたからだ。

速い。

渾身——文字通りの意味で彼の意思とは無関係に身体が動いていたため、厳密には違うが——と言っても過言ではない絶好の踏み込みと力の込め具合で放たれた今の一撃は、そこら辺の衛兵程度なら視認する間すら無い速度を持っていた。その一撃を避けるとは。

以前、*「アサシン」*の正体についてジャミルから*「フアナリス」*とかいう南方の戦闘民族だと、半ば決め付けられるような自慢げな推測を聞かされた事があったが、もしかしたらその憶測は満更間違っていないのかもしれない。

とはいえ、回避した後の行き先は分かっている。

床に突き立ったままの刀身を手首ごと捻り、刃を上に向けるや、間髪入れず腰の捻りを加えた大振りを右後方目掛けて叩き込む。

狙い通り——その結果を呼び込むために身体が動いた、という意味での——、愛剣の太い刀身と、再び噴き上がった床の破片が、ゴルタスの横を通り抜けようとしていた。

アサシン”の進行を妨害する。

視界から消えた“アサシン”をゴルタスが探しているその隙を狙い、彼の背後にて変わらずサーベルの刀身による示威を続けるジャミルの暗殺を済ませようという魂胆だったのだろうか。

成程、あれ程の速さを持つてゐるのならはその魂胆は成功していただろう。——相手がそこらの衛兵程度だったなら。

だが、ゴルタス相手にその程度の策略は浅はかといひようが無い。

何故ならば、彼もまた北方の少数民族の出身。“フアナリス”にこそ劣れど強靱な血筋と、類まれな才能を持つて生まれた強力な戦士なのだ。

元より体捌きそのものは鈍重な方で、且つ奴僕ぬぼくの身に堕ちて長い月日が経つといえど、その怪力と劍の腕、肉体に刻まれたセンスは未だ衰えていない。

仕方なく、元いた部屋の奥側へ再び飛び退く“アサシン”へ、即座に横へ傾けた刀身で追い打ちを掛ける。

本来なら、降り出した次の瞬間には腰から上と下が泣き別れになつていてもおかしくない一撃も、やはりそうなる一瞬前に避けられた後だった。

——骨が折れそうだ。

返す刀でもう一度逆振りの追い打ちをし掛ける傍ら、徐々に焦燥が募りつつある心中

でゴルタスは眩く。

繰り返して攻撃を回避する「アサシン」に対する焦りでは無い。そもそもが、「アサシン」への攻撃行為自体、彼が望んでやっている行動では無いのだ。

ゴルタスに真に焦燥を感じさせているその対象は、

「何やってんだゴルタス！　ちゃんと当てるよ！　このゴミー！　木偶の坊!!」

彼の背後という安全な場所から「アサシン」との戦闘を、抜き身のサーベルを片手に観戦する主人——ジャミルだ。

彼の命令は生け捕り。

ただ叩つ切るだけでも難しい相手である以上、その指示は理不尽という他無い。

だが、達成させなければならぬ。

それが出来なかつた時、待っているのは今浴びせられている罵声とは比べ物にならないおぞましい罰のみであり、彼の罵倒が響く度にその事実を「疼き」という形でしつこく知らせて来る鉄仮面の内の顔が、次第にゴルタスの精神を蝕んでいく焦りの理由であつた。

だが幸い、というよりはむしろ疑問なのだが、この状況下で彼にとって有利に働いている要素が一つだけあつた。

当の相対する白ローブの動きだ。

どういう訳か、今のところ攻撃を加えて来る素振りは見えない。やつて、こちらの隙を狙って背後へ駆け抜けようとするくらいで、むしろゴルタスとの戦闘を避けようとしている節すらある。

狙いがジャミルである事も、尋常で無い素早さを持っている事も既に分かっている。それを考慮すれば、彼から逃れつつジャミルの抹殺を優先する事自体は何ら不思議ではない。

だが、それだけではないような気がする。

そうゴルタスに感じさせたのは、かつては戦士として培った直感であり、また目深く被られたフードから見え隠れする、殺意はおろか敵意さえ碌に感じられない暗殺者の視線である。

そして、視界の隅で先程まで打って変わった不安げな表情で彼と「アサシン」を見る少年にその答えがあるのではないか、とも思えた。

とはいえ、今は「アサシン」の真意を確かめる暇は無い。

大きく身体を捻って引き戻した剣を、そのまま左隣を抜けようとした「アサシン」の前方へ叩き落とし、砕いた床を宙に舞わせる。

そんな風に変わらず自分を放って主人へ迫ろうとするしつこい暗殺者への、息つく暇も無い対処と共に募る焦りに、いよいよゴルタスから思考する余裕が失われてきたため

だ。

眼前に振り下ろされた大剣の流線の先が垣間見えた。

それと同時に後に飛び退いたほんの数瞬後に、漆喰の床が爆音を伴って四散する。

これで四度目となる破片の雨の追従を一発も受ける事無く書斎の奥側に足を着けたモルジアナだったが、しかし変わらない無表情の奥で彼女もまた焦り出していた。

状況の不利さ故だ。

戦場は四方が壁で区切られた狭い——といっても、一般街の市民から見れば十分に広い——書斎で、その端々に立つ彼女自身と標的の中間に立ち、範囲の広い得物と巻き上げた瓦礫、自らの巨体で道を塞ぐ鉄仮面の大男。

唯でさえ「フアナリス」の脚力に任せた俊敏さを活かし難い僅かな空間の、そのど真ん中に腕の立つ護衛を配置されたとあっては、流石の若鷲も攻め手を欠かざるを得なかった。

いや、厳密に言えばより簡単に確実な必勝法がある。——鉄仮面を斃し、その勢いのままに標的を暗殺すればいいのだ。

確かに鉄仮面は強敵だが、不可能では無い。

これまでの僅かな交戦で、かなりの剣の腕と怪力、それに本領を發揮できないとはい

え「フアナリス」の動きを追えるだけの動体視力と直感を備えているのは既にモルジアナ自身も理解した事。そこから繰り出される一撃をまともに受けようものなら、身体のどこかが斬り飛ばされる事は避けられないだろう。

実際、腰に巻いている赤いサツシユの端が解れ一つ無く切れる程度で済んだ最初の不意打ちも、ほんの僅かでも対処が遅れていれば確実に頭から股までが両断されていた。

されど、強力無比と言わざるを得ないその攻撃は、避ける事自体はそう難しくは無い。現に、今も紙一重と言つていいタイミングで避けて見せた。彼との戦闘に集中しさえすれば、恐らく鉄仮面を葬る事はそう難儀では無いだろう。

しかし、そこまで分かつていても、なお鉄仮面との戦闘へとモルジアナは踏み込む事が出来ないでいた。

何故ならば、ジャミルへの道を阻む、ゴルタスと呼ばれたその鉄仮面の大男は「奴隷」——救うべき「罪無き者」であり、「アサシン教団」が定める「アサシン」の三つの掟の一つ——『罪無き者を殺めるなかれ』がある限り、絶対にゴルタスを殺めるようなマネは出来ないからだ。

しかし、この掟が彼を殺す事が出来ない理由の全てとするには少々語弊がある。刃を向けるという罪在りし行為を、既にゴルタスは行っているからだ。

それでもなおモルジアナが殺す事を拒むのは、彼女が考えるところの「罪無き者」の

範囲から、まだ彼が逸脱していないからだ。

どこまでが「罪無き者」として認められる範囲か、という話題は現在でも「教団」内では尽きない話題の一つだ。無知や境遇から罪を犯さざるを得なかつた者ならまだ救いがあると主張する者もいれば、どんな理由があろうと罪は罪であり、犯した者は等しく裁かれるべきだ、と断ずる者もいる。

そしてモルジアナは前者であり、『当人の意思に関係無く行つた罪であるならば、それはもはや罪では無いのではないか』という、良く言えば寛容、悪くいえば甘い自論を持っている。

その主張の出所が、幼き日の奴隷に墮ち掛けた過去から来ているのはいうまでも無い。

あのまま「大導師」に救われる事無く奴隷になつていけば、少なからず自らの意思とは無関係に罪を犯す日が来ていた事を想像するのは容易く、それを理由に罪在りし者として扱われるのはあまりにも理不尽だという結論に至るのも、また容易であつた。

故に、奴隷という自由意思を鎖に縛り付けられた人々のほとんどは、その時点で少なくとも彼女が認識するところの「罪無き者」なのだ。

勿論、それとは別に当人が好き好んで罪を犯しているのであればそれは別の話であるが、それでも、やはりあのゴルタスという大男はモルジアナにとつての「罪無き者」の

範疇に収まっていた。

目を見れば一目瞭然だ。

鉄仮面の左側に開けられた穴から覗くその目には、最初から殺気や敵意の類がまるで感じられない。いや、それ以前に何も宿っていない。

まるで人形の瞼の内に嵌められた硝子玉のように無機質な目だ。

奴隸の目だ。

犬畜生のように鎖に繋がれ、人を人と思わない酷い扱いを受け続け、そうする内に人間が持つべき当たり前の尊厳や自由意思を忘れ去ってしまった人間がする目だ。

今回の任務過程で幾度と無く目にして来た、唯主人の意のままに行動する事だけを徹底的に刷り込まれた、救うべき人々の目だ。

そして、血走り出したそれによく見え隠れし出した焦燥と怯えの出元は、
「いいぞおゴルタス！ そのまま『アサシン』を捕まえるんだ！」

自分が現在進行形で狙われている事を忘れたかのように、剣闘士の試合を被害の及ぶ事の無い客席から観戦するようなノリで抜き身のサーベルを振り回すジャミルである事は明白であった。

傲慢非道、且つ「奴隸を甚振って楽しむ変態野郎」と自領の民達からも密かに揶揄されるようなサディストで、加えてあのように強力な技能と怪力を併せ持った筋骨隆々の

大男が完璧に手懐けられている。

そんな標的の人間性とゴルタスの振舞いを見れば、考えただけで吐き気を催しかねないような壮絶な扱いを受け続けて来ただろう事は想像に難くない。

そして、粉碎された部屋の入口を境界にジャミルと逆側に立ち、モルジアナとゴルタスを交互に、不安げに蚯蚓腫れの浮いた顔で見守る少年も。

この場にはいない、ジャミルによつて集められた大勢の奴隷達も、また……。

そう思考しつつも、降り掛かって来た大剣の横薙ぎを再び後退してモルジアナはかわす。

「ハッハッハ！ どうした、アサシン、め！ もう逃げ場なんか無いぞ!」

着地するや立ち上がった背に感じた壁の感触と同時に、ジャミルからの野次が降り掛かって来る。

尋問していた時の震え声とは一転した、尊大さが雄弁に表れた、勝ち誇つたような声色が、ただでさえ癪に障る。

ましてや、イヤに饒舌になったところを見るに、恐らく平時からしてそう変わらないのだらうその口調で、

「流石の『ブアナリス』も、この僕の力ゴルタスには適わないみたいだな！ 今すぐ僕への無礼を謝罪して奴隷になる事を誓うなら、止めてやらない事も無いぞお!」

最も嫌う言葉を聞かされたとあつては、突発的に自らの足下に罅割れた凹みを作る程のイラつきがモルジアナの内に込み上げるのは当然であり。

結果、それによつて彼女の籠が少しばかり外れるのも、また必然の流れといえた。

ふう、と一つ溜め息を吐く。

諦めから来る溜め息だ。

罪無き者を殺す事は何が合つても認められない。が、傷つけるだけならば一応許容される範囲だ。

それでも罪無き者を傷つけるようなマネもしたくないというのが優しさから来るモルジアナの偽り無き思いだったが、それをすつぱりと捨て去る事にしたのだ。

このままではジリ貧もいとこだ。

加えて、これだけ盛大に暴れている以上、もうそろそろ騒ぎに気付いた衛兵達がここに集まつて来てもいい頃——いや、奥から漂つて来ては次第に濃くなつて来る汗と鉄の臭いから省みるに、既にこちらに向かつて来ている。

邪魔が増えるのは好ましく無い。そうなる前に、今度こそジャミルを消して退散せねば。

そのために、

「……………めんなさい」

これから怪我を負わせる事になるだろう鉄仮面に一言だけ謝罪を呟いた、その刹那、右足の裏を沿わせるや、スタート台として蹴り抜いた背後の壁の瓦礫と土埃を背に、ゴルタスの巨体目掛けてモルジアナは飛び込んでいた。

一拍遅れ、即座に振り上げた剣で袈裟切りを繰り返すように出そうとするゴルタス。

合わせ、ローブの裾とスカートを翻らせて右足を上げるモルジアナ。

鉄刃を握る拳が、獅子の腹を穿つと謳われた狩猟民族の爪先が。

人の目に捉えられぬ高速の流線と化した互いの武器が、一瞬の間に迫り合い、ぶつかり合った。

時を少し遡り、〃チーシャン〃の貴族街。

ほぼ中心部に位置する領主邸の書斎に忍び込んだ〃アサシン〃と、その標的となった領主にして彼らの雇用主であるジャミル所有の奴隷が目下戦闘中である事等知る由も無い衛兵達は、現在別の賊を追っていた。

そして今の彼らは、追われる側であった。

貴族街の南端、一般街との境目にほど近い一帯の上空を飛行する〃魔法のターバン〃の進行方向を腰を下ろして見据えるアラジンと、その背後で、ヒヤアアアアアアッ、と情けない悲鳴を上げて慌てふためくアリババは、

「撃てエッ！ 空飛ぶ賊だ!!」

真下の建物の上に立つ衛兵達から火矢を射掛けられる側であった。

「ああアラジンっ！ につ、逃げようっ！ こんなトコ飛んでたつて碌な事ねえって！

矢しか飛んで来ねえって！ いい今すぐ逃げよう頼むからあ!!」

四方八方から飛来してはターバンの上を照らし上げる矢の群れから身を守るために屈んだ姿勢で、目尻に涙を浮かべながらのアリババの懇願を、しかし首をゆっくり振つてアラジンは拒否する。

「ゴメンね、アリババ君。それは出来ないよ」

「何でえ!？」

「この先に、『アサシン』のお姉さんがいるんでしょ？ だったらきつと、ウーゴくんもいる」

金属器ごと彼女に奪われた囚われの身の親友も、あの白いローブの少女の下にいる可能性が高い。

ならば、行くしかない。

「ウーゴくんが待っている。助けるんだ。僕達の手で、ウーゴくんを……!」

『友達』を、救うしかない。

そういう彼なりの決意を秘めた言葉が、確かに狼狽し切り、悪い方向に沸き立ってい

たアリババの心境を押し留め、その場に縫い止めるに至ったのは、自身すらまだ知る由も無いアラジンという少年の正体が故か。

まあ、即座に、いやいやいやいや、と慌ただしくアリババが頭を振り回すまでの一瞬間の間に過ぎなかつたが。

「いやだからあ！　今はマズイつて、下見ろつてえつ！　そこから中から衛兵ヘイタイに弓で狙われてるつてえつ！！　火い着いた矢が当たる——」

再び慌てふためいたアリババがそこまで叫んだ時だ。

ボスリという音が、アラジン達の背後から聞こえて来た。

柔らかい布に高速で何かが突っ込んで来たようなその音に、まるですぐ背後に迫る死神の気配に慄ついたかのように青ざめた顔を引き攣らせたアリババと共に、アラジンは振り返った。

幾重にも波打つ白布の海面に、灯りが灯っていた。

“魔法のターバン”を、火矢の先端が貫いていた。

「当たったアアアアアアアアアアッ!!」

絹を裂くようなアリババの絶叫が貴族街の夜空に轟く。

それを合図とばかりに、矢の穂先に巻かれた油塗れの布からターバンに空いた穴の周囲へ、一気に火が広がった。

「イヤアアアアアアアアア！ 燃えるううううう！！」

続いて響き渡るアリババの二度目の悲鳴。

そして、そんな彼と共に自らのターバンが赤々と燃え出す様を目にしたアラジンも、こればかりは目を剥かずにはいられなかった。

恐慌しつとも脱いだ上着を火元に叩き付けて消火活動を始めるアリババを後に、前方を向き直るや更にターバンを急がせる。

しかしながら、僅かな光源しか存在しない闇の中を飛行する白布など——ましてや、それ自体が燃える事によつて数少ない光の一つと化しているとあつては、目立たないワケが無い。

故に、先へ進めば進む程ターバンを発見する衛兵は増え、放たれる矢は数を増し、比例してターバンに食らい付く火剪の数も除々に増加していく。

そうして、最初に「魔法のターバン」を射ぬかれてからもう時期5分。

4 m四方程度に広がっていたターバンの後三分の二が燃え広がった炎によつて飲み込まれてしまつてゐるのは、必然であつた。

「お、おおういどーすんだよアラジン!? も、もうすぐそこまで火が迫つてるぞっ!? 俺達まで燃えちまうぞこのままじゃっ!!」

否、その前に遙か真下の地表へ激突してしまうだろう。

最も、今はまだ火が回っていない前方三分の一の無事な布地の上でしゃがみ込み、半泣きで絶叫するアリババと、彼にしがみ付かれ、揺さ振られつつも冷や汗の流れる顔を進行方向から逸らさないアラジンが行き着く先に変わりは無い。

闇夜を大火と共に猛進する彼らに差し伸べられているのが救うべき親友の手では無く、眼前に広がる黒よりもなお暗い冥府への誘いである事に、何ら変わりは無かった。

……何も起きる事無く、唯真下から雨霰の如く放たれる矢から逃れんと、当ても無くターバンを飛ばすだけであつたなら、だが。

「……ッー」

何か良い手は無いか。どこか逃げ切れる所は無いか。——そう彼なりに思考と視界を巡らしていたアラジンの青く大きい双眸の先で、*“それ”*は起こつた。

*“それ”*が起こつたのは彼らの進行方向の右斜め前。ターバンの真下で幾つも並んではちよつとした森を築き上げる屋敷の中でも、一際規模の大きい屋敷。

周囲のどの家屋より優雅且つ強い威容を放つその屋敷の屋根が、爆発した。

正確に言えば、勢い良く屋敷の中から飛び出した何かによつて屋根が突き破られ、四散したのだ。

その光景がアラジンの網膜の奥で像を結んだ一瞬の後、厚い漆喰が木端微塵と化した事による轟音が彼らの下まで飛び込んで来た。

「こゝ、今度は何だあつ?!」

音により屋敷の方へ振り向いたアリババが再三に渡つて叫ぶその頃には、既にアラジンの眼はそこを見据えていた。

月から受けた光を鋭い煌めきに変えて、ターバンとより若干低い宙空で回転する何かの、その下でぽつかりと開いた屋敷の屋根の大穴を。

既に炎が「魔法のターバン」の四分の一にまで浸食している。

衛兵も、未だに彼らから放たれては向かつて来る矢の数も、もはや数えるという発想が即時霧散する程に膨大な数と化している。

一刻の猶予も無く、またアラジンにも躊躇は無かつた。

「急げ! 魔法のターバン!」

土埃が煙となつて噴き上がっている穴を指差したアラジンの意思のままに、舞い上がる炎から零れ落ちる幾つもの火の子とアリババの戸惑いの声を尾に、その時点で出せる最高の速さを持つて白布が闇の中を疾駆した。

モルジアナとゴルタス。北と南という違いはあれど、互いに強靱な血筋を受け継ぐ少数民族の末裔同士のぶつかり合い。

その決着は一瞬の内に、書齋の屋根が碎かれる轟音と共に着いた。

渾身の爪先蹴りを柄尻に叩き込んだ大剣が、屋根を突き抜けてゴルタスの右手から宙高くへ消え失せた。

と同時に、衝撃の走った手を思わず押さえるという隙を見せた彼の腹へ、すかさず蹴り上げた右足を下ろすや軸足にし、間違つても殺さぬように手加減した左回し蹴りを叩き込んだモルジアナの勝利であつた。

傍から見れば、特にその一部始終を観戦していたジャミルからすれば、呆気無いにも程がある結末だつただろう。それこそ、予想だにしない結果にあんぐりと開けた口から、もう一刻もすれば今まで以上の罵詈雑言を喚き立てるだろう程に。

だがしかし、打ち据えられた腹を抑えてその場に跪く使えない駄奴隷犬に批難中傷の言葉を浴びせ掛ける暇は、もはや彼には与えられていない。

今の彼に与えられているのは、

「よ、寄るなっ！ こつちに来るなあっ！ 狂犬めえっ!!」

あつという間に目前まで迫つて来た死を前に、両手で握つたサーベルの切っ先を震えさせながら、威嚇にもならない無意味な虚勢を張る事だけ。

その様子を、膝を付いてなお彼女の背よりも大きいゴルタスの巨体を避けながら冷たい目で見据えるモルジアナのすぐ前に、赤み掛かった茶色が飛び込んで来た。

奴隷の少年だつた。

あの少年が、特徴的な目元に涙を溜めたもの憂げな表情で、俯くゴルタスの下に駆け寄って来たのだ。

どういう理由か二人の間に言葉は無かったが、しかし鉄仮面の男の安否を、少年が心の底から案じているという事が、その身ぶり手ぶりだけの遣り取りから如実に伝わって来る。

改めて、罪悪感が襲って来た。

しかし、その一方で、やっとここまで来たという達成感も、モルジアナの心中に生まれていた。

思えば、ここに来るまでに色々な回り道をして来た。

ブーデルを始めとした、標的に関わる奴隷商への実りの無い尋問と、彼らの下に繋がれた人々の解放を続けて来た。

求めて来た標的の目的と、“チーシャン”から奴隷商を断絶するための最高の見せしめとして選ばれたフアティマーからの予期せぬ告白と侮辱に、心をこれ以上無く乱れさせもした。

後、二人の一般人の少年の奴隷泥棒の罪を被ってやったり、その片方のために“秘宝”を奪うといった、ちよつとしたアクシデントに見舞われたりもしたか。

この街に来てからまだ十日。しかしながら、その短い間に随分と濃い経験をしてきた

気がするこの任務も、いよいよ終わりの時に辿り着こうとしている。

ジャミルの目的を、その裏に居座る「騎士団」の野望を潰し、既に解放した、あるいは少年やゴルタスを含めた、まだジャミルの下に繋がれている奴隷達人々の下に自由と平和を取り戻してやれる、その時が。

——待つて、もう少しだから。

心中でそれだけ告げ、ゴルタスへの心配に手一杯でこちらに気の回っていない少年の頭を一撫でしてから、再び視線をジャミルへ戻す。

既に書齋の外、廊下の方から喧騒が聞こえるようになっていた。すぐそこまで衛兵が迫っているのは明らかだ。

悠長に構えている暇はもう無さそうだ。——今すぐ、一撃で仕留め、終わらせよう。

左手の小指を引き、腕当てに据え付けられた鞘からアサシンブレードを抜刀。小さくも小気味の良いスライド音を耳にしつつ、ジャミルへ狙いを定める。

標的は完全に怯え切っている上に隙だらけだ。反撃の心配はほとんど無い。出来て、虚勢を張り続ける事くらいなものだ。何も問題は無い。

そう判断するや、一端腰を下ろし、足のバネを溜め込む。

そして次の瞬間、溜め込んだ足の力を解放すると共に瞬時に距離を詰めた標的の左胸——心臓を、モルジアナのアサシンブレードが一突きにし、永劫の眠りへと突き落とす。

た。

「ギヤアアアアアアアアアア!!」

……そうなる、筈だった。

そうならなかったのは、不意に感じ取った「異変」と叫び声に踏み込もうとしていた足をモルジアナが止めたためであり。

その「異変」——つい最近嗅いだ覚えのある臭いのある出所達が、轟々と燃え上がる炎と共に、屋根に開いた大穴から書斎の中に飛び込んで来たからだ。

「……何で……」

「彼ら」の内の、片方が両手を床に着いた四つん這いの格好でその場に着地し、もう片方は情けない悲鳴を上げ続けながらゴロゴロと奥の方へ転がって行く。

前者は長い三編みを垂らした青い髪の少年。後者は前髪が一束跳ねた金髪の少年。

二人の少年の姿を、つい昨日彼らと行動を共にしたモルジアナが見間違えるワケが無い。

「何で……貴方達が、ここに？」

ましてや、立ち上がるや彼女の下に歩み寄って来る青い髪の少年の事を忘れるワケが無い。

「教団の外の人間」でありながら好ましいと感じられる人間性を持ち、尚且つモルジ

アナがその手から“ジンの金属器”なる“秘宝”を奪い取った、その人なのだから。
「笛、返して」

驚愕のあまり、思わず言葉にしたモルジアナの問い掛けを無視するように、青い髪の少年——アラジンが小さな手を突き出した。

屋根を突き破つてからずっと高空で回転していた剣が、重力に従って未だ跪く主人のすぐ手前に突き立ったのは、それとほぼ同時であつた。

第十夜

赤々と燃える炎にどンドン食われていく足場の布に慌てふためいていた少し前の事など、自らが置かれた現状に比べれば比較的些細な事であった。

突如爆裂音と共に屋根が弾け飛んだ屋敷の中へ相方共々飛び込むや、掛かった慣性を殺し切れずに転がったせいで鈍い痛みの中へ走った身体に呻きつつも持ち上げた視界に飛び込んで来たその姿に、アリババはそうとしか思えなかった。

すぐ背後の壁に何故か開いている大穴を挟んだ左隣で、整った顔をあんぐりと開けた口で台無しにしている、今の彼が最も会いたくない男がへたり込んでいた。

「チーシャン」領主の間の抜けた横顔が、「魔法のターバン」が飛行するままに飛び込んだ「そこ」がこの街の最高権力者の邸宅であるという、全く知りたくなかった恐ろしい事実を瞬間的に悟らせる事を、アリババに強いていたのであった。

「げっ……!?!」

奴隷を甚振る事が趣味の悪徳領主にして、現在アリババが抱えている借金の返済先たる彼の男が、飛び込んだ屋敷の中にいる。

その状況から連想される事実は至つて単純——自分達が今いるこの屋敷の主は領主

であるという事。

そして、偶々通り掛かったところに屋根に大穴が空いたので飛び込んだ、というだけのアリババ達が彼からどう見えるかも至って単純。——不法侵入者。つまりは賊だ。

(や、やべえっ……！)

相手は奴隷を甚振って楽しむと悪名高い、この街の頂点。

唯でさえそんな危険人物に借金している身だというのに、この上不法侵入の罪に問われるなどいよいよ洒落にならない。奴隷どころか、処刑ものである。

しかも間の悪い事に、

「旦那様ッ！ 御無事でするか旦那様アッ!?」

背に矢筒と弓を背負い、赤いサツシユを巻いた腰からサーベルを下げた強面の男達が、壁の大穴から大挙して押し寄せて来た。

屋根という屋根から火矢を射ってきた連中とほぼ同様の装備を身に着けた、衛兵達であった。

「!? 何だこの有様は……！ 一体何が!？」

「むっ? そこの小僧! 貴様何者だ!? どうやってここに入った!？」

「おい見ろ! “アサシン”だ、“アサシン”がいるぞ! この部屋もきつと奴の仕業だ!」

——「アサシン」だつて？

部屋の奥の方を指差す衛兵の言葉に、え、と声を洩らしたアリババはそちらに目を向
けようとしたが、そんな余裕は無かった。

「何だど!?」ならば、この小僧は「アサシン」の仲間か!!」

衛兵の誰かが放つた言葉が、雲行きが急激なまでに怪しくなつた事を否応無く彼に知
らせる。

「おのれ賊め! 我らの目の届かぬ所で旦那様を害そうとはふざけたマネを!」
アサ
シン「諸共、この場で叩き切つてくれるう!」

急転する状況に逃げる事はおろか、それを順序立てて整理する間すら見失つてしまつ
たアリババの頭上に、細長く湾曲した鞘から引き抜かれた衛兵のサーベルが掲げられ
からだ。

間髪入れず、重苦しい光を放つ刃が目を丸くする彼の眼前目掛けて降り掛かつて来
る。

それに対し、涙目で情けない悲鳴を洩らしつつも、即座に腰元に伸びたアリババの右
腕もナイフを引き抜く。

淀み無く、身体が覚えたままに行われる応戦体勢への移行は目を見張るものがあつ
た。

が、反面その行為が孕む危険性にアリババが気付くのは聊か遅かった。

相手は領主直属の衛兵。それに刃を向けるといふ事は、例えそれが謂れ無き罪による処刑への正当防衛だったとしても、すなわちその主たる領主に刃を向けるも同義だ。本格的に領主を敵に回す事になる。

だが、突き出したナイフを引つ込める指令を腕に与える暇はもう無い。

ナイフの刃先が迫るサーベルの刀身とぶつかり合つて火花を散らし、そしてアリババの顔が絶望一色へと染まる時が、今まさに訪れ——なかつた。

ナイフが独りで迫るサーベルから離れたのだ。

否、離れているのはナイフではない。

不意に襲つて来た首下の苦しさに、ぐえつ、と呻く当のアリババ自身だ。

そして、浮き上がっていた尻が着地するや、咳き込みつつ後を振り向いた彼の目に映つたのは、上着の後襟を左手で掴む白ローブの上半身。

奴隷泥棒の罪から救いはしてくれただが、同時にアラジンから「ジンの金属器」を奪い、こんなところまで来る原因も作ってくれた、憎き暗殺者——

「っ！……あ、アサシンっ!?!」

であつた。

ふと、視界の横側を白い流線が通り過ぎた。

その軌跡を、首を回して無意識に追った先にいたのは、二人の人間だった。

一人はダボダボの薄汚い上着を着た見覚えの無い小僧。

そして、駆け付けた衛兵にあわや斬られる寸前となってみつともなく怯えるその小僧の後襟を掴むや、再び流線と化す白い人影。

正面に戻した視界の中心、書斎の奥に、ゴルタスの巨体越しに再び姿を現した暗殺者。

“王様”になるべき彼の暗殺を企んだ、無礼者の狂犬。

“アサシン”であった。

「……あつ、アサシン”だッ！ 衛兵！ 奴を生け捕りにしろ！」

茫然自失から一転、意識を取り戻したジャミルはすぐさまサーベルの切っ先でアサシン”を指差し、衛兵達に指示を下す。

「い、生け捕りですか!?! あの大麻野郎を!?!」

しかし、彼の命令に衛兵達があからさまに動揺する。

当然だろう。

相手は他ならぬジャミル自身の命を狙った暗殺者。

加えて、彼の傲慢にして無慈悲な性格を嫌というほど知っている彼らが、その憎き下郎を生かして捕まえるなどという命令を受ければ、一様に鳩に豆鉄砲を撃たれたような

顔になるのは当たり前だった。

が、当のジャミルからすればそんな衛兵達の事情は知った事では無い。

「何だ!? 僕の命令が聞けないっていうのかッ!」

人にとって、労働とは責務である。

衛兵達はジャミルに雇われている身。つまり、雇用主であるジャミルの身を守り、命令を遂行する事こそ、彼らが果たすべき責務なのである。

故に、その命令は如何なものであろうと——それこそ、〃目の前で死んで見せろ〃という無茶苦茶な命令であろうと、文句一つ無く従わなければならないのだ。

それが責務というものであり、それが為されなかつた時には重い罰が課されるのが世の道理というものだ。——少なくとも、ジャミルの中ではそういうものであり、また衛兵達も雇い主のそんな理不尽極まりない道理を理解しているが故に、

「い、いえっ! 滅相ありません!」

二の句を告ぐよりも前に首を縦に振るのであった。

「じゃあとつとと揃まえろよノロマ共め! ……ああ、それにしても」

——何だよこれは……。

衛兵達に怒鳴り散らしてから書斎を見回したジャミルの眉間に、深い皺が刻まれる。

変わり果てた書斎の内装が、彼の悲痛気な表情の理由だ。

“アサシン”によつて拘束されていた彼を救うために、ゴルタスが切り割つた壁は勿論の事。

その後発展したゴルタスと“アサシン”の戦闘によつて、“レーム”の有名職人に作らせた高級絨毯は所々が碎かれた床諸共唯のボロ布と化し、やはり高級材が使われた椅子と机も同様に粉碎されている。

それだけで冗談のような値が付く書齋そのものは勿論の事、いずれも手に入れるのに金と手間を掛けまくつた調度品のその殆どが、ほんの数刻の内に無価値な唯のガラクタへと変貌していたのだ。

そして、その原因の片割れであり、『“アサシン”を生け捕りにしろ』という命令を完遂する事も無く、たった一撃食らつた程度で跪いているゴルタスの後ろ姿が、見る影も無くなつた部屋の中央にあつた。

「ゴルタスウツ!!」

考えようによつては、“アサシン”——伝説と謳われた“フアナリス”の力の証明が為されたといえなくもない。同様に特殊な民族の血を引く故に、常人よりも遥かに丈夫な肉体を持つゴルタスを、あんな小柄な身から繰り出した蹴りだけで膝を着かせたのだ。

が、それだけの判断を頭に血の昇つた今のジャミルに要求するのは無理難題。

「一体何だこの部屋は!? 僕が命令したのは『アサシン』の生け捕りだぞ! 誰がこんな事しろって言ったアツ!」

部屋を滅茶苦茶にされ、あわや殺されそうになり、挙句主人たる自分の命令を碌に遂行出来ない木偶同然の奴隷への憤怒。

それに伴った、怠惰極まりないゴルタスの背を手にしたサーベルで滅多突きにしたいという欲求。

湧き上がってくるそんな感情に突き動かされるままに、二人の小僧と共に前方に立つ『アサシン』と、下した命令も記憶の片隅に追い遣ったが故の突然の行動に動揺し出す衛兵達を後目に、ジャミルは一步踏み込んだ。

……そうしようとしたが、出来なかった。

屋根に空いた大穴から入り込んで円を作る光の中で、一瞬の内に白ローブの右腕が腰元から右肩の斜め上まで移動するのが見えた。

その刹那、

「うわっ!」

不意に起き上がるや、道を塞ぐように突き出されたゴルタスの右手を『何か』が貫いたからだ。

その後の一連は、結果的に主人の行く手を遮った奴隷への叱責など考え付く間すら無

い程の急転直下であった。

まず、反射的に顔の前にサーベルの刀身を掲げる事が出来たのは、幼少より仕込まれてきた王宮剣術の賜物であり、また本来なら致命傷を負っていたこの瞬間における、ジャミルの数少ない幸運の一つであった。

が、間髪入れずに雪崩れ込むそれ以外の要素のほとんどは、この瞬間における彼にとつての不幸となった。

ゴルタスの厚い手に易々と穴を空けた「何か」が、少量の血飛沫と火花を散らしてサーベルに接触する。

とほぼ同時に、「何か」を受け止めた刀身がパキリと軽い音を立てて折れた。

細身の刀身とはいえ、下民では到底払えないような額の付く丈夫な業物が、中程から、あまりにも呆気なく。

その予想外の光景に目を見開く事によって、ようやくジャミルは「何か」の正体を見極める事が出来た。

飛び込んで来たからだ。

本来は彼の眉間を撃ち抜き、脳を抉つて死に至らしめる筈だったところを、しかし「主人を守る事」を身体に教え込まれたゴルタスの右手によって与えられた力を急激に弱められ、続けてジャミル自身が掲げた剣の妨害によって進行方向をずらされた「何か

“が。

鳥の片翼を模した刀身を鈍く輝かせる“アサシン”の投げナイフの切っ先が。限界まで開かれた彼の左の瞼の、その奥目掛けて。

次の瞬間、首を仰げ反らせる衝撃と共に闇に包まれた左目と、それから襲ってきた悍ましいまでの痛みが、ジャミルを獣のように咆えさせていた。

「ギヤアアアアアアアアアッ!!」

顔を——目に止まらぬ速さで投げられたナイフが突き立った左目を押え、仰向けに倒れ込んで悶え苦しむ領主の地獄の亡者の如き叫びに、思わずアリババも顔を青くし、両耳を塞いで悲鳴を洩らしていた。

「目え、目がアッ! 僕が目がああああああつ!!」

「だ、旦那様っ! お気を確かに、旦那様!」

もはや威厳も減ったくれも無い領主に慌てて衛兵の何人かが駆け寄ろうとする様を見るその傍らで、不意に背筋を氷で撫でられるような悪寒を感じた。

はつと真横を振り返ってみれば、この状況を作り上げた当事者——“アサシン”が、振り上げていた右腕を腰元に戻していた。

革帯に据え付けられた鞆に納まったままの新たなナイフに添えられた細い指が、彼女

が何をしようとしているかを如実に表わしていた。——追い打ちだ。

——やべえ！

喚く領主自身も、彼に注意を引かれた衛兵達も、*「アサシン」*の動きに気付く様子は無い。

このままでは、今度こそ領主が殺される。

止めなければ、と思った。

相手は義理も無ければ、色々悪い噂も囁かれる悪徳領主。加えて、借金の返済先でもある彼は、アリババの立場からすればむしろ消えてくれた方が好ましい。

そういう相手であるが、しかし今まさに命が奪われようとしていると察したその時点で、どうにかせねばという衝動が彼を突き動かす事は止めようの無い事だった。

だが生憎というか、同時に彼の悪い癖もまた彼の体に働きかけていた。

身体が動かない。

止めるために*「アサシン」*の左肩に伸ばし掛けた手が、しかしそれが届いた時に彼自身に降り掛かるかもしれない想像すら及ばない災厄を予感させ、残り10cm程というところで固まってしまふ。

——動け！ 動けよ俺！

必死に自らの体に呼び掛けるが、やはり動く事は出来ず、カタカタとアリババの体は

小刻みに震えるだけ。

そしてそんな彼の様子を嘲笑うように。

領主へのトドメの一撃となるだろう投げナイフが、鞘から抜かれるのが見えた。

もうダメだ！

すぐさま目を瞑り、顔を背ける。

程無くして訪れるだろう更なる狂乱に身構える。

……しかし、どういうワケか。

そうしてから10秒程経過したが、しかし耳から伝わって来る周囲の状況から変化は感じ取れない。未だ領主の安否を気遣う衛兵の声すら聞こえる。

あれ程の早業を見せた「アサシン」の二発目だ。放たれば一瞬の内に、今度こそ領主の命を掻つ攫う事は間違いない。なのに、これだけ時間が経って何も変わらないとはどういう事だ？

恐る恐る、薄眼を開けて周囲を見回したアリババは、すぐにその答えを知った。

何の事は無い。

投げナイフが、まだ刀身を半分だけ出し出した状態で鞘に収まっていた。

数瞬後に変化を齎す筈だったそれを、「アサシン」がまだ放っていないかっただけの事だったのだ。

それを見て、未だ苦痛の声を上げているも領主が生きている事に安堵するよりも前に、疑問がアリババの内に込み上げる。

何故「アサシン」はナイフを投げないのか。

今更領主への追い打ちを躊躇した、などという事は無いだろう。それならば、そもそも最初の一撃を打ち込んでいない。それで仕留められなかったからこそその二撃目だ。

となれば、このイカれた暗殺者が動きを止めざるを得ない「何か」が起こったのか。そう結論付け、その「何か」の正体を探るべくアリババは視線を領主の側に向けた。

結論からいえば、「何か」に該当しそうなものはすぐに見つかった。だが、

(ま、まさか、アレ……?)

それ——領主を守るように立ちはだかる鉄仮面の巨漢こそが「アサシン」が攻撃を躊躇した理由であるとは、到底思えなかった。

左目以外の顔のパーツの一切を覆う鉄板一枚の仮面と、そこから漏れ出すコシユーという不気味な呼気が催す異質感は、ついでに殺すような事はあつても攻撃を戸惑わせるような要素に成り得るとは到底思えない。加えて、男の足を繋ぐ鎖と先程の領主の怒声、そして今現在領主の盾となろうとしている事を省みれば、あの大男が領主の奴隷である事はほぼ間違い無い。

何故領主を狙っているのか自体そもそも不明だが、少なくとも彼に隷属する身である

鉄仮面を、攻撃を中断してまで生かす理由がアリババには思い付かなかった。

思い付きはしなかったが、しかしそれが事実であった。

目深に被られたフードの中から、くつ、と口惜しそうな声が聞こえたような気がしたその時には、「アサシン」自身の背に回されていた左腕が既にアリババの胴を腋に抱えていた。

先程のような持ち上げられる感覚すら無い早業に、へっ、と間の抜けた声を洩らしたアリババの視界の端に、

「あ、アラジン!?!」

同じように「アサシン」の右脇に抱えられた相方の青い頭が映る。

考えてみれば、屋敷に逃げ込んでから今まで、彼の姿をとんと見ていなかった。だが、何故自分と同じように「アサシン」に抱え上げられているのか。

そもそも抱え上げられた事すら気付いていないのか、キョトンとした表情で大人しくしているアラジンに問おうとしたアリババだったが、そんな事はすぐにどうでも良くなった。

不意に強い風が顔に吹きかかった。

それが、自らが高速で動いている事による相対速度から発生した風であると悟るよりも先に、

「——え？」

先程まで見上げる位置にあつた筈の屋根の穴を見下ろしている事に対する疑問の声を洩らしていた。

その声が夜の静寂を一時引き裂く盛大な悲鳴へと変わったのは、強制移動した視点の奥で指を指しながら見上げる屋敷の外の衛兵達や貴族達の姿を捉えて、ようやく自分達を抱えた「アサシン」の跳躍によつて空高く飛び上がったっているからだとアリババが気付いてからの事だつた。

予想外だつた。

二本目のナイフを投げようとして、しかしそれを防いだゴルタスに見舞つた蹴りは、確かに殺さぬように手加減はしていた。だがそれでも、それなりに鍛えた衛兵程度なら半日は立ち上がれない程度には力を込めていた。

それを、まさか食らつて間もない内から自分の投げた投げナイフに反応して見せるとは……。

何にせよ、救うべき罪無き者である彼の巨体によつて、唯一衛兵の群れに覆われていなかった前方を塞がれてしまった時点で、ジャミルへの追撃は諦めざるを得なかつたのは確かだ。

いや、追い打ちを掛けるだけならまだ可能だった。ゴルタスの脇を抜け、ジャミルに注意の回っている衛兵の内の邪魔になる者だけを排除してから、強引にジャミルに止めを刺す事も可能だった筈だ。

それを敢えてやらずに、天上の穴から一足跳びで脱出したのは、

「うわあ……」

「イヤアアアアアアアアア！ 高いイイイイイイイイ！！」

自らが居る高空に感嘆と絶叫という、対称の反応をモルジアナの両脇に抱えられながら示す二人の少年が理由であった。

そもそも、入口側にいたアリババを一端自らの傍へ引き寄せたのは衛兵から引き剥がすだけでは無く、アラジン共々周辺に置く事で咄嗟の時に守れるようにするためだ。

仮にあの状況で追い打ちを優先していた場合、せっかく自らの傍に引き寄せていた二人から一時とはいえ離れる事になり、それによって衛兵、あるいはゴルタスの攻撃に少年達を晒す可能性が無いとは言い切れなかった。

彼らも一応は罪無き者。例え僅かな危険性であったとしても、その彼らが目の前で殺される可能性をモルジアナは看過する事が出来なかった。故に、最期の標的を前にしてアラジン・アリババ共々退避するという、苦渋の選択をせざるを得なかったのだ。

——それにしても……。

「——あ、そうだ。お姉さん、僕の笛返して！」

「は、離せえ！ 離してくれえっ!! うわああああああ!!」

片や、状況を省みない再度の要求。片や、金属同士を引つ掻き合わせる方がマシと思えるほどの叫喚。

そんな二者二様の反応で騒ぎ立てる少年達は、果たして自分達が何をしたのか分かっているのだろうか。

そんな疑問を覚えたモルジアナだったが、答えは考えるまでも無かった。

分かっているなくて当たり前なのだ。

そもそも、自分がどういう目的で動いているのかさえ彼らは知らない。

故に、ジャミルの死によつて解放される筈だった何十何百もの人々が、自分達の介入によつて未だ隷属を強いられる身のまま置いて来る羽目になってしまったなどという事は、彼らからすれば知る由も無い事。

そんな事よりも、笛がどうだの、高度がどうだのと喚く方が今の少年達にとってはずっと重要なのだろう。

そういう結論には至ったが、しかし結果と場を弁えないアラジンとアリババの煩わしい事この上ない有り様を受け入れられるかといえば、それは別の話。

彼らの、特に泣き叫ぶアリババの声は周辺の注意を引き寄せかねないし、何より耳元

でぎゃんぎゃん騒がれるという状況は至極不愉快だ。それこそ、フードの下でムースンと膨らませた頬の上に青筋が浮かび上がる程に。

そういう訳で、飛び移った屋敷の扉を力任せに砕いて、眼前に現れた新たな屋敷の屋根へ跳躍する傍ら、一端足を止めてアラジンとアリババを黙らせる、という決定事項がモルジアナの中に出ていた。

が、それが実行に移される事は無かった。

「いたぞー！ 賊だっ！」

屋根の上に降り立つや目に飛び込んで来た大勢の衛兵達に、そんな暇は無い事を瞬時に悟った故だ。

もの凄いき高さだった。

道路も、木も、壁も、人も。下方の何もかもが途轍もない勢いで小さくなっていく。

とつくに燃え尽きて留め具だけになってしまった“魔法のターバン”を使う事無く、唯人が跳んだだけでそれほどの高さに到達出来た事に感嘆したアラジンだったが、それは一時の事。すぐに本来の目的である“笛の返却”を、再度“アサシン”に迫ったのであった。

だが生憎と、そのすぐ後に彼らが陥った事態は“アサシン”がその要求に応えるか否

かなどといつていられる程悠長な状態では無かった。

「おい！ あの白いローブ、もしかして——」

「噂の『アサシン』か！ ならばあのガキ共は唯の賊では無く、麻薬野郎（ハシシ）の仲間だったというワケか！」

アラジン達の方を指差してそんな会話をしているのは、『魔法のターバン』で飛んでいた時に燃える矢を放ってきた、あるいはその者達と同様に武装した格好の衛兵達だ。

アラジン達も足場になっている平たい屋根の奥側。そのまた更に奥や両隣に建つ屋敷の屋根の上。そして、今し方飛び出した屋根の穴からも攀じ登っては列を整えてくる。

四方からギラついた視線を送ってきたり、弓を構えたりする武装した衛兵の群れに、気付けばすっかり囲まれていたのだ。

その威容と緊張感に再び言葉を失ったアラジンの耳に、すぐ傍から声が掛かる。

「貴方方ですか？」

『アサシン』であった。

フードの中から覗く特徴的な目元を周囲の衛兵達に向けたままそう問い掛けて来た少女の無表情は、心なしか、少しイラついているように見えた。

「……へ？」

一拍置いて、最初に応答を返したのは『アサシン』のもう片方の脇に抱えられたアリ

ババであつたが、顔が冷や汗に濡れそぼつた彼の口から出て来た間の抜けた声は、傍から見ても返答では無く、問い掛けの意味が分からない、という趣旨の反応だつた。

フードの影に隠れた眉間に、一筋の皺が刻まれたような気がした。

「あの衛兵達を……までおびき寄せたのは」

「アサシン」の付け足しから更に思考のための一拍の後、実に言い辛そうに、そうかも、という小さく呟くアリババの細まつた横眼がアラジンに向けられる。

その恨めしげな視線には、お前のせいだぞ、という彼からのメッセージが込められていたのだが、生憎それにはアラジンが気付く事は無い。

視線の意味に気付く前に、彼が青い双眸を別の方——ゆっくりと上へ傾けられていく「アサシン」の頭へ向けたからだ。

「アサシン」のお姉さん？」

何をやってるんだらう、と首を傾げるアラジンの耳に、スーウという空気が勢い良く流れるような音が聞こえる。

それが「アサシン」が深く息を溜め込む音だと気付いたのは、同じく彼女の妙な挙動に訝しみを覚えたアリババが同じ方に目を遣つたのとほぼ同時であり。

それから程無くして、胸を逸らせる程に頭部を傾けた「アサシン」の呼吸音が止んだと思つた、次の瞬間。

獣の咆哮が響いた。

「っ!？」

暴風雨の勢いそのままの凄まじい音が、辺りを覆い尽くす。

両手で耳を塞ぐだけではとても足りない。両目も固く閉じ、歯を食い縛って、やっと凌げる。

そんな暴力的な音波に晒されたアラジンが周囲の状況を知る由も無くば、そもそも何かに思考を回す余裕も無い。

故に、ようやく音が止んで目を開いたその時になって、

「——あれ?！」

自分とアリババがいつの間にか「アサシン」の腕の中から離れ、屋根にうつ伏せていた事に気付き、疑問の声を洩らした。——「アサシン」はどこに行つた?

その疑問の答えは、それまで声一つ聞こえなかつた衛兵達のどよめきに振り上げた頭の先にあつた。

四つん這いのアラジンの前方8 m程、例の音が発生するまで前を塞ぐ衛兵達の最前線だつたその辺りで。

足下に横たわる衛兵の首元から、左腕の仕込み短剣を引き抜きつつ立ち上がる白ロブの様が、その答えであつた。

衛兵達の威容故か青い顔をしていたアリババの口から返つて来た肯定は予想通りであり、そして可能な限りに表に出さなかつたまでも、モルジアナを酷く落胆させるものだった。

どうしてこうなつたか、などもはや訊き出す気も起きなかつた。

彼らの移動手段として真つ先に考え付くのが、あの空飛ぶターバンだ。

今はその持ち主の頭に巻かれていない純白のそれを、この夜闇の中で広げて飛べばこれ以上無く目立つのは間違い無い。目撃した衛兵に不審がられ、火矢の一つ二つ射られるだろう事は想像に難くなかつた。

というか、実際に射られたのだろう。

だから炎と共に彼らはジャミルの屋敷へ飛び込む嵌めになつたのだろうし、燃えてしまつたせいで持ち主は頭にも巻く事も出来ないのだろう。

そうして、只管に注目を集めた彼らを追つて来た衛兵達が、最期に少年達がいたこの辺りを目指して集結し、現在に至る、というところなのだろう。

最も、それが分かつたところで何も良い事は無い。

唯、こういう事態を避けるために目撃されずにジャミルの屋敷に侵入した自らの行為を潰したとんだイレギュラーと、そのイレギュラーの元凶であるアラジンとアリババを

守りつつ、隙間も油断も無い衛兵達の囲みを突破するという余計な仕事が増えた事に呆れ返ったモルジアナの眉間に、一層深い皺が刻まれるだけの事。

そう、それだけだ。

どういふ過程があつたにせよ、まずは眼前に広がるこの現状を突破するのが先決。そしてそのために彼女が取つた行動こそ、肺一杯に溜めた空気を全て変換しての、咆哮であつた。

多種多様な動植物が数多く生息する「暗黒大陸」の覇者たる「フアナリス」の咆哮。凶暴残忍な肉食獣の大群すら恐れさせ、退かせるその一声が、避けんばかりに開かれたモルジアナの口から放たれるや夜の静寂を食い尽し、辺りに存在する全てのモノを無差別に震わせる。

地面、家屋、木々。そして、衛兵達の耳朶。

ある者は耳を塞いで保護する事を優先して構えを解き、またある者はモルジアナの雄叫びに当てられて茫然自失とし、そうしてほぼ全ての衛兵が心身共に隙だらけとなつたのを見計らつた次の瞬間。

下ろした荷物と拉げる漆喰の足場を背に、若鷲ヘイザムが飛び発つた。

既に一帯を支配していた雄叫びは止んでいる。だが、衛兵達が元通りの臨戦態勢に回復するには、更に一時が必要。

その一時が過ぎるのを待たずして、手短な位置で膝立ちになっていた哀れな獲物の首筋降り掛かった銀の鉤爪が、抵抗を受ける事無く喉から頸椎までを穿ち、その勢いのままに斃れ伏せさせる。

そして、赤く濡れた爪を引き抜き、自らの死に気付かなかった故の真顔の臉を下ろして安らかな寝顔に変えたその時点で、モルジアナの計略は完成したも同然だった。

先の強烈な咆哮によって、その場にいる全ての衛兵の殆どは体勢だけでなく、心理的にも大きな隙が出来た状態だ。

そんな彼らの視界に、隙を突かれて事切れた仲間の死体という惨状が飛び込んで来ればどうなるか。

「……………あ……………あ……………」

咆哮の主にして、その惨状を作り上げた暗殺者の、返り血の赤斑が付いた白い姿がその目に映ればどうなるか。

「う、わ……………うわ……………うわああああああ!!」

「た、助けてえっ! 助けてくれえええええ!!」

その場で腰を抜かして声にならない声を吐く者達。恐慌状態に陥り、構えていた剣や弓を捨てて一目散に逃げる者達。

怯えて尻尾を巻く獣の如く、完全に戦意を喪失してしまった大半の衛兵達の有り様

が、この状況を突破するためのモルジアナの計略だ。

アラジンとアリババを抱えたままこの場を切り抜けるために、衛兵達を殺める事それ自体に抵抗は無い。されど、そのために全ての衛兵を殲滅する気も無い。犠牲は最小限に抑えるべきものだ。

故に、*「フアナリス」*の咆哮を持つて警戒と覚悟を吹き飛ばしたところで、同僚の死という精神への不意打ちを叩き込んで退散させた。

結果、40人程が戦線離脱、あるいは戦闘不能——落し掛けた命を拾う事と相成ったのであった。

そう、その40人程に含まれた者達は。

「おっ、おのれよくもおー！」

最初の時点で彼女達の周囲にいた衛兵の数は、ざっと見て60人超。

そこから先の約40人を差し引いて、まず20人程。

「おいつ、どうした!」

「今の音は何だ!? 虎でもいるのか!」

更に、遠方から音響の弱まった吠え声を聞き付けて新たに駆け付け、攀じ登って来た者が10人超。これにより配置は変化し、前方18人、右隣の屋敷の屋根4人、左隣りの屋敷の屋根6人、後方ジャミルの屋敷の屋根に6人。

計34名の衛兵達は、その全てがとはいわないまでも、残念ながらこの場で命を落とす事が決定付けられた者達。

「死ねえええええっ！　　アサシン！！」

その先頭に立ち、振り上げたサーベルに仲間を殺められた事への恨みを込めて猛然と駆け込む鬼の形相の衛兵同様。

モルジアナ達がこの場を突破するための、犠牲だ。

「ぬおおおおおおおッ！！」

降り掛かる渾身の袈裟切り。

銀の煌めきがそのまま軌跡と化すその一撃は、当たれば容易くローブ諸共モルジアナの細身を裂き、命を奪い取るだろう。

当たりさえすれば。

実際は逆。

己が斬撃を、上半身を逸らせての紙一重でかわされ、同時に展開したアサシンブレードをガラ空きになっていた腹——鳩尾へ流れるように突き込まれつつ背後に回られた衛兵の命が、奪い取られていた。

敵の攻撃の勢いを利用し、無意識下の隙を突いて必殺の一撃を与えるカウンター。　　アサシン”の戦闘における基本戦術だ。

続けてしやがみ込むように倒れ込む死体を背に、立ち位置が変化した事により眼前に現れた衛兵の足目掛けて、自らの左足を無造作に踏み下ろす。

響く粉碎音。音源は下の屋根諸共砕かれた衛兵の爪先。

10代の少女のそれからは凡そ離れた爆裂な威力の踏付けに、溜まらず声無き悲鳴を洩らして衛兵が仰け反る。それによって無防備に伸びた首を、すかさず飛び込ませた右足のハイキックによって押し折る。

無精髭の生えた顎先を、丸時計で例えるところの11時の辺りまで上げられた衛兵が、頸動脈と気道を塞がれた事により脳死を迎える——までの数瞬を待たず、右足を屋根の上に戻すや振り返り、更に疾駆。

地表の獲物を見定めた猛禽類の急降下同然の速さから突き出した足先が、驚く間も無い3人目の衛兵の腹を貫き、吹き飛ばす。

あくまで比喩だ。実際に貫いたワケではない。

だがそれでも、空気を詰めた革袋を強引に叩き割ったような破裂音が伴ったその一撃によつて、臍臓を文字通りの意味で潰された事による兵士のショック死が避けられるワケでもない。

戦いの空気の中を飛び交う若鷲ヘイザムの体の奥から、際限無く湧き出す力が止まる事も無い。

そうして5 m程飛び、屋敷の屋根から落ちる間際でどうにか止まるも、それつきりうつ伏せて動かなくなった三人目の犠牲者を視界に納めた何人かの兵士達が動きを止める。

斃す絶好の機会だ。が、敢えて彼らを尻目に、モルジアナはその場から跳躍。

平時より一層軽く、速く低空を滑るように飛ぶ彼女の行く手には、弓を構えた衛兵が1人。

大方、前衛と衛兵達と乱戦中の彼女を奥手から射抜こうという算段だったのだろうが、若鷹の真紅の双眸にその姿が一瞬でも捉えられた時点で彼の計略は破綻している。急接近。

対応し切れず、咄嗟に放った矢が白ローブの隣を抜け、明後日の方向へ飛ぶ。

腰の剣を抜く間も無く、翻るローブの裾の奥から放たれた回し蹴りによつてこめかみを碎かれた兵士の遺体が横へすつ飛んでいく。

まだ終わりじゃない。

繰り出した蹴りの勢いのまま、振り返りつつ着地するやその場にしゃがみ込むモルジアナ。

その両手は革帯の左右、鞘から伸びる投げナイフの柄を掴んでいる。

先のジャミルへの追い打ちにより一本消費し、現在手元に残っているのは三本。

残る三本全てが、扇状に残像を残して振られた両腕から飛び発ち、前述した動きを止めた内の最も距離の近かった三人の喉、左胸、右太股を貫く。

今度の「貫く」は文字通りの意味だ。

血飛沫の尾のみを残してどこかへ消える刃の餌食となった3人の内、前者2人は即座に唯の肉塊と化し、残り一人も傷ついた腿を押さえてその場に転がる。

ここまで同じ屋根に立つ衛兵達の内、未だ健在なのは11人で、経過時間はまだ一分を少し過ぎたばかり。その短い間に最初の18人の内、これに含まれない6名が死亡、1名が無力化された事になる。

「フアナリス」なればこそその素早さと圧倒ぶりだ。この勢いならば、全滅させるのに10分と掛かるまい。

「コノオオオオオオ!!」

剣を振り被り、突進してくる新たな衛兵。

しかし、数の暴力などという言葉を在って無き者にせんがばかりのモルジアナとの彼我戦力差を目にした故か、汗だくの顔は焦りに満ちた表情を浮かべ、体勢も何処か覚束ない。

仕留めるのは容易いにも程があるが、しかしモルジアナに油断は無い。

奢り、高慢、過信、そして油断などといった感情は時として自分や周囲を傷つける事と

なる——そう“大導師”から念を押しつけてきた彼女の心に、そんな感情は存在し得ない。

誰よりも、何よりも速く、鋭く、強い“フアナリス”の身もそれだけでは絶対的な勝利条件にならないければ、常に物事が想定通りに動くとも限らない。——“真実など無い”。

最も、先程の乱入騒ぎは流石に予想外過ぎて意表を突かれざるを得なかったが。

ともかく、それを知るからこそ、自らも接近するや、他の者同様にその衛兵も蹴り殺そうとしていたところを、

「ヒイイイイイ!!」

程無くして耳に届いたその悲鳴によって、振り下ろされた衛兵のサーベルの柄を、足の代わりに突き出した両手で掴み返す判断に切り替える事に、何ら抵抗は無かった。

すぐ耳元から響いた暴音——“アサシン”の咆哮——に溜まらず閉じた耳と共に閉じた目を再び開いた時、眼前で行われていた殺戮劇にアリババは言葉を失っていた。

いつの間にもやら移動すると共に一人。攻撃をかわすと共に一人。首への蹴りでまた一人。飛び蹴りでまた一人。また一人、また一人……。

心身ともにイカれた奴だとは分かっていたが、まさかこれ程までに強いとは。

先程より数の減った衛兵を蹴散らし、更に減らしていく。『アサシン』の一方的な戦いぶりだが、アリババを開口させ、その一方で彼の心の奥にあるものを少しずつ燻らせていく。

しかし彼と、その隣で四つん這いになっているアラジンに、呑気に『アサシン』の戦いぶりを観戦する暇は無い。

視界の左端で幾つもの光点が瞬く。

その正体を見極めるよりも先に、ヤバイ、と打ち鳴らされる自らの内の警鐘に従ってアラジンの後首を掴みつつ飛び退くアリババ。

刹那、二人のいた空間を雨が通り過ぎた。

矢の雨だ。

反射的に矢の飛んで来た方を向く。

左側の斜め掛かった屋根の上で弓を構える衛兵——弓兵の集団が目飛び込んで来た。

「ヒイヒイヒイヒイ!!」

忘れていた。

衛兵が集まっていたのは前方だけじゃない。左右も後方も、既に包围されている。

前方の兵士達同様その数は減っているようだが、しかしもう何度目になるか分からない。

い絶叫を放つアリババには、一様に輝く眼光を向け、獲物を射ち損じて舌打つ彼らの数などどうでも良かった。

相手が複数人で、矢という得物を使う事に変わりは無いからだ。

「もう一度、構え！」

矢の利点が「遠距離から一方的に狙撃出来る事」であるのは語るまでもない。

対して、アリババの得物は腰のナイフのみ。近づかなければ応戦出来ない。

加えて、向けられる矢の数六本に対し、彼のナイフは一本切り。一本一本放たれるならまだ飛んで来た矢を強引に叩き落として防ぐ事も出来るかもしれないが、一度に何本もとあつては不可能。

そして今の彼らの状況で最も問題なのが、衛兵達との距離が5mと少し程度しか無いという事だ。この程度の距離では、放たれた事を認識した次の瞬間には間違い無く矢が身体に突き立っている。相手も十分に錬度を積んだ身であろう事を省みれば、先のような紛れ同然の回避は二度も許されないだろう。

つまり、降り注ぐ矢から身を守る術は少年達には無い、という事だ。

「放てえッ!!」

轟く号令。引き絞られた弦が鳴らすほんの僅かの発射音を立てて射出される矢。

咄嗟に目を閉じ、無駄と分かりつつも両手で頭を庇うアリババ。

その心中は、脳裏に否応無く描かれる数瞬後の自らの無残な姿と、それに伴う苦痛に對して身構える事で一杯だった。

故に、いつまでも経つても感じない身体に矢が刺さる痛みに對して鋭敏になっていた彼の心中に疑問が生まれるまでに、そう時間は必要無かった。

様子を伺うために薄らと目を開ける。

そうして再び開ける視野に真っ先に飛び込んで来た“それ”に、思わずアリババは声を洩らしていた。

「な、何で……!?!」

矢など飛んで来るワケが無い。

放った衛兵達の弓の前に“それ”が立ちはだかり、少年達を守る障壁となっていたのだから。

だが、何故だ。

目下戦闘中だった前方の一団をまだ斃し切っていないというのに、それを放って自分達の盾となつて、一体何の利があるというのか？

“それ”に——自分達の眼前に立つ白ローブの背にそう問い質したい衝動に駆られたが、その前に“アサシン”が行つた新たな行動の前に、そんな余裕は呆気無く吹き飛ばぶ。

轟音と共に方々へ四散する衛兵達と、彼らが足場としていた屋根の破片と共に。何が起こったか、否、何をしたかはその目でハッキリと見た。

「アサシン」の更に前、彼女がアリババ達と自らの身を守るための肉の盾として翳していた衛兵の体——殆どの矢を受け止めたため、アリババが目にした時点では既に針鼠と化していた——を、その背に添えた右足で蹴飛ばしていた。

それによつて飛び出した兵士の体が、一瞬の間に射線上に現れて攻撃を防いだ。「アサシン」に少なからず動揺した弓兵の下へ突つ込み、足場の漆喰を砕きつつ弾き飛ばしたのだ。

結果、着弾点の辺りの居た筈の兵士達は悲鳴の残響だけを残して各々の飛んだ方向から真下へ消えていき、代わりに蹴飛ばされた兵士がクレーター状に抉れたその中心点上半身を丸々埋めて尻を向けた姿を無残に晒していた。

常軌を逸したトンでもない殺し方に、パクパクと金魚のように口が勝手に動いていたアリババの方に、クルリと「アサシン」が振り返る。

その右腕が、何かを投げた後のように左下へ下げられている。

イヤな予感がしたそのすぐ後に聞こえて来た、バスツという何かが貫かれるような音にアラジン共々振り向いた背後、右隣の屋敷の屋根の上で、4人いる兵士の3人が目を見開いていた。

三組の双眸が一様に向く方向にいたのは、横一列に並ぶ彼らの右から二番目。顔面からサーベルの柄を生やして大の字に倒れた残り一人の衛兵であつた。

その姿を一拍置いてアリババの脳が認識する頃には、既に茫然とする兵士達のすぐ傍まで白いローブが駆け寄つていた。

あ、と自分でも何を言おうとしたのか分からない声を洩らしながら、無意識に伸ばした手の先で、“アサシン”の踵が右側の衛兵の頭を屋根へ叩き落とした。

そのまま着地と共に、まるでそれが唯のラックに収まつていた物であるかのように、最初に斃した衛兵の顔面から伸びる剣に躊躇無く手を掛ける白ローブを見る、いや目を見開いて睨むアリババは、いつの間にか自分の両手が拳を握っている事に気付いていない。

その心の奥で既に燻り出している感情に、まだ気付いていない。

彼の表情を険しくさせ、拳を震えさせるその感情に気付いているのは、

「アリババ君」

呼び掛けるアラジンの、青い双眸だけであつた。

砕ける漆喰の屋根に後頭部——同様に砕けた頭蓋を埋もれさせた右端の兵士を一瞥する事無く、着地と共に目の前に現れたサーベルの柄へ右手を伸ばす。

元々は少年達を守るための肉の盾とした衛兵が持っていた物だ。

カウンターの要領で奪い取りつつ本来の持ち主を腹——臍臓から串刺しにし、更にその死体を攻撃に利用しつつ抜いたところで、丁度後から弓で狙っていた兵士目掛けて投擲したそれを握るや、力任せに身を捻る。

それにより回転したモルジアナに引かれ、見るもおぞましい様へと変貌した衛兵の顔面から引き抜かれた刀身が、血の流線を引いて彼女に斬り掛かろうとしていた衛兵の胴を水平に裂く。

痛みに仰け反る衛兵。

すかさず、左手の小指を引いて引き出したアサシンブレードを、晒された喉仏へ躊躇無く突き込む。

更に、断末魔の呻きを上げる兵士を意に介さず、血が滲み出すその首をブレードを突き刺したままの左手で横へ押し退けつつ、前進。その先で動揺を顕にする4人目の兵士の赤いサツシユが巻かれた腹を、右半身を競り出しての踏み込みと共に突き出したサーベルで突く。

それによつて刀身の中程まで胴体を貫かれた衛兵は、しかしまだ息があつた。

苦痛に呻きながらも、飛び出そうな程に血走った眼球を向け、震える手を己が身に刺さる剣の向こうに立つ“アサシン”の方へ伸ばそうとする。

その様子を間近に見るモルジアナの心中に、黄泉への淵に立たされてなお足掻こうとする醜い亡者へのおぞましきは無い。

あるのは、もう助からぬ身となつてなお生へしがみ付こうとする兵士への憐憫と、次なる獲物への攻撃の意思のみだ。

血塗れの切っ先の向きを修正しつつ、赤い滲みが布地を浸食し続ける衛兵の腹へ添えた右足に力を込める。——解放する。

剣は発射台、一気に伸ばす脚は火薬と引き金。そして放たれる砲弾は……。

切っ先の向いた先、前方に集まっていた残り11名の衛兵達を、足場——屋根が砕けて出来た瓦礫と粉塵と共に纏めて巻き上げた、先の衛兵の亡骸であった。

これで残るは6人。

先の弓兵達よろしく、方々へ散つては地面と死の抱擁を交わす事となつた衛兵達の居た辺りから吐き出される屋敷の持ち主の喧騒と濛々とした煙を背に、残る衛兵達が集っている筈のジャミルの屋敷の方へ振り返る。

途端、込み上げた訝しさに特徴的な目元が僅かに歪む。

視界に入つて来た残りの衛兵達は皆怯え、産まれ立ての小鹿のように身体を震わせている。酷い者に至つては、失禁すらしている。

それは別に良い。むしろ僥倖だ。戦意を失つた相手まで殺す必要は無い。

だが、*「アレ」*は一体どういう意味だ？

「もう止めろッ！」

彼は――。

「もう、いいだろお！ これ以上殺すなあッ!!」

両腕を広げ、自らの命を狙っていた衛兵達を守るように立ち塞がるアリババは、一体全体何がしたいのだ？

右手に握ったナイフを小刻みに震わせ、冷や汗塗れの必死の形相で睨み返して来る金髪の少年の奇行に。

唯々モルジアナは目を細めるしか無かった。

第十一夜

「——何のつもりですか？」

暫しの重苦しい間の後、そう投げ掛けてくる「アサシン」のフードの奥の視線は只管冷たく、恐ろしくて溜まらなかった。

故に、その問い掛けへの答えを返す前に、ナイフ片手に怯えた衛兵達の前に震える体を仁王立ちさせるアリババが、

「う、うるせえ、バカ野郎ツ!!」

と叫んだ罵声は、同時に自らの心を少しでも持ち直そうとするがための鼓舞の役目も持った、虚勢でもあった。

「さ、さつきも言つたじゃねえか！ こ、これ以上殺すなつてっ！」

そう、答えは至つて単純。——「見ていられなかつた」。

猛禽の如く縦横無尽に飛び交い、塵芥を巻き上げる突風同然に衛兵の——同じ人間の命を無慈悲に掻つ攫つていく「アサシン」に耐え兼ね、形振り構わず飛び出さずにはいられなかつたというだけの事。

あの時と同じ、危機に晒された他者の命を、道端に転がるゴミのように扱う者から守

らねばという意思。

数日前、アラジンと出会う切っ掛けとなったあの「砂漠ヒヤシンス」の襲撃で、運悪く捕食されそうになった娘へ必死に手を伸ばそうとする母親へ、心無い言葉を掛けたブーデルの横面を殴り飛ばした時と同じ、彼の内に眠る本質の、突発的な爆発だ。

だが、それを端に発したアリババの我武者羅にして無鉄砲極まりないこの行動には、決して小さくない代償が伴う事になる。——前回よりも火急で、且つより危険な代償を。

(くそっ……くそっ!! またやっちゃまった!!)

「砂漠ヒヤシンス」の時にも吐いていたのとほぼ同じ台詞を吐いたアリババの心中は、しかしあの時以上の後悔と緊張に満たされていた。

彼が置かれた現状は、「砂漠ヒヤシンス」の時とは幾つか差異がある。

その中でも特に大きく、問題のある差異が、自身の行動によつて対峙する事となった相手がブーデルでは無く、「アサシン」だという事だ。

唯でさえ、絶対に表立った敵対は避けるべきだと自らが定めたイカれた殉教者ファイターイー。おまけに、理由の程こそ定かでは無いとはいえ、一度は弓兵の矢の雨から守られた借りまで今は出来上がっている。恩よりも先に疑問が沸き立つ奇行としてしかアリババ自身には捉える事が出来なかつたまでも、結果的にその行為に対して仇で返す形になっている現

状に変化は無く、その先に待つものも容易に連想出来るというもの。

すなわち、与えた恩を踏み躪られて激昂した「アサシン」からの報復である。

この「報復」という一点においても、前回との差が大変に関わつて来る。前回の件の対峙者だったブーデルは莫大な借金と自らの立場を利用してネチネチ脅しを掛けて来る程度であり、多くの関係者も巻き込む事になったとはいえ、危険に晒されたのはあくまで「人生」だ。

だが、現在の対峙者である「アサシン」が、あの豪農と同じマネをするワケが無い。報復の手段は必然的に殺人であり、危険に晒されるのは「人生」などという遠回しなものでは無く、アリババ達の「命」そのものだ。

右手から下げた血濡れの刃で串刺しにされるか。それとも今は左腕に収まっている隠し短剣で首を貫かれるか。あるいは一瞬にして長距離を詰め、人間を漆喰と丈夫な木材で作られた屋根すら吹き飛ばす砲弾にすら変える、冗談のようなその脚力で蹴り殺されるか。

何にせよ、立ちほだかるにはあまりにリスキーが過ぎる相手の前に立ちほだかつてしまったという、取り返しつかない過ちを犯してしまった事だけは確かだった。

——おまけに……。

片方の視線を「アサシン」から逸らさぬまま、背後に並ぶ衛兵達をもう片方の目で肩

越しに伺う。

一様に怯え、憔悴し切った表情を浮かべる男達は、つい少し前までは賊、あるいは「アサシン」の仲間と誤解してアリババ達にも剣や弓を向けていた。

そんな彼らはアリババからすれば本来助ける義理など無くば、こうして背を向けているのを良い事に彼に不意打ちを仕掛けないとも言いつれぬ。

「砂漠ヒヤシンス」の時に助けた親子とは真逆。ハッキリ言えば、先の領主同様、消えてくれた方が好ましい連中であり、いくら命の危険に晒されていたとはいえ、そんな者達のために動いてしまったという事実が更にアリババの後悔を深いものにしていった。

——でも……。

チラリと左方、少し離れた位置から緊張した面持ちで自分達を見守るアラジンの方を見やる。

ジンの力を借りる事が出来ない現状、少しでも危機から遠ざけるべきだとその場に残るように言い付けておいた相方の大きく青い瞳と視線を交わすや、拳を握った両手を眼前に掲げての力強い頷きが返って来る。

その仕草に込められた声無き言葉が、形無き手となつて自らの双肩を支え、勇気づけてくれているようにアリババには思えた。

——やるしかねえよな……!!

自らを更に鼓舞するため、深く息を吐き、大仰に一步踏み込む。

依然心の内では恐怖と後悔が漂っていたが、身体の震えと全身を濡らす汗だけはそれによつてどうにか収まる。

その間も金の双眸を変わず白ローブに向けたまま、攻め来る兆候を決して見逃さぬよう、更に鋭く、注視する。

こうなつた以上は仕方ない。しかしただ何もせず葬られる気も無い。

まだやらねばならない事はいくつもある。

後の衛兵達とアラジンを守りつつ、何としてもこの場を切り抜け、生き残るのだ。――

――そう決意を固めたアリババのナイフを握る手に、更に力が籠る。

張り詰めた金の視線が、猛禽類の嘴のように尖つたフードの鏢の下から覗く冷たい紅の光とぶつかり合い、張り詰めた空気が静寂を漂わせ、そして暫しの時が過ぎて。

“アサシン”の右腕が、動いた。

同時に、その動きに反応して右手のナイフを眼前へ突き出そうとしたアリババの耳に、薄い金属板が何かに衝突したような音が伝わって来る。

その音が無造作に放り捨てられたサーベルが屋根の上で跳ねた音だと彼が気付いたその時には、既に白いローブが彼の左隣に立っていた。

思わず、すつ頓擧な声を洩らして後ずさる。

ざつと前方10m程。音の正体に勘づいて無意識に視線を逸らしたほんの一瞬の間に、一切の気配を感じ取らせる事無くそれだけの距離を移動して見せた“アサシン”の脚力は実に恐るべきもの。領主邸からの脱出、先の衛兵達との戦闘、更には過去を遡る事昨日の奴隷泥棒の誤解解きの際から既に目にしているが、それでも尋常ならざるその脚力には、敵がすぐにでも自分達を蹂躪出来るところまで来ている事への危機感も忘れて、バケモンだ、と改めて驚愕せざるを得なかった。

そして、驚きからなかなか立ち直れないアリババ達を尻目に小口から発せられた言葉が、更に彼らの耳を疑わせる事になるのだ。

「散って下さい」

「……へ？」

徐かつ、かたなくうんざりとしたような白ローブの言葉に、間の抜けた声のアリババの口から洩れ、衛兵達が目を点にする。

そんな彼らに構う様子も無く、“アサシン”の言葉が続けられる。

「貴方々を殺す気はありませんし、こうしていても時間を無駄にするだけです。追撃をせず、増援も呼ばない事を条件に、貴方々を見逃します」

淡々と、一方的に告げ終える“アサシン”であつたが、しかし直前まで大量殺人を

行っていた者の口からこんな心変わりでもしたかのような発言が飛び出したところで、真正直に受け止められるワケが無い。衛兵達が顔を見合わせてざわめき立て、アリババはアリババで胸中に困惑を渦巻かせるしかないのは、当然の帰結というものだ。

勿論、そんな事は「アサシン」の知るところではない。

「——もう一度だけ言います」

変わらず淡々とした口調と共に、カシユリと僅かな金属音が鳴る。

その音に反応し、続いてぎよつとしたアリババの目に入って来たのは、伸び切った「アサシン」の左腕の仕込み短剣であった。

「散って下さい」

さもなくば、先に殉職した同僚の後を追う事になる。

そういう脅しを込めて短剣を抜刀したのだとアリババが悟った次の瞬間には、

「う、わ、うわあああああああああつ!!」

「に、逃げる! 殺されるう!!」

金切り声を上げた衛兵達が、我先にと同僚を押し退けながら、出て来た領主の屋敷の屋根の大穴の方へ一目散に退避を始めていた。

巻き上がる砂埃と凄まじい喧騒。文字通り命が掛かっている故の男達の恐ろしいまでの様相に再び啞然とするアリババだったが、不意に視点が前方から真下の屋根へ勝手

に回転する。

つい先程感じたばかりの浮遊感。

急激に距離が詰まったかと思いきや、魔法のターバン[〃]を使つてもいないのに急速に自らの隣まで浮き上がったアラジンを目にするよりも前に、自分達が再び白ローブの両脇に抱え上げられた事を悟つたアリババの顔が、同時にすぐそこまで迫つて来ている恐怖の存在にも勘づき、蒼白になる。

間違いない。〃アサシン[〃]がまた、自分達を連れて高所を駆け^飛ようとして^ほいる。

「ちよ、ちよつと待つ——」

裏返りそうになる声で制止を呼び掛けようとしたが、時既に遅し。

青と金を引き攀れた白ローブは屋敷から夜空へ躍り出し。

一時の騒ぎが収まってようやく帰つて来るかと思われた静寂の帳は、再び絶叫によつて闇の奥へ追い遣られるのであつた。

少年達を担ぎ上げるや、再び貴族街の屋根の上を駆け出したモルジアナが思考していたのは逃走先だつた。

当初の予定では、ジャミルの屋敷からそう遠くない裏路地に事前に設置しておいた藁山の中へ飛び込み、必要に応じて巡回中の衛兵や追手の目を欺いてから教団支部へ帰

還。ジャミルの暗殺完了、及び「チーシャン」での任務終了を報告するという算段だった。

しかし領主暗殺は失敗に終わり、おまけに見捨てられるわけにはいかない邪魔者達まで今はある。自分と同じ「フナリス」でも無ければ、「アサシン」としての訓練を積んでいる訳でも無い少年達が当然「飛鷹イーグルダイブの舞」が出来るワケが無いため、地表10m以上から藁へ直行というわけにはいかなかったのだ。

といつても、そちらの方は左程問題では無い。本当に問題なのは、地表に下りた後だ。本来、ジャミルの暗殺は誰にも目撃される事無く、誰にも悟られる事無く標的を消し去る、完全な隠密暗殺ステルスアサシネーションとなる筈だったのに、実際は失敗した挙句、お荷物二人のお蔭で先の乱戦も含むこれ以上無い騒ぎを引き起こす事となった。

結果、死体となったジャミルが発見されるまで潜入時と変化の無い又ルイ警戒が続く筈だった地上は、行き渡った領主襲撃の報によつて緊張が高まった衛兵達がそこら中を行き交う有り様と化してしまった。こうなつてしまった以上、モルジアナだけならともかく、素人二人を連れて何事も無く地上から貴族街を抜ける事はほぼ不可能といえた。

一方で、屋敷群の上にはいた衛兵については潜入時よりも数が明らかに減つていた。恐らくはアラジンとアリババの追跡で大半が持ち場を離れたためだろうが、何にせよ、持ち前の並外れた走力もあつて、配置数の減つた屋根の敵に気付かれる事無く走り抜けて

いるのは不幸中の幸いであつた。

最も、それについても厳密には『ようやく敵に気付かれる事無く走り抜けている』というのが実状だつたが。

駆ける足を緩めないまま、横眼の視線だけを後に向けて追手がいないかを確認する。

月灯りに照らされた家屋群の青白い輪郭線のみが浮かび上がるだけの背後の空間には、追つて来たり、壁を伝つて攀じ登つて来たりする衛兵の影は一つも無い。

完全に巻いた事を改めて確認し終えて前に向き直ろうとしたモルジアナだつたが、しかしその視界と耳に入り込んで来た不快なモノにフードの奥の眉を顰める。

視界に映り込んだのはアリババの顔だ。

ジャミル邸付近でのあの戦闘からの逃走再開後、彼はずっと叫び続けていた。その喚き声の音量はすぐにも彼を放り投げて両耳を塞いで仕舞いたい衝動に駆られる程凄まじく、同時に付近の衛兵を呼び寄せる警報の役割も果たしてしまつていたのだから堪つたものではない。お蔭で、暫くは通り過ぎた後から制止の声や暴言や矢の群れに追従される羽目になつた。

そんな彼も叫び疲れたらしく——実際は度重なる高所での高速疾走に精神が耐え切れず、昇天してしまつたのだが——、今は実に安らかな寝顔を浮かべ、弛緩した身体を慣性と風とモルジアナに預けていた。その表情は、曲りなりにも逃走中である現状とは

無縁の心地良さに溢れた本当に安らかなもので、逆に神経が逆撫でられる気分だ。

だが、所詮失神ぼんしているだけのアリババに催す不快感など高が知れている。

今この場において彼女が感じている不快感の大本は、もう片方の方だ

「ねえお姉さん、いい加減笛返して」

アラジンである。

長い三つ編みを風に揺らす彼が、アリババの絶叫が途絶えてから程無くして、思い出したように笛の返却要求を再開してきたのだ。

音量自体は大した事は無い。少なくとも、背後を通り抜けた衛兵に気付かれない程度には。

だが、耳元で同じ言葉を際限無く繰り返されるのが鬱陶しい事に代わりは無く、フードの後を摘ままれては離されるといふうちよっかいまで現在進行形で加えられているとあれば殊更というもの。

「ねえ、笛返してよ。ウーゴくんを返しておくれよ」

とはいえ、それに耐えるのも後少しだけだ。

ざっと見繕って100m。

今のペースならば5秒と経たぬ内に走り切れる距離を、建ち並ぶ家屋群の上を飛ぶよう駆け抜けたその先にあるのは、貴族街と一般街の境界線となる通り。

そこから枝分かれして一般街側へ伸びた裏道の先にある、袋小路だ。

元より人目に付き難い場所であり、ここに達するまでに経過した時間はまだ30分と経っていない。よって、一般街の方までは領主の襲撃の情報が伝わっていない可能性は高く、警戒度も低いと想定してここまで来たのだ。

念を押して、通りに面した2階建ての屋敷の屋根の端から地表の様子を覗き込んでみたが、舗装された道路にあるのは左右に横並ぶ露天だけであり、市民はおろか巡回の町警史すら見当たらない。

これならば問題は無い。

「ねえ返しておくれよ。ねえってば——」

駄々を捏ねる子供のしつこい要求を無視し、屋根の端を飛び台に跳躍。

少年達を連れて迷う事無く飛び上がったモルジアナの体が夜風を切って達したその頂点と地表からの距離は10m弱。常人は勿論の事、他の「兄弟」でも藁無しに落ちれば骨の二、三本は罅が入るだろう高さだ。

だが、「フアナリス」である彼女の人より屈強で柔軟なその足腰ならば、すかさず下方に向きを変えた力と二人の少年の重みによる加速で急速なまでに増加した落下速度も、難なく押し殺す事が出来る。

そのまま、少しばかりの着地音を立てて漆喰の壁に左右を囲われた袋小路の手前に降

りたモルジアナは、再度周囲を確認しつつ奥へ移動する。そして、前方を塞ぐ壁まで後1mという一まで来たところで振り返り、両脇のアラジンとアリババを地面の上に放り落した。

揃って顔から土へダイブさせられる事になった少年達の内、アラジンが、わっ、と小さな悲鳴を上げ、一方で気絶したままのアリババは頭を地面に滑らせ、モルジアナに向けて結ばれた白の上着の裾に覆われた尻を突き出すような格好で寝そべる。

そんな二者二様のリアクションを気にも留めず、片や持ち上げた顔を押しさえて呻き、片や変わらずケツを突き出したままの少年達の間を進んで立ち止まるや、

「……まで来れば貴方達を追う者もいません。笛は返せませんから、もう付いて来ないで下さい」

とだけ告げて腰を屈め、少年達を後にその場から跳び去ろうとしたが、出来なかった。感じた違和感のままに振り返ってみれば、やはりロープの後裾の端をアラジンに掴まれている。

「……離して下さい」

「ヤダ」

うつ伏せに寝そべったまま、裾をガツチリ掴んだ両手だけで上半身を持ち上げて追いつく。縋ろうとする彼の目が、真っ直ぐにフードの奥のモルジアナの双眸を見返して来る。

「ウーゴくんは僕の大事な友達なんだ。お姉さんがウーゴくんを返してくれるまで、絶
対離さない」

「ウーゴくん？ 貴方の友だとかいう？」

笛を奪い取る直前に紹介された、筋骨隆々の巨大な二本の腕がモルジアナの脳裏に思
い起こされる。

考えてみれば、アレは一体何だったのか？

蛇のように笛の尻から飛び出して来たかと思えば途端に引つ込んだあの腕について
与えられた情報は「アラジンの友」という真偽の疑わしいものだけで、それ以外は一切
が謎。むしろ、あの瞬間目にした事全てが現実のものだったのかさえつい疑ってしまう
程……。

——「現実かさえ、疑ってしまう」……？

不意に浮かんだ「ある可能性」に、ハッとモルジアナは頭を上げた。
そうだ。アレは現実では無かったのだ。

——ウーゴの正体は笛——「ジンの金属器」と呼ばれたあの「秘宝」が見せた、「幻
」だったのだ。

間違い無い。アレが「エデンの林檎」と同じ秘宝であるというのなら、発動したそ
の力によって気付かぬ内に幻惑されていたとしても不思議ではない。

彼女自身だけでなく、今は地面に突つ伏しているアリババも、笛の所持者であつたアラジンも。

だとすれば——。

「何があつても返せません」

「どうして?」

「あの笛がとても危険な代物だからです。それに恐らく、貴方はあの笛に魅了されてい

る」
最初に幻を目にした時、それよりも「秘法」自体に目が向いていた。それに、目の前の少年が、ほんの少しの好印象だけで暗殺者に助けを求め、特殊な思考倫理を持つ人間である事もその時点では既に知っていた。

だが、それでも疑問に思ふべきだったのだ。——あのような異形を平然と友と呼ぶこの少年は、果たして正常なのか、と。

答えはノーだ。

恐らく、彼は既に「秘法」の魔力に魅了されている。「秘法」によつて、唯の幻を友と思ひ込まされている。そして存在しない友を救い出さんとしているようで、実は刷り込まれた「秘法」への強大な依存心に無意識に従つて取り戻そうとしているだけなのだ。

ならば、尚の事笛を返す訳にはいかない。

「貴方が友と思つているものは、あの笛が見せた唯の幻想に過ぎない。貴方に笛を返せば、きつといずれ、笛は幻友を通して貴方や周囲の人間に破滅を齎します」

今はまだ「幻の腕を友と思ひ込まされている」程度の魅了だが、今後も笛を持ち続け、て悪化したそれがどのようなように変貌するかは全くの未知数。

最悪、自分だけでなく周囲すらも「秘法」の誘惑に晒し、墮落させ、取り返しのつかない恐ろしい事態を引き起こしてしまうかもしれない。かつて「林檎」の力に墮落し、「教団」だけでなく「聖地」エルサレムまで掌握、支配しようとしたという、先代大導師のよう

に。「やはり貴方には「大導師」様のよう「秘宝」を扱える才能は備わっていない。笛も、友の事も忘れなさい。アレは貴方に害しか及ぼさ——」

「違ふもん」
不意に響いた声に、諦めさせるために敢えて声のトーンを強くして告げていた言葉を遮られた。

「ウーゴくんは幻なんかじゃない。僕の大事な、自慢の友達なんだ。なのに、何でそんな酷い事言うの？ ウーゴくんがお姉さんに何かしたかい？」

いや、本当にモルジアナの言葉を遮つたのは声じゃない。変わらずフードの影の中の

双眸を見つめてくる、澄んだアラジンの双眸だ。

いつの間にやら目尻に涙が溜め、逆ハの字になった細い眉に沿うように険しくなったその目から放たれる視線に。

信じ難い事に、*「アサシン」*でも何でもない、自分より年下の見るからにひ弱な少年の視線に、気付けば射竦められていたのだ。

「笛を返して。ウーゴくんを呼ぶから、今お姉さんが言った事、全部謝っておくれよ」
獣を前にしたような、分かりやすい威嚇や恫喝が含まれているワケでは無い。

只管に静かで、それでいて得体の知れない威圧感に圧迫され、声を喉から先へ出せない。

だが、このまま喋らせるままといい訳にもいかない。

「……ですから、貴方の友は幻に——」

足元からの眼力をどうにか耐え凌ぎ、どうかかそこまで声を絞り出せた、その刹那。

「違う!!」

今までの表面上は穏やかだった口調から一転した苛烈な怒鳴り声、少年の小さな口から発せられた。

ギャップと予想外の苛烈さに僅かに怯むモルジアナ。

その隙に乗じたかのように、掴んでいた裾を引っ張って立ち上がったアラジンの掌が

突き出される。

「笛を返して。——今すぐ、ウーゴくんに謝って」

そう告げるアラジンの据えた目は凍えるように冷えた眼光を放ち、先程までの静けさを取り戻した言葉の裏に込められた威圧感はいくらまでの比では無かった。

そして、その眼光と威圧感を一身に向けられた若鷲は動揺していた。——「フアナリ」の「アサシン」である自分をたじろがせるこの少年は、一体何者なのか、と。

そうして睨み合いに発展する内に、フードに隠れた額に冷や汗が滲み出してきたモルジアナが後ずさりしそうになったその寸前、

「あら」

思わぬ助け舟が入った。

「こんなところで何してるのモルジアナ？ 任務はどうしたの？ その子達は？」

声のした左手、袋小路の入り口側へ咄嗟に振り向いたモルジアナの視界に現れたのは。

普段目にする上着付きのローブ姿から一転した、筋骨隆々の身体にあまりに不釣り合いな薄い衣装を身に纏った「アサシン教団 チーシャン支部」管区長、バートリーであった。

それから時と場所は移り、貴族外と一般街の通りに面する歓楽街。

先の袋小路付近とは一転して、むしろ昼間より活気が増しているその一角、入り口上から露出の激しいドレス姿で誘うような姿勢の美女の絵と共に「摘み取られた薔薇」という店名が綴られた看板が見下ろすその店の奥にアラジン達は招かれていた。

「——なあ、アラジン」

「何だあい、アリババくん？」

案内された横広の部屋は前方に片開きの簡素な扉が一つだけあり、後方には壁に張り付けられた鏡と台、同数の椅子で構成されたシンプルな化粧台が横並んでいる。その右側には幾つかの露出度が高いドレスが木製のフックに掛けられ、左側の床隅には衣類の放り込まれた籠が乱雑に置かれている。

ここまで彼らを連れて来たバートリーとかいう異様に大柄で筋肉質な女性？ がスタツフルームとか何とか呼んでいた覚えがあるその部屋のたった一つの出入口を、適当な化粧台の椅子に同じように座っているアリババの声に明るい返事を返す間も、アラジンは期待の眼差しで見つめ続けていた。

今の彼は、頗る上機嫌であった。

「その、何で俺達こんなトコにいるんだっけ？」

「もう、アリババ君ったら！ “アサシン”のお姉さんの知り合いのバートリーってオ

バスンが、笛を返してくれるからここで待つてろつて、僕と氣絶してたアリババ君をこのお店まで連れて来てくれたんだよ。さつき言つたばかりじゃないか！」

そうなのだ。

あの袋小路からここに来るまでの途中、「アサシン」——確かモルジアナ、あるいはハイザムとバートリーは呼んでいた——と何やら話し合つていたバートリーが突然アラジンの方を見下ろすなり、笛を返してくれると言つてくれたのだ。

すぐさま、その横にいた「アサシン」が驚愕を顔にしていたが、諫めるようなバートリーの言葉の後に、恐らく笛を保管してある場所——しづ、と言つていた氣がする——へ取りに行けという彼女の命令を受けるや、澁々という感じで去つて行つてしまった。

それから、ごめんなさいね、とか、ウチの娘が迷惑掛けちゃつて、とか謝るバートリーに連れられるまま歩いて辿り着いた「摘み取られた薔薇」にて、彼女と「アサシン」が笛を持つて来るまで暫し待つようにいわれ、現在に至るといふワケだ。

「ああ、そうだったな。えつと、まあ、その、うん、良かったな。ウーゴくん 笛、返してもらえ
事になつて」

「うん！ 楽しみだなあ。あの扉が開いたらウーゴくんが帰つて来るんだよー」

両手で頬杖を付いて、ウフフ、と満面の笑みを浮かべる今のアラジンの頭の中は、再会したウーゴと何をするか、という思考一色で埋め尽くされている。部屋に案内される

までに出会った、いつもならば迷う事無く飛び込んで、その柔らかさを堪能しているだろう幾人の美女も、今この時のみは彼の頭の片隅にさえ存在していなかった。

笛を奪われてからももう一日過ぎている。きつと彼も寂しがっていた筈だ。やはり笛が戻つて来次第呼び出して抱き合い、慰め合うのが一番だろう。

その後はすぐに「アサシン」にウーゴへの侮辱を謝罪してもらうのだ。もう一度ウーゴを目にすれば、流石に彼女も彼が幻でも何でも無い、ちゃんと実体のあるジンだと分かってくれる筈……。

そこまで考えて、ふとアラジンの頭に疑問が過つた。

「そういえばね、アリババくん」

「ん？」

呼び掛けと共に振り向いたアラジンの視界に、左腕で頬杖を突く顔を明後日の方向に向けたアリババの姿が入って来る。

どうやら何かを考え込んでいる様子だった。

一瞬、今話を振るのはマズかったかと心配したアラジンだったが、すぐに返つて来た返事を受けて気を取り直し、改めて自らの内に生まれた「疑問」について話し始めた。

「ここに来る前の袋小路で——アリババくんが気絶してた時の事なだけだね。『アサシン』のお姉さんが言ってたんだ」

「何て?」

「僕が笛を返せって言つてたらね、お姉さん、 〃笛は危険だから返せない〃 って」

いや、あの時だけじゃない。

思い起こせば、笛を奪われたあの瞬間も、

『これは貴方が持つには危険過ぎる』

と、彼女は言っていた。

「あと、僕に 〃だいどうしさま〃 って人みたいに 〃秘宝〃 を使う才能が無いから返せない、とも言つてたんだよ」

それらの発言を省みる限りでは、 〃笛が欲しくて盗んだ〃 というよりも、むしろ、

「どういう事なんだろう? もしかして 〃アサシン〃 のお姉さん、僕達を助けようとしてくれたのかな?」

というふうな受け取れた。

そもそも、 〃アサシン〃 の行動の真意を彼らは、少なくともアラジン、ウーゴを取り戻す事に躍起になるあまり考える余裕も無かつたし、一度は 〃アサシン〃 の事を 〃優しい〃 と評した当の彼自身としても、彼女自身の欲ではなく、自分やアリババの為の行動であつたという方がむしろしっくりと来た。

無論、どういふ印象を抱こうが出来つて間もない少女の思惑など完全に見通せる訳も

無ければ、ずっと一緒だった親友の事を危険だ幻だと言われても信じるどころか侮辱されているとしか思えない事にも変わりはない。

結局のところ、今し方アリババに振った意見も推測の域を出ないのであった。

「……なあアラジン？」

アラジンの問い掛けから少し経ったところで、そっぽを向いていたアリババが唸ってから、顔を彼の方に向けた。

心なしか、僅かに眉を蹙めたその顔には思い詰めたような表情が浮かんでいる。

「俺もちよつと考えてたんだけどさ——」

とまでアリババが言い掛けたのとほぼ同時のタイミングで、小さな軋みが彼の耳に伝わって来た。

その音に反応し、即座に振り向けた顔の先には、予想通り待ち望んだモノが待っていた。

今まで着ていた長袖のローブとは対象的な、胸元から上を露出したドレス姿の「アサシン」と、その前で床から2m超しか離れていない天井に頭を打たないように巨体を中腰の姿勢にして部屋に入り込んで来る「バートリー」。

そして「バートリー」の巨大な手の中から、持ち主が送る眼差し以上の輝きを発しているアラジンの笛であった。

『今すぐ支部に戻つて、この坊やの笛を取つて来てあげなさい』

と、唐突に指示された時、思わずバートリーの正気を疑わずにはいられなかつた。

しかし有無を言わさずと言わんばかりの彼女の強い口調と、後で答えるから、の一点張りには取り付く島も無く、渋々笛を回収しに支部へ戻らざるを得なかつた。

その際、ローブの代わりに着て来るように、と同時に指示を受けたのが今身に着けているドレスと靴であつたのだが、受けた時点では疑問しか浮かばなかつたそちらの方の指示の理由も、待ち合わせ場所として指定された店の正体を知つた今となつては呆れと共にモルジアナは理解せざるを得なかつた。

「摘み取られた薔薇」と名付けられたその店は、今彼女が身に着けているもの以上に際どい格好の女性達がちよつとした奉仕活動を行う、そういういかがわしい類の店なのだ。

成程。確かにこういう店に入るのであれば、いつもアサシンのローブやその下に着込んである黒のワンピースでは悪目立ちしてしまうだろう。

それならそれで、何故態々着替え無ければならないような場所を待ち合わせ先に指定したのか、という疑問も浮かんで来ないでもなかつたが、事前に彼女が口にしていた、店の娘が休んだだの、ヘルプがどうだの、という台詞や、以前「収集隊」の「兄弟」から

聞いた彼女の「表の顔」が記憶の片隅から蘇つて来た時点で、呆れが増すと共にそんなものは霧散してしまつた。

それに、協力者でも何でもない一般人を支部に連れ込む訳にもいかないし、かといつて適当な路地裏ではほんの僅かではあるうが、巡回中の町警史や夜道を歩く市民に発見される可能性が無いワケでも無い。その辺りを考慮すれば、「結果的に」という言い回しを頭に付けざるを得ず、且つ未成年を連れ込むには不適當極まりなかつたが、客と商売女^{ホステス}達が店の内外を問わず入り乱れるお蔭で、ドレス姿でいる限り目立つ事の無いこの店を選んだバートリーの判断は、強ち間違つてはいなかつた。

最も、アラジンに笛を返す事を承諾した方の判断については、未だに疑問だらけだが。故に、店の奥の廊下の突き当たりにある「スタッフルーム」と彫られた木板が掛けられた戸を開くや、

「わーい、ウーゴくーん！」

目を輝かせて突進して来た青髪の少年がバートリーの下に辿り着くよりも前に、身を乗り出してその足を阻んだのだ。

「ちよつとモルジアナ。何やつてるの、そこをお退きな——」

「その前にいい加減答えて下さい。どうして彼に笛を返すのかを」

即座に飛んで来るアラジンの文句とバートリーの鋭い眼光に構わず、更にモルジアナ

は言葉が続ける。

「この笛は『ジンの金属器』という『秘宝』だという事は既にバートリーさんにもお伝えした通りです。それに、この少年は既にウーゴという幻の友を見てしまう程に笛に魅了されている事もここに来るまで話した筈」

であるにも関わらず『秘宝』を返すなど、更にアラジンの魅了が進行し、遂には墮落しても構わないと言っているにも等しい。それが分からないバートリーでもないだろうに、これではあまりにも解せない。推測すら及ばない彼女の不可思議な意図は、是が非でも確認しなければ。

だからウーゴくんは幻なんかじゃないってば、という横からの少年の文句を無視しつつ、その特徴的な顔をじつと見つめるモルジアナ。

それに対して巨体の管区長が行ったのは、

「ふう」

露骨な溜め息であった。

さも、お前の言っている事はまるで的外れだ、と言わんばかりのあまりな態度に覚えた苛立ちに眉を擡めるモルジアナを尻目に、笛の返却を容認した理由がようやくその口から紡がれ出した。

「簡単な話よ。この笛が『ジンの金属器』だからよ」

「どういう事ですか？」

「多分貴方は知らないだろうけど、金属器に封じられたジンは、自らを使う人間を選ぶ”っていう伝承があるの。つまり、この笛を使う事が出来るのは笛に宿るジんに認められた人間だけで、その坊やはジんに笛を使う資格があると認められているワケよ」

つまり、”笛を扱う資格を与えられている唯一の存在であるアラジンが、笛に誘惑されるなど有り得ない”というのが、爬虫類染みた縦長の瞳を件の青髪の少年に向けるバートリーの意見ということらしい。

だが、その論理は到底鵜呑みに出来るものではない。

「その伝承とやらは本当に正しいのですか？ それに、最初に笛をお渡しした時は、そんな事は一言も仰られていませんでしたか？」

”伝承”というからには、それこそ真偽の確かめようも無い過去の遺物からの情報が人伝えに伝えられて来たものと見ていいだろう。そんな不確かな話を根拠にするなど、こういうっては何だが、”真実は無い”を信条とする”アサシン”にあるまじき思考だ。

後者の笛を預けた時についても、むしろ、彼女自身やその場にいた”収集隊”の”兄弟”も少なからず表情を強張らせていた筈だ。

だのに、心変わりでも起こしたかのようなこのバートリーの変化はどういう事なのか？

そんな事は無いと思いつつも、心に一抹を生じさせるモルジアナの耳に返って来たのは、予想外で、しかし予想通りの答えだった。

「ええ、正しいわ。だって貴方がジャミルを始末しに行った後、試してみたもの」
「試した？——まさか」

「そのまさか。笛を吹いてみたのよ、『収集隊』の連中と一緒に」

瞬間、え、え、つ、という嫌そうな声と共に赤い双眸がギョツと見開かれる。

すぐさま詰め寄ろうとしたが、大丈夫よ、とその前に翳されたバートリーの開いている方の手によって押し留められる。

「私も含めて、誰も誘惑されていないわ。もし魅了されていたなら、まず返そうなんて気が起きて無いわ」

というか、そもそもジンどころか音すら出無かったわよ、この笛、と付け加えるバートリーは聊か不満げであったが、しかし、これで『金属器に宿るジンが使い手を選ぶ』という『ジンの金属器』に関する伝承の正当性が証明されたのは確かだった。

「さて、これで私からの説明は終わりだけど、まだ何かあるかしら？」

言葉と共に、異様なまでに高い鼻先が向けられる。

本音をいえば納得し切れていないが、しかし伝承を基にし、自らの身を持って笛の安全性を証明して見せたバートリーの意見は筋が通っている。これ以上追及しても、状況

が変化する事はまず無いだろう。

仕方なく、小さく左右に振った首で返事を返し、背後のアラジンがバートリーの方へ歩み寄れるようにモルジアナは横に下がった。

予期せぬ声が彼女達の耳朵を打ったのは、それからアラジンが笛を受け取るほんの少し前の事だった。

「あの、すみません」

アリババであった。

今の今まで蚊帳の外だった彼が、化粧台の端の方からひよつこりと手を上げていた。

「ちよつとお、質問がありました。……その——」

少しビクついた様子で、トーンの落ちた声と共に、掌を向けられていた彼の右手が倒され、そこから一本だけ微妙に伸びた人指し指が、

「——アサシンのそっちの娘に」

モルジアナを指していた。

「……何ですか？」

無然とした口調でそう返す「アサシンの」の不愉快そうな視線に射抜かれ、アリババは思わず唾を呑みそうになる。

先の戦闘の終わり際に彼女の前に立ちはだかつた事を根に持たれてしまったのか。

鎖骨の下まで露出したドレス姿のため、ローブ姿の時はサイドテールに結わえた赤髪と端正な顔立ちごと特徴的な目元を持つ紅の目を隠していたフードは、今は存在しない。それ故の直の眼光は、唯でさえ竦み掛けている彼に容赦の無い圧力を掛けてくる。

だが、ここで挫けるワケにはいかない。

意を決し、*“アサシン”*の視線に耐えるために奥歯を噛み締めていた口をアリババは開いた。

「その、何で俺達を助けてくれたのかな、なんて」

余計な刺激を与えないよう、愛想笑いを浮かべて頭を掻きつつ尋ねたそれは、彼がこの部屋で覚醒してからずっと思考していた事であり、また先の戦闘に限った事でも無い。領主邸に逃げ込んですぐ衛兵に襲われた時。そして彼女と始めて言葉を交わす事となった、奴隷泥棒の罪から救ってくれた時の事も含まれている。

「いや、だってさ、そんなつもりはからつきしんだけど、俺達つて君の邪魔しかしてないしさ。ホントならとつくに、その、死んでもおかしくないっていうか……」

むしろ、そうなっている方が自然というものだ。

言葉通り、アリババ達が今まで*“アサシン”*にやってきた事は彼女への邪魔やちよつかいばかりであり、怒りを買う事はあっても、何の義理も無い彼らを危機から救う理由

は無い筈。殺気だった兵士の群れのご真ん中に捨て置かれるなり、あるいは「アサシン」自らの手で喉笛を裂かれるなりされる方が、受け入れられるかどうかは別として、よっぽど理解できる。

にも関わらず、「アサシン」はアリババ達を三度も、それも後半二回は容易く葬れる状態の敵を放つてまで、窮地から救い出した。

更にはアラジン曰く、彼の笛を盗んだ一件さえも、詳細こそ未だ不明だが「ジンの金属器」欲しさではなく、彼らの身を案じての行動だったという。

これはどういうことなのか？

「見ず知らずの自分達を救う」ために行われた一連の行動は善行といっても差し支えない。ハシシ野郎やファイダー大麻イーとまで揶揄される「アサシン」の執念深く暗いイメージとは正反対のものだ。それだけを省みれば、かつてアラジンが評していた「優しい人」の方が、むしろしつくりと来る。

だが一方で、その「優しい人」が人間を容易く無慈悲に殺める事が出来る、噂に違わない暗殺者としての一面を持っているのもまた事実。

「優しい人」と「アサシン」。相反する二つの顔。

一体どちらが、目の前の赤髪の少女の本当の姿なのか？——それが、「アサシン」が自分達を救った理由を考える内に辿り着いた、アリババの疑問であった。

「……貴方方が罪無き者だからです」

暫しの沈黙の後、無表情のままの「アサシン」の小口が不意に紡いだ答えは、あまりに唐突だった。

「罪無き者？」

反射的に返したアリババの酷く上ずった声が、あまりに予想外の返答によつて彼の内に生まれた驚愕と疑念を如実に表わしていた。

まさか、暗殺者の口からそんな言葉を聞こうとは夢にも思わなかつた。

だが、彼を襲う衝撃はこれだけに留まらない。

呆氣に取られて目を丸くする彼にお構いなく続けられた少女の言葉が、彼を更なる戸惑いの中へ誘うのだ。

「罪無き者、虐げられる者に手を差し伸べる事もまた「アサシン」の使命。それに従つて、窮地に陥っていた貴方方を救つたまでの事です」

「？」「アサシン」の使命？」

——人を助ける事が？

つい、逆だろ、人殺しがだろ、と言い掛けた口を、余計な事を言つて怒らせないために咄嗟に押さえる。

幾人も殺してきた暗殺者がいきなり人助けを使命などと言い出しても、悪い冗談か、

幻聴か、さもなければ妄言にしか聞こえない。

——いや、待てよ。

ふと、脳裏に「ある事」が思い出される。

「アサシン」に纏わるもう一つの噂。「ライダー」——イカれた「殉教者」と謂われる所以たる、とある宗教団体の噂を。

口に手を当てたままつい思考の海に乗り出し掛けたアリババだったが、程無くして背筋に感じた悪寒により、否応無く現実へ戻つて来る。

見れば、「アサシン」の釣り上がり気味の目が細まった状態で彼を見据えていた。

彼の仕草を、話をまともに聞いて無いと受け取ったのか。悪寒の正体だとすぐに気付いた異様に冷めた視線が丹念に磨かれた槍の鋭さを持つて見返すアリババの目を貫き、後ずさりさせる。

が、それもすぐに途切れる。

「アサシン」が踵を返し、

「支部に戻つてます」

とだけバートリーに告げ、入つて来た扉を潜り抜けようとしたからだ。

「ちよ、ちよつと待てよー」

咄嗟に呼び止めるアリババ。

その声に「アサシン」の足が止まるも、しかし振り返った無表情の横顔から言葉までは返つて来ない。

「勝手に切り上げてどこ行くんだよ!? まだ話は終わつてないっての!」

勝手に消えようとした事への不愉快さからか、無言の少女に構わず発し続けた声が、自分でも驚く程に張り上がっていた。

反して、変わらず顔を向ける事無く、視線だけをチラリと寄越した少女の声は冷めきっていた。

「——もう話す事はありません」

「いやだから、あんたには無くても俺がまだ——」

「何を仰りたいのかは分かりませんが、無意味です。『アサシン』^{私達}の目的を理解しない貴方方とこれ以上話を続けたところで、何の益も無い」

聞く前から無駄だと言わんばかりの「アサシン」の物言いを、しかしアリババは否定しなかった。

彼女の言う通りだったからだ。——『「アサシン」の目的を理解しない』というその一点においては。

むしろ、理解したくなど無いといった方が正しい。

何故なら、

「『ダイドウシ』って奴から言われた事なんだから、その目的つつうのは!」

十中八九彼自身の口から吐き出された、その台詞の通りだからだ。

「——『アサシン教団』っていうんだよな? あんたらが入ってる、組織の名前」

「『アクティア王国』山間の奥地に存在するとされる小さな村。険しい道程故に存在からして風の噂の息を出ないその村に本拠地を構えるとされる、いかがわしい宗教団体の噂。」

子供を攫い、大麻漬けにして道徳心や恐怖心を始めとする理性を奪った上で人殺しの術を教え、命知らずの殺人鬼へと仕立て上げて敵対者の暗殺を行わせると実しやかに囁かれる暗殺者集団——『アサシン教団』。

彼らの目的もまた定かではなく、噂を語る者に応じて大なり小なり差異が生じてくるが、どれも必ずといって良い程特定のキーワード——『神』、『楽園』といった、聞くからに胡散臭さの漂うもの——が含まれるという点で共通しており、そこから連想されるのは凡そ真つ当なものでは無い。

その話自体は『チーシャン』で『アサシン』の活動が騒がれ出すよりも前から、バイト中に荷馬車に乗せていた客の何人かから他愛無い談笑や都市伝説程度の意識で聞いた事がある。その時点では根も葉もない噂話だとともに受け取っていなかったが、目の前の少女と幾度か目にした彼女の『行為』という証明を前にした今となつては、件の

噂は事実と認めざるを得なかった。

そして同時に、その噂に対する彼の印象、想起される感情も大きく変わっていた。以前の奴隷泥棒の件で「アサシン」を探すアラジンに嫌々付き合わされた時の、腐った世の中、というぼやきが、その感情の変化が如実に現れた良い例だ。

しかし、そうなった経緯はどうあれ相手が薬漬けとあつてはまともな対応は不可能、残念ながら手遅れと無意識に判断していたために、あの時は世の中の理不尽さに憤りとしても、その先へ踏み込む事は無かった。

だが、目の前の少女はパツと見正常で、その上見ず知らずの自分達に何の見返りもなく救いの手を差し伸べる善意すら持っている。

まだ完全に大麻に理性を潰されていないのかは分からないが、ともかくまだ手遅れでは無いのだ。

「真つ当な道に引き戻せる」可能性があるという事だ。

「あんたが何言われてるかなんて知らねえよ。でもやつてる事って殺人だぞ？ 人殺しだぞ？」 どれだけ崇高な目的があるうが、君みたいな女の子拉致ヤクつて薬漬けにして、無理やり人を殺させるなんて、どう考えたって碌なモンじゃねえ。イカれてるんだよ、
「教団」も、その「ダイドウシ」って奴も」

そして、先程もアラジンの口からほんの少しだけ出て来た「ダイドウシ」という者こ

そ、恐らくは少女を「アサシン」へと仕立て上げた全ての元凶。

彼女だけでなく、多くの人々を大麻野郎ハシシへと変え、両手を血に染めさせる憎むべき畜生というワケだ。

「――抜け出そうぜ、こんなカルト宗教！」

自らの口を突いて出た言葉に驚いたのは、アリババ自身だった。

彼女の後、アラジンの傍で威容を静かに控えさせるバートリーも、ほぼ間違いない「教団」の一員。どういうわけか今のところそれらしい兆しは見えないが、実質的に監視役と化している彼女の前でこれまでの「教団」への侮辱染みた発言がどういふ結果を齎すかは明白である。故に、こんな発言はいつもならば例の病気に邪魔され、飲み込んでしまっている筈だからだ。

だが、今は違う。

「考える。人の命奪つて「神」様だの「楽園」だの言ってる頭おかしい集団から抜けたって、誰もあんたを咎めやしねえ。あんただって本当は人殺しなんて嫌だろ？」

一人の少女を、それも三度も窮地を救われた恩義がある少女を人殺しの身から引き戻す事が出来る。

大麻と狂信で人の人生を狂わせ、人の命等塵芥程度にしか考えない非道極まりない集団から救い出す事が出来る。

そういうまたと無いチャンスが彼の肩を押し、普段ならば絶対踏み込みはしないだろう領域まで踏み込ませていた。

「そりや追手とか来るかも知れねーよ。けどあんたはもの凄く強いし、今ならアラジンのジンウーゴくんの力だつて借りれるんだ。何も怖かねーよ。それならそれで、一緒に戦おうぜ！」

「砂漠ヒヤシンス」の一件や先の戦闘時と同様に、

「『自由』のために！」「教団」や、『ダイドウシ』と!!」

感極まつて手を勢い良く差し出す程に。

今のアリババは『吹っ切れていた』のだ。

故に気付けなかった。

自分が踏み込んだ領域が、決して手を出してはいけない凶獣の縄張りだった事に。

「……知つたような事を……」

ポツリ、とアリババに背を向けたまま『アサシン』が洩らした呟きは、しかし当のアリババの耳に届く事は無かった。

発せられるや、別の音に掻き消されてしまったためだ。

彼女の足下で割れ、四方へ破片を飛散させる床のタイルの、その破砕音によって。

「……っ……!?!」

突如割れた固い石のタイルに、共にぎよつと目を見開いたアリババとアラジンが飛び上がったのはほぼ同時であり、それから数刻後に、あ、と碎けたタイルの残骸へ縦長の目を下げたバートリーに構わず「アサシン」がゆつくりと、ゆつくりと振り返る。

そうして再び目にする事になった彼女の顔に、う、つ、という嫌な呻き声アリババの喉の奥から込み上げて来た。

「アサシン」が誰のために、何のために存在するのか知ろうともしないくせに……」

浮き上がっていた「アサシン」の左足が不意に視界から消えたと思つたその刹那、その足を覆う鮮やかな赤い靴の裏が着いた新たなタイルが無数の破片と化し、甲高い音と共に飛び散つた。

信じ難い事に、滑らかな輪郭を描く少女の足が固い石のタイルを踏み割つていたのだ。

「大導師」様がどんなお方か知りもしないくせに……」

三枚目のタイルが割られた音が部屋内に響く。

「アサシン」が一步踏み出していた。

直後に肩を跳ねさせ、一步あらずさるアリババへ向けて。

「師や、兄弟」達のように、自分の手を汚してまで誰かを救つた事も無いくせに……」
ゆつくりと、「アサシン」が歩み寄つて来る。

彼女の動きそれ自体は、身に着けているドレスの布擦れの音すら全く無い完全な無音だったが、その足だけは一步踏み込む度にけたたましい音を鳴り響かせている。

まるで彼女の足下だけが異空間と化してしまったかのようなその近づき方は只管に不気味で、忙しなく耳朵を叩く破壊音と共にアリババの内の恐怖を煽って来る。

——いや、それ以上に彼の恐怖を呼び起こして来るものがある。

俯いた“アサシン”の顔。垂れた前髪とその影に隠されて目にする事が出来ない、その上半分——特徴的な目元。

見えない筈なのに、覆い隠されている筈なのに。

それなのに、視線が。

闇の中に姿を隠し、何処からともなく殺意だけを只管獲物に注ぐ肉食獣のように鋭い視線が。

射殺さんばかりに彼を貫き、笑い出した膝を動かせ、後退させていくのだ。

だがそれも終りだ。

下がり続ける内に、遂に背後の壁に貼られた鏡と背が密着し、すぐ手前まで“アサシン”に接近されてしまった今や、アリババに退路は残されていない。

視界の更に後で、止める、だの、店が壊れる、だのという制止の声など、どちらにも聞こえない。

「知ったふうな事を——」

もはや、先程までの勢いは一欠片も残っていない。

背後の壁にへばり付き、尚も逃れようと足掻く今のアリババの心を代わりに満たしていたのは、恐怖と疑問と後悔だった。

自分は確かに少女を救おうとした筈だ。 “アサシン教団” や “ダイドウシ” だって、どう考えたって碌な奴らじゃない筈だ。なのに、何故こうなる？ 何故、こうも声に怒りが滲み出ている!?

皆目見当が付かない。

だが自分が “アサシン” の逆鱗に触れるような発言をしたらしいのは確かであり、結果招いてしまった現状は、やっちゃまった、などという簡単な言葉で済ませられそうにない。

怯え切り、引き攣って視点の定まらない目で赤い頭頂を見下ろすしか出来ない程に硬直してしまったアリババの思考は、もはや凍結寸前であり。

視界の端でフツと消えた “アサシン” の右足が、そんな彼の頭へのトドメとなった。

「——言うなアアツ!!」

一喝。

同時に、耳のすぐ傍から一際大きい破壊音が颯風と、大小の漆喰と硝子の破片を伴っ

て襲い掛かつて来る。

勢い良く鋭い破片群が降り掛かるが、それらがアリババを傷つける事は無く、後から追い掛けて来た粉塵共々彼の丈の長い上着を汚す程度の被害に収まったのは幸いを通り越して、奇跡という他無い。が、それを喜ぶ余裕は、壁と化粧台に沿って身体をずり落ちさせる今のアリババには無い。

すぐ真横、彼の顔から20cm程度しか離れていない長方形の鏡の、粉々に罅割れたその右端と裏の壁を貫き、踝まで埋もれた健康的な色合いの足を。

ほんの少しのズレで鏡と漆喰ではなく、彼の頭部を粉々に粉碎していたであろうその蹴りを放った「アサシン」を。

ずっと無表情しか浮かべていなかった可愛らしい顔立ちから一転、特徴的な目元と細く長い眉をあらんばかりの怒りで吊り上げ、これでもかという程に眉間と鼻頭に憎々しげな皺を寄せた、悪鬼羅刹のような恐ろしい形相へと変貌した少女の顔を。

騒ぎを聞き付けて来た数人の商売女ホステスやウェイターの愕然の声や、彼を心配するアラジンの叫び声、絹を裂くようなパトリーの絶叫の中。

腰を抜かし、ガラス片と瓦礫の散らばる床に力無く座り込んだ姿勢で、だくだくと嫌な汗が流れ落ちる顔諸共、涙が目尻に滲み出す目を震わせ、点にして。

ただ、ただ只管に怯え、只管にワケが分からないままに、それでも只管に目を離す事

が出来ず、只管に見上げる事しか出来なかつた。